

---

# インフィニット・ストラトス～白と黒～

終焉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス〜白と黒〜

### 【Nコード】

N6683U

### 【作者名】

終焉

### 【あらすじ】

世界でただ一人ISを動かせる男「織斑 一夏」彼を狙い、様々な国が動く中、彼とその仲間達の命を狙う謎の機体が学園に現れる。

## プロローグ（前書き）

すみません！間違っこの小説を削除してしまったので新しく投稿します。中身が少し変わっていますが、間違いや感想、アドバイス等どんどんください！

## プロローグ

????? Side

カタカタカタ・・・カタカタカタ・・・真つ暗な部屋の中に二人はいた。一人は四十近い年齢の女だが、抜群のスタイルとプロポーシヨンを持っており、もう一人は三十の男だが周りに強烈な威圧感を与える空気を纏っていた。

カタカタカタ・・・カタカタカタ・・・空中に浮かぶ画面を操作しながら女は呟く。

「ふう～ようやく完成か～本当に長かったね～」

そう言つて女は向こうを見る。そこには人が入るようなカプセルがあった。

「やっと終わつたんですか？」

カプセルを見ながら男はそう言う。

「そんなこと言つてもね～これを完成させるのにどれだけ時間がかつたと思う？」

「まあ、こんなものをすぐにつくれて言つても無理がありますね」

「そう思つならもつと褒めて欲しいな～」

「はいはい、すごいですね」

「むう〜つれないな〜ほんと苦労したのに〜まあ、それはもういいとして本当に行くのかい？」

女がそう言つと、男は少し悲しそうな顔をしながら・・・

「・・・ええ、これをつくつて欲しいものそれが理由ですから」

と、少し間はあつたが男ははっきりとそう言つた。それを聞くと女は・・・

「・・・考え直してくれないかい？」

女は無駄だとわかつていても彼のする事を止めたかつた。男はそれを聞くと女を少し睨みながら・・・

「貴女が原因なのに何言つてるんですか？」

「・・・まあね、今更だけどつくづく思うよあんなものを作らなきゃ良かったつてね」

「・・・もう遅いですよ。今更そんなこと考えても俺も貴女も失つたんですから。貴女のせいで・・・ね」

男はそう呟く。彼女のせいで二人は多くの大切なものを失つた。女はそれを聞くと・・・

「そうだね・・・私のせいでこつなつちやつたもんね・・・言つても無駄だつてわかつてるけど・・・本当にごめんね」

頭を下げながら、女は謝罪した。それを見ると男は・・・

「・・・もういいですよ。ちゃんとこれをつくってくれたんですから」

そう言うと男は彼女に頭を上げるように言った。これ以上なにかを言っても、何も変わらないし、それに自分にも責任はある。大切なものを守れなかった自分にも、それより今は――

「「あれ」はどうですか？」

彼女に頼んでいたもう一つの物について聞く事にした。「あれ」が無いと目的を果たす事ができない。それを言うと彼女は――

「勿論出来るよ。「あれ」もね。まあ、向こうに「あれ」に勝てる機体があるとは思えないけどね。「あれ」を使いこなすための準備はできた？」

「勿論ですよ。そのための訓練は全てこなしましたし、準備は万全です」

「そっか、じゃあ渡すね。はい、これだよ」

彼女から受け取ったのは黒い鎖に白い小さな剣がくっついているブレスレットだった。それを右手に付けると、

「ああ、それともうちよつとでエネルギーが溜まるから、もう少しだけ待っててね」

女がそう言うと男は、

「分かりました。じゃあ、それまで外で待ってますね」

そう言っつて男は部屋を出た。

1時間後、男が部屋に入るとすぐに女に聞いた。

「終わりましたか？」

「うん、ばつちし。じゃあそのカプセルの中に入ってね。向こうに送るから」

「はい。分かりました。これでいいですか？」

すぐに男がカプセルの中に入ると、

「ん、オツケーじゃあ送るね〜ポチっとな」

ゴウンゴウンという音を鳴らしながら、空間が歪み・・・そして音が消えた頃にはカプセルの中に男はもういなかった。

「行ってらっしゃい」

男がいなくなると女は悲しい表情でそう呟いた。

?????Side end

## プロローグ（後書き）

初心者なものなのでどうか、よろしくお願いします。



## 第一話（前書き）

改めて投稿します。まだまだ未熟なので、どうか意見や感想、アド  
バイス等を送ってください。

## 第一話

東Side

ガラクタやケーブルだらけの部屋でディスプレイの映像を見ながら  
東は笑う。

「ふふふ〜面白い事になってきたね〜」

そこに映っているのは世界でただ一人ISを動かせる男、織斑一  
夏についてのニュースだった。

「でも、どーしていつくんはISを動かせたのかな〜？ちーちゃん  
の弟だからって動かせる訳無いしなんで動いたんだろ？」

東は考えたがどうしても分からなかった。基本的にISを動かせる  
のは女だけ、男には動かせないはずだ。なのに一夏は動かしている。

「う〜ん。いつくんをナノ単位まで分解すれば解るかな〜？」

「それは困るな。そいつは俺が殺すのに」

「!?!」

後ろから声がしたので、振り向くとそこには黒い布で顔を隠した人  
物がいた。東は目の前にいる人物を警戒しながら・・・

「誰かな君は？私になにか用でもあるのかい？」

「無ければ話かけたりしないだろう」

「まあ。そうだね〜じゃあ、こちらから質問させてもらうね。どうやってここに入ったのかな？」

この部屋に入るにはいくつかのセキュリティを解除する必要がある。普通の人が作った物ならともかく束が作ったセキュリティを解除するのは不可能のはずだ。

「ああその事か。それならすぐに解除した。俺のISでな」

「ISで解除した？」

束は目を細めた。基本的にISは戦闘用だけのはずだ。それなのにこの人物が持っているISはセキュリティを解除するという能力を持っている。それにさっきから気になっていたが・・・

「君はもしかして男かい？」

「そうだ。それがどうした？」

「やっぱり・・・」

それがどうしたなどではない。今の所ISを動かせる男は一夏だけのはず。なのに目の前にいる男もISを使っている。どう考えてもおかしい。

「君は一体、何者なんだい？」

そう言うしか無かった。情報が無い上に男、そして謎のISどう考

えても異常でしかなかった。

「いいだろう。質問に答えてやるよ。まずは顔を見せてやる」

そう言つて男は黒い布を取るとそこには……………

「！！　　　どういふ事かな？その顔は……………」

「どついつ事も何もこれが俺の素顔だが何か問題でもあるのか？」

「問題しか無いと思つよ？その顔は」

そう、その顔はあり得ないのだ。あり得ないはずの顔が今日の前にある。

「ふん……………まあ、そう言つのが普通だろうな。この顔を見ればな」

そう言つと男はまた黒い布で顔を隠した。

「さてと、顔を見せてもらった事だし、次は君のISを見せてもらおうかな？」

「構わん、好きなだけ見ればいい」

男は右手に付けていた黒いブレスレットを束に渡す。そしてそれを調べると……………

「！？何このスペック！あり得ない……………何なのこの能力……………私が今開発してる二機より遥かに強いじゃないこの機体！こんなの原則以外なんでもないよ！？」

それを聞くと男はフツと笑いそして・・・

「だろうな。それに勝てる機体なんて存在しない・・・最強の機体だからな。それは」

束は何も言わなかった・・・いや、言えなかった。なにせ目の前にいる相手はあり得ない素顔にあり得ない能力を持つIS、これでは何か言える方がどうかしてる。さすがの束もただ黙っているしか無かった。そうして沈黙が続くと男の方が先に声を出す。

「・・・い・・・おい！」

その声で束がハツとする。余りにもあり得ない事ばかりが続くので惚けてしまったのだ。

「な・・・何かな？」

「まったく・・・まあ、こんな事ばかり起きればこうなって当然か・・・それよりさっき言っていた二機というのは白式と紅椿の事か？」

「!?!」

また、あり得ない事が起こった。この男、今自分が開発している二機の名前まで知っている。思わず束は――

「君は一体何処まで知っているんだい？」

そう言った。すると男は・・・

「さあな・・・何処まで知っているんだろっな？」  
と、笑いながら言った。

（・・・言うわけ無いか・・・まあ、当然といえば当然だけどね・・・さてどうするかなこれ）

データを見たがこれは危険過ぎる。強いとかそういうレベルの問題ではない、危険過ぎるのだ。おそらくこの一機だけでも国一つは簡単に滅ぼせる。それほどまでにこの機体は強力なのだ。

（ここで機体とデータを全て破壊した方がいいねっこれ）

そう束が考えてると・・・

「ああ・・・ちなみに言い忘れてたが、データも機体も破壊しようとしても無駄だ。データは特殊な条件じゃないと破壊出来ないし、機体も戦闘以外では破壊出来ないようになってる」

それを聞くと束は、

「どうかなく解析できる以上このデータをばらまく事はできると思うよっ」

と、ニヤリと笑いながら言ったすると男は・・・

「ああ、確かに解析はできるが・・・そろそろだな」

「？そろそろ・・・って、あれ！？何これ！どんどんデータが消えてる！なんで!?!」

束が画面を見るとさっきまで映っていた機体のデータが消えているのだ。そして、たった数秒で残っていたデータも全て消えてしまった。

「悪いが・・・その機体のデータは専用の端末でないと数分で勝手に消滅するようになっていて。仮にデータを解析してばらまいてもすぐに消えるだけだ。残念だったな」

「うわあ〜何それ、そこまで徹底的にデータを守る必要があるの？」  
束はがっかりした。これでは手も足も出ない、後は専用の端末とやらを使うしか無い。

「まあ機体をじっくり見たければ、専用の端末を貸してやるが・・・その端末も閲覧と調整しか出来ないからな、変な事を考えないようにするんだな」

（はあ〜打つ手無しか〜さすがの束さんもこれじゃあお手上げだね〜でも、あの機体・・・さっき見た時になんか変な所があったんだよね〜確かに性能も武器も脅威的だけど、出力は50%程しか出せないようになってたし、武器に至っては一つしか使えないようになってるし・・・なんでだろ？）

これ程までに強力な機体を開発する人物がこんな欠点を残すとは思えない。まるで――

（意図的にこうなるようにしたとしか思えないね〜でも、だとしたら・・・なんでかな〜？）

考えれば考える程、ますます分からなくなっていました。

(うっん。今は様子を見るしか無いか)なら・・・別の質問をした方がいいね。最初に言った事について)

そう考え、東は次の質問を出す事にした。機体の事は気になるが後で調べればいい。そして・・・

「次の質問をしてもいいかい？」

「ああ、構わない。で・・・次はなんだ？」

「君たしか最初にこう言ったよね？」「そいつは俺が殺す」って、そいつっていうのはいつくんの事かな？」

「・・・そうだ。俺の目的は織斑一夏を殺す。それがどうした？」

そう言った瞬間明らかに雰囲気が変わった。悲しさと殺意が一つになった・・・そんな雰囲気を感じた。それを見て東は・・・

「問題はそこなんだよね、なんで「君」が「いつくん」を殺そうとしているのか、そこが一番の謎なんだよね、君に一体何があったんだい？」

「さあな・・・恨みがあるから殺すそれでいいだろう」

(これ以上聞いても無駄だね)でも「何か」があったって分かっただけでも上出来かな?)

「じゃあ、最後の質問ね。君は何故私に会いに来たのかな？」



「・・・力を借りに来た。後は隠れる場所と・・・俺の機体の調整してもらおう為だな」

「協力すると思う？いつくんを殺そうとしてる君に」

「する気が無いなら殺すだけだ」

男は隠していた拳銃を束に突き付けながら言った。

「それって、脅迫だよな？」

「ああ、そうだ」

(ふう〜協力するしか無いね〜これは)

協力しないといえは間違い無く殺される。そう判断した束は・・・

「ん〜オツケー協力するよ。力を貸してあげるし、機体も調整してあげるね」

それを聞くと男は拳銃を懐に戻しながら。

「ふん・・・随分と聞き分けがいいな」

「まあね〜死にたくないしね、でも代わりに私の護衛と君の機体をたっぷり見せてもらおうよ？君も私じゃないとあの機体を完璧に調整出来ないってわかってるでしょ？」

「ふん、良くわかってるな・・・いいだろう。護衛はきちんとこな

してやる。機体も好きなだけ見ればいい。但し、俺の機体のデータを白式や紅椿に組み込もうとするなよ」

（うーん。やっぱりばれてたか、まあ、護衛はちゃんとしてくれるみたいだし。機体もたっぷり見れるから良しとしますか）

「じゃあ、しつかり私を守ってもらおうよ。後、「例の組織」に行ったりしないかね？」

「安心しろ、奴らも俺の獲物だ。織斑一夏を殺した後にゆっくりと奴らを潰してやる」

「ふふふ、頼もしいね〜じゃあ、そろそろこれを君に返すね」

男は束から黒いブレスレットを受け取ると右手に付け直した。

「ふあ〜今日は色々あって疲れたからもう寝るね〜それじゃあ、おやすみなさい〜」

そう言うと束は適当な所でぐっすりと寝ていた。それを見て男も適当な場所で横になり、そして・・・

「俺も寝るか・・・」

そう言うと彼の意識は闇に消えた。

束Side end

## 第一話（後書き）

もっと上手になりたいのでよろしくお願いします。

## 第二話（前書き）

少し短いかもしれませんが。読んでいただければうれしいです

## 第二話

?????Side

随分と寝ていたのだろう。目を開けるとそこには――

「やつほく起きたかい？黒くん。朝ごはんにするよ」

・・・何故か桃太郎の格好で鉞と釣竿を背負っている篠ノ之束が目の前にいた。

「うん？どうしたんだい？黒くん。訳のわからない不思議生物でも見たような顔をして？」

「いや、まさにそのとおりなんだが・・・何故、桃太郎の格好をしている？後、桃太郎に鉞や釣竿は必要無いだろう？何故、背負っている？」

「ふっふっふく甘いよ！黒くん！今の時代なんでもこなさなきゃ桃太郎は滅んでしまう運命にあるのさ！それを防ぐために束さんはこの格好をしているのさ！」

と・・・自信満々の表情で言う篠ノ之束だが・・・

「いや、まったく理解できないのだが？まず、桃太郎は種族じゃないし、それとお前がその格好をするのとはどう関係するんだ？後、「黒くん」というのは俺の事か？」

「うん、そうだよ？黒い髪に黒いブレスレット、そして黒い布、黒

ばっかだから「黒くん」駄目かい？」

「……駄目と言ってもどうせ無駄だろ……」

篠ノ之束が誰かの言う事を簡単に聞いてくれるとは思えない。男が少し呆れながら言つと……

「あつはつはゝまあね！当然だよ！」

何がまあね！なんだと言いたいがと言つてもどうせ意味が無いし、黙つておく事にした。それよりも朝食を取る事にした。ふと時間を見ると……

「……おい、篠ノ之束」

「なんだい？黒くん？」

「お前さっき朝食を食べようと言つてたよな？」

「そつだよ？」

「……どう見ても朝食という時間には見えないのだが……」

時計を見ると、すでに昼の3時、どう考えても「朝食」ではなく「昼食」のはずだ。それを聞くと束は……

「えゝそんなのどうでもいいじゃんゝそれよりもさつさと朝ごはんを食べようよゝ」

「……もういい。これ以上なにか聞いたら頭が痛くなる。」

さっさと食べてとするか・・・」

「そうだよ。そんな事を考える前にまずご飯を食べなきゃ健康に良くないよ?」

不健康の塊の分際で何をほざくと言いたかったが、やめる事にした。言っても無駄だし、また変な事言われるのが関の山だ。そう考え、朝食?を済ませた。

東Side

東と男が朝食?を済ませると男が聞いてきた。

「・・・白式はもう完成したのか?」

「ん? まあね。元々、欠点機として捨てられてのを動くようにしただけだし、そんなに苦労しなかったね。」

「・・・俺の前でそんな事言ってもいいのか?」

「うん? 君の事だから、それぐらい知ってると思ったけど・・・白式や紅椿の事知ってる時点だね。」

「・・・まあな。」

「それよりもさ。君の機体をもっと詳しく調べたいんだけどいいか

い？」

「……別に構わないが……昨日見て俺の機体がどんなものかわかってるだろう？何故、又調べようとする？」

（……うん。やっぱり黒くん。あの機体の欠点について知らない見ただね〜なら……尚更あの機体について詳しく調べる必要があるね〜）

そう束が考えると男が少し不審に思ったのか……

「……なにか企んでいるのか？」

男がそう言つと束は……

「うん。ただあの機体をもっと見ただけだよ。あれほどの機体をもっと詳しく調べたいのはISを開発した者として当然の事だよ？」

嘘は言っていない。あの機体が気になるは事実だし、開発者として調べたいのも本当の事だ。但し、全部が本音というわけでもない。束としても一夏達のためにも少しでも情報が欲しいのだ。束がそう言つと男は……

「……まあ、いいだろう。あの機体を調べてもこれ以上なにか出てくるわけでも無いし……飽きるまで調べればいい。但し、わかっていると思つが……」

「わかってるって黒くん。あの機体のデータを使つな、でしょ？ちゃんと約束は守るから安心してよ〜」



「・・・安心できると思うか？ISという世界最強の力を開発した上、脱走癖のあるお前に俺の機体を預けるはどう考えても悪い予感しかないだろう」

「むうゝまあ、そうだねゝ事実そのとおりだし、反論出来ないねゝ」

「・・・する気は無いのか？お前は・・・はあ、もういい好きなか  
け調べる」

男がそう言う少し呆れながら右手に付けていた黒いブレスレットを束に渡した。

「いいのかい？これを私が持ち逃げするかもしれないよ？」

「されても問題無い。例え持ち逃げされても遠隔でコールすればいいだけだ」

「・・・この機体のコールできる範囲ってどれくらい？」

束がそう質問すると男は少し言いづらそうに・・・

「・・・ここから地球の裏側まで・・・」

「ええゝなにそれ、なにその超範囲盗んでもまったく意味ないじゃん」

「・・・ちなみに俺以外コールは出来ないようになってる」

男が顔を反らしながら、気まずそうに言った。

「・・・さすがの東さんも何も言えないね〜はあ」

二人の間に気まずい空気が流れると・・・

「・・・体を動かしてくる。好きなだけ調べる・・・後、これがその機体専用の端末だ」

男が東に端末を渡した後、部屋をでると東は機体を改めて調べる事にした。少しめんどくさそうな顔をしながら・・・

調べて数時間たったが、やっぱりおかしい。武器も様々な種類があり、機体の出力も驚異的なものだ。それなのに、何故制限を掛ける必要があるのだろうか？

(う〜ん。やっぱりわかんないな〜なんでわざわざ制限を掛けるんだろ？それに・・・いくつか閲覧すら出来ないようになってるデータもあるし・・・考えれば考えるだけ益々分からなくなってしまふね〜とりあえず気になるのが三つあるね〜)

今、端末に標示されてるデータは「Rシステム」と「Eシステム」、そして正体不明のプログラムの三つだが、その全てが閲覧不可能になっているデータだった。最後のプログラムに至っては名前すら標示されていない。東はこの三つをどうしても見たいのだが・・・

(う〜ん。見る事すら出来ないなんて、余程重要なものなんだろう

けど・・・気になるね〜)

ニヤリと少し邪悪な笑みを浮かべる東。何としても見てやるつもりが・・・

「そろそろいいか？」

という声が出たので一瞬ビクツとしながら東は振り向く、するといつの間にか男が戻って来ていた。

「ふ〜びっくりさせないでよ〜黒くん。政府の追っ手かと思ったよ〜」

「・・・そうか、それは悪かったな。所で何を調べている？」

男が言うと東は少し考えた。

(素直に言った方が身の為だね〜)

下手な事を言っただけ警戒されても厄介だ。それにもしかしたら何か喋るかもしれない。

「気になるデータがあつてそれを見たいんだけど・・・閲覧出来ないから困ってるんだよ〜」

「・・・ああ、あの二つのプログラムの事か・・・」

男がそう言った瞬間東は目を細めた。閲覧出来ないのは全部で「三つ」、なのに今「二つ」と言った。

( どういう事だろ？黒くんも知らないプログラムが一つ交ざってる  
って事？でも、どうしてかな？ )

更に謎が増えてしまった。少しでも情報が欲しいのに逆にわからない  
事が増えてしまう。

( うーん。これ以上調べても意味が無いね。今日はここまでかな  
なら )

そろそろ腹が減る頃だ。食事をしてから又、考える事にした。

束 Side end

## 第二話（後書き）

意見やアドバイス、感想をどんどん送ってください！

### 第三話（前書き）

投稿します。誤字や間違い等、ありましたらどんどん言ってくださ  
い。

## 第三話

束Side

束と男が出会って、一ヶ月以上が過ぎたある日・・・

「ふふふ」さてと、そろそろ準備するのでしょうか」

そう言い、束は向こうにある黒い機体を見た。それは束が開発した無人用IS「ゴレム？」だった。束はこの機体で今度IS学園で行われるクラス対抗戦の日に一夏を襲撃するつもりなのだ。なぜ一夏を襲撃するつもりなのか？それは一夏を強くするためだ。束はこれから先、「例の組織」が本格的に動くと予想していた。それに対抗してもらう為にも、一夏は強くならなければならない。そのため束は一夏に「ゴレム？」をぶつけようとしているのだ。

「テストも全部完了したし・・・後は対抗戦の日を待つだけだね」  
そう束が考えていると・・・

「なら・・・俺も一緒に行くとするか・・・」

「・・・黒くんもかい？なんでかな？」

「・・・織斑一夏を殺す為だ。それ以外に何がある？」

（・・・まあ、それ以外あるわけないか？それにしては・・・黒くんも不可解な行動を取るよね）」

束は男にある質問をした。

「ね、前から気になってけど……いつくんを殺すって言う割には変な事ばかりかしてるよね？なんで？」

「……何の事だ？」

「惚けても無駄だよ、いつくんを殺すのなら暗殺でも襲撃でもすればいいじゃん。なのになんでわざわざこの日に殺そうとするのかな？」

そう、この男はまだ一夏と戦っていない。この男の実力と機体ならば簡単に殺せるはずなのに、なのになぜまだここでゆっくりしているのか……その事を束は聞いているのだ。

「……その日だから……だな」

（その日だから？どういう事かな？この日でなければ駄目って事？でも……なんでこの日でなければ駄目なのかな？）

束はその事について聞きたかったが……おそらく聞いても応えなだらう。なら、別の質問をすることにした。

「まだ聞きたい事はあるよ、そもそもいつくんを殺すつもりなら、なんでいつくんに白式を渡すのを黙って見ているのかな？どう考えても不自然だよな？」

そう、それが一番おかしいのだ。一夏を殺すつもりなら、白式を受け取る前に殺せばいいはずだ。なのに、何故かこの男はそうしようとしな。束はそれが一番気になっていた。



「……ふん、さすがは篠ノ之束といった所か……いいだろ。質問に答えてやる。白式を受け取るのを見過ごすのは力のない奴を殺しても意味が無いからだ。これでいいか？」

(うーん。話を聞く限りどうも黒くんは一般人としてのいつくんじやなくて、IS操縦者としてのいつくんを殺そうとしているって事かな？)

もし、そうだとすれば彼が何者なのか少し予想がつく。だが、その結論に至るにはまだ情報が少な過ぎる。

(……答えを出すには現時点ではまだ、不可能だね。それに……もし仮にそうだとしてもどうやってここに来たのかな？)

束は今考えてる事が彼の正体だと思っているが……もし、そうだとしたらやはりあり得ない事になってしまう。束は今考えてる事を無視することにした。

「……納得したか？したのならさっさと俺の機体の最終調整をしろ。」

「……断ったり、変な調整したらどうする？」

「……なら、死んでもらう。お前も今ここで死にたくはないだろ。」

(はあ。やるしか無いね。まだ紅椿は完成してないし……それに死んだら篝ちゃんに渡せないしね……従っしか無いね。)

今ここで死ぬわけにはいかない。束はおとなしく言う事にした。但し……

「わかったよ、ちゃんとしてあげる。けど……こっちの頼みも聞いてもらおうよ?」

束は取引を持ち掛ける事にした。このままおとなしく従うのも嫌だからだ。

「……要求はなんだ?」

「いつくんをこ」却下だ」って、早いよ!まだ全部言っていないよ!

「……どうせ、「いつくんを殺さないでほしい」とかだろ……俺がそんな事聞くわけないだろ……」

「ううだったら……こういうのはどうだい?」

最初の頼みを見捨てられると別の頼みと言う事にした。それを聞くと男は……

「……それはまた、厄介な要求だな……だが「断らない方がいいと思うよ?」「……どつという意味だ?」

「こっちもいつくんを殺されたくないし……それに、頼みを聞いてくれるなら機体も完璧に整備するし、その上にチャンスも与えられる。これ以上の譲歩はしないよ?それに……君もまだ私を殺すわけにはいかないでしょ?」

(……確かにまだ、ここで篠ノ之束を殺すわけにはいかない……

か)

ここで篠ノ之束を殺せば、機体の整備ができなくなる上、寢床の確保にも時間がかかる。更に食事にも影響がでてしまう。男が少し考えてから・・・

「・・・分かった。その要求を飲もう。これでいいんだな？」

「ありがとう〜黒くん。そのか「但し・・・」なんだい？」

「こちらもその間は好きなようにさせてもらおう。いいな」

「・・・仕方ないね〜いいよ。その間は好き勝手にしても。でも・・・わかってるよね？」

「・・・ああ、その代わりにお前も俺の機体を完璧に仕上げてもらおうぞ」

「勿論、じゃあ貸してね〜調整するから」

「・・・ふん、受け取れ」

男は黒いブレスレットと専用の端末を束に渡してその後すぐに部屋を出た。

「さて・・・じゃあがんばりますか!」

??? Side

あれから数日後・・・俺の機体の整備も終わり、ゴーレム?の準備も完了した。そして・・・

「・・・では行くとするか・・・」

「ふふふ〜早く君の機体を見せて欲しいな〜」

束は機体のデータは見たが、機体そのものはまだ見ていない。だから今か今と待っていた。

「・・・来い・・・」ラグナロク「」

俺が機体の名前を言うと一瞬だけ周りが光りそして・・・黒い騎士の様なISが現れた。

「へえ〜そんな姿をしているだ〜かつこいいね〜それにしても・・・ラグナロクか〜確か終わりを意味する言葉だよな?おまけに、ゴーレム?と同じ「全身装甲」とはね〜正体を隠す為ってとこかな?」

「ああ、そのとおりだ。それと・・・ん・・・ん・・・ん。これでいいな」

俺が何度か声を出すとすぐに声が変わった。

「おお!女の子の様な可愛い声になったね〜うふふ〜それも君のISの能力の一つだからほんと変わってるよね〜君の機体」

「ふん・・・とんでもないものばかり開発するお前に言われたくない

いな・・・流石に男の声のまま戦うのは不味いからな・・・」

「じゃあ、喋らなきゃいいじゃん」

「無理だな」

「即答だねーじゃあ、そろそろ行ってらっしゃい」

「……………」

俺は束に言葉を返さないまま、ゴーレム?と共にIS学園に向けて飛び発った。

???Side end

## 第三話（後書き）

意見やアドバイス、感想をどんどん送ってください！

## 第四話（前書き）

結構時間がかかりました・・・それでは投稿します。後、意見やア  
ドバイス、感覚等送ってください！それと間違いもあつたらお願い  
します。

## 第四話

一夏Side

俺は今第二アリーナで試合開始のときを静かに待っていた。目の前にいる凰鈴音こと鈴も同じ様に待っていた。そして・・・

『それでは両者、規定の位置に移動してください』

アナウンスが流れ、俺と鈴は向かい合う。俺は改めて鈴のISS「甲龍」を見る。前に戦ったセシリアの「ブルー・ティアーズ」と同じ、第三世代型のISSだ。特徴的な非固定浮遊部位と肩の浮いている棘付き装甲が攻撃的なイメージを出していた。

「一夏」

「・・・なんだよ」

「今謝るならこの前の事は許してあげるし、手加減もしてあげるわよ。まあ、その代わりにヶ月位はデザートをおごってもらうけどね」

「いやだね。来るなら全力で来いよ。じゃないと負けちまうぜ?」

俺がそう挑発すると鈴は・・・

「ふん・・・どうやら全力で叩き潰す必要があるようね。あたしとアンタじゃあ、力の差がはっきりしてるのがわかんないの?」

鈴は腕を組みながら言う。



「うるせえ、そんな事わかってる。でも、全力でやらなきゃ試合の意味がねえだろ」

俺ははつきりとそう言った。勝負というのは全力でやって、意味がある。手を抜いてもらっても無駄なだけだ。

「ふん。じゃあ、お望みどおり全力でやってあげるわ。後悔しなさい。後、言っておくけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを超える攻撃力があれば、操縦者にダメージを与えられる」

嘘ではないだろう。噂では操縦者にダメージ『だけ』を与える武器も有るらしい。もちろん、それは競技規定違反で禁止されている。だが、「殺さない程度に痛めつける」事なら、一般的な武器でも可能だ。そして・・・代表候補生クラスならばそれが可能なんだろう。俺が前にセシリアを追い詰める事が出来たのは奇跡と断言していいだろう。そして・・・奇跡は二度も続く事はない。

『試合・・・開始!!』

ブーーーーーッ!!

合図が鳴ると俺は動くと同時に展開した「雪片二型」を鈴に向けて振るう・・・が、なにかで弾かれた。俺は三次元躍動旋回をこなし、鈴を正面に捉えると鈴が右手に持っている物を見た。それは異形の青龍刀「双天月牙」だった。

「へえ・・・少しはやるじゃない。でも・・・次はどうかしら？」

鈴が「双天月牙」を自由自在に操りながら斬り込んでくる。おまけに、高速回転している為、俺は防ぐので精一杯だった。

(このままじゃ、消耗戦になっちまう。距離を取ー！)

「甘いー！」

鈴がそう言った瞬間、肩のアーマーが開く、そして中心の球体が光ったのと同時に俺は見えないなにかに「殴り」飛ばされた。

(ぐっ……なんだ！？今は!?)

俺は意識をはっきりさせ、態勢を立て直す。が……その間も鈴の攻撃は続く。

「今のはジャブだからね。次は……ストレートよ!!」

「くっ!!」

なんとか今の攻撃はかわした様だが、いつまでもかわす事は出来ない。はつきり言ってかなりまずい状況だった。

?????Side

(……もう少しで到着だな)

俺とゴーレム？はステルスモードになりながらIS学園に近づいていた。この時間帯ならば、もう試合が始まっている頃だ。

(・・・織斑一夏。やっと、お前を殺す事ができる)

だが、篠ノ之束の「頼み」を叶える必要がある。到着しても「その時」が来るまで、戦ってはいけないそれが篠ノ之束の「頼み」の一つだった。

(・・・奴も厄介な要求を出すものだな・・・)

篠ノ之束の「頼み」を聞かなければ、戦う事が出来ない。それが今の彼の現状だった。

(・・・到着まで、五分とといった所か・・・ゴーレム？がいなければもっと速く着いたのだが・・・仕方ないか)

俺はIS学園が見えると、そのままゴーレム？と共に第二アリーナに向かった。

## 一夏Side

俺は鈴が試合中に何度か言っていた衝撃砲「龍砲」について考えているが・・・何一ついい案が出てこない。なにせ砲弾は見えない上、砲身まで見えないのだ。おまけに、「龍砲」は砲身斜角がほとんど制限なしで撃てる・・・はつきり言って隙が無い。射線はあくまで

直線だが、鈴の操縦者としての能力がかなり高い。基礎のすべてを高いレベルで習得していた。つまり、強敵なのだ。

（・・・ハイパーセンサーで空間の歪みと大気の流れを探らせているけど・・・これじゃだめだ。撃たれてからわかっても意味がない。実力差がはつきりしている以上、どこかで先手を打たないと俺の負けだ。となると・・・やっぱり、「これ」しか無いな）

俺は右手に持っている「雪片二型」を見て、ある言葉を思い出す。

「バリアー無効化攻撃」、「雪片二型」の特殊能力だ。攻撃力は高いが、使用するにはシールドエネルギーを消費しなければならぬ。いわば、諸刃の剣だ。たが、勝つにはこれしかない。実力差がある以上、長期戦になればこちらの負けは確実だった。ならば、一か八か・・・

（「瞬時加速」で鈴の懐に入ると同時に「バリアー無効化攻撃」で攻撃する。これでシールドエネルギーを半分以上削れなければ・・・俺の負けだな）

「瞬時加速」で俺に掛かる急激なGはISの操縦者保護機能で防いでくれる。俺は気を引き締めると・・・

「鈴、本気で行くぞ」

真剣な顔をしながら俺がそう言うと、鈴が少し頬を赤くした。

「な、なにを今更そんなこと言ってんのよ・・・と、とにかく実力の差というの思い知らせてあげるわ!」

俺と鈴が武器を構え直すと、俺は衝撃砲が発射される前に加速姿勢

に入り、そして、「瞬時加速」で鈴に近づき……「雪片二型」が  
当たりそうになった。

（もらった！）

だが、「雪片二型」が当たる瞬間……

ドゴオオオオン！！！！

「「！？」」

突然、轟音と共に大きな衝撃がアリーナ全域に走った。そして……  
ステージの中央に「なにか」がいたが、黒い煙のせいで何があるの  
かわからない。

「な、なにが起こって……」

俺は状況を把握しようとする……

鈴からプライベート・チャンネルが飛んできた。

『一夏、試合は中止よ！いますぐピットに戻りなさい！』

「はぁ？いきなりなにを……！！」

俺が次の言葉を言おうとした瞬間、ISのハイパーセンサーが緊急  
通告を行ってきた。

……ステージ中央に熱源を探知、所属不明のISと断定します。  
ロックされています。

「なに!？」

つまり、アリーナの遮断シールドを貫通する程の攻撃力を持った謎の機体がここに侵入し、こちらを狙っている・・・簡単にいうとピンチな状況に陥ってしまったのだ。

『一夏、早くピットに戻って!』

「待てよ鈴!お前はどつするつもりだ!？」

あれほどの攻撃力を持つ機体と戦うのは鈴でもかなりキツイはずだ。ちなみに・・・初めての相手とのプライベート・チャネルのやり方がわからないので、俺はオープン・チャネルで聞いた。

「あたしが時間稼ぎをするわ。一夏はその間にピットに戻りなさい!いいわね!」

「あのなあ、鈴を置いていける訳ないだろ!俺も戦う!」

「なに言ってるのよ!いいからさっさと戻りなさい!」

ちなみにさつきから俺達はプライベート・チャネルではなく、オープン・チャネルで喋っている。

「安心しなさい一夏、あたしもあんなのと最後まで戦う気はないわ。少し時間を稼げば、すぐに学園の先生たちが来て、事態をー!ー!」

「あぶねえ!!鈴!!」

間一髪ので俺は鈴をその場から離れされることが出来た。その直

後に強力な熱線がその場所を襲った。

「ビーム兵器か・・・なんて出力だ。セシリアのISよりも威力があるな」

「つて、ちよつと離しなさいよ！」

「おい、暴れるなよ。それに殴るな！」

「だったら、さつさと離しなさいよ！」

鈴が俺に向かってパンチを連射してきた。なんでだ？

「それにさつきからどー！」

「！避けるぞ！」

俺はそこから離れると・・・すぐにビームの嵐がその場を襲う。そして、謎のISが姿を現す。

「なんだ？この機体・・・」

俺はその機体を見たが・・・変な所ばかりだった。色は少し黒に近い灰色で手が異常に長い。それに首がない。肩と頭が一体化していた。そして一番おかしい所は「全身装甲」だということだ。普通、ISは部分的にしか装甲を出さない。ISはエネルギーシールドでほとんどの防御を行なっている。いくら防御に特化していたとしても肌がまったく出ていないISなど見たことも聞いたこともない。そして他にはメートルを超える巨体を支えるためか、全身にスラストアームがある。頭には剥き出しのセンサーレンズがあり、腕には

左右合わせて四つのビーム砲口があった。

「何なんだよ、お前」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

当然といえば当然だが、相手はこちらの問いに答えようとしない。

『織斑君！鳳さん！今すぐアリーナから脱出してください！私達教師である機体を対処します！』

山田先生が割り込んできた。が・・・

「悪いですけど、先生たちが来るまで俺達が時間を稼ぎます」

教師達が来るまでに誰かがあの機体の相手をしなければ観客席の人間に被害が及ぶ可能性がある。なにせ相手は遮断シールドを突破するような機体だ。

「いくぞ、鈴」

「なに、仕切ってるのよ！それよりいい加減離しなさいってば！」

「わかったよ。ほら、それと・・・戦う覚悟はあるのか？」

「当たり前よ。ていうか・・・やるしかないでしょ？」

『二人共！？ダメですよ！生徒さんになにかあつたらー！』

敵の機体が突進してきたが、それをかわす。そして、俺と鈴が横並



びになるとそれぞれ得物を構える。

「ふん、向こうはやる気満々ね。一夏、あたしが援護するわ。あんたは突っ込んで、武器ってそれだけでしょ？」

「ああ、じゃあ援護よろしく」

「いくわよ!」

「いくぞ!」

俺達は即席のコンビネーションで敵に向かった。

??? Side

「さて・・・お手並み拝見と言った所か・・・」

「ラグナロク」を纏っている俺はゴーレム?をアリーナに襲撃させた後、客席にステルスモードのまま待機していた。

「・・・はあ、今すぐにでも、奴を殺したいのだが・・・待つしかないか・・・」

俺は束が出した「頼み」を守っていた。本来ならすぐにでも、織斑一夏と戦いたいが・・・それは出来ない。束の「頼み」は二つ、その内一つはゴーレム?から戦わせてその後に一夏と戦うことだった。

そんなもの無視したい所だが、断ればゴーレム？とも戦う事になる上、「ラグナロク」に仕込んだプログラムを起動させられる。俺は黙って待つしかなかった。

「・・・さつさと倒してくれよ。織斑一夏、俺はあまり気が長い方ではないからな」

俺は一夏達とゴーレム？の戦闘を眺めながらある事を考えていた。それは一つ目の「頼み」についてだ。

(・・・何故、俺ではなく、先にゴーレム？と戦わせる？普通に考えて・・・俺を最初から戦わせた方が生き残る可能性は高いはずだ。なのに・・・何故、わざわざ俺を後から戦わせようとする？なにか考えでもあるのか・・・?)

自暴自棄になったのか、それとも別のなにかを待っているのか・・・少なくとも、なにか企んでいるのは間違いない。

(ふん・・・まあ、いいだろう。その企みに乗ってやるとするか・・・)

俺はそう考えると再び戦闘を眺める事にした。

千冬Side

一夏達と謎の機体との戦闘を眺めながら私はコーヒーでも飲む事に

した。

「もしもーし!?二人共聞こえてますかー!?もしもーし!?」

ISのプライベート・チャネルで声を出す必要はないのだが・・・それを忘れる程、今の山田先生は焦っていた。

「二人共やると言っているのだから、やらせてもよからう」

「織斑先生!こんな時に何をのんきな事を言ってるんですか!?!」

「ふう・・・落ち着いてコーヒーでも飲め。糖分が足りんからイライラするんだ」

私はそう言い、コーヒーに砂糖を入れた。すると山田先生が・・・

「・・・あの、それ塩ですよ。先生」

塩?まさか、私は砂糖を入れていたはずだ。そう思い容器を見ると・・・大きく「塩」と書いてあった。

「・・・なぜ塩がある」

「え・・・でも、それ「塩」って書いてありますけど・・・あっ!弟さんが心配なんですネ!?!だからそんなー!」

ふむ、どうやら山田先生は糖分が足りないようだ。では、この「砂糖」入りのコーヒーを渡すでしょう。

「山田先生、「砂糖」入りのコーヒーをどうぞ」

「え……あの……それって確か塩が入ってるやつじゃ……」

「どござ」

ずずつと押しつけると山田先生はやっと「砂糖」入りコーヒーを受け取った。少し泣いているようだが……気のせいだろう。

「いただきます……」

「熱いから一気に飲むように」

ふむ、良い事はするものだな。ちなみにからかわれそうになった事に対しての報復ではないぞ？決して。

「織斑先生！わたくしも出撃させてください！何時でも行けますわ！」

「そうしたいが……これを見る」

ブック型端末に表示されている情報は第二アリーナのデータだった。

「遮断シールドがレベル4になっている上、扉はすべてロックされていますわね……まさか、あのISのせいだ！？」

「そのようだ。これでは避難も救援もすることができないな」

私は落ち着いていた口調で話すが……内心苛ついていたようだ。その証拠にさっきから片方の手で画面を何度か叩いている。

「なら、すぐにでも、政府に助勢を・・・」

「もうやっている。今も三年の精鋭がシステムクラックを行なっている。終わり次第、部隊を突入させるつもりだ」

「はぁ・・・わたくしは待つことしかできないのですね・・・」

「まあ、お前は突入部隊に入っていない。そこでゆっくりしてる」

「な、なぜですか!？」

「お前の機体は一对多向きだ。今の状況で戦ってもむしる邪魔だ。後、連携訓練は？その時のお前の役割は？ビットはどう使う？味方の配置は？敵のレベルはどのくらいに想定している？連続稼働時――」

「も、もういいです。わかりましたわ!」

「ならいい。そこでおとなしくしてろ」

オルコットを黙らせると私はまた、一夏達と例の機体を見る。

「あら・・・篠ノ之さんは？」

オルコットがなにか言っていたみたいたが、聞こえなかった。一夏達を見ながら私はとても嫌な予感を感じた。

一夏Side

「くそ・・・また、かわされた!」

何度目かの必殺の一撃、だが、また空を斬るだけだった。

「もう!当てなさいよ!ちゃんと狙ってるの!？」

「狙ってるつーの!」

本来なら当たるはずだが・・・敵の機体のスラスタはとんでもない速さを出している。懐に入っても一瞬で離れてしまう。

（・・・まだ、エネルギーは残ってるけど・・・このままじゃあ・・・）

「一夏!」

「おっと!」

敵がまた、反撃をしてきた。さっきと同じ様に長い腕を滅茶苦茶に振り回しながら接近してくる。おまけに、ビームも撃ってくるから手に負えない。

「いい加減・・・くたばりなさいよ!」

鈴がそう言いながら衝撃砲を撃つが・・・敵は見えない衝撃を叩き落とす。

「鈴、あとのくらいだ？」

「三〇〇ってとこ。まだいけるけど・・・正直キツイわね・・・今のあたし達があれば落とすのってかなり厳しいわよ？」

俺も二〇〇程度は残っているが・・・やはりキツイ。けど・・・

「まだいけるなら、それで充分だ。なんとかしてみせるさ」

そう、言いはなつ。気持ちで負ければそこで終わりだ。それを聞く  
と鈴は少し呆れながら・・・

「アンタねー。はぁ・・・でどうすんの」

「そうだな・・・なにか弱点でもあればいいんだけど・・・」

「あのねえ、そんなのあつたらとっくに倒せてるわよ。弱点が無い  
から苦労してるんでしょ？」

「そうだけど・・・」

俺は少し考える。なにか隙はないのかと、

(そういえば、あいつ・・・)

「なあ鈴、あいつなんか変じゃないか？」

「・・・？変つて、なにが？」

「いや、あいつの動き・・・なんか機械じみてないか？なんつーか・・・あれって人が操作してるとはとも思えないんだけど」

「・・・そういえば、そうよね・・・さっきから同じ行動ばっかしてるわねアイツ・・・それにさっきからあたしたちが喋ってる間はあんまり攻撃しないし・・・まるで興味があるみたいだけど、でもあり得ないわよ。ISは人が乗らないと動かない。そうなってるのよ?」

確かにそうだ。だが・・・本当にそうだろうか？絶対あり得ないとは言いつれない。なにせその技術があっても隠していれば、誰にも気づかれないで済むのだ。

「ねえ、仮にあれが無人機だったら・・・勝てるの?」

「ああ、それに全力で攻撃しても問題無いしな」

「どつという意味?」

「「雪片二型」の威力は「零落白夜」も含めて高すぎるんだよ。訓練や対戦で全力を出すことはできないけど・・・相手が無人機だったらその必要もないしな」

「・・・アンタそんなもの使ってたの?まあ、それはいいとして・・・どつやって、その全力を当てるのよ?」

もつともな意見だ。攻撃を当てようにも、懐に入ろうとすればすぐに離脱されるし、衝撃砲で攻撃しても叩き落とされる。

「安心しろよ。策がある」



俺がそう言つと鈴がニヤリと笑つた。この顔は「失敗したら駅前のクレープをおごれ」という顔だった。やれやれ。

「ふーん。いづじゃない。そういうからには・・・絶対当てなさいよ」

「ああ、絶対に当てる。だから・・・手伝つてくれ」

「わかつたわ。で、どうするの?」

鈴が聞くと俺は、

「俺が合図を出したら、あいつに向けて衝撃砲を撃つてくれ。フルパワーで」

「・・・別にいいけど、どうするつもり?」

俺はそれを聞くと少し笑う。当たらなくて問題無い。目的は別にあ

る。「なによ・・・笑つて、もう」

「ごめんごめん。それより早速ー」

俺が突撃しようとした瞬間・・・

「一夏あつー!」

いきなり、アリーナのスピーカーから大声が響いた。なんだと思

周りを見ると中継室に箒がいた。あと、審判とナレーターが気絶していた・・・たぶん、箒のせいだろう。なにしてるんだよ・・・

「男なら・・・男なら、そのくらいの敵を倒して見せろ！」

箒がまた、大声で叫ぶ、そして・・・その声に反応して敵の機体が箒の方を見る。

（まずい！！）

今の館内放送で、発信元の箒に興味を持ったようだ。今から言っても間に合わない。ならー！！！！

「鈴！」

「わかったわ！」

鈴が最大出力の衝撃砲を撃つため、準備をする。それが終わると俺は鈴の前に出る。

「ちょっとなにしてんの！？離れなさいよ！」

「さっさと撃て！」

「ああーもう！知らないわよ！」

鈴が衝撃砲を発射すると同時に俺は「瞬時加速」を作動させる。

「瞬時加速」は後部スラスタ翼からエネルギーを出して、それを内部に取り込み、圧縮して放つ。その際に出るエネルギーを利用して加速する。つまり、外部からのエネルギーでも加速できるということ

とだ。そして、「瞬時加速」はエネルギーが多ければ多い程、速さが増す。

ドンツ！という音がした瞬間、俺は加速する。衝撃砲のエネルギーを利用して加速したのだ。そして同時に右手の「雪片Ⅱ型」から今まで以上に強い光が放たれた。

――『零落白夜』発動。

その情報を俺は「聞く」ではなく「理解」した。初めてISを触れたときに感じた感覚を身体中を包んだ。

（守ってみせる・・・！俺の家族を、仲間を、皆を、守り抜いてみせる！！）

俺はそのまま敵の機体に突進し・・・そして敵の右手を切り落とす。が・・・同時に残った左手で相手が俺を殴り地面に叩きつける。そして、そのまま左手でビームを撃とうとする。

「「一夏！！」」

箒と鈴が叫ぶ。それを聞き、少し笑うと・・・次の瞬間、敵の機体が四つの閃光に撃ち抜かれた。

「上手くいったみたいだな。セシリア！鈴！止めだ！！」

「ええ！！」

「わ、わかった！！」

そして二人の攻撃で敵の機体が完全に沈黙した。

「なるほど、さっきの一撃で敵を斬るのと同時に遮断シールドを破壊する。そしてそこからオルコットさんが敵の機体を撃ち、そしてあたしたちで止めを刺すって訳か、考えたわね一夏」

「ああ、相手は無人機だったからな。認識外からの攻撃は対処できないって思ったんだ。上手くいったよ。ありがとなセシリア、鈴」

俺が礼を言つと・・・

「ま、まあ当然ですわ！わたくしはセシリア・オルコット。イギリス代表候補生なのですから！」

「そ、そうね！あたしは凰鈴音。中国代表候補生なんだからこれくらい、当然よ！」

二人共少し照れながら喋っていた。どうしたんだろう？まあ、何にせよ・・・

「やっとこれでー」

「終了だ」

「「「「「！？」」」」」

何処からか声がした瞬間。俺に漆黒の閃光が襲いかかった。

一夏Side end

#### 第四話（後書き）

話が長くなりそうだったので・・・続きは次回になります。ついに  
「夏達と「男」が戦います。」

## 第五話（前書き）

やっとできました・・・今回はほとんどオリジナルの話です。では、投稿します。

## 第五話

????? Side

ゴーレム？が倒された後、俺はすぐに超大型ビームライフル「シヴァ」を展開、そしてチャージを開始した。チャージが完了したの同時にステルスモードを解除し、織斑一夏に向けて発射した。

「ぐあああああー!!」

「一夏!?!」

「一夏さん!!」

「一夏あ!!」

奴に当たりはしたが・・・直撃していなかった。奴の機体の左側の装甲を破壊しただけだった。間一髪の所でかわしたようだ。それでもかなりの損傷を負わせたが・・・

(・・・どういう事だ? 「シヴァ」の出力が低すぎる・・・本来ならば、今ので始末できたはずだが・・・)

俺は妙だと思いい機体の武器を調べる。すると・・・

(何!?!今使用できる武器は「シヴァ」と「レーヴァテイン」の二つだけだ?!?!しかも、「シヴァ」の威力も3割程度でチャージは撃つためだけか・・・おまけに、機体の出力も60%にも満たないのか!くっ、あの人・・・「ラグナロク」にこんな仕掛けを施して

いたのか・・・！)

俺は歯を噛みしめた。これで倒せなくはないが・・・少しきつい。幸い「レーヴァテイン」は何の異常も無いようだが・・・

(・・・この際、仕方ないか・・・「Rシステム」は使用できるよ  
うだし、それよりも今は奴を殺す方が先だな)

機体の事を黙っていた篠ノ之束を後でどうするかと考えるが・・・  
今は目の前にいる「敵」を殺す事に集中することにした。

(どうやら、向こうもこちらに気付いた様だな・・・なら、まずは  
奴等の出方を見るとしよう)

俺はそう考えると・・・「シヴァ」を構えながら奴等が動くの待っ  
た。

## 一夏Side

くっ・・・なんだ今のは！？どこから攻撃してきたんだ！？俺はす  
ぐ、周りを見ると・・・

「なんだ？あいつは？」

俺の視線の先に・・・黒いISがいた。さっきと同じ「全身装甲」  
だが、形が明らかに異なっていた。さっきのISは鉄の巨人という



感じだが、目の前にいるISは黒い騎士という印象を受けた。そう考えるとセシリアと鈴が、

「一夏さん！無事ですか！」

「大丈夫！？一夏！」

「ああ、でも・・・左側の装甲がボロボロになっちまった」

ハイパーセンサーのおかげで直撃は避けたが・・・それでも被弾してしまった。

「良かったですわ・・・でも」

「ええ、アイツ・・・絶対許さない！」

セシリアと鈴がもう一機のISを睨めつけた。かなり怒っているようだ。

「セシリア、鈴、気をつけるよ。アイツ・・・さっきの奴とぜんぜん違うぞ」

「わかってるわよ。あれ・・・無人機じゃないでしょ？」

「・・・無人機？そういうえば、さっきもそんなことを言っていました・・・何のことですか？」

セシリアが気になるのか訪ねてきた。が・・・

「悪い。今は説明してる余裕はないんだ。それよりもあのISを倒

さない」と

「・・・そうですね。少し気になりますが・・・まずは、あの機体を倒しましょう」

「けど・・・正直キツイわよ？今この中で無事なのってオルコットさんだけだし。どうやって倒すの」

鈴の言う事はもっともだ。俺はボロボロだし、鈴もかなり消耗している。三対一だが、敵の強さがわからない以上、迂闊に動けない。そう考えてると敵が・・・

「・・・ふん、さっさとかかってきたらどうだ。雑魚がいくら集まろうが所詮、雑魚にすぎん」

(ーやっぱり、こいつ・・・)

敵が喋ったのだ。つまり、あの機体は無人機ではないということになる。

「おい、お前いつからそこにいた？」

「・・・お前らがあの機体と戦う前だ。それがどうした」

「あの機体と戦う前って・・・まさか、あの機体で学園を襲撃させたはお前か!？」

「・・・半分正解、半分外れだ」

どういう事だ？こいつがああ機体を襲撃させた張本人ではないのか？

「アンタの目的はなんなのよ」

「・・・織斑一夏を殺すことだ」

「」「」「！」「」「」

今アイツ・・・なんて言った？俺を殺す？なぜだ？

「貴方・・・一夏さんになにか恨みでもありますか？」

「・・・ああ、だから殺す。さて・・・お前から来ないのであれば・・・こちらからいかせてもらうぞ。時間もあまりないのでな」

？今なにか変なこと言ったような・・・時間がない？なぜ？俺が考えてるとアイツが観客席からアリーナ内部に入ってきた。手にかかりでかいビームライフルを構えながら・・・

「・・・戦闘開始だ」

「くっ、いくぞセシリア！鈴！」

「ええ！」

「いくわよー！」

俺達は奴に向かっていった。

千冬Side

一夏達があの機体を倒したと思った次の瞬間、一夏に謎の攻撃が襲いかかった。少し当たったが一夏は無事のようだ。だが・・・

「な、なんですか。あの機体は・・・いつの間に観客席にいたんですか!？」

「おそらく、光学迷彩で姿を隠していたのだろう。しかし・・・」

私は奴の言葉が気になっていた。奴は「織斑一夏を殺す」と言っていた。

(何故、一夏を殺そうとする?それに・・・なんだあの機体は?さつき襲撃してきた機体と同じ「全身装甲」だと?おまけに顔も隠しているとはな・・・)

「山田先生、すぐに教師達を出撃させてください。奴を捕まえるためにも」

「そ、それが・・・まだロックが解除されていません。これでは救援に行くことは不可能です」

「何!?最初に襲撃した機体を倒した時点でロックは解除されているはずだ!どついう事だ!？」

私は珍しく大声を出していた。予想外の返事のせいで少し冷静さを欠いていた。

「確かにあの機体を倒した後、ロックが解除されましたが・・・すぐにまた別のロックをかけられています」

「くっ、三年にシステムクラックを続けさせる。一刻も早く彼等を助けるために」

(織斑先生・・・焦ってますね。仕方ありませんか・・・相手は謎の機体の上、織斑君を殺そうとしていますし・・・)

私は一夏達を助けられないこの状況を不甲斐ないと思いつつ、一夏達の無事を祈った。

一夏Side

「くっ、この・・・！」

「三対一なのに・・・」

「ぜんぜん当たらないなんて・・・」

「・・・弱い。相手にならんな」

戦い始めてかなり時間が経ったが・・・俺達は奴に一撃も当てることができなかつた。奴の機体はさっきの機体よりも速い上、奴自身もかなりの実力者だ。目に見えない衝撃砲やセシリアのビットも簡

単にかわしていた。

「……そろそろ終わらせるとするか……」

奴はばかりでかいビームライフルを左手だけで持つと……右手に武器を展開した。近接ブレードだ。そしてそれで俺に斬りかかろうと接近してきた。まずい！

「させませんわ！」

「一夏、離れて！」

セシリアと鈴がそれぞれビットと衝撃砲で攻撃するが……奴はそれをすべてかわしながら俺に近づき、ブレードをすさまじい速さで振るう。俺はなんとかそれを「雪片二型」で防いだ。

「くっ……なんて重い」

「……中々粘るな。さつさと死んだほうが楽になるといのに」

「簡単に殺されてたまるか！」

「一夏さんから離れなさい！」

「後ろに下がって！一夏！」

セシリアと鈴で俺から奴を引き離れた。だが、奴は下がると同時にビームライフルでセシリアを撃つ。

「きゃあああああ！」

「セシリア！」

「オルコットさん！」

「……よそ見している暇があるのか？」

俺達がセシリアのほうを向いた際に奴が俺に斬りかかってきた。

「一夏！」

鈴がなんとかそれを防ぐ。そして俺が斬りかかろうとすると奴は後ろに下がった。

「大丈夫か？二人共」

「あたしは大丈夫よ。けど……」

「ま、まだいけますわ」

さっきの一撃でセシリアの機体はかなりの損傷を受けた。

「……織斑一夏。お前がおとなしく死ねば、二人はこれ以上傷つかずに済むぞ」

奴が突然、そんなことを言い始めた。

「……どういう意味だ」

「……そのままの意味だ。目的はお前一人、お前さえ死ねばこれ

以上ここにいる必要はない。どうする?」

「・・・俺が死ねばおとなく引いてくれるのか?」

「ああ」

・・・俺が少し考えた。奴の強さは異常だ。これ以上戦えば最悪、二人は死んでしまうかもしれない。俺が犠牲になれば二人は助かる。ならいつそのこと・・・と考えると・・・

「冗談ではありませんわ!そんな要求こちらから断らせてもらいますわ!」

「そうよ!あたし達がそんな要求を受けさせると思ってるの!?」

「ふ、二人共・・・」

「一夏さん。貴方が死んだからって、敵が引くとは限りませんわ」

「そうよ。一夏、アンタを殺すために言ってるだけよ。それに、あたし達はアンタを死なせるつもりなんてまったくくないわ」

「けど、俺がここで死ねば・・・」

俺が続きを言おうとした瞬間、二人が突然怒鳴った。

「いい加減にしなさい!!一夏!あたし達はアンタを死なせたくないって、言ってるよ!!」

「そうですわ!!だから、さっきのような事は二度と言わないでく



「ださい!」

「……ごめん。二人共、ありがとな」

馬鹿だ。俺は、ここで死ねば二人はどれだけ悲しむだろう。それに、千冬姉や篤にも同じ想いを受けさせることになる。

「……」

俺は無言で奴を睨めつけた。

「……交渉決裂か……」

「ああ」

「……馬鹿が、二人を助けるチャンスをみすみす手放すとはな」

「馬鹿はアンタのほうじゃないの?」

「そうですね。わたくし達は一夏さんを死なせたくないから言ってるのですわ」

「……なら、お前らも殺す。それだけだ」

奴がそう言うと、こちらに向かってきた。ビームライフルでセシリアと鈴を狙いながら、俺にブレードを振るう。「雪片二型」で受け止めると……「雪片二型」が溶け始めた。

「な!」

「……こいつは「レーヴァテイン」高熱を発生させるブレードだ。早くしないと……死ぬぞ？」

「くっ！」

俺はすぐに下がったが……「雪片二型」の一部が溶けていた。

(どうする……あれと打ち合うはずい。「雪片二型」が使い物にならなくなっちまう。俺の武器はこれだけだ……どうすればいい)

奴は俺が考えてる間も、「レーヴァテイン」で攻撃してくる。「雪片二型」で受け止めるたびに受けた所が溶けていた。

(くそ！このままじゃあ……)

「一夏、あたしも加わるわ！」

鈴が「双天月牙」で奴に斬りかかる。が……

「な、なにこれ！？武器が溶けてる！？」

奴に「レーヴァテイン」で防がれた。そして「双天月牙」も「雪片二型」と同様に一部が溶け始めた。

「下がれ！鈴！」

「う、うん！」

俺が言うと鈴は俺の隣にきた。

「なんなのあのブレード、武器を溶かすなんて・・・」

「「レーヴァテイン」って名前らしい。高熱を発生させる能力を持っているんだ。「雪片Ⅱ型」もあれのせいだからやばいことになってる」

「迂闊に防げないわね。どうする？一夏」

「鈴はできるだけ衝撃砲で攻撃してくれ。俺が奴と斬り合う」

「そんなことをしたらアンタ「雪片Ⅱ型」が・・・」

「わかってる。けど、俺の武器はこれしかない。なら、そうするしかない」

「わかったわ、できるだけあれと打ち合わないようにして、いいわね」

「ああ、そう言えばセシリアは？」

俺がセシリアのほうを見ると・・・セシリアと奴が斬り合っていた。「インターセプター」で応戦してるが・・・「インターセプター」も所々溶けていた。「レーヴァテイン」のせいだろう。あのままじゃやられる。

「鈴！」

「わかってる！」

俺と鈴でセシリアを援護すると奴が下がりさつきと同じようにセシリアに向けてビームライフルを撃った。だが今度はかわした。

「何度も同じ手が通用すると思ってましたの？」

「・・・ふん、仕方ないか。「Rシステム」起動」

奴がなにか言うとき、奴からエネルギーのようなものが放出され、機体を覆った。

「な、なんだ？」

俺が少し戸惑っているとビームライフルを俺に向けそして・・・

「・・・死ね」

さつきよりも遥かに強力な熱線が俺に向かってきた。やばい！

「ぐぐううううー！」

間一髪の所で避けたが・・・右側の装甲が少し破壊された。

「大丈夫！？一夏！」

「一夏さん！無事ですか！」

「ああ、なんとかそれにしても・・・なんて威力だ。さつきまでのとは桁違いだ」

「・・・こいつを使った以上、お前らにはもう負けしかない。諦め

てさっさと死ね」

「んなこと言ってさっさと死ぬ奴はいねーよ」

「・・・往生際が悪いな。なら・・・すぐに殺してやる」

奴は「レーヴァテイン」を構え、今まで以上のスピードを出して、向かってきた。俺は「雪片二型」を再び構え・・・奴を迎え撃った。

「・・・馬鹿が、こいつに触ればどうなるかわかってるだろう」

「わかってるさ！だから・・・こうするんだよ！」

俺は「雪片二型」を振るい「レーヴァテイン」に当たる瞬間、軌道を変え、奴自身を攻撃するが・・・

「・・・浅はかだな。そんな攻撃が通用すると思ってるのか」

奴は「雪片二型」をかわし・・・俺を蹴りとばした。そして俺が態勢を立て直す前に「レーヴァテイン」を突き刺すように構えながら向かってきた。だめだ、かわせない。

「これで終りだ死ね。織斑一夏」

奴の「レーヴァテイン」が俺に――刺さらなかった。刺さったのは・・・

「あああああー！！」

「鈴!？」

鈴だった。「レーヴァテイン」が鈴の腹に突き刺さった。

「……馬鹿な奴だな。わざわざ仲間を庇うとは……」

「ふふ……」

奴が言うと鈴が不敵に笑った。

「……なにが可笑的い」

「……だって……アンタ程の実力者が……この状況に気づかないから……可笑しくてね……」

「……？この状況……!!しまっ……」

奴がなにか気づいたのか鈴から離れようとする。だがその前に鈴が奴の右腕を両手で掴む。

「捕まえたわ……!今よ一夏!オルコットさん!こいつを攻撃して!」

「くっ、貴様……!離せこの……」

「させませんわ!喰らいなさい!」

奴がビームライフルを鈴に向けて撃とうとする。が……その前にセシリアのビットが火を吹く。

「ぐああああああ!!」

「今ですわ!一夏さん!止めを!」

「ああ!!」

俺は鈴がつくつてくれた最初で最後のチャンスを活かすため、「雪片二型」の切札「零落白夜」をもう一度を発動させる。そして奴に近づき……

「くらえええええ!!」

奴に「零落白夜」を喰らわせた。

「があゝ ああああ あ!!」

「やったか!?!」

「このおおお!!」

「零落白夜」を喰らわせたが奴はビームライフルを俺に向けて発射した。

「うわあああああ!!」

「一夏さん!?!」

「……夏!!」

俺は避けきれず直撃した。

「が……ぐお……はあ……はあ……く……おの……れ」

奴は二人の注意が俺に向いた際に鈴を気絶させ、「レーヴァテイン」を引き抜いた後、アリーナから脱出した。俺はそれを見た後……気を失った。

千冬Side

「例の機体……撤退しました。それと同時にロックもすべて解除されました」

「急いで織斑と凰の手当てを、今回の事件についての情報はすべて規制するように、後、襲撃した機体を回収しろ。もう一機への追撃はするなと伝える」

「……いいんですか？あの機体を逃しても、今から追撃したほうがいいかと」

山田先生がああ機体を追撃したほうがいいと言った。私もそう思う。だが……

「今から行っても間に合わないだろう。それに下手したら我々も危ない」

あの機体がどのようなものかわからない以上、追撃するのは危険だ。



それに・・・操縦者もかなりの使い手のようだ。もしかしたら私より強いかもしれない。そんな相手に策もなく攻めるのは危険だ。

「わかりました。では手配を済ませます」

山田先生が手配のため、部屋をでると私は・・・どうしようもない怒りを壁にぶつけた。

「一夏・・・」

私は弟の無事を祈ることしかできなかった・・・

千冬Side end

## 第五話（後書き）

意見やアドバイスを、感想等どんどん送ってください！後、間違いや誤字もあれば言ってください。

## 第六話（前書き）

かなり時間がかかりました・・・では投稿します。戦いの後です。  
ちなみにもう少し続きます。

## 第六話

一夏Side

「うっ……ん……？」

身体中の痛みで俺は目を覚ました。

「ここは……保健室か？」

周囲を見ると治療用の道具が置いてあったのでそう判断したが……  
とりあえず俺はなにがあったか少しずつ思い出すことにした。

(えーと、確か学園に襲撃した機体を倒したあとに……黒い機体  
と戦って……あいつに攻撃してそれから……！鈴は！?)

俺が鈴の無事を確かめようとする……

「……気がついたか。一夏」

「千冬姉……？」

千冬姉がいた。いつの間に保健室に入ったのだろうか。

「かなりの重体だが、命に別状はない。数日は痛みを悩まされると  
思うが……我慢しろ」

「はぁ……！それより鈴は！？無事なのか！？」

「安心しろ、さっき聞いたが無事だ。臓器にも損傷はないと言っていた」

俺は千冬姉の話を聞いてほっとした。鈴が無事で良かった。

「それにしても・・・ISの絶対防御をカットした状態で最大出力の衝撃砲を喰らった上、黒い機体の攻撃を受けてよく生きているな。普通は死ぬぞ？」

えっ？俺そんな状態で戦ってたの？てか絶対防御ってカットできないようになってたはずじゃあ・・・？

「まあ、それはともかく・・・無事で何よりだ。家族が死ぬ所を見たくはないからな」

いつもの千冬姉の表情ではなく、世界で二人だけの家族。俺にしか見せない優しい顔でそう言った。

「千冬姉、心配かけて・・・ごめん」

「気にするな。心配などしていないさ。お前は私の弟だ。簡単に死なな」

相変わらずだな。千冬姉、まあそれも千冬姉の照れ隠しの一種だ。て知ってるから、気にならないけど。

「私は後片付けがあるからそろそろ仕事に戻るとしよう。お前も少し休んだら部屋に戻っていいぞ」

そう言うと、千冬姉は保健室を出た。真面目だな。千冬姉。俺も将

来はああなりたい。

「あー、ゴホンゴホン。入るぞー夏」

篤がわざとらしい咳払いをしながら入ってきた。

「よっ、篤」

「う、うむ」

どうしたんだろう。なにか言いたそうだが・・・

「き、今日の戦いのことだが」

「あっ、そういえば試合は？やっぱり無効試合になったか？」

「あ、ああ。あんなことが起これば当然だろう。それに・・・お前も鈴も怪我をしているしな」

だよなあ。もし、再試合をするとしても俺と鈴の怪我が治ってからだろうな。そう考えてると・・・

「お、お前は一体何を考えているんだ！」

「はい？」

いきなり篤に怒られた。なんで？

「勝てたからよかったが・・・あのような事故は先生方に任せればいいだろう！余計な自信は身を滅ぼすことになるんだぞ！まったく・・・

・・・」

「！そっういえばあの黒い機体はどうなった？」

「む？あの機体ならお前の一撃を受けたあと、突然苦しみ始めてな。その後すぐに学園のアリーナから逃走したぞ」

苦しみ始めた？「零落白夜」を受けたからか？うーん。少し気になるけど・・・

「まだ捕まっていないのか？あの機体・・・」

「ああ。私も詳しいことはわからないが・・・どうやら先生方もあの機体を追撃する気はないようだな。なぜかは知らんが」

おそらくあの機体と操縦者が相当な強さを持っていたからだろう。それに訓練機ではあの機体に追いつくのは難しいだろうからそれもあるだろうな。それより・・・

「あいつはなんで俺を殺そうとしたんだ？」

「一夏、お前誰かに恨まれるようなことをしたのか？」

俺は少し考えるが・・・何も思い当たる節はなかった。が・・・

「そんなことをした覚えはないけど・・・少し気になることがあるんだ」

「ま、まさか・・・誰かの恋人を奪ったり、誰かをボコボコに殴ったりしたのか!？」

箒がとんでもないことをいうので俺は慌て否定した。

「んなわけねーだろ！そうじゃなくて・・・あいつの剣を受けた時にちよつとな・・・」

「奴の剣？奴の剣が誰かに似ていたのか？」

「そうじゃないんだ。あいつの剣を受けた時にちよつと変な感じがしたんだ」

「変な感じだと？なんだそれは？」

箒が聞いてくると、俺は少し黙ってしまつ。殺そうとしている奴にしてはおかしい・・・とりあえず今は誤魔化すことにした。

「なんでもない。俺の気のせいだと思うからいいよ」

「ふう。だったら言おうとするなまつたく・・・」

「なんだよ。もしかして心配していたのか？」

「な、なにを言っている！私がお前の心配などするものか！」

ええ〜してくれよ。いくらなんでも酷すぎるぞ。幼なじみ。

「ま、まあとにかく・・・今回のことで訓練がどれだけ大切かわかったことだろう。これからも続けるように、いいな？」

「わかってるよ。俺はもつと強くならなきゃいけない。仲間を守る



ためにも」

「そ、そうか・・・ならいい。私は先に部屋に戻ってるからな」

少しは待ってくれよ。酷い幼なじみだな。

「あ、あと」

「？なんだ筈」

「た、戦ってた時のお前は・・・か、格好良かった・・・な、なんでもない！じ、じゃあな！」

そう言うと筈は逃げるように部屋を出ていった。ドアくらい閉めてくれよ。たく・・・それにしても・・・

(・・・あいつの剣、なんでだろう？なんであいつの剣から・・・)

俺はあいつの剣を受けた時、二つの想いを感じた。一つは「殺意」そして・・・もう一つは・・・「悲しみ」だった。

「ん・・・眠い。少し寝るか・・・」

疲労のせいか眠気が襲ってきた。俺は今考えてることを後回しにして寝ることにした。

「・・・一夏」

ん？誰かの声が聞こえたような・・・俺が目を開けると・・・目の前に鈴がいた。

「鈴？」

「！お、起きてたの？一夏」

「いや、今日が覚めたけど・・・お前動いて平気なのか？」

「う、うん。あんまり激しく動くのはダメだけど、普通に動くくらいならいいって」

良かった。でも・・・腹に剣が突き刺さったからやっぱり心配だ。それに・・・

「傷痕とか、残ったりしないよな？」

「大丈夫よ。活性化再生治療もしたから傷は残らないわ」

そう言いながら近くイスに座る鈴、リンゴでも剥いてくれるのかな？見あたらないけど。

「そうか。なら一安心だな、けど鈴」

「？なに一夏」

「あんな無茶なこと二度としないでくれ。絶対に」

「・・・ごめん。でも・・・あの時あしなかつたら一夏が・・・」  
わかってる。俺を守るためにしたってことくらい、でも・・・

「鈴、俺に言ったよな。「アンタを死なせたくない」って、俺もお前を死なせたくない。だから・・・もうあんなことはしないでくれ」

「・・・だったら、一夏。もっと強くなりなさい。あたし達があんなことしないように」

「・・・はあ、わかつたよ。俺はもっと強くなってみせる。仲間を守るためにも・・・絶対に」

「じゃあ、傷が治つたたら一夏を鍛えてあげるわ。感謝しなさい」

うわぁ、俺の訓練がもっと厳しくなりそうだな・・・あ、そういえば、

「試合が無効になつちまつたからな・・・勝負の決着はどうする？再試合はまだ決まってなさそうだし」

「もういいわよ。それは、あたしもちょっとムキになってたし・・・」

ん？もういいのか？でもやっぱり男としてけじめはつけけないとな。

「鈴、その・・・悪かつたよ。色々ごめん」

俺は鈴に昔の約束の事とそのあとにまずいことを言ってしまった事について謝った。人との繋がりを簡単に失いたくないからだ。そう

考えてると・・・少しずつだが、鈴と約束した時のことを思い出した。確か・・・

「なあ、鈴。昔約束した内容って、「料理が上達したら、毎日あたしの酢豚を食べてくれる？」だったわけ？で、どう？料理は上手くなったか？」

「え？えと、あ、あう、うう・・・」

なんだ？約束の内容を言ったら急に顔が赤くなったぞ。それになんかしどろもどろになってるし。

「なあ、もしかしてあの約束って・・・」「毎日味噌汁を」みたいなことだったのか？俺はてっきりただ飯を食べさせてくれるかと思っただけど・・・」

「そ、そうよ！ほ、ほら料理って誰かに食べてもらったほうが上達するじゃない！？だ、だからそういう意味で言ったのよ！」

なんだそういう意味だったのか？なんか誤魔化してる気もするけど・・・あと、

「鈴、あんまり大声出すなよ。傷に響くぞ」

「あ、うん。そうね。あんまり大声出すのはまずいわね」

大声出して怪我が悪化したら結構きついしな。あ、そうだ。

「なあ鈴、こっちに帰ってきたんだからまたお店やるんだろ。鈴の親父さんの料理また食べさせてくれよ」

「・・・ごめん。お店はしないんだ。あたしの両親が離婚しちゃったから・・・それにあたしが国に帰ったのも、それが理由なんだよね」

えっ・・・あんなに仲の良さそうだったのにどうして・・・そういえばあの頃の鈴は無理をしていたような気がしたけど・・・

「今は母さんの方の親権なの。女の方が立場が上だしね・・・父さんとは一年くらい会ってないわ」

つらいだろうな・・・家族が離れ離れになっていいわけがない。でもそうせざるを得ないことが起こってしまった。理由は聞きたいけど・・・無理だろう。一番苦しいのは鈴なのだから、

「・・・家族って、難しいね」

俺は・・・千冬姉だけが家族だ。だから・・・鈴の言葉がどれだけ重いかわからなかった。

「鈴、怪我が治ったら今度どこかに遊びに行こうか」

「え・・・もしかしてデー・・・」

「五反田も呼んで三人で遊ぼうぜ。久しぶりさ」

「・・・じゃあ、行かない」

・・・何故か鈴が不機嫌になってしまった。どうしてだろう・・・  
久々に三人で遊ぼうと思ったのに。

「で、でもあんたと二人つきりなら遊びに行ってもー」

鈴が続きを言おうとしたら、保健室のドアがいきなり開いた。

「一夏さん、お元気ですか？私が看護に・・・あら？」

部屋に入ってきたセシリアが鈴を見つけた。すると・・・

「どうしてここにあなたがいますの？一夏さんは同じ一組の私が看護しますわ。それにあなた・・・怪我をしているのでしょう。なら、怪我人らしく部屋でおとなしくしていなさい」

「別にいいじゃん。先生に許可はもらっているし、それにあたしは一夏の幼なじみだしね。あたしがなにをしてもあんたには関係ないでしょ」

「関係ありますわ。わたくしは一夏のクラスのメイトですし・・・それに今は一夏の特別コーチですわ」

特別って所をやけに強調したような気がするけど・・・ちなみにセシリアが「代表候補生ですし」と続けると鈴が・・・

「じゃあ怪我が治ったらあたしが一夏の特別コーチになるわ。代表候補生だし」

「な、なにを言ってますの？ダメに決まっていますわ！そうですわよね！？一夏さん！」

「なんでよ？一夏もあたしのほうがいいでしょ？」

・・・なんで俺に振るんだろう。俺はそんなこと今はどうでもいい。  
なぜなら・・・

「俺はどつちでもいいよ。俺は強くならなきゃいけないからな。あの機体に勝つために」

俺がそう言うと二人が真剣な表情で話す。やはりあの機体と戦った者として、どうすればいいかと考えているのだろう。

「そうよね・・・アイツ、今のあたし達じゃあ勝てないもんね・・・」

「今回はなんとか退けましたが・・・次もうまくいくとは限りませんわね・・・」

今回は鈴のおかげで助かったが・・・次戦う時までには強くならなくてはいけない。仲間を守るためにも・・・

「ねえ、一夏・・・アイツと会ったことあるの？」

「ない。あの時初めてあの機体と戦ったしな・・・」

「ではなぜ、あの機体は一夏さんを狙っていたのでしょうか・・・  
「恨みがある」と言った以上はなにか理由があるはずですが・・・」

たぶん・・・俺があの時感じたあいつの想いと関係している気がする。でも・・・あいつが俺と仲間の命を狙っているのならば、絶対あいつを倒してみせる。そう心に誓った。

千冬Side

学園の地下にあるレベル4権限を持つ者しか入れない場所に私はいた。今回学園に襲撃してきたISを調べるために、そして・・・私はアリーナでの二つの戦闘映像を何度も見ていた。

「・・・・・・・・ふむ」

私はある所を見ていた。一夏が黒い機体に「零落白夜」を喰らわせたその後だ。黒い機体が「零落白夜」を喰らったあと、何故か私が苦しみ始めた。それが気になっていた。

95

(・・・何故、奴は「零落白夜」を喰らったあと、苦しみ始めた？  
「零落白夜」を受けただけにしては妙だな・・・奴が使った謎の能力と関係しているのか？確か・・・「Rシステム」と言っていたが・・・)

私が黒い機体の戦闘映像を見ると、山田先生がディスプレイに割り込んできた。どうやらもう一機の情報を持ってきたようだ。

「どござ」

ドアが開くとブック型端末を持って山田先生が部屋に入った。

「あの機体の解析した結果・・・あれは無人機でした」



「・・・そうか」

世界で初めての無人機・・・まだ完成していない技術である遠隔操作と独立稼働。その二つの技術があつた機体に使われていた。（どちらか、両方かは不明だが）

「どうやって動かしていたのかまったく不明です。織斑君達の攻撃で機能が完全に停止しています。修復は無理かと・・・」

「コアは？」

「未登録のコアでした。それと・・・」

やはりか・・・と私が確信すると山田先生が黒い破片を持ってきた。

「これは・・・黒い機体の装甲の破片か？」

「はい・・・調べた結果・・・その破片に自己修復と自己再生の能力があることがわかりました」

「何・・・！？どういう事だ？あの機体は自己修復と自己再生の能力を持っているというのか・・・！？」

信じられなかった。そんな装甲を持つISなど聞いた事がない。これは一体・・・

「私も結果を聞いた時は驚きました・・・どう考えてもあり得ません。こんな装甲を持つ機体があるなんて・・・」

更に危険なモノが出てしまった。これは・・・無人機よりも遙かに危ない。

「この事を他の誰かに言っただか？」

「まだ言っていません。知っているのは私とこれを調べた者だけです」

「今すぐこの破片を隠すようにしてくれ。無人機以上にこの情報を嚴重に保管しろ」

「わかりました。今すぐに行きます」

「他にこの破片について・・・わかったことはあるか？」

「あと、わかったことは・・・どうやらあの破片にナノマシンが混入していました・・・おそらくそれが自己修復と自己再生を行なうかと思われます」

「ナノマシン？機体の装甲にそんなものが使われているのか？」

「はい。ですが・・・そのナノマシンもすでに消滅しています・・・これ以上の解析は無理です」

消滅？ナノマシンが勝手に消えたというのか・・・？ますます分からん・・・確かナノマシンは超小型の機械のはず・・・何故それが勝手に消えたのだ？それに・・・誰がこんなものを造ったのだ？いくら「あいつ」でも無理だろう。となると・・・一体誰が？

「織斑先生？」

「！すまん少し考えていた。すぐにこの破片を隠してくれ」

「わかりました。では」

私はあの黒い機体の力にとつもない恐怖を抱いた・・・

千冬Side end

## 第六話（後書き）

意見やアドバイスに感想等どんどん送ってください！後、間違いや誤字もあつたらお願いします。

## 第七話（前書き）

続きを投稿します。オリジナルの話です。ではどうぞ、

## 第七話

東Side

「ふう〜かなりやばかったね〜でも結果オーライってとこかな〜？」

私は学園のアリーナで起こさせた今回の襲撃事件についての映像を見ながら言った。

「でも黒くんがあれほど強いとは思わなかったな〜いっくんを強くするためにゴーレム？と共に行かせたけど・・・あとちょっとで殺されそうになっちゃったし・・・ほんとに危なかったね〜」

私はいっくんがその他と共に黒くんと戦っているを見ながら思う。まだ武器が二つしか使えない上、機械の出力を制限されているというのにいっくん達を圧倒していた。もし、機体の能力が完全な状態なら間違いなくいっくん達を瞬殺しているだろう。

「ほんとに助かったね〜「ラグナロク」に制限を掛けてくれた人に感謝したいな〜どこにいるかわからないけど。それと・・・もうそろそろかな〜？」

黒くんがそろそろ帰ってくる頃かな？と思うと黒くんが帰ってきた。

「はあ・・・はあ・・・く・・・うう・・・はあ・・・う・・・」

「ラグナロク」を纏った黒くんがとても苦しそうな声を出しながら戻ってきた。そしてそのままドサッ・・・と倒れてしまった。

「大丈夫じゃ・・・ないよねえ〜どう見ても・・・う〜ん。どうしようかな〜？このままどこかの国に引き渡すつてもありだけど・・・ちよつとまづいよね〜」

黒くんをこのまま国に引き渡せば非常にやっかいなことになってしまふ。私は少し考える。

(・・・とりあえず今はまだ私と一緒に居させるべきだね〜あの機体を他の凡人共に渡すのやだし・・・それにあんな機体が他の誰かの手に渡れば絶対に戦争のきっかけなるだろしね〜)

なんせ、「ラグナロク」はたった一機でも国一つを滅ぼすことが可能な機体だし・・・そんなものを他の国に渡せば間違いなく戦争が起きる。それはさすがにまづい。

「にしても・・・なんで黒くんはこんなに苦しんでるのかな〜？」

「零落白夜」をいつくんが使ったことも驚いたけど・・・黒くんが「零落白夜」を受けたあと急に苦しみ始めたことにも驚いた。

「いくら「零落白夜」が強力でも黒くんがこんなに苦しむの変だし・・・なんでだろ？まあでも今は治療してあげますか」

私は黒くんに最新の医療用の機械を使って黒くんの身体を診たが・・・いくら調べても原因はまったく不明だった。

「う〜ん。身体に異常はないね〜となると・・・もしかして機体が原因かな？」

私は黒くんに貸してもらっている「ラグナロク」専用の端末を使っ

て調べることにした。

「ん〜やっぱり前とあんまり変わってな・・・あれ？」

「ラグナロク」を調べるとおかしな所を見つけた。私が前に調べた時は閲覧できなかったはずの「Rシステム」が今は閲覧可能になっている。

（・・・どういう事かな？前は見ることもできなかったのに・・・ひょっとして黒くんが「Rシステム」を使ったからかな・・・？）

だとしたら・・・これはチャンスだ。「ラグナロク」についての重要な情報を知ることができる。私は迷わず「Rシステム」の中身を見たが・・・

「！！これは・・・正気かな？こんなものを機体に組み込むなんて・・・」

私は「Rシステム」を見て一瞬目を疑った。とんでもない内容がそこに映し出されていた。これは・・・ISに組み込んで良いようなものではない。

「・・・でもこの内容が本物だとしたら・・・黒くんが「零落白夜」を喰らって苦しんだ理由も納得いくけど・・・もしかして黒くんは「Rシステム」がどういうものか知ってて使ったのかな・・・？」

だとしたら・・・彼は一体どれだけの覚悟を背負っているのだろう。私にはとても理解することができなかった・・・

「・・・これは黒くんが目を覚ましたら聞いてみるとしますか・・・



・残り二つのやつもこんなやばいものじゃないといいけど・・・」

私は彼を心配してしまう。それと同時に「ラグナロク」が他の国に渡ってしまうことを怖れた。幸い「Rシステム」は内容だけしか映し出されていなかった。が・・・これを他の誰かが見ればとんでもないことになってしまう。特に国のトップや重要な地位に就いている小物がこれを見ればどうするか・・・一瞬で想像できた。

「・・・これはなんとかして隠したいけど・・・無理だよね」この端末じゃあ「ラグナロク」のデータの閲覧と機体の調整しかできないし・・・はあ、どうしよう。他のプログラムを組み込んでそれを消すことはできても「ラグナロク」自体のデータを消すことができないし・・・なに考えてるのかなこれ造った人」

東さん自身もとんでもないばかりつくっているけど・・・それがまだましたと思う程のものだもんねえ。あれ・・・ほんとにどうしよう。

(まあ、黒くん自身滅茶苦茶な強さだから問題ないと思うけど・・・やっぱり心配だね)。ふう、にしても・・・色々考えて疲れちゃったよ。そろそろ寝ますか)

私は黒くんの体調が良くなったら色々聞こうと考えて、寝ることにした。

「・・・接触したか？ やっぱり。はあ、予想はしてたけど・・・仕方ないね」

私が自分の部屋で今見ているのはIS学園に襲撃した「ゴレム？」と私が造った機体「ラグナロク」を操り、織斑一夏達と戦っている「彼」の姿がそこにあった。

「やっぱりあの仕掛けを施しといて正解だったね！今の彼等じゃあ「彼」に勝てる要素なんて無いし・・・」

あの仕掛けをしていなければ「彼」が彼等を瞬殺していたのは目に見えてる。私は「彼」に対するけじめはつけなきゃならない・・・でもだからといって「彼」がしようとしていることを見過ごすことはできなかった。私がそう考えてると・・・

「失礼します」

二人同時に声がした。誰なのかはわかってる。「彼」を止めるために呼んだ助っ人のような者達だ。

「来てくれてありがとうね。二人共、私に初めて会うことになるのかな？」

「そうだな。テレビや新聞であんたのことは散々見たけど、こうして会うのは初めてだな」

「・・・できれば今一番会いたくない人ですから貴女は」

やっぱりこの二人は私が憎いのだろう。当然といえば当然の事だ。

私はこの二人……いや、もつと多くの人に怨まれて当たり前のことだから……

「……私が憎いのはわかってるよ。でも……これは君達しかできないからね……だから君達を呼んだんだよ。「彼」と親しくしてた君達をね……」

「ふん、あいつをあんな風に変えたくせによくそんなことが言えるな。あんた」

「……「あれ」が起こったのは貴女があんなものを作ったからなんですよ？貴女が直接的な原因ではないのはわかっています。それでも……私達は貴女を憎まずにはいられません」

「わかつてるよ……「彼」が変わってしまったのは結果として私があれを作ったからだもんね。だからはじめはつけなきゃいけない。「彼」にも君達にも……だから力を貸して欲しいんだ。「彼」がやろうとしてることを止めるために」

「……だったらあいつにあんなもの渡すなよ。向こうであの機体に勝てる機体なんてあるわけねーだろ。まったく」

「でも……貴女があの人を機体であの人に渡し、そして向こうに送るのが貴女があの人に対するはじめなんですか？なら、今度は私達へのはじめをつけてもらいます」

つまりこれは協力する代わりにこちらの要求を聞いてもらう。と言っているのだ、私は最初からそのつもりだから覚悟はすでに出来ている。例え二人がどんな要求をしても受け入れるつもりだ。

「・・・要求はなんだい？今すぐ死んでもらうとかは駄目だよ」

「そんなんじゃないよ。俺達があいつを止めれたら言う」

「そうかい。じゃあ今すぐ準備してくれるかい？こつちもあまり時間には余裕があるわけでもないからね」

「わかりました。どれだけ時間がかかりますか？」

「半年以上はかかるね。彼等が本当に危なくなつた時以外はできるだけ送りたくないし・・・」

「彼」が向こうにいるだけでも充分まずいが・・・これ以上向こうに行くのもかなりまずい。影響は最低限に止めておきたい。

「やれやれ・・・注文が多いんだよ。アンタは、まあ半年つてのは俺達の訓練と機体のための時間だろうけど」

「仕方ありませんよ。私達もあの人も本来ならいないんですから。でも、向こうは大丈夫ですか？」

「大丈夫だと思うよ。機体の制限もあるけど・・・」彼」が学園に襲撃したせいで向こうもかなり警戒してるようだから」

「なら大丈夫そうだな。後、あいつも呼んでいいか？」

「君の恋人だっけ？いいよ。彼女なら機体の開発を手伝ってくれそうだし」

今は少しでも人が必要だ。また恨みがこもつた目で私を見るだろう

けど・・・我慢しなきゃね。はじめをつけるためにも・・・

「後は・・・彼等用のやつも造らなきゃね。念のために」

「・・・大丈夫ですか？いくら貴女でも無理があると思いますけど・・・」

彼女が少し心配したのか、質問してきた。でも・・・

「問題ないよ。君達の機体も彼等用のやつも全部造ってみせるから。絶対に」

「ま、アンタならいけるだろ。完璧に仕上げてくれよ」

「あはは、人使いが荒いね、勿論そのつもりだけどね。じゃあ早速準備しますか」

「なら、私達は訓練をしてきますね。そっちは任せましたよ。では行きますよーイーさん」

「ああ、そっちは頼んだぜ。イーさん」

「ん。じゃあそっちも頑張ってね。二人共、さてとやりますか！」

そして私は準備を始めた。「彼」を止めるためにそして・・・イーを変えするために、

??? Side end

## 第七話（後書き）

意見やアドバイスを、感想等どんどん送ってください！後、間違いや誤字があればお願いします。

## 機体説明「ラグナロク」(前書き)

「ラグナロク」の説明です。武器や能力が増えるにつれ更新します。

## 機体説明「ラグナロク」

### ラグナロク

中世時代の騎士の様な姿。「全身装甲」型のISで色は黒。現在存在するすべての機体を遥かに凌駕する性能を持つ。(制限付き)装甲に特殊なナノマシンを使っており、耐熱性がある上、自己再生や自己修復が可能。防御力も少し上がっている。また、光学迷彩やジャミングによる高いステルス性能もある。そして「展開装甲」を兼ね備えている。(ある理由により使っていない)待機形態は黒い鎖に白い剣のアクセサリーがついたブレスレット。コアナンバーは不明。

### 基本装備

#### 「レーヴァテイン」

近接用ブレイド。日本刀の様な形。大きさは「雪片二型」と同じくらい、特殊能力は「高熱」。触れた物を溶かすことが可能。ただし、一瞬で全部を溶かすことはできない。敵の武器を無力化することを目的に開発された。

#### 後付武装(現在使用可能武器)

#### 「シヴァ」

超大型ビームライフル。バズーカの様な形。普通の機体並の大きさも持つ。特殊能力は「変形」。全力で放てば町一つを消し去ることができる。(ただし、現在は五割)あらゆる場面に対応するために開発された武器。



「フェンリル」

ビームブレード。両手両足から展開することが可能。特殊能力は「強化」。両手両足に持っている武器を強化することができ、接近戦に対して驚異的な威力を発揮する。武器を強化することを目的に開発されたが予想以上に強力な武器となった。

「テュール」

ウイングガン。形は天使のような翼。特殊能力は「移動」。どんな状態であれ、行きたい場所（大体直径五十メートル程）に移動することができる。「銀の鐘」以上の連射能力を持ち、羽形の実弾を放つことができる。更に実弾は自動で復元されるため弾切れが無い。エネルギー弾は一度ウイングにチャージしてから放つ。ただし、両弾とも一度使うと全て使いきるまで溜めることができない上、完全にエネルギーや弾が溜まるまで使えないという欠点がある。また、「移動」を発動するにはチャージしたエネルギーが必要な上に強制的に「移動される」能力のため到着点を狙われるとなす術もなく攻撃を受けてしまう。広範囲に攻撃するためと緊急離脱用に開発された。

「グングニル」

ランス。形はドリルに近い。特殊能力は「命中」。狙った標的に当たるまで追跡する。ただし、途中で何かに当たると効果は消える。接近戦であまり使うことはない。中にはビームと実弾が切り替え可能なスナイパーライフルが仕込んであり、更にランス自体にエネルギーを纏うことができる。フルチャージするとランスからエネルギーが放出、十字閃のような形状になり、その状態で投擲すれば「シヴァ」の全力と同じ威力が出せる。（これも現在は五割）投擲した後は自動で粒子になり、機体の元へと戻る。ちなみに「命中」の効果の対象はランス全体なので、中にあるライフルの弾丸もこの効果を受ける。狙撃や確実なダメージを与えることを目的に開発された。

「ミヨルニル」

ウォーハンマー。サイズは約一メートル程で面の部分が尖っている。特殊能力は「破壊」。相手の装甲や武装を簡単に壊す事ができる。（ただし触れた場所だけ）「ラグナロク」の武装の中でも攻撃力だけなら最強の武装。リミッターを外していない機体なら一撃で戦闘不能にすることが可能な程攻撃力が高い。普通に振っても強力だが、中にある電気をチャージすると更に威力が増す。相手の装甲を壊し、絶対防御を強制的に発動させられる事ができる。ただし、ハンマーという武器の特性上、隙がでやすいので何度も使う事に適していない。敵の防御や武装の破壊や敵を一撃で倒すことを目的に開発された。

機体自身の特殊能力。

解除能力

あらゆるロックやセキュリティを短期間で解除できる。

声変更能力

自分の声を自由自在に変えることができる。普通の機体には必要ないが、正体を隠すためのもの。

「Rシステム」

機体の出力や武器の威力を上げることが可能。ただしリスクがあるため危険。

「Eシステム」

世界中が欲しがれる程のものという以外、一切不明。

機体説明「ラグナロク」(後書き)

変なところがあればお願いします。

## 第八話（前書き）

機体説明と一緒に投稿します。またオリジナルの話です。

## 第八話

東Side

え、私は今、正座している状態で黒くんに「シヴァ」を向けられて  
いるんだよね。なぜかというところ……

「……さて、俺になにか言わねばならんよな？篠ノ之束」

「ラグナロク」の制限を黙っていたことについて……黒くんに問  
いただされている最中なんだよね。黒くんが目を覚ました直後にこ  
うなっちゃったんだよね。どうしよう……

「え、えと……やっぱり怒ってる？」

「……怒ってる以外になにがある？」

だよなあ。むしろ怒ってる以外になにがあるんだって感じだし……

「と、とりあえずその物騒なものを下げてくださいたらうれしいんだけ  
どな」

と……私が言つと……黒くんにギロつと睨まれた。ま、まずい  
よこれは……返答次第じゃ束さんの命が消えてしまうよ。どうす  
ればいいかな……と考えると黒くんが、

「……今から出す問いに素直に答えればやめてやる。だが、も  
し嘘をつけば……分かるよな？」

そう黒くんが言いながら「シヴァ」のチャージを開始してる・・・  
嘘を言えば本気で撃つつもりだよ黒くん・・・

「え、え〜と・・・なにを言ったらいいのかな？」

ま、まずは黒くんがなにを聞きたいのか知らないかね。

「・・・今回の襲撃事件を起こす前に「ラグナロク」の制限について知っていたな？」

「・・・はい。知ってました・・・」

真面目に言わなきゃ束さんが殺されそうだよ・・・ほんとに、

「・・・次だ。俺が気絶してる間に「ラグナロク」のデータを「紅椿」に使ったりしてないだろうな・・・」

「っ、使ってないよ！使ったりしたら束さんが速攻で殺されちゃうよー！」

「・・・念のため、「紅椿」のデータを見せろ」

「どござ、これだよ」

すぐに私は「紅椿」のデータを黒くんに見せた。おとなしく渡さなきゃどうなるか分かりきってるからね・・・

「・・・本当に使っていないようだな。では次だ。他になにが隠していないだろうな・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ナニモカクシテナイヨ」

うん。完璧に誤魔化せたね。我ながら上手くできたと思ったよ。・・・  
ってあれ？黒くんが「シヴァ」を撃とうとしてるけど・・・なぜ？

「ち、ちよつと待つて黒くん！なんで「シヴァ」を撃とうしてるの  
かな！？東さんは正直に言っただよ！？」

「・・・だったら何故、しばらく黙っていた上にカタコトになって  
いる。どう考えても、お前がなにかを隠しているとしか思えんだろ  
うすぐに言え。さもなければ・・・」

「ま、まった！ちゃんと正直に言うから許して黒くん！」

「・・・ならば、さっさと見え・・・次はないぞ・・・わかってる  
だろうな・・・」

コクコクと頷く私。次また嘘をついたらほんとに殺されちゃうよ・・・  
言っしかないね。これは、

「・・・で、なにを隠している？まさかとは思うが俺の顔のことを  
ばらしたりしてないだろな・・・」

「し、してないよ！大体そんなことをしたら、こっちも困っちゃう  
よー！」

「・・・それもそうか、ではなにを隠している？」

それを聞くと少し考えてしまう。どうしようかな・・・こっちもよ  
くわかってないし・・・そう私が考えてると黒くんが痺れを切らし

たのか・・・「シヴァ」を撃とうしてた。って！

「ま、待って！撃とうとしないで！ほんとに東さん死んじゃうよ！」

「・・・さっさと言わないからだ。まったく・・・」

「うううだってこっちもよくわかってないもん」

「・・・どういう事だ？」

黒くんが気になっているみたいだ。まあ仕方ないね、ほんとに私もわかっていないし・・・

「黒くんに会って2日目と言ったこと覚えてる？ほら、私が「見ることができないから困ってる」って言った時のこと」

「・・・ああ、あれか。たしか「Rシステム」と「Eシステム」のふ「三つだよ」・・・なに？」

「三つ目があったんだよ。おまけに名前さえ表示されていないからね・・・東さんもどう言えばいいか困ってたんだよ」

私が言うと黒くんが驚いていた。やっぱり黒くんも知らなかったみたいだね。

「・・・三つ目だと？あの人一体何を組み込んだ？くそ・・・色々厄介なものを「ラグナロク」に入れやがって・・・」

黒くんが歯を噛みしめていた。それと・・・



「……やっぱり俺を素直に送る気はなかったのか……」

(……送る？という意味かな……やっぱり黒くんは……まさかね)

私が今考えたことを頭から消した。我ながら馬鹿げたことを考えたものだ。

「……まあいい。それより……三つ目が何なのかわからないのか？」

「黒くん」「ラグナロク」専用の端末は閲覧と調整しかできないから無理だよ〜わかってるでしょ？」

「……他のプログラムを組み込んでそれで解析するというのも無理か」

「それはもうやってるよ〜でも、無理だったよ」

実際にやってみたができなかった。それにもしできたとしても……それを書き換えることは無理だろう。

「……それについてなにかわかったらすぐに言え。いいな」

「言わなきゃだめ〜？」

私が少しふざけながら言つと……黒くんがまた「シヴァ」を撃とうしてた。だ〜か〜ら！

「いちいちそれを撃とうとしないで黒くん！それ喰らったらただじ

「やあすまないんだよ！？わかってる！？」

「……ちっ、一発くらい撃たせる。喰らってもどうせ無事だろう」

「君は私をなんだと思ってるんだい！？」

「……世界最強の力I.Sを開発した稀代の悪魔にして、不死身の化け物篠ノ之束」

「酷いよ！もはやそれ人間じゃなくなってるよ！一応束さんは人間だよ！？っていうか……」

「さつきから私をからかってないかい黒くん！？」

「……くくっ、たまにはこういうのもいいだろう」

「よくないよ！はぁ……まさかこの束さんがこんな風にかかわれる日が来るなんて……」

「疲れたよ〜色々黒くんのせいだからね」

「今度は私が黒くんを睨む。けど、黒くんは知らんぷり。むっ、腹が立つね〜いつか復讐してやる。……あ、そうだ。あの事聞かなきゃね。」

「黒くん「Rシステム」を使って身体は大丈夫かい？」

「……何故、その事を知っている？」

「黒くんが警戒しながら私を睨み付けてきた。当然だね〜何せ、「ラ

「グナロク」の重要プログラムの一つ、「Rシステム」のことを知っているんだし、それに「Rシステム」は閲覧できないようになってたはずなのに、私の中身を知っていることに対して警戒しての  
だろう。」

「君が「Rシステム」を使ったせいだと思っけど・・・昨日「ラグナロク」を見たら「Rシステム」が閲覧可能になってたんだよ」

「・・・はあ、そんな仕掛けまでしていたのか・・・あの入」

「・・・ねえ、ずっと気になってたんだけど・・・「ラグナロク」を開発したの一体誰なんだい？」

「・・・気になるのか？」

「それが普通だと思うけど・・・こんな異常とも言える性能を持つ機  
体を開発した人物が誰なのか・・・やはり気になる。」

「言っ気はなさそうだね」

「・・・そうではないんだが・・・」

「?じゃあなんで言わないんだい？」

「・・・色々と厄介なことになるからだ」

厄介なことって・・・まさか・・・?いや、そうだとしたらおかし  
いし・・・うん。謎だらけだねえ。黒くんも「ラグナロク」も・・・

「あんまり「Rシステム」を使わないようにしたほうがいいよ？あれを使った状態で「零落白夜」を受けたら最悪寿命が縮むかもしれないんだよ？」

「……そんなのしつたことか。俺があれをどう使おうが俺の勝手だ、心配される筋合いはない。それに心配するなら織斑一夏のほうがいいんじゃないか？」

「……そうだね〜でも……君も気になるんだよ。なぜか……ね」

「……ふん」

私が彼を気にする理由は彼の顔と彼の雰囲気だ。どうしても……気になってしまう。

「……俺はそろそろ訓練するでしょう……なにかあったらすぐに呼べ」

「わかったよ〜あとさ〜今度新しいゴーレムを造ったらデータを採るのに手伝ってくれないかい？」

「……わかった。できたら手伝ってやる。では訓練をしてくる。食事の時間になったら言ってくれ」

「ん〜オツケー。じゃあそれまで私は「紅椿」の開発を続けてるか  
らね〜」

「……ああ」

黒くんが素っ気なく言つとそのまま訓練を開始した。私はさっき言った通り「紅椿」の開発を続けることにした。

「んじゃ〜やるとしますか〜」

私は黒くんが気になりながらも「紅椿」を完成させることに集中した。

東Side end

## 第八話（後書き）

意見やアドバイスを、感想等どんどん送ってください。後、間違いや誤字もあればお願いします。

## 第九話（前書き）

投稿します。後少ししたら学年別トーナメント戦を書きます。

## 第九話

??? Side

・・・俺は今ある場所で「ラグナロク」を纏い、「ゴーレム？」が出てくるのを待っている。篠ノ之東が新しい「ゴーレム」を造るためのヒントを俺と戦わせることで得ようとしているのだ。

『じゃあ黒く〜ん。そろそろ「ゴーレム？」を出すね〜』

スピーカーから奴の声すると「ゴーレム？」が出てきた。まあ・・・準備運動になれば上出来だろう。後、機体のチェックもしておこう。

『黒くんそろそろ始めるね〜それとさ〜武器は片方ずつ使ってくれないかな〜？君の実力ならすぐ倒せるだろうからね〜』

・・・注文が多い奴だ。だが確かにそうしなければすぐに決着がついてしまう。聞いてやるとするか・・・

「・・・どっちからだ？」

『「レーヴァテイン」から〜私が言ったら「シヴァ」と代えてね〜んじゃあそろそろ・・・戦闘開始〜』

気の抜けた合図と共に「ゴーレム？」が両腕からビームを連発してきた。俺は「ゴーレム？」の周囲をぐるりと回りながらかわす。

「・・・攻撃が単純だな。簡単にかわせる」



俺はしばらくの間、「ゴーレム？」の攻撃をかわすことに専念したが……飽きてきたな。

「……そろそろ反撃するか」

「レーヴァテイン」を展開すると同時に「瞬間加速」で「ゴーレム？」に近づく。そして「ゴーレム？」の右腕に「レーヴァテイン」を連続で攻撃する。「ゴーレム？」の右腕が少しずつ溶け、ビーム砲口を塞いでしまう。

「……次はひ『待った』……なんだ」

『次は「シヴァ」で攻めて欲しいな』特殊能力も見たいし』

「……わかった。「シヴァ」展開」

俺は「レーヴァテイン」を引っ込め代わりに「シヴァ」を出す。そして……

「……アームガトリングモード」

俺がそう言うと「シヴァ」の形が変わり、俺の右腕と一体化しガトリングの様な形になる。

「……発射」

ダダダダダダッ！！

無数の小型ビーム弾が「ゴーレム？」を襲う。そして「ゴーレム？」の装甲をボロボロにする。

『うひゃ〜すごいねえ。あれが「シヴァ」の特殊能力「変形」か〜色んな形になるのは知ってたけど、実際に見るとすごいね〜』

ダダダダダダッ！！

俺がそのまま打ち続けると「ゴーレム？」はすぐに動かなくなった。

「……終了だ」

『ん〜やっぱり接近されると弱いね〜まあ、ビーム砲口しか無いし・  
・当然と言えば当然か〜あとはもう少し機動力と防御力を上げた  
ほうがいいね〜』

「……少し寝てもいいか？」

篠ノ之束が新しい「ゴーレム」をどうするか考えているので俺は少し寝ることにするかと考えた。

『いいよ〜にしても・・黒くん強いね〜束さんが造った「ゴーレム？」をいとも簡単に倒しちゃうんだもん』

「……あれぐらいならすぐに倒せる。大したことではない」

『むづ〜そう言われると束さんはショックだよ〜せつかくの自信作なの〜』

「……そうか。で、いつ此処を発つんだ？」

データを採った以上、ここにいる必要はもうない。ぐずぐずしてる

と政府の者がここに来るだろう。

『無愛想だよ〜黒くん。もう〜まあ、それは兎も角・・・二、三時間後にここを発つ予定だから大丈夫だよ〜』

「・・・わかった。ではそれまで休んでおく。時間になったら起せ」

『起こさなかったら〜?』

「・・・どうなるかはわかってるだろう?」

俺は「シヴァ」を篠ノ之束に向けながら言う。すると・・・

『ま、待って!ちゃんと起こすからそんなものをこっちに向けないで!』

「・・・なら、冗談を言わないようにするんだな」

『う〜わかったよ〜でも黒くんも「シヴァ」を向けたりしないでよ〜?』

「・・・できるだけそうしよう」

わざと俺がそう言う・・・

『できるだけじゃなくて絶対にしないで!間違っただら束さんは死んじゃうんだよ!〜?もう!』

「・・・くくっ、やはりお前はからかうと面白いな」

『黒く〜ん。いつか絶対に復讐してやるからね〜』

俺が少しからかうと篠ノ之束が物騒なことを言ったが、

「・・・やれるものならやってみる」

俺はもっとあいつを挑発してみた。それを聞くと・・・

『言ったね〜だったら絶対に黒くんを物凄く恥ずかしい目に合わせ  
てやるからね〜』

ふん、まあ楽しみにしておこう。できるとはとても思えないが。

「・・・そろそろ休む。時間になったら頼む」

『う〜わかったよ〜色々仕返したい所だけど〜〜休んでらっしや  
い』

「・・・ああ」

素っ気なく言うと俺は少し寝ることにした。

それから数時間後、俺と篠ノ之束は前にいた秘密ラボの場所に戻ってきた。

「ふう〜帰ってきたね〜我が故郷に！」

「……どう考えても違うだろ。ここが何故、お前の故郷になる」

「ほらよく言っじゃん、住めば宮ちゃん」って

「……住めば都」だ。わざと間違えているのか？」

流石稀代の変人。篠ノ之束といった所か……と考えてると、

「ねえ、今悪口を言われた気がしたんだけど……気のせいかな？」

「……気のせいだろ。（意外と勘が鋭い奴だ）」

「う〜ん。黒くんもそう言うならそうなのかな〜？」

これからはできるだけ、余計なことを考えないようにしたほうが良さそうだな。

「……篠ノ之束」

「ん〜なに？」

「……ラグナロク」の制限について詳しく聞きたい。今すぐ説明しろ

「……わかったよ〜ゆっくり説明するね〜まず、武器の事だけど……どうやら時間が経つにつれ使える武器が増えるようになってるみたいなんだよね〜」

成る程・・・ということは最初は「レーヴァテイン」しか使えない様になってたのか。そしてこの前織斑一夏と戦う時には「シヴァ」が使うことができた・・・か、厄介な制限だ。

「次に機体の出力の事だけど・・・これも武器と同じ様に時間が経つと出力が増えるようだね。東さんがわかってるのはこんなところかな？」

「・・・「Eシステム」は何時使用できる？」

「うん。よくわかってないね。武器がどの順番で使えるのかもわかってないし」

「・・・そうか」

あれが使えるならかなり楽になるのだが・・・仕方ないか。

「ねえ、黒くん。「Eシステム」って・・・「Rシステム」みたいにやばいやつじゃあないよね？」

「・・・ある意味「Rシステム」よりも危険な代物だ。あれがどういふ代物かわかれば世界中がどんな手段を使っても手にいれようとするだろうな」

「・・・とんでもないね。なんで「ラグナロク」にそんなものばかり搭載してるのかな？」

まあ、確かに・・・織斑一夏を殺すために造った機体だからとは言え・・・異常といえる武装に驚異的な性能を持っているから・・・

「……篠ノ之束。IS学園でなにか変わったことはあるか？」

話をそらす事にした。……これ以上なにか言えばこの場の空気が  
気まづくなりそうだ……

「ん〜どうやら今度学年別トーナメントをやるそうだよ」

「……学年別トーナメントか……ルールは二対二か？」

「へ〜よくわかったね〜そうだよ。ふたり組での戦闘だってさ。多  
分「ゴレム？」や黒くんを警戒しているからだろうね〜もしかし  
て……その日襲撃するつもりかい？」

「……いや、今回は挨拶をするだけだ。できるだけ……な」

俺は今回奴と戦うつもりはない。理由は言えないが……

「ふ〜ん。また君にしては変わった行動を取るね〜まあそのつもり  
なら別にいいけど〜もし、戦うことになったら今度こそ二つ目の頼  
みを実行してね」

「……確か「戦い始めて一時間過ぎたら引いて欲しい」だったな。  
一時間過ぎる前に撤退したからな……あの時は」

織斑一夏に対して油断していたからそうだった……次からはそう  
いかないように気を引き締めなければ……

「んじゃあ〜念のため当日になったら前と同じプログラムを組み込  
むからね〜」

「・・・わかった」

ここで断れば色々とまずいことになるからな・・・仕方ない。

「あ、そうだ。武器のことだけどさ。多分学年別トーナメントの前日位に新しいのが使えると思うよ。だからもし使える様になったらその戦闘データも見せてね」

「・・・了解。俺もその武器に慣れておく必要があるからな」

次はどんな武器か・・・少し期待している。篠ノ之束もその様だな。

「ふふふ〜次はどんな武器かな〜楽しみだね〜」

「・・・武器が増えればその分奴の死ぬ確率も増えるぞ」

「あ！そうだった！まあ、大丈夫でしょ。いっくんだし」

「・・・どういう理屈だ。やはりこいつの考えてることはよく分からん・・・流石変人だな。」

「ね〜また悪口を言われた気がしたけど・・・もしかして黒くんじやないよね？」

(・・・勘が鋭いのか鈍いのかよく分からん・・・)

これ以上なにか考えれば変なことをされそうだ・・・余計なことを考えないようにしよう。

「・・・俺ではないからな。だから「ラグナロク」に余計なプログ



ラムを組み込んだりするなよ」

「は〜い。でも黒くんじゃないなら誰かな〜・・・ま、いいやそれより新しい「ゴーレム」のことでも考えよ〜と」

(・・・本当に分からん・・・)

こいつは悪口に対するセンサーでも体内に入れているのだろうか・・・そんなわけないな。我ながら馬鹿げたことを考えたものだ。

「・・・ではそろそろ俺はいつもの訓練をしよう」

「ん〜じゃあご飯の時間になったら呼ぶね〜」

「・・・まさかとは思うがご飯になにか仕込んだり、俺の分を用意しなければ・・・わかるよな？」

「(ギクッ!)あ、あはは〜なに言ってるのかな〜?東さんがそんなことをするはずないじゃん〜」

・・・考えていたようだ。やれやれ、こいつは・・・まあ俺が「やるものならやってみろ」と言っただが・・・これからはこいつのすることを少し警戒したほうが良さそうだな。

「・・・では訓練をしてくる。ちゃんとしたもの用意しろよ。しなければ・・・どうなるかわかるよな？」

「も、勿論だよ〜ちゃんとしたご飯を用意するね〜(ちえ〜仕返しできると思ったのに〜)」

「・・・本音が出ているぞ。どうやら少し思い知らせたほうが良いようだな」

「ま、待つて待つて！ちゃんとするから許して！」

・・・まあいいか俺がからかったのが原因だし・・・

「た、助かったよ〜ありがとうね〜（でも何時か必ず復讐してやる！）」

・・・これからは毎日こいつのやることに注意したほうが良さそうだ・・・なにするか分からんからな・・・流石に命に関わるようなことしない・・・とは言い切れないな。あの篠ノ之束だし・・・

「・・・じゃあ行ってくる」

「は〜い。行ってらっしゃ〜い（どうやったたら仕返しが成功するか考えよつと）」

・・・俺はそのまま訓練を開始した。不安だと思いつながら・・・

??? Side end

## 第九話（後書き）

意見やアドバイス、感想などどんどん送ってください！後、間違いや誤字があったらお願いします。

## 第十話（前書き）

投稿します。少し短いです。次は学年別トーナメント戦です。

## 第十話

東Side

私は今「ラグナロク」にあるプログラムを組み込んでいた。一定時間戦闘を行なうと武器が使用不可能になるようにしている。このプログラムを組み込みながらあることを考えていた。この「ラグナロク」専用の端末についてだ。

「ん？なんでこの端末、他のプログラムを組み込むことができるようになったら？」

それが気になっていた。「ラグナロク」の調整やデータの閲覧は兎も角・・・他のプログラムを組み込めるようにすれば厄介なプログラムを入れられる可能性がある。なのに何故、このようにしたのだろうか。

「・・・まるで交渉させるために造った感じがするね？黒くんはこのことも知らなかったみたいだし・・・」

黒くんは前に「やっぱり俺を素直に送る気はなかったのか」と言っていた。つまり・・・「ラグナロク」の開発者は黒くんの邪魔をしていることなる。けど・・・

「それにしてもこの機体の性能は滅茶苦茶だよ？制限が付いているとはいえ、ん？分かんないな？黒くんの目的の意味も「ラグナロク」を造った人の考えも」

黒くんの目的である「織斑一夏を殺す」黒くんは恨みがあると言っ

てたけど・・・その恨みが一体何なのか、そして黒くんの邪魔をするなら何故「ラグナロク」を造り黒くんに渡したのか、考えれば考えるほど謎が深まってしまふ。

「まあ、今は仕込みを終わらせるとしますか。「ラグナロク」の開発者に会えればいいんだけど・・・」

「・・・無理だな」

「わあ！？・・・って黒くんかびつくりした〜ねえ、さつき無理って言ったけど私に合わせる気はないってこと？」

「・・・そうじゃない。お前があの人に会うのは「絶対に不可能」なんだ」

「絶対に不可能」？どういう意味かな・・・でもこの束さんに「不可能」は無いんだよ。

「ふ〜ん。じゃあ、その人の情報を教えてよ。絶対に居場所を突き止めるから」

「・・・無理だ。あの人は今「この世界」にいない。そして・・・情報も存在しない。存在するはず無いんだ」

「どういう事？この世界にいないって、それに情報が何処にも無いって・・・」

まさか・・・もう死んでいる？いや、それはない。もし仮にそうだとっても情報はあるはずだ。でも黒くんはどうやっても「不可能」だと言った。それに・・・今この世界にいないと言った。

(情報も居場所も存在するはずがない……？うん。まさか幽霊・  
・なわけないしねえ。……多分これ以上聞いてもはぐらかすだ  
ろうね〜)

「……篠ノ之束？」

「うん？なんだい黒くん？」

「……プログラムの仕込みは終わったか？」

「終わったよ」

とりあえず世界中のデータを見ればわかるかもしれない。そう考  
えることにした。

「ふう〜そろそろ「ラグナロク」の新しい武器が使えるようになって  
てると思うけど……どう？」

「……まだだな。恐らくだが……学年別トーナメントの日にな  
れば使えるだろう」

「うん。残念、見たかったのにな〜もし、使えるようになったら  
言っただろ？」

新しい武器がどんなものか知りたいけど……残念。データじゃ武  
器の名前と特殊能力しか知らないしね〜

「……当日になるまでは「ラグナロク」の調整をして貰うぞ」

「はい。ちやちやとやりますか」

「……頼むぞ」

そう言うと黒くんは部屋の外に出た。また、訓練でもするのだろうか。さて……調整が終わったらどうしようか。

「部屋の入り口に十万ボルト級の電流でも流れるようにしようかな  
くっふふ」

私が黒くんにかかわれたことに対しての仕返しをどうやってしようかと考えると……

「……ほづ。どうやら死にたいらしいな」

「……え？」

私が恐る恐る振り向くと……そこには訓練していたはずの黒くんがいた。な、なんで？

「え、えくと黒くん……訓練してたんじゃないあ……？」

「……念のために戻ってきたが……正解だったな。さて……骨を何本かへし折れば余計なことを考えないようになるかな？」

「ス、ストップ！そんな物騒なことを言わないで！」

な、なんて恐ろしいことを言うんだ。黒くんは……ど、どうしよう……どうすればこの危機から逃れることができるかな……？は、早く考えないと束さんの骨がへし折られちゃうよ。そ、そうだ！



「く、黒くん。今私の骨をへし折れば「ラグナロク」の調整が出来なくなっちゃうよ？それでもいいのかい？」

こう言えば黒くんも手出ししないはず・・・なんせ自分の機体の調整が出来なくなるんだからね。これなら――

「・・・そうか、なら調整が終わった後でお前の骨を折ればいい。そうだろうか？」

「ああそれはいいアイデア・・・じゃないよ！結局の束さんの骨が折られちゃうじゃないか！」

「・・・ちつ、気づいたか」

気づくよ！まったく黒くんは・・・なんて腹黒いんだ。こんな風になりたくないね。人として、

(・・・お前が言えることか？)

ん？今黒くんからなにか聞こえたような・・・気のせいかな？まあ、それより・・・

「束さんの骨を折ろうとしないでね？」

「・・・お前がなにもしなければな。俺が居ない間にトラップを仕掛けたら・・・わかるよな？」

「・・・はい」

目が本気だ・・・なにか仕掛けたら骨を折るって言ってるようだよ・・・怖い。

「・・・では、訓練をしてくる」

「頑張つてね」

黒くんはすぐに部屋を出た。一応しばらくの間、入り口を見たが本当に訓練しに行った様だ。

「真面目にやらなきゃね・・・」

サボったり、変なことしたらどんな目に合わされるか・・・私は少し黒くに怯えながら「ラグナロク」の調整を済ませた。

そしてIS学園で行われる学年別トーナメント戦の日になり・・・黒くんは「ラグナロク」を纏っている状態で、今にもIS学園に向かって飛ぼうとしていた。

「黒くくん。あの武器のテスト・・・しなくていいの？」

今日「ラグナロク」のデータを見ると新しい武器が使えるようになっていた。けど黒くん・・・そのテストをする前に行こうとしてるんだよね

「・・・別に戦うわけではない。もし戦うことになれば「コイツ」の

テストになる。それだけだ」

「ふん。ならいいけど・・・前みたいなことにならないでね」

「・・・ふん、余計なお世話だ」

ふふふ、少し照れてるね。黒くん。可愛いところ有るじゃん。

「・・・今何故か、とても不愉快な感じがしたんだが・・・変なこと考えてないだろうな・・・？」

ドキッ！く、黒くん鋭いね。けど・・・睨まないで欲しいな。怖いから・・・

「な、何も考えてないよ」

「・・・帰ったらどうなるか覚悟しておけ・・・いいな」

・・・誤魔化せなかったよ。秘密ラボの場所・・・黒くんが戻ってくる前に変えておこつと・・・

「・・・ちなみに秘密ラボの場所が変わっていたら・・・必ずボコボコにするからな」

「・・・はい。場所変えたりしないから・・・何もしないでね。お願いだから・・・」

私は諦めてお願いするしかできませんでした・・・黒くん。人の心を読まないで、

「……わかった。では行ってくる」

黒くんはそう言いつと……ISS学園に向かって飛んでいった。

東Side end

## 第十話（後書き）

意見やアドバイスを、感想などどんどん送ってください！後、間違いや誤字もあればお願いします。

## 第十一話（前書き）

時間かかりました……。えー、一番長いです。読みづらいかもし  
れませんが……。どうか見てください。次はオリジナルです。

## 第十一話

一夏Side

今日からIS学園で始める学年別トーナメント戦に向けて、俺とシャルルはアリーナの更衣室で待機していた。

ちなみにシャルルはフランスの代表候補生で少し前にもう一人の代表候補生と共にIS学園に転校してきた。・・・男として。

理由は父親が自分の会社の危機を回避するために俺と白式のデータを盗むため。それを知った俺はシャルルに「ここにいる」と言った。

IS学園に所属する三年間はどの国も介入出来ないからだ。その間に自分の居場所や生き方を見つけて欲しかった。今は考えているよ  
うだけど・・・。

後、俺とシャルルは学年別トーナメント戦にペアとして参加している。シャルルが女という事がばれるを防ぐためだ。

今の所、俺しか知らないからな・・・ふと、更衣室のモニターを見ると各国政府関係者に研究所員、企業のエンジニアなどが勢ぞろいしていた。

「すごいな・・・色んな人が来ているんだな」

「三年生にはスカウト、二年生には一年間の成果の確認に人が来ているからね。一年生にはあまり関係ないと思うけど・・・トーナメント上位入賞者にはチェックがには入るだろうね」

「ふーん。ご苦労なことだな」

どうでもよかったので適当に返答した。それを聞くとクスツと笑われた。シャルルには俺の考えてることが筒抜けだったようだ。全部ではないと思うけど、

「一夏はボーデヴィツヒさんとの対戦だけが気になってるみたいだね」

・・・もう一人の転校生ラウラ・ボーデヴィツヒ。ドイツの代表候補生だ。俺とは千冬姉のことで対立している。

そしてこの前のいざこざでセシリアと鈴を痛めつけた張本人。そのせいで二人のISはボロボロになり、今回の学年別トーナメント戦には出られなくなってしまった。

普通の生徒ならともかく、二人は代表候補生の上、専用機持ちだ。トーナメントで結果を出すどころか参加さえできないのは二人の立場を悪くしてしまうだろう。そのことも気になってはいる。が・・・

「・・・確かにそれもあるけどな」

「?なにか他に気になることでもあるの?」

俺が考えていたのは「黒騎士」のことだ。あれから奴は一度も襲撃していない。俺の命を狙っているにしては変だ。なにか準備でもしているのか・・・?

「いや、あいつら自分の実力を試すことをできないから、辛そうだ



なっと思ってただけだ」

「黒騎士」のことを誤魔化すと同時に前の騒動を思い出す。仲間を守ると誓ったのに何もできなかった。その事で自然と左手に力をもっていた。

「感情的にならないでね。彼女は一年生の中では現時点での最強だと思っ」

「わかってる。でも・・・あいつに負けるわけにはいかない」

「黒騎士」に勝つためにも・・・絶対に負けられない。

「そろそろ対戦表が決まるはずだけど・・・」

本当なら前日にできるはずの対戦表が今日決まることになった。なぜかシステムが昨日まで機能しなかったらしく、今日決定した。

「俺達はAブロックの一回戦目に戦うだよな」

「うん。対戦相手は・・・」

「「え？」」

?????Slide

「……そろそろか……」

俺はIS学園の上空でステルスモードのまま待機している。そして篠ノ之束への通信を開く。

「……上手くできたか？」

『それは束さんへの挑戦かい？この程度ならすぐできるけど……どういっつもりだい？システムにハッキングして対戦表を変えろって』

「……言う通りにすればいい。その代わりお前の頼みを一つ聞いてやると言ったんだ。文句はないだろう」

『むくまあ、そういうことならいいけど……』

「……切るぞ」

俺は篠ノ之束の返答を聞く前に通信を切った。さて……せいぜい頑張ってくれよ。織斑一夏。

一夏Side

「一回戦で当たるとはな……待つ手間が省けたな」

「そうだな。すぐに戦えてうれしいぜ」

一回戦の相手はラウラと篝だった。多分抽選で決まってしまったのだろう。篝がラウラと組むなんて考えにくい。

『試合・・・開始!』

「叩きのめす」

試合開始と同時に俺は「瞬間加速」と「零落白夜」を使いラウラに接近する。これが決まればこっちがかなり有利なる。

「おおお!」

「ふん・・・」

「くっ・・・!」

ラウラが右手を突き出すと同時に俺の動きが少しずつ止まる。かわせなかったか・・・!「AIC」慣性停止能力、ラウラが纏っている機体「シユヴァルツェア・レーゲン」の第三世代型兵器で衝撃砲と似たようなエネルギーで慣性を停止させる。

エネルギーでできてる以上は「零落白夜」で切り裂くことは可能なのだが・・・セシリアと鈴に動きが単純なため簡単に腕などをピンポイントで止められると言っていた。

ならば意外性で攻めればと思ったが・・・無駄だったようだ。

「開始直後の先制攻撃・・・わかりやすいな」

「・・・そりゃどうも。以心伝心で何より」

「ならば・・・私が次にどうするかわかるだろう」

「想像したくないけどな」

ガキン！と巨大なりボルバーの回転音が鳴ると同時に「白式」のハイパーセンサーの警告が発する。

『敵ISの大型レール砲の安全装置解除を確認、初弾装填――警告！ロックオンを確認――警告！』

慌てるなよ。一対一じゃないんだからな。

「させると思う？」

シャルルがアサルトカノン「ガラム」でレール砲をずらす。俺に放った砲弾は外れ、シャルルが追撃する。シャルルの十八番「高速切替」でアサルトライフルで攻めようとするが・・・「打鉄」を纏った筈に阻まれる。

「私を忘れてもらっては困る」

実体シールドを展開し銃弾を弾きながらシャルルに近づく。

「なら俺も忘れないようにしてやるよ！」

AICから解除された俺はシャルルに向かって「瞬間加速」を使いぶつかる瞬間に互いの場所入れ替える。

そして俺と筈のブレードがぶつかる。受け止めた隙を狙いシャルルがショットガン「レイン・オブ・サタデイ」で筈を撃つ。

だが当たる瞬間箒が消えた。ラウラがワイヤーブレードで箒の足を引っ張りアリーナ脇まで飛ばす。箒を助けたってわけじゃないな邪魔だからどかしたようだ。

箒が怒鳴っているが気にせずプラズマ手刀で俺を攻撃しながらワイヤーブレードでシャルルを牽制していた。やはり強い……！

「シャルル、大丈夫か？」

「うん。一夏すぐに援護するね」

「いや、作戦通り箒を先に倒してくれ」

「……わかった。気をつけて」

ラウラを今の俺達が一人で倒すのは無理がある。先に箒を倒して二対一でラウラを倒す。一＋一が二とは限らないからな。問題は……それまで俺がやられないようにしなければならぬ。耐えて見せるさ！

????? Side

「……ふむ。中々やるな……」本来「よりも強くなっている。俺が接触したせいか……」

俺は上空から奴らの戦闘眺めている。織斑一夏はラウラ・ボーデヴィツヒの猛攻に耐えている。だが・・・少し強くなったからといって彼女の猛攻に何時まで耐えるのは無理だろう。

さて・・・シャルル・デュノアと篠ノ之箒のほうはすぐに決着がつきそうだ。「紅椿」のない今の篠ノ之箒では勝つのは無理だな。

「・・・シャルル・デュノアの特徴は器用さと「高速切替」、この二つが強力だからな・・・確か「砂漠の逃げ水」という戦法だったな彼女が得意とする戦い方は」

織斑一夏のほうを見ると動きが止まっていた。ラウラ・ボーデヴィツヒのAICで止められているのだろう。そしてすぐに織斑一夏が吹き飛ばされた。

「・・・ワイヤーブレードで飛ばしたか。止めを刺そうとしているが・・・防がれるな」

俺がそう言つとラウラ・ボーデヴィツヒが大型レール砲を発射したがシャルル・デュノアに止められる。そしてすぐに織斑一夏の腕を引つ張りその場を離れる。直後に奴がいた場所が吹き飛ば。篠ノ之箒のほうを見るとすでに戦闘不能になっていた。

「・・・ようやく二対一だな。さあ、次はどうする？」

俺は奴らの戦いを少し楽しみながら眺めていることにした。

私は教師のみが入ることができる観察室で山田先生と共に戦闘映像を眺めている。

「うわぁー、すごいですね二人共。たった二週間ちよつとであればどの連携ができるなんて・・・やっぱりすごいですね織斑君」

山田先生は一夏を褒めているが・・・

「山田先生、あれはデュノアが合わせているから成り立っている。あいつ自身はあまり役に立っていない」

「そうだとしても、他人にそこまで合わせてくれる織斑君がすごいですよ。魅力のない人間に誰も力を貸してくれませんし」

「・・・そうかもしれないな」

確かに・・・一夏に多少の魅力はあるかもしれないが・・・褒め過ぎではないか？

「それにしても・・・学年別トーナメントをいきなり二対二にしたのは、やはり先月の事件のせいですか？」

先月の事件・・・二機の「全身装甲」による襲撃は一般的には反政府組織の仕業ということになっている。幸い無人機だけではなく「黒騎士」もいたため誤魔化すことができた。

だが、やはりIS学園を襲撃したことは重大なことになっている。

その上世界で唯一ISを使える男、織斑一夏を殺そうとしている。このことで世界中が「黒騎士」を警戒している。・・・「黒騎士」を手にいれようとしている国もあるようだ。

「おそらくそうだろうな。より実戦的な経験を積ませるためだろうな」

「でも一年生にはまだ必要ない気がしますけど・・・」

確かにそうだ。戦争するわけでもないのに実戦的な経験が必要あるとは思えない。だが・・・

「そこに先月の襲撃事件が出てくるのだ。今年の新入生は第三世代型兵器のテストモデルが多い。そこに先月の襲撃者が現れたら？」

「機体や武器を自分で守る必要がある・・・ですね」

「そうだ。機体や操縦者を守らなくてはいけないが、教師の数が有限である以上は自分で守るしかない。そのための実戦というわけだ」

一通り説明した後、私と山田先生はまた一夏達の戦闘映像を眺める。

「それにしても篠ノ之さん、すぐに倒されましたね」

「専用機がなければあんなものだろう」

特に篠ノ之はデュノアと相性が悪い。じゃんけんのようなものだ。しかしボーデヴィツヒはそうはいかん。今も二対一だが互角にやり合っている。



「強いですね。ボーデヴィツヒさん。二対一なのにここまでやるなんて」

「ふん・・・変わらん。強さを攻撃力と同じだと思っているがそれでは・・・」

一夏には勝てない。が、このことは言わない。言ったらまた山田先生にからかわれそうなる。まあ、その時は仕返しするだけだが、

「織斑君、「零落白夜」を使いましたね・・・一気に決めるつもりでしょうか」

おそらくそのつもりだろう。さて・・・私はそろそろ「準備」をするでしょう。

「山田先生、私は「準備」をします。後は任せます」

「わかりました。緊急時は通信をします」

「わかった」

私はそう言い部屋を出た。そして「準備」を始める。さて・・・来るか「黒騎士」？

「これで決める！」

「『零落白夜』か、触れれば一撃でシールドエネルギーを消滅させる能力……それならば当たらなければいいだけだ」

ラウラのAICを急停止・転身・急加速でなんとかかわすがついに喰らってしまい俺の動き止まる。

「ふん、てこずらせてくれたな。だが、これでー」

「やれやれ、忘れているのか？俺達はふたり組なんだぜ？」

「……！」

ラウラがシャルルを探そうとするが、もう遅い。シャルルがギリギリまで接近し、ショットガンを大型レール砲に連続で撃ち込む。直後に大型レール砲は爆散した。同時に俺への拘束が解除された。やはりラウラのAICは停止させるものに意識を集中させないと効果を維持することができない。今がチャンスだ！

「くらえ！」

「くっ！」

「『零落白夜』を決めたはずだったが……エネルギーが尽きてしまい、不発に終わった。」

「残念だったな。限界までシールドエネルギーを消費してはもはや戦えまい！私の勝ちだ！」

「させない！」

「失せろ！」

ラウラが俺の援護に入ろうとしたシャルルをワイヤーブレードで牽制する。そして一本のブレードがシャルルに当たる。

「うわあっ！」

「シャルル！」

「次は貴様だ！」

気を取られた隙を狙われ俺はラウラのプラズマ手刀を受けた。そして・・・白式ごと床に落ちた。

「は・・・ははっ！私のー！」

「まだ終わっていないよ！」

「なに！？「瞬間加速」だと！？そんなデータはなかったはず・・・まさか！？」

「ふふっ、そっだよ今初めて使ったんだよ」

すげ・・・この戦いの中で「瞬間加速」を覚えるなんて、もはやシャルルの器用さはワンオフ・アビリティと呼べるだけのものかもしれない。

「ふん！だが私の停止結界の前ではー！」

ドンッ！

AICを発動しようとしたラウラを俺はシャルルが捨てたアサルトライフルを構え撃った。ラウラがすぐに周りを見渡し俺と目があつ。

この銃は前にシャルルと訓練した時に使用許可が下りたもの、シャルルが残弾が残って状態でこれを捨てたときに俺はシャルルの二段構えの作戦気づいた。

そして白式がラウラの一撃に耐えてくれた。がんばってくれてありがとな。相棒、

「これならAICは使えまい！」

「こ、のっ・・・死に損ないがあっ！」

そう叫ぶラウラだが、冷静さは欠いていない。命中率の低い俺の射撃は無視してシャルルに集中した。

「でも、間合いに入れることはできた」

「だからどうした！第二世代型の武器でシュヴァツェア・レーゲンを墜とすことができるはずー！」

そこまで言いラウラがハツとする。気づいたのだろう。単純な攻撃力だけなら第二世代型最強と謳われた武器。

シャルルの機体「ラファール・リヴァイヴ・カスタム？」の盾の中に隠してあるシャルルの切札。

盾の装甲がはじけ飛び、その中のリボルバー杭が融合した装備が姿を現す。六九口径パイルバンカー「灰色の鱗殻」。通称「盾殺し」。

「この距離なら外さないよ！」

シャルルが左手を突き出しながら突撃する。「瞬間加速」で加速しているため全身を止めようとしても間に合わない。ラウラがAICをピンポイントで使うが外れる。そして・・・シャルルが一瞬だけ微笑む、死を宣告するかのよう。

ズガンッ！！

「ぐっぐっ！」

ラウラの腹部にパイルバンカーが直撃する。ISの絶対防御が発動し防ぐもののシールドエネルギーを大量に消費する。しかも相殺しきれなかつた衝撃がラウラを襲う。が、これで終わりではない。「灰色の鱗殻」はリボルバー機構のため高速で次弾を装填する。つまり、連射が可能なのだ。

ズガンッ！ズガンッ！ズガンッ！

続けざまに三発を喰らいラウラの機体がIS強制解除の兆候を見せ始めるが・・・異変が起きた。

ラウラSide

(私は負けられない！負けるわけにはいかない……！)

ラウラ・ボーデヴィツヒ。それが私の名であり記号。遺伝子強化試験体C100三七の名前。

私は戦うために作られ、育てられ、鍛えられた。私は優秀であった。だが、ISが現れその適合性を上げるための処置「ヴォーダン・オージェ」によって私は「出来損ない」の烙印を押されてしまう。

「ヴォーダン・オージェ」疑似ハイパーセンサーと呼ばれる処置。危険性はなく、不適合もなかったはずだったが私はこの処置のせいで左目が金色に変色し、常に稼働状態のまま制御できなくなってしまう。まったからだ。

より深い闇に落ちた私は……初めて光を目にした。教官……織斑千冬と出会い。あの人はとても優秀だった。あの人の教えを忠実に実行するだけで私はIS専門に変わった部隊でトップに立つことができた。

私はあの人に憧れた。あの人の強さに、凛々しさに、自らを信じる姿に強烈に惹かれた。こうなりたいと思った。この人のようになりたいと、

私は教官が帰国するまでの間時間があれば話しかけた。この人が側にいるだけで体の中からふつふつと力が湧いてくるのを感じた。

だが……あの人が自分の弟のことを話すと優しい顔を浮かべた。私はそれを認めたくなかった。あなたは強く、凛々しく、堂々とし

ているのがあなたなのに・・・

だから・・・許せない。教官にそんな表情にさせる弟の存在が、だから敗北されると決めた。あの人の弟を私の力で叩きのめすと、だから負けるわけにはいかない。

(力が欲しい・・・奴を徹底的に叩きのめすための力が・・・！)

ドクンとなにかが私の奥底でうごめく。

『願うか・・・？ 汝、自らの変革を望むか・・・？ より強い力を欲するか・・・？』

言うまでもない。力を得られるなら、何も無い私など全てくれてやる！ だから力を・・・比類なき最強を、唯一無二の絶対を私よこせ！

166

Damage Level:D .  
Mind Condition::Uplift .  
Certification::Clear .  
《Valkyrie Trace System》……boot .

一夏Side

「あああああっ！！」

突然ラウラのが悲鳴を上げると同時にシュヴァルツエア・レーゲンが変形し始める。だが、とても変形とは言えなかった。装甲はどろどろに溶け、ラウラを包んでいった。

「なんだよ、あれ・・・」

IS普通変形などしない。ISがその姿を変えるのは「初期操縦者適応」と「形態移行」の時だけだ。なのに今日の前であり得ないことが起きていた。

シュヴァルツエア・レーゲンだったものはラウラの体を包み込み大地に立つといきなり全身が変化した。「黒騎士」のような色だが形状はかなり異なっていた。

ボディラインはラウラのそれを表面化した形状であり、最低限の装甲が腕と足についている。

頭部はフルフェイスの装甲に覆われており、目の箇所は装甲の下にあるラインアイ・センサーから赤い光を漏れていた。

そして手にはある武器を持っていた。それは・・・

「「雪片」・・・！」

千冬姉がかつて振るった刀、それをコピーしたようなものだった。俺はそれを見た瞬間無意識に「雪片Ⅱ型」を中段に構えた。

すると突然黒いISは俺の懐に飛び込み、刀を中腰に引いて構え、振り抜いた。それは間違いなく千冬姉の太刀筋そのものだった。



「ぐあっ！」

構えた「雪片二型」が弾かれ敵は上段に構える。まずい！

「くっ！」

縦一直線に鋭い斬撃が襲ってきた。俺は白式に緊急回避の命令を送るが左手に軽く刃が触れ血が滲み白式が全身から消えたがそんなのどうでもいい。

俺は激しい怒りに動かされ、拳を握りしめ黒いISに向かっていった。あいつ・・・許さねえ！

拳が黒いISに触れる寸前で俺の体が引つ張られた。箒が俺を引き離れたのだ。黒いISが動かない所を見るとどうやら武器が攻撃にのみ反応するようだ。俺の拳は攻撃と見なされなかったらしい。

「馬鹿者！何をしている！死ぬ気か！？」

「離せ箒！あいつを絶対ぶっ飛ばしてやる！邪魔するならお前を――」

「いい加減にしろ！」

バシーン！と箒に頬を思いっきりひっぱたかれ、俺の怒りの頂点が折られた。

「なんだというのだ！わかるように説明しろ！」

「あれは千冬姉のデータだ。千冬姉だけのものなんだよ！それにあ

んなわけわかんねえ力に振り回されてるラウラも気に入らねえんだよ！ISとラウラ両方共一発ぶっ飛ばさねえときがすまねえ」

あれは「強さ」ではない「強さ」は攻撃力なんかじゃない。そんなのはただの「暴力」だ。

「理由はわかった。だが、今のお前に何ができる。白式のエネルギーはもう残っていないその状態でどうするつもりだ」

「くっ……」

箒の言う通りだ。一撃を叩き込むにしても白式のエネルギーがまったく足りないこの状況では何もできない。

『非常事態発令！トーナメントの全試合を今すぐ中止せよ！状況をレベル4と認定、鎮圧のため教師部隊を送り込む！来賓、生徒はすぐに避難すること！繰り返し！』

「聞いての通り少しすれば先生方が来て事態をすぐに収拾するだろう。お前がやる必要はない」

確かに箒の言っていることは正しい。けど……

「違うぜ箒。俺はあいつをぶん殴る。だからやるんだ。他の奴がどうだとか知らねえよ。それにここで引いたら俺は織斑一夏じゃなくなる。そんなの嫌だね」

「ええい、馬鹿者が！大体エネルギーが無いのにどうやってー」

「無いなら他から持ってくればいい。でしょ？一夏。僕のリヴァイ

ヴならエネルギーを移すことができるよ」

「本当かシャルル！？なら今すぐやってくれ！」

「でも！約束して。絶対に勝つって」

「ああ、勿論だ。ここまで言った以上、勝つしかねえよ」

俺は負けられない。自分自身を貫くために仲間を守るためにそして・  
・。「黒騎士」を倒すためにも。絶対に。

「じゃあ、はじめるよエネルギーを送るね」

「おう、わかった」

リヴァイヴから白式にエネルギーが流れてくる。それと同時に俺は  
不思議な感覚を受け止めた。

(この感覚・・・初めてISを動かしたときと同じ・・・)

まるで昔から知っているような感覚が俺も包み込む、これがなんな  
のかは今はいい。今はあいつを倒す。それだけだ。

「完了。これでリヴァイヴのエネルギーは全部渡したけど・・・武  
器と右腕だけみたい」

「充分だよ」

白式は零落白夜を使うためにこうしてくれた。後は俺次第だ。

「一夏……！死ぬな……。絶対に死ぬな！」

「信じるよ箒。それだけでいい。必ず勝つから」

力だけではない「強さ」を俺は知っている。誰かを守るために強くあり続けた人を誰よりも深く知っている。ならば……俺は誰かのために仲間のために強くありたいと、そう願う。

「じゃあ、行ってくる」

「あ、ああ！勝ってこい一夏！」

俺は箒に勝利を約束し、黒いISに向かう。ちらりとシャルルを見るとただ静かに一度頷いた。それで充分だ。

「じゃあ行くぜ偽者野郎。「零落白夜」……発動」

ウン……と返事のように聞こえた。そして全てのエネルギーを消滅させる刃が出てくる。

（今回必要なのは速度と鋭さ。一瞬で振り抜くことができる洗練された刃）

意識を集中させそれが極限まで高まると「雪片二型」に変化が起きた。「零落白夜」の刃が日本刀のように細く鋭いものになった。

（ありがとな、白式じゃあ、行くぜ）

俺は居合いの構えで黒いISに向かう。黒いISがこちらに接近し、刀を振り下ろす。千冬姉がするのと同じ速く鋭い袈裟斬り。でもそ

れは・・・

「ただの真似事だ」

ギンツ！腰から抜き放ち相性の刀を弾く。そしてすぐに頭上に構え、縦一直線に相手を断ち切る。

「ぎ、ぎ・・・が・・・」

ジジジツ・・・と音がし、黒いISが真っ二つに割れる。そしてラウラが気を失うまでの一瞬の間、俺と目があう。眼帯が外れ現れた金色の左目と。その目はまるで助けて欲しい・・・そう言っているように見えた。

「・・・まあ、ぶっ飛ばすのは勘弁してやるよ」

倒れかけたラウラを抱きかかえ、俺はそう呟く。それが聞こえているかはラウラだけが知るだろう。

ラウラSide

私は・・・ただ羨ましかっただけだったんだ・・・教官を優しい表情にさせるお前の存在が・・・

そして出会い、戦って、理解した。強さとは・・・なんなのか。その答えは無数にあるだろう。でも、その答えの一つに強烈に出会っ

てしまった。

『強さっていうのは心の在処。自分の拠り所。常にどうありたいか  
ってことだと思っ』

・・・そうなのか？

『そりゃそうだろ。自分がどうしたいかわからないやつは強い弱い  
以前に歩き方を知らねえだろ。どこへ向かうか。どうして向かうか、  
さ』

・・・どうして向かうか・・・。

『つまり、やりたいことはやったもん勝ち。そうじゃなきゃ人生じ  
ゃねえし、つまらねえだろ』

・・・では、お前はなぜ強い？なぜ強くあろうとする？

『強くねえよ。俺はまったく強くない。でも、もし俺が強いつてい  
うなら・・・それは強くなりたいから、強いしさ』

・・・強くなりたいから・・・

『それに強くなったらやってみたいことがあるんだ。自分の全てを  
使って、ただ誰かのために戦いたい』

・・・まるであの人のようだ・・・

『そうだな。だからお前も守ってやるよ。ラウラ・ボーデヴィツヒ』

その言葉で私の胸は感じたことのない衝撃を受けた。ときめいてしまった。そして私の心臓が言っている。こいつの前では私はただの十五歳なのだと、たあの女なのだと。・・・織斑一夏。これは・・・惚れてしまいそうだ。

一夏Side

(なんだ？今の・・・)

まるで世界にラウラとふたりだけで話していたような感覚。そんな不思議を感じが俺の体を包み込んだ。とりあえず周りを見るがアリのナの中だ。

「一夏？どうしたの？」

シャルルが話しかけハツとする。

「あ、ああ。なんでもない」

このことは後でシャルルに聞いてみるか。それよりも。

「ラウラを保健室に運ぼう。気を失っているし」

「はあ、やれやれ・・・お前は自分を狙っていた奴まで優しくするのか？まったく」

「それが一夏の良い所だと思っよ」

「はは、ありがと。じゃあ早速――」

ドゴオオオオン――！

「「「！？」」」

俺が続きを言おうとした瞬間。アリーナから爆音が鳴り響く。まさか……！？

「な、なんなの！？今は！？」

「い、一夏……これは……！」

「ああ……間違いない……！あいつだ！」

轟音と共に発生した煙から……奴が現れた。

「……ふん。久しぶり……か」

「「黒騎士」――！」

「黒騎士」が煙から現れた。最悪だ……！この状況でこいつが来るなんて。

「こ、この機体。前にIS学園で襲撃事件を起こしたっていうあの……？」

「ああそつだ！一夏の命を狙っている奴だ！」



「くそっ！なんでこんな時に！」

まずい……！こっちはもう戦えるやつはいない。ラウラは気絶している上に機体が無いし、シャルルの機体はエネルギーがまったくない。筈の機体も戦える状態ではない。俺は右腕に装甲と「雪片二型」があるだけだ。どうする！？

「……ふん、満身創痍と言った所か……だが安心しろ。今回お前を殺すつもりは無い」

「な、なに！？」

どういう事だ……！？なぜ俺を殺そうとしない？俺を確実に殺すチャンスのはずだ。なのになんで……？

「どういうつもりだ！？前襲撃したときは一夏を殺そうとしていたはずだろう！」

「……殺して欲しいのか？だったら今すぐ殺してやるぞ？」

「ふざけないで！人の命をなんだと思ってるの！」

俺もそう思う。けど、この状況では俺達に勝つ可能性なんてまったくない。前は三対一でなんとか追い払うことができた。けど今度は一対一の上、まともな状態ですらない。奴がその気になれば一瞬で俺達を殺せるだろう。

「くっ……！」

俺はなにもできなかった。仲間を守ること自分の命を守ること  
できない。悔しくてしかたなかった。

「……くくつ、今回ここに来たのは挨拶とお前のその顔を見るた  
めだ」

「な、なんだと？」

「……悔しいだろう？今何も守れない自分が悔しくてしかたない  
だろう。それをお前に味あわせるのが今回の目的だ」

何も言えなかった……こいつの言う通りだ。俺は仲間を守ること  
ができなかった。こいつが引いてくれることを祈るしかできない。  
俺は無力だ……

「……ふん、その顔を見れたからな、そろそろ……！」

なんだ？奴が急に黙ったけど……なんで？

「……出てきたらどうだ？織斑千冬」

「……気づかれていたか」

「「「え!?!」」」

俺達が別の声がしたほうを向くと……そこには千冬姉がいた。ど  
うしてここに!?!?

「ち、千冬姉……いつの間ここに?」

「・・・織斑先生だ。まったく・・・だが今回は見逃してやる。こいつを捕まえねばならんからな」

千冬姉がそう言うのと全身が一瞬光り・・・箒と同じ「打鉄」を纏っていた。

「・・・成る程、今日ここにくることを予想していたのか」

「その通りだ。さて・・・そろそろ始めるとしようか「黒騎士」」

「・・・「黒騎士」というのはこいつのことか？」

「ああ、ぴつたりだろう。では・・・行くぞ」

千冬姉は近接ブレードを奴は「レーヴァテイン」を展開しそれぞれ構えた。

「織斑、篠ノ之、デュノア、お前達はポーデヴィツヒを連れて今すぐピットに戻れ。わかったな」

「で、でも」

「いいからさっさと行け!!」

「」「は、はい!」「」

千冬姉がそう言うのと俺達は気を失っているラウラを連れてすぐにピットに向かった。

元世界最強と謎の黒騎士の戦いが今始まるうとしていた。



## 第十一話（後書き）

意見やアドバイスを、感想などどんどん送ってください！後、間違いや誤字もあればお願いします。

## 第十二話（前書き）

では投稿します。オリジナルの話です。楽しんでいただければうれしいです。後11000アクセスとユニークが1700を突破しました！ありがとうございます！

## 第十二話

千冬Side

私と「黒騎士」は互いのブレードを構え、様子を見る。・・・隙がまったくくないな。さて、どうするか。奴のブレードは触れた物を溶かす能力がある以上、打ち合うのは危険だ。とはいえ・・・このまま何時までもこうするわけにはいかな。こっちの狙いに気づかれてしまうかもしれん。ならば・・・

「はあっ！」

「！・・・」

「瞬間加速」と同時に私はブレードを抜き放つように横一線に振るうが避けられる。奴がブレードで打ち合おうとするが、すぐに後ろに下がり左手にアサルトライフルを展開し、連発するが・・・全てかわされる。

「・・・まともに打ち合う気は無いようだな」

「当たり前だ。物を溶かすブレードと打ち合う馬鹿はおらん」

「・・・ならばこれはどうだ？」

奴は左手に超大型ビームライフルを展開する。威力があっても当たらなければ問題ない。が・・・奴はブレードを引っ込めた。

「どういってもいい。私相手にそんな隙だらけの武器で戦う気か？」

「……どうかな？」「ツインガトリングモード」

奴がなにか言った次の瞬間……奴のビームライフルの形が変わり始めた。そしてそれが終わると両手にガトリングを持っていた。

「武器が変形したと!？」

「……喰らえ」

ダダダダダダッ!!

奴は両手のガトリングから凄まじい数の小型ビームを連射した。私は物理シールドを展開し、防ぐがすぐにポロポロになる。

（このままでは一方的な展開になる。何とか奴に接近しなければ……）

私はダメージを受けるのを承知で奴に「瞬間加速」で近づく。何発か受ける気にせず、奴にブレードを振るう。

「……ちっ、まさか喰らうのを承知の上で来るとはな」

「私をそこらのガキ共と一緒にしないでもらおう」

ブレードのない今の奴に私はブレードとアサルトライフルで少しずつ追い詰める。

「……押されているか。ふむ、丁度いいな」



奴が後退するとガトリングを引っ込め、両手首になにかを展開した。

(なんだ？別の武器か・・・？迂闊に近付けんな)

「・・・ほづ、流石元世界最強か。そう簡単には隙を見せんな。そちらが来ないのならば・・・こちらから行くぞ」

奴は両手首からプラズマブレードを出した。あれは・・・!?

「ボーデヴィツヒと同じ武器だと・・・!?!」

「・・・外れだ」

奴がそう言つと両足からも同じようにプラズマブレードを出した。

「なに!?!両手両足からプラズマブレードを出しただと!?!」

「・・・また、外れだ。プラズマブレードではないビームブレードだ」

「な!?!」

奴は両手両足のビームブレードを自由自在に使い、私を追い詰める。

「ならば・・・!」

私はアサルトライフルを引っ込め、近接ブレードをもう一つ展開し奴の攻撃に対抗する。なんとか防ぎきった。

「・・・やるな「フェンリル」の猛攻に耐えるとは」

「「フェンリル」？そのビームブレードの名か」

「・・・ちなみにビームライフルのほうは「シヴァ」だ。覚えておけ」

「ふん、意外と律義な奴だな」

私は「フェンリル」の攻撃から逃れるために下がり近接ブレードを二つ共仕舞い、アサルトライフルを両手に展開した。そして奴目掛けて連射する。が・・・やはり全てかわされる。

（「フェンリル」は接近戦ならば、驚異的な攻撃力を持つが遠距離ならばまったく役に立たない。かといって遠距離から攻撃しても奴には当たらない。くっ、打つ手無しか）

「・・・来い「レーヴァテイン」。「シヴァ」」

奴は私を追い詰めるように「シヴァ」と「レーヴァテイン」を展開する。そして「シヴァ」が奴の左腕と一体化し、私に向けて発射した。

私が避けた隙に奴が「瞬間加速」で接近し、私に「レーヴァテイン」を振りながら両足の「フェンリル」で攻撃する。

凄まじい猛攻に私はアサルトライフルを両方引っ込め、物理シールドと近接ブレードを展開し対抗するが防ぐのが精一杯だった。このままでは間違いなくやられる。

「・・・流石だな。お前以外にもうとっくにやられているだろう

な」

「ふん……！誉められてもまったくうれしくないな」

「……「アームガトリングモード」」

奴がまた「シヴァ」を変形させた。今度は左腕だけのガトリングになり、私に向けて連射する。

ダダダダダダダッ！！

私その場を離れても奴はすぐに追いつき、私に激しい攻撃を叩き込む。

（駄目だ……！機体の性能差は私にとってかなり不利だ！武器の差もはつきりしている上、奴は私より強い！これでは確実に負ける！）

「……「Rシステム」発動」

奴が例のシステムまで使い、機体のスピードと武器の威力が上がる。益々私は不利な状況に陥る。そして……ついに致命的な隙が出てしまった。

「しまった！」

「……終わりだ。織斑千冬」

奴の「レーヴァテイン」が私に触れようとした瞬間……

ダダダダダダダッ！

「!?!」

奴が予想外の攻撃を喰らい後ろに下がる。

「……くっ！誰だ!?!」

『織斑先生！彼等のエネルギーの回復が完了しました!』

山田先生からの通信が入る。間に合ったか……

「千冬姉！無事か!?!」

「大丈夫ですか！織斑先生!」

「織斑先生！怪我は!?!」

「一々騒ぐな馬鹿者共。織斑お前は後で説教だ。いいな」

一夏、篠ノ之、デュノアが私を間一髪の所で助けた。やれやれ、私が教え子に助けられるとはな……。まあいい。今は「黒騎士」を捕まえるのが先だ。

「……どういう事だ？なぜこいつらがここにいる？おまけに機体を纏っているだど？エネルギーはもう無いはずだ」

「ピットでエネルギーを補給したんだよ。お前とちふ……。織斑先生が戦っている間にな」

「・・・成る程、最初から一対一で戦うつもりはなかったのか・・・」

一夏の言う通り、私と「黒騎士」が戦っている間に彼等の機体の補給をしていた。そして補給が完了した彼等と共に「黒騎士」を捕まえる。・・・が四対一でも上手くいくかはわからん・・・ここからが本番だな。

「・・・ふん、四対一で勝てると思うのか？お前ら四人共機体が損傷を受けているその状態で」

「やってみなければわからねえぜ？」

「そうだよ。元世界最強にその弟、天才の妹に代表候補生もいるからね」

「この場でお前を倒し、一夏を守る！」

「さて、第二ラウンドの開始というのか」

私達全員それぞれの武器を構え、奴と対峙する。

「・・・面白い。圧倒的な力の差というものを見せてやろう」

奴がそう言うとき「瞬間加速」で私達に接近する。

「織斑！篠ノ之！デュノア！それぞれ離れて戦え！奴と一対一で戦おうとするな！」

「」「はい！」「」

三人はすぐに散開し、デュノアは援護を一夏と篠ノ之と私で奴と接近戦を行なう。

「……ふん」

奴は「シヴァ」を引っ込め、「レーヴァテイン」と「フェンリル」で私達と接近戦を繰り返す。

「くそっ！ ぜんぜん当たらねえ！」

「全部防がれてしまう！ 四人で攻撃しているというのに……化け物め！」

「なんて強さ……！ 四対一なのに一撃も当たらないなんて……！」

「これほどとはな……！ なんとかしてもお前をここで倒す！」

奴はデュノアの射撃を全てかわしながら私達三人の攻撃を防ぐ。一瞬の間を見計らい、後退の「瞬間加速」を行なう。そして「レーヴァテイン」をまた引っ込めた。「シヴァ」を展開する。

「……「ツインガトリングモード」」

「シヴァ」が変形し、また二つのガトリングになった。それを両手に持ち私達に向けて連射する。

ダダダダダダッ！！

嵐のように激しいビームが私達を襲う。

「うわあああああ！」

「くっくっくっくっくっ！」

「きゃあああああ！」

「くっ！」

私はなんとかかわしたが・・・彼等はそうはいかなかった、まとも  
に奴の攻撃を受けた。彼等が怯んだ隙に奴が「瞬間加速」で近づく。

「・・・「ツインカノンモード」」

また奴の「シヴァ」が変形し今度は二つに割れ大砲のような姿にな  
り、両肩に装着した。それと同時に「レーヴァテイン」をまた展開  
し、両肩の「シヴァ」で私を撃ちながら彼等と接近戦を行なう。

「・・・大したことはないな。やはり織斑千冬以外は雑魚か」

「言ってくれるじゃねえか！」

「嘗めていると痛い目に逢うよ！」

「そういうのは勝ってから言うんだな！」

「・・・雑魚だから雑魚と言っている。そろそろ終わらせてもらっ

右腕の「フェンリル」のビームブレードが「レーヴァテイン」に移

る。そして「レーヴァテイン」の刃がビームに覆われた。

「なっ！？そんな能力まであんのかよ！？」

「・・・喰らえ」

奴が「レーヴァテイン」を周囲に振るう。すると彼等の武器と装甲が少しだけ溶けた。

「！？ど、どういうことだ！？」「レーヴァテイン」は物に触れなければ溶かすことはできないはず・・・！？」

「・・・知る必要はない。そろそろくたばれ」

「ません！」

私は「シヴァ」の射撃を全てかわし奴に接近する。そして奴の「レーヴァテイン」と打ち合う。物を溶かす能力であっても武器を全部溶かすには時間がかかるはず・・・だが、私のブレードがかなりの早さで溶けてしまう。

「な、なぜだ・・・！？なぜ武器がこれほど早く溶ける！？」

「・・・「フェンリル」は両手両足に持っている武器を強化することが出来る。つまり右腕にある「レーヴァテイン」の「高熱」を強化したというわけだ」

「そうか・・・！さっきのは強化した高熱を周囲に振り撒いたのか・・・！」



「・・・正解だ。ちなみに、両肩にある「シヴァ」も手に持てば強化できる」

くっ・・・接近戦に対して強力な武器だというのにもその上、他の武器を強化できるとは・・・厄介にも程がある・・・！

「・・・さて説明も終わったことだ。終わらせるぞ」

奴が強化した「レーヴァテイン」を振るうたびに高熱が私達の機体と武器を少しずつ溶かす。

「三人共離れる！このままでは確実にやられる！」

「わ、わかった！」

「は、はい！」

「わ、わかりました！」

私が時間を稼ぎ三人共なんとか後退した。

「・・・自分を犠牲にして教え子を守るか・・・」

「勘違いするな。自分を犠牲にする気などない」

「・・・そうか。だが、お前らとこいつでは性能にも武器にも差がある。どうするつもりだ？」

奴の言う通り長期戦になればなるほどこちらが不利になってしまつ。ならば・・・手は一つだ。

『織斑!』

『は、はい!なんですか?』

『「零落白夜」を使え。今の奴に当てることができれば私達の勝ちだ』

『わかりました!』

「Rシステム」を発動した状態の奴は「零落白夜」を喰らい苦しんでいた。それを狙うしかない。

「行くぞ!黒騎士!」

一夏が「零落白夜」を発動させ、奴に接近する。篠ノ之とデュノアが一夏を援護し、私も奴の隙を作るために奴と斬りあう。強化された「レーヴァテイン」が私達の機体の装甲を溶かすが気にせずに向かう。

「・・・そう来ると思っていたぞ」

「なに!?!」

奴は一夏がくる前に後退し、「レーヴァテイン」を仕舞う。そして・

「・・・アームカノンモード」

奴が肩に付けた「シヴァ」を変形させ今度は右腕と一体化した。そして地面に向かってフルパワーで放つ。また轟音と共に大量の煙が

発生した。奴はその煙に隠れる。

「くっ！だったらこっちも煙の中に入るだけだ！」

一夏が「黒騎士」を追いかける。まさか奴の目的は……！

「待て！織斑！迂闊に近……」

私が続きを言おうとすると……

ダダダダダダダッ！！

「！？ぐわあああああ！」

織斑が煙の中から現れた大量の小型ビームを喰らった。「黒騎士」が一夏に追い討ちを仕掛ける。

「……終りだ」

奴がいつの間にか展開した「レーヴァテイン」で一夏を攻撃する。

一夏に直撃し白式のシールドエネルギーが尽きる。

「ぐっ……！」

「「一夏……」

「……人の心配をする余裕があるなら、まず自分のことを考えたほうがいいぞ」

「なに！？」

「え!?!」

奴は篠ノ之とデュノアが一夏に気を取られた隙を狙い、さっきの一夏と同じように大量の小型ビームを浴びせる。二人は吹き飛び機体のシールドエネルギーが0になった。

「……これではお前だけだ。織斑千冬」

「……織斑が「零落白夜」を使うと予想していたのか」

「……機体の性能差がある以上、一番攻撃力のある「零落白夜」で来るのは読めていた」

くっ……ここまで強いとは……もう打つ手がない。私達の負けか……

「……織斑千冬、その強さ……放って置けば後々厄介なことになるな。ここで死んでもらう」

「悪いがまだ死ぬわけにはいかん!」

私と奴はまたお互いのブレードで斬りあうが……徐々に押されしまふ。どうする……!?!?

「……戦っている最中に考えごととはな。元世界最強も落ちたものだ」

「……しまっ……」

私のブレードが奴に蹴られ手から離れてしまい、無防備な状態になつてしまう。ここまでか・・・！すまん・・・一夏。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・？」

奴のブレードはいつまで経っても私を襲わなかった。ふと「黒騎士」を見ると・・・誰かと通信しているのか・・・？そして・・・

「・・・・・・・・ちっ、わかった」

奴はいきなりアリーナから撤退し、外に逃げた。なんだ？何が起きた？とりあえずしばらく奴が来るかどうかを警戒したが・・・奴はいつまで経つてもこちらに来ることはなかった。

（何故撤退した・・・？私を確実に仕留めることができたはずなのに何故？）

私はとりあえず山田先生との通信をする。

「山田先生、奴は？」

『もうすでに学園から離れています。・・・どうしますか？』

「まず、織斑と篠ノ之とデュノアの手当ての用意を、奴への追撃は絶対にするなど伝えてくれ」

『わかりました。では準備を済ませます』

山田先生が通信を切ると私は気絶している一夏達を運んだ。・・・  
何を考えている「黒騎士」。

??? Side

俺は今IS学園から離れ、篠ノ之束の秘密ラボの場所に戻ろうとしている。・・・もう少しで織斑千冬を仕留めることができたのだが・・・

「・・・どういっつもりだ。篠ノ之束」

『どういっつもりも何も黒くんが言った「お前の頼みを一つ聞いてやる」ってのを実行しただけだよ？なにか文句でもあるのかい？』

「・・・文句しかないな」

篠ノ之束に邪魔をされた。後少しだったというのに・・・

『ふん。でも束さんは今ちーちゃんが死んでしまっつてのは嫌なんだよね。だから君を撤退させたんだよ。恨むのなら自分の言ったことを恨むんだね』

「・・・ちっ」

あの時余計なことを言わなければ良かったか。そのせいで織斑千冬を仕留め損なった・・・戻ったら篠ノ之束でストレス発散をすると

しよづ。

『でも、新しい武器「フェンリル」を観れたけど・・・すごいね、両手両足にビームブレードを展開する上に他の武器を強化できるなんて、かなり強いねその武器』

「・・・うるさい。切るぞ」

『えっ、ちよつと黒いー』

俺は邪魔をされたことで腹をたて、通信を切った。・・・次はこうはいかんぞ。織斑一夏、織斑千冬。

俺は全速力で篠ノ之束の秘密ラボの場所に向かった。

??? Side end

## 第十二話（後書き）

意見やアドバイスを、感想などどんどん送ってください！後、間違いや誤字もあればお願いします。



## 第十三話（前書き）

できました。では投稿します。

## 第十三話

東Side

「むく黒くん。通信を勝手に切るなんて酷いな。まあ、怒ってるからだろうけど・・・多分後で憂さ晴らしされそうな気がするね・・・どうしよう」

私はガタガタと震えながら言う。最近の黒くんは怖いからねえ。なにか手を打たないと・・・

「ま、それは今置いといて・・・まさかちーちゃんより強いとは思わなかったね」「ラグナロク」と「打鉄」じゃ性能差ははつきりしているけど、それを踏まえても黒くんはとんでもなく強いってことになるからねえ」

まだ三つしか武器を使っていない。なのに彼は四対一でありながら互角以上の戦いをしていた。いつくんを強くするために彼を利用しているのだが、このままでは間違いなくいつくんは殺される。

「・・・「紅椿」はもう完成しているけど・・・あれがあつた所で黒くんに勝つのは無理があるねえ」

何せ「ラグナロク」の性能は第四世代型機体「紅椿」を遥かに超えている。武器に至っては圧倒的な差があるのだ。まだ全部使えないとはいえ、今使っている三つだけでも充分「紅椿」に勝てるだろう。おまけに未だに使用していない能力まであるのだ。

「うん。それにしても「ラグナロク」を開発した人って一体誰な

んだろ？世界中のデータを見たけど・・・「ラグナロク」なんて機体は存在していないからまったくわからないし・・・」

開発者を探すために「ラグナロク」のデータを世界中で検索したがまったく無かった。つまり・・・あの機体は「あるはずのない機体」ということになる。なのに今この世界に間違いなく存在している。

（・・・一つだけ可能性があるんだよね〜前に黒くんは確か開発者について、「今この世界に存在するはずがない」って言っていた。・・・もしそうだとすれば「ラグナロク」は・・・）

そこまで考え一旦思考を停止させる。我ながら馬鹿げたことだと思ふ。だが・・・その考えを捨てることはできなかった。もしそうだとすれば辻褃が合うからだ。しかし・・・「そんなこと」が可能なのだろうか？

「・・・黒くんの目的の意味がわかるまで結論を出すのは不可能だね〜」

黒くんはいつくんを殺すのが目的だ。しかし・・・いつくんを殺すことにどういう意味があるのかまったくわからない。単純にいつくんが憎いから殺すのか、それとも意味があるから殺すのか、あるいはその両方が、いずれの内のどれかが黒くんの目的ということになる。

「ま、そうだとしても東さんは全力でそれを阻止するけどね〜とりあえず今は黒くんの暴力を阻止しないと・・・東さんに明日はないね〜」

黒くんの邪魔をしてしまった以上、只で済むとはとても思えない。

・・・どんな目に逢うか想像したくもなかった。

「・・・入り口にトラップ仕掛けとこつと、どんなやつなら黒くんの動きを止めれるかな？」

前に仕掛けようとしてた十万ボルトの電流でも流すか・・・それとも大量の催涙ガスでも浴びせるか・・・それがマイナス百度以上の冷気をぶつけるか・・・いつそのこと全部同時にやったほうが良いかもしれない。彼が戻ってくる前に私は黒くん対策用のトラップを仕掛ける準備をした。・・・少し怯えながら。

ラウラSide

「う、うう・・・」

私はぼやっとした光が瞼に当たったのを感じ、目を覚ました。ここは・・・保健室か・・・？

「気がついたか」

この声は・・・私が尊敬しているあの人・・・教官の声だった。教官のほうを向くと・・・少しボロボロになっていた。なぜ・・・？

「私は・・・？」

「全身に無理な負荷がかかったせいで筋肉疲労と打撲がある。しば

らくはまともに動くことはできんぞ」

「何が・・・起こったのですか・・・？」

教官がなにかを隠しているのはすぐにわかった、でも・・・聞きたかった。デュノアの攻撃を受けた後に何があったのかを。

「・・・はあ、仕方ないか。重要案件の上に機密事項なのだが・・・VTシステムは知っているな？」

「はい・・・。確か正式名称はヴァルキリー・トレース・システム・・・過去のモンド・グロツソの部門受賞者の動きをトレースするシステムで、あれは・・・」

「ああ、IS条約で現在全ての国家・組織・企業においても研究・開発・使用が禁止されている。それがお前のISに組み込まれていた」

「・・・」

「巧妙に隠されていたがな。操縦者の精神状態と機体の蓄積ダメージ・・・そして操縦者の意志・・・いや、願望か。それらの条件が揃うと発動するようになっていたようだ。現在学園がドイツ軍に問い合わせている。近く、委員会からの強制捜査が入るだろう」

・・・操縦者の意志と・・・願望・・・私の願い・・・

「私が・・・望んだからですね・・・」

あなたになりたいと・・・教官そのものになりたいと・・・

「ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

「は、はい！」

いきなり教官に名前を呼ばれた。なんだろう？

「お前は誰だ？」

「わ、私は……。私……は、……」

その続きを言うことができなかつた……。私が「ラウラ・ボーデヴィツヒ」だと、どうしても言えなかつた。

「誰でもないとのなら、丁度いい。お前はこれからラウラ・ボーデヴィツヒになればいい。時間はたっぷりある。何せ三年間はこの学園に在籍しなければならぬからな。その後も死ぬまで時間はある。たっぷり悩め小娘」

「あ……」

教官の言ったことに私は驚いた。まさか、自分を励ましてくれるとは思ってもしなかつた。しばらくは何も言えないままだった。だが……一つ気になっていることを聞いた。

「教官……」

「ん？なんだ」

「何故……少しボロボロになっているのですか？」

「……………」

今度は教官が黙ってしまふ。どうしたのだろうか……？

「……「黒騎士」のことを知っているか？」

その名前には聞き覚えがあった。確か前にIS学園に襲撃したという謎の機体だ。まさか……？

「またIS学園に襲撃したのですか……？」

「今回は別の目的があったようだな。奴を捕まえるために戦ったが……後少しでやられる所だった」

「な……!？」

教官が負けそうになったというのか？信じられなかった。「黒騎士」は元世界最強の織斑千冬よりも強いというのか？

「幸い奴はなぜか撤退したがな」

撤退？教官をそこまで追い詰めた奴が引いた？……何が何だか……さっぱりだった。

「さて……そろそろ私は仕事に戻るとしよう。言うことは言ったからな。ああ、それから」

教官が席を立ちドアに触れたところでこっちを向くことなく言った。

「お前は私になれないぞ。あいつの姉はこう見えて心労が絶えないからな」

教官がニヤリと笑って言った。なぜかそれがわかった。そして教官が部屋を去ると急に可笑しくなった。

「ふ、ふふ・・・あはは」

なんてずるい姉弟だろう。ふたり共言いたいことだけを言って後は逃げるなんて。あそこまで言って結局自分で考えるんだから、ずるいことこの上ない。でも・・・

(自分で考えて、自分で行動しろ、か・・・)

笑うたびに全身が痛むがそれすらどこか嬉しいと感じた。完全なる敗北。けれどそれが今はたまらなく心地よかった。これから「私」が「ラウラ・ボーデヴィツヒ」がはじまるのだから。

## 一夏Side

『トーナメントは事故により中止となりました。ただし、今後の個人データ指標と関係するため、全ての一回戦は行います。場所と日時の変更は各自個人端末で確認の上ー』

俺は目が覚めた後、教師陣から事情聴取を受け、海鮮塩ラーメンを食べながら今後の予定についてテレビを見ていた。



「ふむ、シャルルの予想通りだな」

「だろうね。ボーデヴィツヒさんの件に「黒騎士」まできたからね」

「黒騎士」……。後で千冬姉に聞いたところ奴は突然撤退したらしい、そのおかげで千冬姉は助かったそうだ。・・・千冬姉が無事でよかった。とりあえず食事を済ませますか。

「ふー、ごちそうさま。この学園料理がうまくて幸せだ。・・・ん？」

なんだろう？ さっきから俺達の食事が終わるのを待っていた女子達がひどく落ち込んでいる。

「・・・優勝・・・チャンス・・・消え・・・」

「交際・・・無効・・・」

「・・・うわあああんっ！」

数十人の女子達がバタバタっと泣きながら走り去っていった。な、なんなんだろう？

「どうしたんだろうね？」

「さあ・・・？」

考えてみるがさっぱりだ。女子というのは摩訶不思議な生き物だということがわかったぐらいだ。あ、筈がまだ残ってる。脱け殻みた

いになつてるけど、ひとまず話しかけるとするか。

「……箒。先月の約束のことだけど……」

俺が約束のことを話すと箒がぴくつと反応した。……死んではないようだな。

「付き合ってもいいぞ」

「……な、なに？ほ、本当か？本当に、本当にいいのか!？」

俺が付き合っていていいというと箒が凄まじい早さで反応し、俺を締め上げる。……く、苦しい。

「お、おう」

「な、なぜだ？り、理由を聞こうか……」

箒はようやく手を離してくれた。……苦しかった。箒のほうを向くと腕組みしながら咳払いをした。頬が少し赤くなってるけど……まあ、いいか。

「そりゃ幼なじみの頼みだしな。付き合つさ、買物くらい」

びきいっ！と箒の表情がこわばる。あれ？そういう約束じゃなかったの？あと……滅茶苦茶怖いんですけど……

「そんなことだろうと思ったわ!」

どげしっ!…と俺の腹に腰のひねりを加えた正拳を喰らわせ、更に

どごおっ！と俺のみぞおちにつま先がささる。

「ふん！」

「ぐ、ぐお・・・」

筈は俺を攻撃した後、ずかずかと去っていたようだ。め、滅茶苦茶いてえ。しばらく動きたくない・・・。

「一夏って、わざとやってるんじゃないかって思うときがあるよね」

「な、なに？どういう意味だよ、それ」

「さあね」

シャルルがぶいっと視線を逸らす。なんなんだよ、一体・・・。それから痛みが少し和らいでからシャルルにあることを聞く。

「なあ、シャルル。ISで会話ってできるか？プライベート・チャネルとは違う、なんつーかふたりだけの空間みたいなところでの会話なんだけど」

「うーん・・・どこかで聞いたことがあるような・・・。確かIS同士の情報交換ネットワークの影響だって言われるけど、操縦者同士の波長が合うと特殊な相互意識干渉が起こるっていうあれかな」

「たぶんそれだと思うけど・・・。しかし、波長か。なんかよくわからねえな」

「IS自体にまだわかっていないことが多いからね。作った篠ノ之博士も自己進化するように設定したって言ってたから、本人も全部を把握するのは無理って言ってた気がする」

「・・・東さんらしいな」

あの人、自分の興味か向かないことはどうでもいいからな・・・。調べればわかるだろうに。ん？なんか・・・シャルルの目が少し睨んでいるような感じがする。

「ねえ一夏。ふたりだけの空間で会話って、もしかしてボーデヴィツヒさんと？」

「あ、ああ・・・そうだが」

「ふーん」

なんだ？急にシャルルが不機嫌になったようだけど、なんで？

「ここにいましたか織斑君にデュノア君。さっきはお疲れ様でした」

「山田先生こそ。ずっと手記をしてて疲れてませんか？」

「いえいえ、私はああいう地味な活動が得意ですから。問題ありませんよ。何せ先生ですから」

えへん、山田先生が胸を張ると・・・大きな膨らみが揺れる。俺は思わず顔を背けた。

「一夏のスケベ」

ぼそつと言ったが俺ははつきりとそう聞こえた。

「な、なに言ってるんだシャルル！誤解だ！」

「どうーだか」

なんでこんなに不機嫌なんだ？俺何かしたか？

「どうかしました？織斑君？」

「い、いえ。特になにも」

「そうですね。それよりも朗報です！なんと、ついに今日から男子の大浴場が使用出来ます！」

「えー！？本当ですか！？俺ははつきり来月からになると思ってましたけど」

「それが今日大浴場の点検があつて、生徒達が使えなかったんですけど、点検がもう終わったので男子のふたりに使ってもらおうって計らいなんですよ」

ラッキー！最近トラブルばっかだったからな……。先月といい、今回といい……。そういえば両方共「黒騎士」が現れたよ……。そして両方共あいつと戦ったけど……。今回まったくかなわなかったな……。もっと強くならなきゃだめだ。あんな悔しい思いをしないためにも仲間を守るためにも……。でも、俺にできるのか？「黒騎士」を倒すなんてことが。

「織斑君？」

「一夏？」

山田先生とシャルルに話しかけてハツとした。

「す、すみません。ボーっとしてて」

「……もしかして一夏。「黒騎士」のことを考えてたの？」

「「黒騎士」ですか……。あの機体について世界中が調べていますが……。まったく情報がないんです」

「まったくくつて……。何処で造られたとか、開発者が誰かとかもわかっていないんですか？」

世界中が調べて一切情報が無い機体なんてあるのか？

「わかっていることは武器の種類と名前と能力に目的だけなんです。機体の名前も操縦者についてもまったく不明ですし……」

「謎の機体に謎の操縦者……。判明しているのは武器と能力と目的だけ……か」

奴の目的は俺を殺すこと……。でもその理由も不明。一体あいつは何者なんだ？

「「黒騎士」のことはいざれ何かかわかると思います。今はふたり共お風呂場で体を休めてください」

「・・・そうですね。じゃあ早速ーあ

まずい・・・。今山田先生は「ふたり共」と言った。俺とシャルルのことだろうな。シャルルは本当は女子だ。けど、それを知っているのは今の所俺だけ・・・一緒に入るのはまずいし、かといって別々に入るのも周りからひんしゆくを買うだけだ。

「え、えーと」

「どうしたんですか？ふたり共早く着替えを持ってきてください。私はお風呂の鍵を持って脱衣場の前で待ってますね。じゃあ」

本当にどうしよう・・・。

「・・・シャルル」

「う、うん。このままじゃ・・・まずいけど、と、とりあえず着替えを取りに行こっか」

「そうだな・・・。何か名案が思いつくことを祈ろう・・・」

ちなみにその後、結局いい案は思いつかずシャルルと一緒に入ることになりました・・・。はあ。

???Side

「・・・さて、「的」に向かつて「シヴァ」を撃つとするか」

秘密ラボに戻った俺は訓練をすることにし、「的」に「シヴァ」の照準を合わせ、チャージを開始する。俺が撃とうすると・・・

「待つて待つて！黒くんやめて！ほんとに束さん塵一つ残さずこの世から消えちゃうよ!？」

「・・・」的「は黙って撃たれてる」

「酷いよ！束さんは的じゃないよ！というか人を的扱いしないでよ！」

「・・・人を罠に嵌めようする奴は的で充分だろ。後一瞬遅かったら俺は間違いなく死んでいたぞ」

俺が部屋に入った直後、十万ボルトの電流に大量の催涙ガス、マイナス百度以上の冷気が襲ってきた上に一千度を超える火炎放射機と二十のマシガンに十のロケットランチャーが俺を攻撃した。・・・「ラグナロク」を展開するのが後少しでも遅ければ間違いなく即死していた。

「・・・俺を殺そうとしたんだ。俺がお前を殺そうとしてもまったく問題ないよな？」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい。・・・ああしなかったら黒くんは何されるかわかんないし・・・」

「・・・ほづ。何されると思っていた？」



こいつが俺のことをどう思っているか・・・少し気になるな。

「・・・人をすぐにからかう上にビームライフルで人を殺そうとしてる悪魔？」

「・・・」「Rシステム」発動」

「ストップストップ！黒くん「Rシステム」まで使ってどうするつもりかな！？」

そんなの一つしかないだろう。

「・・・」「フェンリル」」

「く、黒くん！「フェンリル」って・・・」「シヴァ」をどれだけ強化するつもりだい！？」

「・・・さて、そろそろお前をこの世から完全に消し去ってやる。遺言はあるか？」

「東さんが死んじゃうのはもう確定なのかな！？」

当たり前だ。だが・・・選択肢はあってもいいだろう。

「・・・ふう、わかった。選択肢をやる。次の三つを選べ、まず、「レーヴァテイン」で高熱を発生した状態で切り裂かれるか、それとも「シヴァ」のフルパワーを浴びるか、それが「フェンリル」で切り刻まれるか。どれか選ぶといい」

「それって全部死んじゃうよね！？選択肢ないよね！？」

あるぞ？結果は全部同じだが。

「……ではいつそのこと全部行なうか」

「一番酷いよ！というかそろそろ許して！幾らでも土下座するから！」

「……流石にやり過ぎか、まあ反省しているようだし……勘弁してやるか。」

「……次からはあんな罫を仕掛けるなよ」

「……ウーン、ワカタタヨ。モウニドトシナイネ」

「……こいつ。」

「……前言撤回。やはり殺す」

「タンマタンマ！もう二度としないって言ったよ！？なんで殺そうとするかな！？」

「……自分が一番よくわかってるだろう」

間違いなくこれからもやるつもりだ。でなければカタコトになるはずないからな。

「ま、まあまあ。落ち着こうよ黒くん。元はといえば君が私をからかったことが原因なんだからさ」

「……確かにそうだな」

こいつをからかうのは結構楽しいからな……。

「でしょ？というわけで今回のことを水に流して欲しいんだけど……」

「……わかった。ただし、また今回みたいなことをすればその時は……わかるよな？」

「はーい。束さんもあれはやり過ぎかなって、ちょっと思ってたし」

ちよつとかよ。やれやれ、篠ノ之束らしいと言えるがな。それにしても……今日は疲れたな。

「……篠ノ之束。俺はそろそろ寝る。明日もISS学園に行くが、いいか？」

「……襲撃しないのならいいよ」

「……襲撃はしない。早朝に少しだけ……向こつの様子を見るだけだ」

馬鹿なことを考えるものだな。俺も……やはり人ということか。

「んー。じゃあいよいよ戦いそうになってもすぐに徹底してね」

「……了……解」

篠ノ之束に返事をした後、「ラグナロク」を仕舞い俺はすぐに適当な場所で寝た。

一夏Side

翌日……。朝のホームルームになったがシャルロット（シャルルの本当の名前で二人きりのときはそう呼んで欲しいと言っていた）の姿はなかった。

「先に行つてて」と言うので食堂で別れた……。どうしたんだろう？後ラウラもないけど、たぶん昨日のこの事情聴取を受けているんだろうな。

「み、みなさん、おはようございます……。今日は、その……。みなさんに転校生を紹介します……。転校生といいますが、すでに紹介しているといいますが、ええと……」

はい？転校生？クラスの皆も気になっている。今月すでにふたりも転校生がまた来るのか？どうなってるんだ？

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

え？この声……。まさか？

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしく願います」

入ってきたのはスカート姿のシャルロットだった。なるほど・・・山田先生の憂いの理由がわかった。・・・待てよ？

「え？デュノア君って女・・・？」

「美少年じゃなくて美少女だったわけね。納得」

「あれ？織斑君、同じ部屋なんだから知らないってことはー」

「ちよつと待って！昨日確か男子が大浴場を使ったよね！？」

「やばい！教室中が一斉に騒ぎ始めた！バシーン！と教室のドアが開き・・・」

「ー夏あつー！！」

いきなり鈴が現れた。背後には龍が見える。・・・完全に怒ってるな。

「死ね！！」

鈴がISを展開すると同時に衝撃砲をフルパワーで俺に向けて放とうとしている。死んだ俺・・・明日の朝刊一面は決まった。『哀れ高校一年生男子、同学年女子に殺害される。死体は原型をとどめておらず、クラスメイトは口々に悲しいの声を漏らす』

「ミンチでした」「地面に落ちた柿でした」「・・・」「シヴァ」を  
身体に打ち込んで内部から撃つか」

あれ？今なんか「黒騎士」が言ってたような気がー

ズドドドオンッ！

「ふーっ！ふーっ！ふーっ！」

鈴が怒りのあまり肩で息をしてるって・・・俺生きてる！？

「・・・」

俺を助けたのは・・・ラウラだった。「シユヴァルツエア・レーゲ  
ン」を纏っている。AICで衝撃砲を相殺したんだろう。よく見る  
とレールカノンがなかった。

「助かったぜ、ありがとなラウラ。・・・っていかお前の機体も  
う直ったのか？」

「・・・コアは無事だったからな。予備のパーツで組み直した」

「へー。そうなんーむぐっ！？」

いきなり俺ラウラにキスされた。えーとなんで！？何が起こった！？

「お、お前を私の嫁にする！決定事項だ！異論は認めん！」

「・・・嫁？婿じゃなくて？」

「日本では気に入った相手を「嫁にする」というのが一般的な習わしだと聞いた。故に、お前を私の嫁にする」

人って混乱しすぎると逆に冷静になるんだな。後ラウラにデタラメなことを言った奴出てこい。説教してやる。

「あ、あつ、あ・・・！アンタねええつ！！」

げっ！鈴がまた衝撃砲を撃とうとしてる！

「待て！俺は悪くない！どちらかというと被害者だ！」

「アンタが悪いに決まってるでしょうが！全部！絶対！アンタが悪い！！」

駄目だ！もう説得できる状況じゃない！こうなったら教室から逃げ  
ー！ー！

ビジュンツーーー！

教室の後ろ側出口から逃げようと俺の鼻先にレーザーがかすめる。  
ま、まさか・・・

「ああら、一夏さん？どこかにお出かけですか？わたくし、どうしてもお話ししなくてはならないことがあります・・・」

セシリアが俺に向けて「スターライトmk？」を発射した。そして機体を纏った。本当にまずい！こうなったら窓から逃げるしかない！最悪白式を展開すればなんとかー！

ダンッ！

はい？なんで俺いきなり日本刀を突き立てられるんだ？

「……一夏、どづいづことか説明してもらっぞ」

「待て待て！説明して欲しいのは俺の方——うわあっ!？」

問答無用！と言わんばかりに日本刀を俺に振るう。やめる馬鹿！マジで死ぬぞ！ど、どうする!?!このままじゃ本当に死ぬ！適当に逃げるとシャルロットにぶつかった。

「にっ」

「に、にっ」

ああ、今俺の目の前に天使がいた。まさしく地獄で仏だな。助かった……

「一夏つて他の女の子の前でキスしちゃうんだね。驚いたな、僕」

「あの……シャルロットさん？俺はしたんじゃなくてされたんですけど……後、なんでISを起動させているんでしょうか？」

「なんでだろうね？」

パンツ！盾の装甲が弾け「灰色の鱗殻」通称「盾殺し」が現れる。

「は、はは、ははは……」



人は極限を超えると笑うしかできなくなるって誰かが言ってけど・・・成る程これがそうか・・・！

ドガアアアッ！！

その日のホームルームは轟音と爆音に衝撃でクラスが揺れた。

????Side

俺は今「ラグナロク」をステルスモードの状態で纏って、織斑一夏達の教室の中を見ていたが・・・

「・・・大丈夫かあいつ？」

織斑一夏が仲間達？に殺されかけている。・・・俺が殺す前に彼女達に殺されそうな気がするんだが・・・流石の俺でも奴が可哀想と思ってしまう。

「・・・多分無事だと思うが・・・」

俺が殺すのだから、ここで死んでしまうのは困る。

「・・・そろそろ戻るか」

俺は織斑一夏達のどたばた騒ぎを見てこう思ってしまう。・・・羨ましいと、俺にはもう手に入れることができない日常・・・全てを

失った俺には眩しすぎる光景だ。

「……………」

俺は静かにIS学園を去った。

??? Side end

## 第十三話（後書き）

意見やアドバイスを、感想などどんどん送ってください！後、間違いや誤字もあればお願いします。

## 第十四話（前書き）

投稿します。これで原作の二巻が終わります。ではどうぞ。

## 第十四話

東Side

「ふああゝまだ帰って来ないのかなゝ黒くん。東さんは退屈でしようがないよゝ」

早朝のIS学園に少し様子を見るだけと言っていたから、そろそろのはず……。そう考えていると黒くんが帰ってきた。

「……今戻った。どうやら今回は罠を仕掛けていないようだな」

「ふっふっふゝ黒くん。東さんは昨日の一件で少しは学習したんだよ？やるなら安全なトラップを仕掛けたほうがいいからね」

「……罠に「安全」があるのか？というよりもお前まだ俺を嵌めようとしているのか」

あ、気づかれちゃったよ。やっぱり黒くんって鋭いなゝ。

「だってゝ、黒くんにからかわれたままって気にくわないもゝん。何時かは一矢報いらないとね」

「……はあ、まあいい。だが昨日みたいなことはもうするなよ。下手をすると俺が死ぬ」

うゝん。むしろそうしたらいつくんは助かるんだけどねゝ。……殺っちゃおっかなゝふふふ。

「……来い「シヴァ」」

私がそう考えたらいきなり黒くんが「シヴァ」を展開した。ち、ちよつと！

「ま、待って黒くん！なんでいきなり「シヴァ」を出すのかな!？」

「……お前、今俺を殺そうと考えてたよな？だから殺られる前に殺る。それだけだ」

「あ、あはは。黒くん私がそんなことすると思っ?」

「ああ」

即答!？まあ……昨日あんなことすれば当然だよ。それより……黒くんを説得しないと東さんが死んじゃうよ！

「お、落ち着いてよ黒くん。今ここで私を殺すのはまずいでしょ?」

「……ちっ、わかった。ならば四肢の一つを吹き飛ばすだけならいいだろう?」

「うん。それなら……いいわけないでしょ！東さんの身体の一部が消えちゃうじゃないか！」

あ、相変わらず黒くんは恐ろしいことを考えるね……。まったく……人として恥ずかしいと思わないのかい!？

(……人のことを言える立場か)

あれ？また黒くんが何か言ったような気がしてたけど・・・気のせいかな？まあどうでもいいや。それよりもまた「ラグナロク」を調べよっと。

「黒くん。「ラグナロク」を貸して調べたいから」

「・・・お前なあ、はあ・・・好きなだけ調べろ」

「シヴァ」を仕舞った黒くんが呆れながら「ラグナロク」を渡した。なんで呆れてるのかな？

「・・・俺は少し寝る。食事の時間になったら起こせ」

「はい。ゆっくり休んでね」

「・・・それと謎のプログラムについて何か解いたらすぐに俺に言え、いいな」

「・・・はい」

言わなかったら容赦なく束さんを攻撃するだろうね・・・黒くんだし。

「・・・じゃあ寝るとするか・・・」

そのまま黒くんはすぐに寝た。寝るの早いな。

「んじゃ、調べますか」

私はいつものように「ラグナロク」を調べ始めた。

「うん。相変わらず凄い性能だね。第四世代を遥かに超えているし・・・反則以外のなんでもないよねこれ。にしても・・・」

私は一つあることが気になっていた。それは・・・。

「なんでコアのナンバーが見れないようになってるんだろ？」

そう、「ラグナロク」のコアのナンバーがわからないのだ。なぜか閲覧出来ないように嚴重なロックが掛けられている。

「・・・新しく造られたコアだから分からないようにしてるのかな・・・？」

一瞬そう考えたが・・・それはあり得ない。ISのコアは私以外に造ることは絶対に不可能だ。となると・・・何故？

「・・・うん。ほんと謎だらけだね。この機体・・・おまけにこれ・・・「展開装甲」まであるし」

実はこの機体私が完成させた新しい技術である「展開装甲」が組み込んであるのだ。しかも「全身装甲」の状態。

「・・・「全身装甲」の機体で「展開装甲」って・・・私でも無理があるのにとっちゃって・・・？」



考えみたが・・・やはりあの可能性しかない。そして・・・もしそうだとすれば「ラグナロク」に勝てる機体があるはずがない。

「はあ、でもそうだとっても一体誰がこれを作ったのかな？」

開発者がわかれば黒くんの目的が少しわかるはずだが・・・まったくわからなかった。

「うーん。まあ今は少しでも調べー」

ぱらりろぱらりろへるへる

私が解析を続けようといきなり携帯からゴッド・ファーマーの曲が流れた。こ、この着信音はまさか・・・！？

「トウッ！」

私は「ラグナロク」の解析を一旦止め、携帯電話に向かって跳んだ。（ほんとはダイブだけど）何か割れたような音がするが気にせず携帯電話を取り耳に当てる。

「も、もすもす？終日？」

『・・・・・・・・』

ぶつつ。いきなり切れた。って！

「わー！待って待ってー！」

私の願いが天に届いたかどうかしらないが、携帯電話が再度鳴った。

・・・良かった。

「はーい、みんなのアイドル篠ノ之東ここー！待って待ってえ！切らないでえ！ちーちゃん！」

『その呼び方はやめろ束。・・・それより今日はお前に聞きたいことがある』

それを聞くと一瞬私は黙ってしまふ。まさか黒くんのことじゃないよね・・・？できるだけ平静を装おつて・・・と。

「何かな〜？」

『お前今回の件に一枚噛んでいるのか？』

ま、まさか黒くんのことかばれた！？い、いや、黒くんも細心の注意をはらっているはず、となると・・・？

「う〜ん。何のことかさっぱりだね〜」

『VTシステムだ』

私はほつとした。黒くんのことじゃなくて良かった・・・。

「ああ、あれ？うふふ、ちーちゃん私があんな不細工な代物を作ると思うかい？私は完璧にして十全な篠ノ之東だよ？つまり、作るものは完璧において十全でなければならぬ。ていうか忘れてたけど、五時間くらい前にあれを作った研究所はもうこの世から消えてもらったよ。勿論死亡者はゼロだから安心してね」

『そうか。それと・・・』黒騎士「について何か知らないか?」

・・・誤魔化すしか無いね。まさか一緒に居ますなんて言ったらどうなるやら・・・。

「黒騎士」・・・IS学園を襲撃したっていう機体のこと?」

『そうだ。お前なら何か知っているんじゃないか?』

知っているどころじゃないけどね。でも嘘を言うしかないね・・・。

「まったく知らないね。少し気になったからあの機体のことを調べたけど・・・情報が一切無いからどうしようもないね」

『そうか・・・。お前なら何か知っていると思ったが、すまん』

・・・ちーちゃんを誤魔化すならともかく、嘘をつくのは罪悪感があるね・・・。

『何かわかったら言ってくれ。じゃあな』

ぶつと電話が切れる。もうちょっと話したかったな。名残惜しいけど・・・ま、いいや。私は携帯電話を放り投げる。

「・・・さっきから五月蠅いな。なんだ?」

「あ、起きちゃった?黒くん」

さっきからのやり取りのせいで黒くんが目を覚ましてしまった。悪

いことしちゃったな。

「さつきちーちゃんから電話がかかってきたんだよ。久しぶりに話せて東さんは嬉しかったよ。」

「……ちーちゃん。織斑千冬か……。まさかとは思いが」

「も、勿論黒くんのことは言っていないよ！だからその殺気を引っ込めて！」

「……今言えばお前もまずいことになるからな……。信じてやる」

ふう。信じてもらえて良かった。じゃあ「ラグナロク」の解析を続けますか。

ちやらら。ちやらら。あんたら全員、覚悟しいや。バキューンバキューン！ぐあああつ！ああつ、兄貴つ兄貴い！おったらあ、タマあとつたらんかあ！

「……凄いや着信音だな。趣味がいいとはとても思えない」

私はまた「ラグナロク」の解析を中止し携帯電話を取る。黒くんがなにか言っていたが無視する。この電話が鳴るのは初めてだ。相手は誰なのか出る前からわかっている。

「やあやあやあ！久しぶりだねえ！ずっとずーっとな待ってたよ！」

『……姉さん』

「うんうん。何を言いたいのかはわかっているよ。欲しいんだよね？君だけのオンリーワン、代用無きもの、篠ノ之箒の専用機が。勿論用意してあるよ。最高性能にして規格外仕様。そして白と並び立ち黒を倒すもの。その機体の名は」

私はまた嘘をつく。そして黒くんがいるにも関わらず彼を倒すための力の名を言う。

「「紅椿」——」

束Side end

## 第十四話（後書き）

意見やアドバイスを、感想などどんどん送ってください！後、間違いや誤字もあればお願いします。

## 第十五話（前書き）

投稿します。束が可哀想な話です。ちょっとやり過ぎたかな。楽しんでくれます。楽しんでくれます。

## 第十五話

???? Side

篠ノ之束に織斑千冬と篠ノ之箒の電話がかかってきて数日後、俺が目を覚まし部屋を見回すと……。

「……………寝るか」

……今見たものを忘れ、また寝ることにしよう。……決して現実逃避したわけではないぞ。

「ん？起きたかい黒くん……ってなんでまた寝ようとしているんだい？」

「……………あんなものを見れば大抵のやつはこうすると思うが……俺が見たものは……巨大なにんじんだった。……機械でできてるようだが……何やっているんだこいつ？」

「……………何を作っているんだ」

「わからないのかい黒くん？」

わかってたまるか。……と言いたいのが何なのかは予想できる。「知っている」からな。

「……………移動用のポッドか。だが何故形がにんじんなんだ？」



「ん？前にロケットで移動してたら撃墜されそうになったからね。だからにんじんの形をしたポッドにしたんだよ」

「……これで移動しても撃墜されそうな気がするんだが……」

上空で巨大なにんじんが猛スピードで移動してたら誰でも怪しいと思っ、攻撃するだろう。それに気づかないのかこいつ？

「大丈夫だよ。にんじんだったら怪しまれずにすむから」

……気づいていないようだ。まあいいか、多分大丈夫だろうし。

「……それよりこんなものを作っているということは……臨海学校に行くつもりか」

「当たたり。篝ちゃんにあれを渡さないといけないからね」

「……「紅椿」か。俺を倒すために……か？」

「あはは。やっぱりばれてたか」

「……お前がこの前篠ノ之箒にそう言ったんだろっが」

白と共に黒を倒す紅……か。まあできるとは思えんがな。

「まあね。でも今の彼等じゃあ君を倒すのは無理だろうね」

「……だから俺と戦わせることで奴等を強くしようとした。違うか？」

「流石黒くん。全部わかってるね。で・・・私の邪魔をするつもりかい？」

「・・・するつもりはない。どうせ無駄になるだけだ」

その程度の小細工で俺と「ラグナロク」を倒せるわけが無いからな。

「凄い自信だね。まあ、もうすぐ新しい装備が使えるようになってたからかな？」

「・・・まあな」

篠ノ之束が二日前に「ラグナロク」を調べるともうすぐ新しい装備が使用可能になっていた。しかも・・・。

「・・・今度はあの装備だからな。くくっ」

「ラグナロク」の装備の中でもかなり強力なやつの一つだった。しかし・・・。

「・・・篠ノ之束。何故今回だけ事前にどういう装備か判明したのだが・・・理由について何かわかったか？」

そう何故か今回の装備はどういうものかわかっている上、以前「フエンリル」が使用可能になってから時間がそう経っていないはずなのにもう使えそうになっていた。

「うん。わかってないね。多分開発者がそういう風にしたとは思えないね」

「・・・はあ、あの人本当に色々と厄介な仕掛けしているな・・・」  
「ふふふ〜君も大変だね〜。にしても・・・次の装備ってどれだけ強力なやつなんだい？」

「・・・さあな」

俺は篠ノ之束の質問を適当に返す。あれは強力だが・・・使いすぎると少し危ない。

「む〜。教えてくれたっていいじゃん〜」

「・・・今度の戦いで見ればいいだろう」

わざわざこいつに言う必要はないからな。

「ちえ、つまんないな〜。まあどうせまたいっくん達と戦うだろうからいいか」

「・・・妹のために無関係なやつを無理矢理使う・・・か。お前も随分狂っているな」

「ふう〜、黒くんと一緒にしないでよ。いっくんを殺す理由を言わない君に言われたくないね〜」

ふん、お前も俺に似たようなものだろう。

「・・・そろそろ食事にするか。飯は？」

「あ、これ作るのに夢中で忘れていたよ〜。すぐに用意するね」

「……やれやれ、さっさと作れ」

「え、黒くんも手伝ってよ」

「……断る。お前がそれを夢中で作っていたからだろう」

わざわざこいつのために料理を作るのもなんか嫌だからな。

「黒くんの鬼」。 (そっちがそってくるなら黒くんの料理になんか仕込んでやる!) 「

……どうやら少し思い知らせたほうがいいな。

「……「フェンリル」展開」

「あ、あはは、黒くんなんで「フェンリル」を出したのかな？」

「……お前が一番よくわかっているだろう？」

「な、何の事かな？ 束さんはなににも企んでいないよ？」

自分で墓穴を掘りやがった。天才のくせに馬鹿かこいつ。

「……誰も企んでいるのかなど聞いていないぞ」

「あ！……ダッシュユ！」

篠ノ之束がいきなり逃げ出した。……簡単に捕まったが。

「え、え〜と黒くん・・・助けてくれないかな〜？」

「・・・却下だ」

「ち、ちーちゃん！いつく〜ん！篝ちゃん！くーちゃん！この際誰でもいいから誰か私を助けて〜！」

「・・・さて、今回はどんな風にするか・・・とりあえずボコボコにするか」

「へ、ヘルプミ〜！誰か助けてくれたら東さん特製の機体を造ってあげるから助けて〜！」

それはかなり魅力的だが・・・生憎俺には「ラグナロク」があるし、今ここにいるのは俺と篠ノ之東だけだ。残念ながらこいつを助けてくれるやつは誰もいない。

「・・・さて、そろそろ始めるぞ。安心しろ。殺すつもりはまったくない」

「ほ、ほんと？良か」・・・ただし「・・・な、なに？」

「・・・徹底的に痛めつけてやる。死なない程度にな」

「か、神様！仏様〜！東さんをこの悪魔から助けてくださ〜い！二度と悪いことはしないから〜！」

ほう、それはいいことだ。だが・・・俺にやられる前に言うべきだったな。

「……ではやるとするか。徹底的に悪死悪鬼してやる」

「ま、待って嫌な予感しかないよ!? 後、なんかお仕置きの字が違うような気がするよ!？」

「……ちっ、勘がいいな。だがもう逃げられないからな……。くっ……。さて、どうするか。」

「……では悪死悪鬼をするか」

「だ、誰か助けー！ーいやあああああああああああああああああああああああ  
あああああー！ー！ー！」

部屋中に篠ノ之束の悲鳴が鳴り響いた。

束Side

「う、ううう……。ひっくひっく、酷いよ……。黒くん。あそこまでしなくても……。ひっく、いいじゃないか……。ううう」

うう、私は黒くんの二時間以上かけて……。ひっく、行われたお仕置きを喰らって泣いてます……。うう、あんなことまでするなんて……。ひっく、黒くんには血も涙もないのかい!? しかも……。

「……。すう……。すう」

あんなことをしておいて黒くんはぐつすりと寝ているなんて……。理不尽にも程があるよ！！何時か絶対にぜっーたいに黒くんを復讐してやるー！ー！

「……すう。……すう」

ていうか……。今ここで復讐してやる！！私の前で寝ているなんて……。無防備に程があるね黒くん？ふふふ、私が受けた痛みを数十倍にして返してあげるよ！！

「まずは……。これだね。ふふふ、後はこれとこれと……。あ、これも使うべきだね」

私は黒くんに仕返すするための道具を用意する。うふふ、覚悟するんだね黒くん！！私にあんなことした罰を受けるがいい！！それに……。今までからかわれた分も上乘せしてあげるね……。！！

「よし、これだけあれば充分だね。さてとそろそろー！ー」

「……。何をするつもりだ？」

あ、あれ？な、なんでだろう？今私の頭が「すぐに逃げるんだ！」って言っているよ？あ、あはは、まさか黒くんが起きてるわけないよ。だ、だつてさつきまでぐつすりと寝ていたんだから……。そう思い私は身体中から大量の冷や汗を出しながら後ろを向くと……。黒くんがいました……。ああ……。私はここで死んじゃうだね。まだ三十も過ぎてないのにこの世とお別れするなんて……。運命ってなんて残酷なんだろう。恨むよ神様。

「……。どうやらまったく懲りていないようだな……。ならもっ

と悪死悪鬼をしたほうがいいな」

黒くんがなにか言っていたようだけど・・・私はもう何も聞こえませんでした・・・頭の中では今までの思い出が浮かんでは消え、浮かんでは消えていった。ああ、これが走馬灯なんだね。さよなら、ちーちゃん。いつくん。篝ちゃん。くーちゃん。来世でまた会えたらいいな・・・。

「さて・・・もう一回やるとするか」

私はまたあの恐ろしい拷問を受けました・・・。

「うう、生きてる・・・？私生きてるよね・・・？」

黒くんの拷問を受けて目を覚ますと・・・自分の体をちゃんと確認できた・・・。ちなみに黒くんはまたぐっすりと寝ていた・・・。憎い・・・！黒くんが憎い！！何時か・・・何時か必ず黒くに復讐してやるんだからー！！！！

・・・でも今は臨海学校のための用意をしないと・・・、うう、身中が痛いけど・・・我慢我慢。篝ちゃんに「紅椿」を渡さなきゃいけないからね・・・。

「・・・今日はこれを完成させよと・・・うふふ、黒くん・・・今はそうやってゆっくり寝ていると良いよ。何時か必ず絶対に黒くに復讐してあげるから・・・！！！！」



私は黒くんへの仕返しを胸に誓い作業に没頭した。

東Side end

## 第十五話（後書き）

意見やアドバイスを、感想などどんどん送ってください！後、間違いや誤字もあればお願いします。

## 第十六話（前書き）

臨海学校に向けての男と束の話です。次からは一夏達の視点で話が  
始まります。

## 第十六話

?????Side

「・・・何故朝っぱらからこんな目に遇わなければならんだ・・・

」

「ふ、ふふふ、黒くん・・・。昨日私にあんなことしておいてよくそんな呑気なことが言えるね?」

今俺は・・・篠ノ之束に殺されかけている。目を覚ますと縄で全身をぐるぐる巻きにされ、身動きができない状態でロケットランチャーを向けられている。・・・昨日やり過ぎたか。

「・・・昨日のことならいくらでも謝罪するから許してくれないか・・・

」

「却下に決まっているでしょ!うふふ、早速復讐のチャンスがくるなんて束さんは運がいいね。さあ、黒くん。君の罪を数えるんだね!...!」

「・・・一、二、三、四、五・・・数えるのがめんどくさいな・・・

」

「ほんとに数えてどうするの!・・・まあ、いいけどね。その余裕もすぐに消えるからね。ふふふ、さあ、このまま普通に撃つだけつてもつまらないしね。どうしよっかな?」

・・・まずい。このままだと間違いなく殺される。・・・仕方ない

な。

「……来い「ラグナロク」」

「ラグナロク」を纏おうとしたが……右腕に……ない？ど、何処にいった？

「ふっ、黒くん……。探し物はこれかい？」

篠ノ之束がポケットから出したのは黒い鎖に白い剣のアクセサリーが着いたブレスレット……。 「ラグナロク」の待機形態だ。

「……い、いつの間に……？」

「何言ってるんだい黒くん？寝ている間に取ったに決まっているじゃないか。黒くんって寝ている間は無防備だよ。いくらでも取る機会があったよ？」

「……（だらだら）」

ま、まずい……。本当にやばい状況だ……。い、いや、まだ手はある！

「……」

「うん？観念したのかい黒くん？目を瞑っちゃって、でも容赦はないよ？私が味わった痛みを数百倍にしてあげるからね……」

篠ノ之束の言葉を無視し、頭の中で「ラグナロク」のイメージを作る……。 じい……

「ふふふ、じゃあそろそろーって、え!？」

篠ノ之束が持っていた「ラグナロク」のアクセサリーが光る。そして、アクセサリーが消えると同時に俺の身体に「ラグナロク」が展開される。

「……こいつが遠隔でコールできるのを忘れたか？」

「あ……」

ふう……、今回はやばかった……。一瞬だけが死を覚悟したからな……。さて……。

「……形勢逆転だな」

「くっ……。そういえば「ラグナロク」は遠隔コールが可能だったんだっけ……」

「……さて、昨日のようにしてやってもいいが……」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

俺がそう言つと篠ノ之束が震えながら謝った。……そんなに怖かったのか……。

「……今回はなにもしない。だからそろそろ落ち着け」

「ごめんなさいごめんな……。えっ？ほんと？」

「……嘘をついてどうする……」

本当に今回はなにもする気はない。……昨日やり過ぎたことに対しての詫びといった……

「嘘だね」

やっぱりするか。人の厚意を無駄にするやつには悪死悪鬼が必要だな。

「……レーヴァテイン」「シヴァ」「フェンリル」展開

「ま、待って！なんでいきなり武器を全部出すのかな！？」

お前が俺を怒らせたからだ。さて……どうするか。

「……身体を細かく切り刻むか。それとも……身体を少しずつ撃ち抜くか」

「タンマタンマ！黒くんやめて！東さん確実に死んじゃうよ！」

「死ね」

「即答！？」

当たり前だ。それ以外あると思っているのか？

「……お前が人の言うことを素直に聞かずに疑うからだ。さあて、まずどれで殺るとするかな……」

「ち、ちょっと！なんか今やるが殺るになつてなかつたかい！？」

ふむ、やはり中々勘が鋭いな。字が違うことにすぐ気づくとはな。

「……細かいことは気にするな。どうせ、死ぬんだからな」

「お、お願い！謝るから許して！まだ東さんは死にたくないよ！」

……どうするか。篠ノ之束も反省しているようだし……、元々は俺が原因だからな……。よし。

「……俺が怒っている理由を当てることができたら許してやる」  
いくらこいつでもこれぐらいならわかるだろ。

「え〜と……。本当のことを言ったからかな？」

……こいつに期待した俺が馬鹿だったな。というか篠ノ之束がこ  
ういうことに対してまともな答えを言うわけないか……。

「……もう喋ることも許さん。すぐに仕留めてやる」

「そ、そんな！篝ちゃんに「紅椿」を届けられなくなるじゃないか  
！」

「……知るか」

お前の都合など俺にはどうでもいい。……まあ後一回だけ助かる  
チャンスをやるか。



「・・・篠ノ之束。篠ノ之箒に「紅椿」を渡したいよな？」

「も、勿論だよ！」

こいつも妹のことを大切に思っている・・・か。そういえば「あのふたり」にしばらく会っていないな・・・。ふたり共元気にしているだろうか・・・。

「・・・黒くん？はっ！チャンス！」

俺が「あのふたり」のことを考えている隙に篠ノ之束が逃げようとしていた。・・・甘いわ。ドゴツ！！

「じぶっ！？」

俺は篠ノ之束に背中に蹴りを喰らわせる。（勿論加減して）・・・相当痛いだろうがな。

「う、うう。め、滅茶苦茶痛いよ・・・か、加減してよ黒くん・・・」

「・・・お前が逃げたせいだろうが。自業自得だ。それにできるだけ加減はした」

「そ、そうなんだ・・・。（黒くんが加減するなんてあり得ない。まさか、私をもっと苦しませるために・・・？ガタガタ）」

・・・お前にとって俺は一体何なんだ？

「・・・さてとで「く、黒くん」・・・なんだ？」

「さ、さっき少し黙っていたようだけど・・・、何を考えていたんだい？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・知り合いのことだ」

全てを失った俺に残された大切な存在……。俺があいつらに会う資格なんてもう無いが……。

「君の知り合い・・・？しばらく会っていないのかい？」

「・・・・・・・・ああ、ある出来事が起こってから一度しか会っていない。あいつらとはもう十年ぐらいは会ってないな」

俺が会うことを拒絶した・・・、という理由もあるがな。

「・・・・・・・・ふう、時間稼ぎも終わったようだな。では悪死悪鬼をするか」

「・・・・・・・・黒くん。できれば手加減して欲しいな」

「・・・・・・・・はあ、わかった」

今回は弛めにしてやるか……。

「・・・・・・・・では始めるぞ」

「・・・・・・・・はい」

観念した篠ノ之束に悪死悪鬼を開始した。

束 Side

「うう……、身体中が痛いよ……」

私は黒くんの拷問（弛めの）を受けた後、黒くんについて考えていた。ちなみに黒くんは訓練をしている。

（なんで黒くん……。知り合いの話をした時あんなに悲しい感じがしたんだろ……？）

最初に黒くんと会った時以来だ。「ある出来事」っていうのがどうしても気になる。

「……黒くんは今まで一体どんな過去を歩んでいたんだろ……？」

もし、それがいつく人を狙う理由だとすれば……。

「……ううん。彼に何があったのか聞きたいけど……、絶対言わないだろうね……」

黒くんは私を信頼していない以上、向こうから言うことはまず無い。

「人の過去を覗く機械を作ろっかな」

といつてもそれを作るのに相当な時間がかかるが・・・やる価値はある・・・が。

(けど・・・黒くんの過去を知ったからといって私が有利になるとは限らないんだよね・・・)

もしかしたら彼の過去を知ったことで逆に不利な状況になるかもしれない。

「・・・モタモタしていたら手遅れになるかもしれないし・・・やってみますか」

危険を侵してこそ、その見返りも大きい。私はやることにした。

「・・・問題はそれができて黒くんに使うことができるか・・・だね」

今回の件で黒くんは私に対して今まで以上に警戒するだろう。・・・しなきゃよかったな。

「後悔しても意味ないしね。まず篝ちゃんに「紅椿」を届けてからかな」

今は黒くんのことよりも篝ちゃんだ。黒くんに対抗するためにも篝ちゃんに「紅椿」を渡す必要がある。

「んじゃ、そろそろ向こうに行く準備をしますか」

黒くんも呼ばないとね。呼ばなきゃまたあの拷問を受ける羽目になるし・・・。

臨海学校の前日になり、私と黒くんは今にも飛び発とうとしていた。

「ふう。準備万端！おやつも持ったしお弁当もちゃんとあるね」

「……小学校の遠足か」

黒くんがなにか言っていたけど無視無視。臨海学校の場所に行く準備が完了したし、そろそろ向こうに行きますか。

「……俺は一足先に向こうで待っているぞ」

「オツケー。でも見つかるようなへまはしないでね？」

「……誰に言っている」

ギロリと黒くんに睨まれた……。怖いからやめてよ。

「ごめんごめん。黒くんわかっていると思うけど……」

「……わかっている。あの機体が倒されるまで動くな……だろ？」

「せいかり。勿論「ラグナロク」は完璧に整備してあげるね」

「……当たり前だ。一々お前の頼みを聞くのは癪だがな」

そうでもしなきゃいっくんが殺されちゃうよ。「こっちはいっくんを  
死なせるつもりなんてまったくないんだからね。」

「・・・行ってくる。例の場所で待っているぞ」

そう言って黒くんは飛び立つ。じゃあ私も行きますか。彼等がいる  
向こうへ。

私は例のポッドに乗り臨海学校の行われる場所に向かって発進した。

東Side end

## 第十六話（後書き）

意見やアドバイスを、感想などどんどん送ってください！後、間違いや誤字もあればお願いします。

## 第十七話（前書き）

できました。ちょっと無理があるかも……。とりあえず投稿します。



## 第十七話

一夏Side

「海っ！見えたあっ！」

バスに乗って数時間、トンネルを抜けて海が見え始めた。

「早く旅館に着かないかな？さつさと海に入りたいな！。シャルルもそう思うだろ？」

「う、うん？そ、そうだね」

「そんなに気に入ったのか？それ」

「え、えっ？ま、まあね。えへへ」

シャル（シャルロットの呼び名）の左手首にしているブレスレットは昨日の買い物に付き合ってくれたお礼に俺がプレゼントしたやつだ。かなり気に入ってくれたみたいだけど・・・あれでよかったかな？そんなに高いものじゃないし・・・。

「うふふっ」

「まったく、シャルロットさんは朝からえらくご機嫌ですわね」

「うん。そうだね。えへへ・・・」

上機嫌なシャルに比べ、セシリアは不機嫌なようだ。なんでだろ？

「一夏さんもシャルロットさんだけにプレゼントなんて・・・不公平ですわ」

「んー。じゃあ、セシリアにも機会があれば買おうか？あんまり高いのは無理だけど」

「ほ、本当ですよ！？な、ならいいですわ。ふふっ」

俺がそう言つとセシリアが機嫌が悪くなった。けど、あんまり貯金を使いたくないし・・・。またバイトでしょうか？そっいや、さつきからラウラはキョロキョロしてるな。

「ラウラ大丈夫か？昨日からずっとそんな感じだけど・・・おい、おい」

「なっ！？近い馬鹿者！」

むう、顔を押し返された。何なんだ一体？ラウラの顔は少し赤みがかっているけど、ま、こいつは自己管理できそうだし大丈夫だな。箒に声をかけるか。

「箒向こうに着いたらすぐに泳ごうぜ。お前泳ぐの上手かったよな」

「あ、ああ。昔はよく遠泳をしたものだ」

箒も様子がおかしいし・・・。どうしたんだろ？

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ」

千冬姉のお言葉で全員がきちんと座る。指導能力抜群だな千冬姉。日々の指導（体罰）のせいだろうけど。それからすぐにバスは旅館に着いた。四台のバスから一年生が出てきて整列した。

「ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員に迷惑をかけないように注意しろ」

「」「よろしくお願いします」「」

「はい。こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね。全員で挨拶し、女将さんは丁寧にお辞儀をした。しっかりとした大人の雰囲気を感じた。」

「あら・・・こちらが噂の・・・？」

「ええ、まあ。今年は一人男子がいるせいで浴場分けが難しくなっていますって申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。それにいい男の子じゃありませんか。しっかりとしてそうに見えますよ」

「そう見えるだけですよ。さつさと挨拶をしる馬鹿者」

頭を押さえつけなくてもいいじゃないか千冬姉。今しようとしたのにさ。

「お、織斑一夏です。よろしくお願いします」

「ぶつぶ、ご丁寧にどうも。清洲景子です」

また女将さんが丁寧なお辞儀をした。その気品のある動作に少し緊張してしまう。

「出来の悪い弟でご迷惑をおかけします」

「あらあら。織斑先生つたら、弟さんには随分厳しいですね」

「いつも手を焼かされていますので」

ぐう・・・言い返せない。本当のこともあるしな・・・。はやく冬姉に迷惑をかけないようにならないとな。

挨拶をした女子一同は、すぐさま旅館の中入りそれぞれの部屋に向かった。そっぴや俺の部屋ってどこだろう？

「ね、ね。おりむ。おりむ。って部屋どこ？一覽に書いてないし。遊びに行くから教えて」

この呼び方は・・・やはりのほほんさんか、のほほんさんが俺の部屋のことを聞くと周りにいた女子が一齐に反応した。・・・何故？

「うーん。俺知らないかな。廊下で寝るとか？」

そんなわけないと思うけど、ほんとにどこだろう？

「織斑、お前の部屋はこつちだ。ついてこい」

「は、はい。織斑先生。俺の部屋は・・・？」

「ここだ」

「え？ここは……」

案内された場所は教員室だった。どうということだろ？

「最初は個室だったんだが、それだと女子が就寝時間を無視して勝手に入るだろうからな。だから私と同じ部屋にした」

はあ、でも俺のために鬼の寝床に入るやつはいないと思うけどな。

「一応言っておくが、あくまで私は教員だということを忘れるな」

「はい、織斑先生」

「それでいい」

千冬姉から部屋に入る許可をもらって中に入るとトイレにバス、洗面所は専用の個室になっている。結構贅沢だな。

「一応、大浴場も使えるがお前は一部の時間のみ使える。深夜、早朝に入りたければ部屋のバスをつかえ」

「わかりました」

その後千冬姉は自分の仕事を済ませると言って部屋を出た。俺は軽めのリュックサックを持って更衣室に向かった。

?????Side

「……ここか」

俺は篠ノ之束との待ち合わせの場所に着いたが少し早い……か。

「……海でも見て時間を潰すか」

そう考え俺は「ラグナロク」を纏い、ステルスモードの状態で海に向かった。

「……この時間なら奴等も海に向かうだろうな」

そう考えると……自然に身体が動きだした。

「……俺も結構女々しい奴だな」

見たところで何も変わらないというのに。それでも……俺は奴等のやり取りを見たいのだろう。

「……」

俺は少しずつ海に向かって歩いた。

「……………」

俺は更衣室に向かう途中で篝と会ったが、道端にウサギの耳が生えていた。

「…………えーっと、これ……………」

「知らん。私には関係ない」

篝のこの反応…………間違いなくあの人だ。ISの開発者篠ノ之束。

「とりあえず…………抜いてみるか？」

「勝手にしろ、私にはどうでもいいことだ」

そう言っただけでこの場を去ってしまう。相変わらず束さんのことが嫌いなんだ…………。一人になった俺は軽くウサミミを引っ張ったがすぽっと抜けた。あれ？

「何していますのー夏さん？」

「あ、セシリア。いや、今このウサミミを引っこ抜いただけだ」

「は、はい？」

セシリアが訳がわからないという感じで聞き返す。まあ、そうなるよな普通。

「いや、束さんがー」

キイイイン……。

ん？何かこっちに向かってきてるようなー

ドカーーン！

謎の飛行物体が地面に突き刺さり、大量の煙が舞い上がる。煙が消えるとそこにはー

「に、にんじん……？」

俺とセシリアがそう呟く。なんだこりゃ！？なんでにんじんが飛んできたんだ！？

「あっはっはっ！引っかけたね！いつくん！」

ぱかっとなんかに割れたにんじんの中から束さんが現れた。普通に登場する気はないんだろうか……。

（……ないと思うぞ）

あれ？今誰かが言ったような……気のせいか？ま、まあいいや。

「お、お久しぶりです、束さん」

「うんうん。本当に久しぶりだねえいつくん。篝ちゃんはどこかな？」



「え、えーと」

「まあ、私が作った篝ちゃん探知機ですぐに見つかるからいいや。あんまり時間も無いし・・・じゃあねいっくん。また後でね！」

「今なんか変なことを言ったよな・・・。俺がそう考えてると束さんはすでに走り去っていた。滅茶苦茶速いな。」

「い、一夏さん？今の方は・・・」

「束さんだよ。篝の姉さん」

「え、えええっ！？い、今の方があの篠ノ之博士ですか！？現在行方不明になっているあの！？」

「そう、その篠ノ之束さん」

にしても、ここは部外者は参加できないはずなのに思いつきり無視してるなあ、また後でねと言ったからまた会うことになるのかな？

ま、今のところは関係なさそうだし・・・、俺はその後セシリアとある約束をして更衣室にむかうが・・・、一番奥にあるので女子の更衣室前を通らなければならぬ。中は見えないが・・・声は聞こえてしまう。

「わー、胸おつきー。また育ったんじゃない？」

「ひゃあっ！も、揉まないで〜」

「へ〜結構大胆な水着だね〜すっごい〜」

「そう？アメリカじゃ普通だと思うよ？」

「・・・うん。聞こえない聞こえない。俺はなににも聞いていない。さて、さつさと着替えますか。男子更衣室ですぐに着替え海に向かった。」

「あ、織斑君！」

「え！？わ、私の水着変じゃないよね！？」

「うわゝ。体かっこいいねゝ。鍛えてるねゝ」

「織斑くん。あとでビーチバレーしよう」

「おう、時間があればな」

浜辺に着いてすぐに女子数人に出会う。可愛い水着だけど・・・その露出度に少し照れてしまう。海に入るために準備運動を始めると・・・鈴が飛び乗ってきた。そっぴやこいつ昔から水着になると飛びついてくるんだよな。猫みたいだ。

「い、ち、かゝゝゝっ！あゝんた真面目ねゝ。一生懸命体操しちゃって。それよりさつさと泳ぐわよ」

「おいおい、お前も準備運動しろよ。溺れるぞ」

「あたしは溺れたことがないから大丈夫よ。にしても高いわねー。遠くまでよく見えるわ。ちよっとした監視塔ねー夏」

俺の体をしゅるりと駆け上って肩車の体勢になりながら言う。身軽だなくって！

「誰が監視塔だ！」

「一夏に決まっているじゃん。人の役には立つわよ？」

「・・・誰が乗るんだよ」

「うん。あたし？」

にへへっ、と笑いながら言う鈴。あのなあ・・・。

「あっ、ああっ！？な、何をしていますの鈴さん！？」

鈴と喋っているとセシリアが話しかけてきた。ちなみにふたりの水着は鈴がタンキニタイプで色はオレンジと白のストラップで、セシリアがブルーのビキニだ。

「何って、見ればわかるでしょ。肩車よ」

「だから何故肩車をしていますの！？」

セシリアがざくっ！とパラソルを砂浜に刺した。なんか怒りがこもってる。

「なにになに？なんか揉め事？」

「って、織斑君に肩車してもらってる！」

「ええっ！いいなあ」

「きつと交代制よ！」

「そして早い者勝ちよ！」

騒ぎを聞きつけた女子が俺に詰めかけてくる。やばい、とりあえず・  
。。。

「鈴降りる。誤解が広まる」

「ん。まあ、仕方ないわね」

「ほっ。。。い、一夏さん。さっき約束して通りサンオイルを塗  
ってください！」

「「「え！？」「」」

誤解だと説明したかったが・・・セシリアがさっきの約束のことを  
言ってしまった。なんでそんな大声を出すんだよ・・・。

「私サンオイル取ってくる！」

「私はシートを！」

「私はパラソルを！」

「じゃあ私はサンオイル落としてくる！」

おい！塗ってあるならわざわざ落とすな！俺の手間が増えるって、

もう海に入っていた。・・・はあ。

(・・・大変だな)

ああ、ほんとは、誰？さっきも聞こえたような・・・？疲れているのか俺？

「コホン。そ、それでは、お願いしますわ」

しゅるりとパレオを脱ぐセシリア。かなり色っぽく、ドキッとした。

「お、おう。背中だけだよな？」

「い、一夏さんがさりたいのでしたら、前も結構ですわよ？」

「いや、背中だけで頼む」

「でしたら・・・これでどうぞ・・・」

「お、おう」

セシリアはサンオイルを塗りやすいようにうつ伏せの状態になる。・・・色々と目のやり場に困るんですけど・・・でも気にせずにはならないぞ。

「じゃ、じゃあ・・・塗るぞ」

「ひゃっ！？い、一夏さん、サンオイルは手で少し温めてください」

「わ、わるい、始めてだからどうすればよくわからなくて・・・」

「そ、そうですね。な、なら仕方ありませんわね」

「なんかセシリアが少し嬉しそうな感じがしたけど……。ともあれ、俺はさっき言われたとおりサンオイルを温めてからセシリアの体に塗っていった。ある程度塗ると鈴が……。」

「……。セシリア。続きはあたしがやってあげる。ほいほいと」

「きゃあっ！？鈴さん何をーっ、冷たっ！」

「サンオイルを塗ればいいんでしょう？ぺたぺたと」

「ああもう！いい加減にー」

「……あ」

「きゃあああっ！？」

セシリアが怒って体を起こし、そのせいで水着が落ちてしまっ。間一髪目は逸らした。危ない。

「……ごめん」

「今更謝ったって……。許してもらえと思ってますの！？」

「じゃあ逃げるね。ばいばい」

「って、俺を巻き込むな鈴！たく……。セシリアすまん！えと、見えてないから、な？」

「な、なっ……!」

セシリアの顔が真っ赤になった。……やっぱり恥ずかしいよな。俺は鈴に引つ張られ海に入った。

「ぶはっ!鈴!」

「あはは、ごめんごめん」

「はあ、でも……やっぱりこういつのっていいな」

「どういう意味?」

「……最近あいつのせいで気が張ってからさ。こんな風を楽しむのは久しぶりって感じがしたんだ」

最近をよくあいつのことを考えてしまう。俺の命を狙う「奴」の存在を。

「……黒騎士」ね。一夏せつかくの臨海学校なんだからそんなこと考えずに今は遊ぼうよ」

「……ああ!そうだな!」

鈴の言う通り今は楽しむか。明日から忙しくなるからな。

「じゃあ一夏、向こうのブイまで競争ね。負けたらパフェをおごってもらおうわ。……よーい、どん!」

「おいこら！卑怯だぞ！待て！」

「あははっ！ぼーっとしてるのが悪いのよ！」

まったく……。でも楽しむとしますか今は。

??? Side

「……ふっ」

俺は今海の近くで誰にも聞こえないように小さくため息を漏らす。  
俺の視線の先には織斑一夏達がビーチバレーをやって楽しんでいた。

「……まあ、楽しめる内にゆっくり楽しんでおくんだな」

戦いの時はすぐにくるのだから、そして今度こそお前を殺す。織斑一夏。

俺がしばらく奴等を見ていると……。やっと篠ノ之束から通信がきた。

「……遅いぞ。何やっていた」

『いや〜ごめんごめん。篝ちゃんを探していたんだけど……。見づからなくてね〜。だから君に通信したんだよ〜』



おまけか俺は、まったくこいつは……。

「……わかった、すぐに向かう。そっちの準備はどうだ？」

『ばつちしだよ。明日が楽しみだね。うふふ』

やれやれ、やっぱりこいつも狂っているとしか思えんな。……俺が言えることではないが。俺は待ち合わせの場所に戻りながら話を続ける。

「……あの機体がこっちにくるのは何時くらいだ？」

『明日の午前十一時ぐらいじゃないかな？ね〜黒くん。それより例の武装を見せてよ〜』

「……断る。明日見ればいだろう」

ついさつき、あの武装が使えるようになったが……今こいつに見せる必要はないからな。

『黒くんのケチ〜。まあ、明日見れるからいいけどね〜後……ちやんと私の「頼み」を聞いてね？』

「……ああ」

気に入らないが……今はこいつの「頼み」を聞かないといけなからな。

『ね〜黒くん。そういえばなんで待ち合わせの場所にいなかったの？』

「……………少し海を見ていただけだ」

『……………まさか、黒くん』

「……………安心しろ。手は出していない」

今は戦い以外で手を出すのは無理があるからな……………。

「……………さて、そろそろ着くころだな切るぞ」

『はい。着いたらすぐに君の機体を調整するね』

「……………当然だ」

俺は通信を切り篠ノ之束がいる場所に向かった。

?????Side end

## 第十七話（後書き）

意見やアドバイスを、感想などどんどん送ってください！後、間違いや誤字もあればお願いします。

## 第十八話（前書き）

少し時間が掛かりました。ではどうぞ！

## 第十八話

一夏Side

「ふう、さっぱりした」

時間があつという間に過ぎ、旅館の大広間三つを繋げた宴会場で夕食を済ませた後、海を一望できる露天風呂を一人で使った俺は、部屋に戻るうとしていた。

・・・海で遊んでいた最中何度か変な視線を感じたけど・・・なんだったんだろ？女子の誰が見てたのかな？まあ、それより部屋に戻るか。セシリアにマッサージをしないといけないし。部屋に入ると千冬姉がいなかった。

（千冬姉も温泉かな？）

俺がそう考えていると千冬姉が帰ってきた。

「ん？なんだ一人か。女の一人も連れ込まんとは詰まらんやつだな」

「・・・はあ、もういいよ。それは」

それに、ここは一応千冬姉の部屋だ。もしこの部屋にいかかわしいことを目的に女子を連れて来たらどんな目に遭うか・・・。あ、そうだ。

「なあ、千冬姉」

俺がそう言つと即座に鋭いチョップが飛んできた。加減はしてくれ  
たみたいだけど。

「織斑先生と呼べと何度も言っているだろう」

「まあいいじゃん。二人きりだし、風呂上がりだし・・・久しぶりに  
マッサージをしようか？」

「ふむ・・・、そうだな。疲れが少し溜まっている感じがするしな  
・・・やってもらおうか」

「ん。じゃあ準備するか」

床に敷布団を敷いて・・・と。これでよし。

「じゃあ千冬姉、ここでうつ伏せになって」

「わかった。手を抜くなよ？」

「抜かないって、さて始めますか」

俺は千冬姉のマッサージを開始した。

?????Slide

「.....」

「黒くん。なんで私を睨んでいるのかな？」

「……お前、この前に自分のやったことを忘れたのか」

「はて？この前に君に拷問を受けたことはすっかり覚えるけどね」

俺は……この前と同じ様に縛られていた。入ってすぐに篠ノ之束が仕掛けたトラップが作動してこうなってしまった……。油断していたか、まさか同じ手でくるとは……。

「……どうなるか覚悟しているだろうな？」

「ふっふっふ。そんなに睨んでも怖くないも〜ん。「ラグナロク」はここにあるしね」

また、この前と同じ様に「ラグナロク」の待機形態のプレスレットを持っていた。

「……ふん、また前と同じ様にするだけだ」

俺が「ラグナロク」を遠隔コールで展開するが……。こなかった。な、なに！？

「ふっふっふ。黒くん。私が二度も同じ失敗を犯すと思っていたのかい？今回は遠隔コールできないように特殊なジャミングをこちら一帯に仕掛けて置いたんだよ」

「……成る程、だが……。詰めが甘いな」

「む、失礼だね黒くん。この篠ノ之束に向かってそんなことを言うなんて」

俺が武器を隠しているとは思っていないのだろうか……。よし、そろそろ切れるな。

ブツッ。

「ん？何の音かな？」

「……。俺が自由になった音だ」

「……。え？」

隠しナイフで縄の一部を切り、一気にほどいた。ふう、懲りんやつだなこいつは。

「ま、まだまだよ！まだ「ラグナロク」は——「シュッ」……。あれ？」

縄をほどいた俺は篠ノ之束の手にある「ラグナロク」を取り戻した。

「……。よく覚えておけ。手に人質を持っているところという風に奪われることになる……」

「そ、そんな……。(ガタガタガタガタ)」

篠ノ之束が震えだした……。これからどうなるかわかっているのだろう。さて……。やるか。



「・・・今回は容赦しないぞ。徹底的に痛めつけて殺る・・・」

「ね、ねえ！今「痛めつけてやる」じゃなくて「痛めつけて殺る」  
になってなかったかい！？」

ふう・・・、こういうことに関しては何故か勘がいいなこいつ。ま  
あ、どうでもいいが。・・・ん？なんだ・・・？ポケットから何か  
出したぞ？

「えい！」

その何かを地面にぶつけると・・・煙が発生した。煙幕か、甘い。

「今の内にー」「ガシツ！」って、えええ！？」

俺は一瞬で篠ノ之束の腕を掴む。

「し、視界が見えないのになんで・・・？」

「・・・声で分かるだろ。普通」

「・・・あ」

やっぱり馬鹿だこいつ。まあ、声を出さなくても足音で居場所は分  
かるがな。

「・・・さて、手は尽きたようだな。なら、悪死悪鬼の始まりだな」

「だ、誰か助けてー！誰かこの悪魔から束さんを救ってくださいーい  
！」

「……残念だな。ここには俺とお前しかいない。それに……誰かが俺の顔を見ればどんなことになるか……忘れてないだろうな？」

「う……、ひ、卑怯だよ！黒くん！」

お前が言えることじゃないだろう。俺の寝ている間に縛ったり、「ラグナロク」を取り上げたり、罫を仕掛けていくくせによくそんなことを言えるな。

「……では、始めるか。潔く罰を受けろ」

「嫌だね！誰があんな拷問を受けると思っているの！」

そんなの一人しかいないだろう。

「篠ノ之束」

「酷すぎるよ！黒くんには優しさや情けという言葉はないのかい！」

「……」

「……黒くん？」

優しさ……情け……か。昔の俺にはあったが今の俺にはもう必要無いものだな……。そんなものがあっても意味はないのだから。

「黒くん……？どうしたの……？」

俺ははっとする。……………今日はもう寝るか。

「……………もういい、何もしない。俺はさっさと寝る。……………余計なことはするなよ?」

「う、うん。わかった」

俺はそのまま適当な場所で寝た。

束Side

「……………黒くん」

私は寝ている彼を見ながらさっきのことを考えていた。黒くんが何かを思っていた。そしてまた、悲しい感じがした。確か私が優しさや情けと言った辺りからだ。

「君は優しさや情けを否定しているのかい……………?」

私は彼のことを何も知らない。何も……………。

「……………一体君はどんな過去を歩んできたのかな……………?」

私がそれを知ってしまったてもいいのだろうか……………。彼はいつくんを恨んでいるけど……………憎んではない。そんな感じがする。彼が

憎んでいるもの……それがわかればもしかしたらいつくと戦わずに済むかもしれない。

「黒くん……。君はなぜいつくんを殺そうとするのかな？その理由は君の過去とどう関係しているんだい？そして……。君は一体何者なのかな？なんで君はー」

私の問いに彼が答える訳がない……。でも、それでも聞きたかった。彼の目的……。その意味を……。

千冬Side

私の部屋には今一夏に好意を抱いている五人がいる。私が一夏のマッサージを受けている間に部屋の扉の前で聞き耳を立てていた。

まあ、最初は篠ノ之、凰、オルコットで次に篠ノ之、凰、デュノア、ボーデヴィツヒだが。（ちなみにオルコットは一夏のマッサージを受けていた）

さて、一夏は今風呂に行かせたし、こいつらに聞くとするか。口止めもしたしな（旅館の飲み物）私はビールの飲みながら五人に問う。  
「お前ら、あいつのどこがいいんだ？」

彼女達は少しずつだが言い出した。

「わ、私は・・・あいつの腕が鈍っているのが腹立たしいだけです」

「あたしは、腐れ縁なだけだし・・・」

「わ、わたくしは・・・クラスの代表としてしっかりとっしりしてほしいだけです」

おやおや、本当のことを言う気は無いのか？ならば・・・。

「そうか。では一夏にそう伝えておこう」

「」「」言わなくていいです！」「」「」

篠ノ之、凰、オルコットは私がわざとらしくそう言つとすべに言い返した。素直に言わないからだまったく。

「僕・・・あの、私は・・・優しいところです」

デュノアはぽつりと言った。確かに一夏は優しいな、・・・悪くいえば甘いやつだが。

「しかし・・・あいつは誰にでも優しいぞ」

「そうですね・・・。そこがちょっと、悔しいかな」

だろうな。こいつらの本音は自分だけに優しくしてほしい・・・と言いたいのだろう。一夏は唐変木だから気づかん。

「で、お前は？ボーデヴィット」

「つ、強いところ、でしょうか・・・」

「いや弱いだろ」

今の一夏はそれほど強いとは言えない。まだ代表候補生並の強さもないだろうしな。

「つ、強いです。少なくとも私よりは」

・・・成る程心のことが。まあ、それだけなら確かに強いがな。

「まあ、それは別にしてだ。あいつは役に立つぞ。家事も料理も中々できるし、マッサージもうまい。・・・欲しいか？」

「……………え!?!」「……………」

「く、くれるんですか?」

「やるかバカ」

「……………ええ!?!」「……………」

まったく・・・、大切な弟を簡単に渡すわけがないだろう。だが・・・。

「女なら奪うくらい気持ちで行かんか。自分を磨けよ、ガキども」

私は三本目のビールを口にする。そして・・・。

「それと・・・、もっと強くなるんだな。「黒騎士」を倒すために・

「・・な」

私が「黒騎士」のことを言った瞬間この部屋の空気が変わった。

「織斑先生……。「黒騎士」って、一体何者なんですか？」

「私はまだ奴と戦ったことはないな……」

「ラウラはその時気絶してもんね」

「そういえば……ここにいる人の内ラウラさん以外とはすでに一度戦っていますわね……」

「世界中が調べてもまったく情報が無いって聞きますけど……」

それぞれが「黒騎士」のことを話し始めた。……私も一度奴と戦ったが後一步のところ助かったからな……。

「……「黒騎士」のことで判明しているのは武器、能力、目的の三つだけだ。それ以外は一切不明。厄介にも程がある」

「操縦者や機体名もまったく不明なんですよね？」

「おまけに教官を倒す程の実力者……」

「あたし達全員でかかっても勝てるかわからないし……」

「良くて相打ち……最悪全員殺されますわね……」

「だが、「黒騎士」の情報は結構集まっている。今なら全員で戦え

ば流石の奴でも倒せるのでは無いのか？」

ふむ、篠ノ之の言う通り情報は結構集まっているのだが……。

「その情報も重要なものはほとんど無い。はっきり言ってこれでは情報が集まっているとは思えん」

「重要な情報が無いって……武装や能力がわかっているだけでも充分だと思えますけど……」

「奴の場合全ての武装に能力がある。「レーヴァテイン」は高熱、「シヴァ」は変形、「フェンリル」は強化……もし奴にまだ使っていない武装があればそれだけで充分脅威になる」

「まだ使っていないって……これ以上何かあるんですか!？」

「あり得ない可能性ではないな……。」「黒騎士」の情報がまったく無い以上、否定できん」

「織斑先生。何とかして「黒騎士」を捕まえるのは出来ませんか？」

「出来たら苦労していないわよ。あいつにこれ以上の武装があればあたし達に勝ち目なんてほとんどなくなるわよ」

「あの機体……。やっぱり第三世代型なんでしょうか？」

「……わからん。何せ情報がまったく無いからな」

あの機体……。とても第三世代型とは思えないが……。束が造ったというのも何か違う気がする。仮に束が「黒騎士」を造っても一



夏を殺そうとしている奴に渡すだろうか？それにあれほどの操作技術を持つ操縦者の名前も判明しないというのも妙だ。もしや「あの組織」の関係者か……？

「……一夏を守りたいなら強くなるしかない。少なくとも全盛期の私並にな」

「実際織斑先生を圧倒してましたからね……」

「機体の性能差を考えてもあれは異常よ。あいつが喰らった攻撃なんて二回しかないわ」

「一夏さんの「零落白夜」とシャルロットさんの不意打ちだけですわね……」

「化け物としか言えんな……。全盛期の教官以上の強さは……」

「今の私達では追い払うことすらできるかどうかも怪しいからな……」

だがそれでも強くなるしかない。私達が奴を倒すのが先か奴が私達を殺すのが先か……。それはこれからの私達次第か……。私も早く「あいつ」を使えるようにしなくては……。いざとなれば……。命をかけなければならぬ。私はそう考えながらビールを飲み干した。

千冬Side end

## 第十八話（後書き）

意見やアドバイスを、感想などどんどん送ってください！後、間違いや誤字もあればお願いします。

## 第十九話（前書き）

できました。ちょっと束の態度が良くなっています。原因は……  
あいつのせいですけど。

## 第十九話

一夏Side

臨海学校の二日目。今日はISの各種装備試験運用とデータ取りをする日だ。専用機持ちは大量の装備があるので大変だ。俺の「白式」は後付装備ができないからデータ取りしかできないけど。

ちなみにラウラが珍しく遅刻していて千冬姉にISのコア・ネットワークについての説明をさせられていた。簡単に言うと広い宇宙でお互いの位置を確認するためのものでオープン・チャネルやプライベート・チャネルに「非限定情報共有」などを行うことで自己進化の糧になるとのことだ。

「流石だな。遅刻の件はこれで許してやるっ」

その言葉でラウラはホッとしたようだ。・・・多分ドイツで指導していた間に千冬姉の恐ろしさをイヤというほど味わったんだろな・・・。

「それでは各班ごとにISの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え」

はい、と一同が返事をした。一年生全員が並んでいるのでかなりの人数だ。そういや四組の専用機持ちは休んでいるらしい、ちなみに俺達がいる場所は四方を切り立った崖に囲まれた所だ。

「ああ、篠ノ之。お前はこっちに来い」

「はい」

千冬姉に呼ばれた筈がそちらに向かった。

「お前には今日から専用ー！」

「ちーちゃー~~~~ん!!」

「・・・束」

ずどどどど・・・!と砂煙を出しながら篠ノ之束さんが臨海学校に堂々と乱入してきた。

「やあやあ!会いたかったよちーちゃん!さあ、ハグハグしよう!愛を確かめー!ぶへっ」

「うるさいぞ、束」

「ぐぬぬぬ・・・ちーちゃん相変わらず容赦ないアイアンクローだねっ」

千冬姉は飛びかかってきた束さんの顔面を掴む。・・・思いつきり指が食い込んでるし、本当に容赦のない千冬姉だ。まあ、束さんもその拘束を抜け出しているけど。着地した束さんは筈の方を向く。

「やあ!」

「・・・どうも」

「えへへ、久しぶりだね筈ちゃん。何年ぶりかな?おっきくなった

ね、特におっぱいが」

がっつ！と束さんを殴る篁。今は自業自得かな……。

「殴りますよ」

「殴ってから言わないでよ……。しかも日本刀の鞘で叩くなんて、ひどいよ篁ちゃん！」

「おい、自己紹介くらいしろ束。うちの生徒達が困っている」

「え、まあいいけど。私が篠ノ之束だよ、はい終わり」

束さんがめんどくさそうに自己紹介をした。ぽかんとなっていた一同は、やっと目の前にいる人物がISの開発者にして天才科学者・篠ノ之束だと気づいたようだ。

「……もう少しまともな自己紹介はできんのか、お前は。全員こいつのことは無視してテストを続ける」

「こいつはひどいよちーちゃん。らぶりい束さんと呼んでよ」

「うるさい、黙れ」

「その……頼んでいたものは……？」

篁がためらいがちに束さんに尋ねる。すると束さんの目がキラーンと光る。

「つつぶつつぶ。すでに準備完了だよ。それでは大空をご覧ください！」

束さんが空に向かって指さす。俺達全員空を見上げると……。

ズーンッ！

「うわっ！」

いきなり轟音と衝撃が発生し、金属の塊が現れた。そして壁の一部が倒れ中身が見える。

「じゃじゃーん！これこそ篝ちゃんの専用機「紅椿」！全スペックが現行ISを上回る束さんお手製ISだよ！」

真紅の装甲を持つ機体は、束さんの言葉に応えるように外へ出てきた。って、さつき束さん全スペックが現行ISを上回っているって……つまりこれは最新鋭機にして最高性能機じゃないか。……あの「黒騎士」よりも強いのか？

「さあ篝ちゃん！今からフィッティングとパーソナライズをはじめよ！私が手伝うからすぐに終わるよ」

「……お願いします」

「堅いよ。ま、いいや。それよりもさつきとやりますか」

コンソールを開き指を動かす。空中投影のディスプレイとキーボードを呼び出し、膨大なデータを見ながら凄まじい速さでキーボードを叩いていた。

「近接戦闘を基本に万能型に調整してあるから、すぐに馴染むと思

うよ。あと自立支援装備もつけておいたよ」

「紅椿」をよく見ると腰に左右一本ずつの日本刀型ブレードを装備しているがそれ以外はなにもなかった。少し「白式」に似ている気がするが、さつき東さんが「自立支援装備がある」と言っていたから、第三世代型の装備があるのかもしれない。

「あの専用機・・・篠ノ之さんがもらえるの・・・？身内って理由だけで」

「そうよねえ。なんかずるいよねえ・・・」

ふと、誰がそんなことを言った。確かに篤は代表候補生でもないし・・・。俺のようにテストのために用意されたわけでもない。周りからすればえこひいきだろうな。

「おやおや、歴史の勉強をしていないのかな君達？有史以来、世界が平等であったことなど一度もないよ」

東さんの指摘を受けた女子は気まずそうに作業に戻る。東さんはさつきのことはどうでもいいようで調整を続けていた。・・・喋っている間も手は止まっていなかった。相変わらずすごいなこの人・・・。

「ふう、あとは自動処理に任せておけばパーソナライズも完了つと。いっくん「白式」を見せて。東さんは興味津津なのだよ」

「は、はい」

俺は意識を集中させる。



(・・・い、「白式」)

俺の周りが一瞬光り、「白式」の装甲が展開される。

「データ見せてね。おりゃ」

束さんが「白式」の装甲にコードを刺す。するとさっきと同じようにディスプレイが空中に現れる。それを見た束さんが目を細めた。  
・・・どうしたんだろ？

(・・・このパターンは・・・まさか・・・？いや、そんなはずは・・・)

「・・・束さん？」

少し気になり、束さんに話しかけると少し慌てながら返事をした。

「な、何かな。いつくん？」

「い、いえ。どこか変なところでもありましたか？」

「ううん。不思議なフラグメントマップだったから気になっただけ。多分男の子だからだと思っよ」

ちなみにフラグメントマップというのは人間で言う遺伝子のようなもので、各ISの独自に発展していく道筋らしい。

「束さん、それなんですけど・・・。どうして男の俺がISを動かせたんですか？」

「ん〜・・・なんでだろうね？私にもさ〜っぱりだよ。ナノ単位まで分解すればわかると思うけど・・・、してもいいのかい？いっくん」

おそらく分解の対象は「白式」だけじゃなく、俺を含められている気がする。

「お断りします」

「だよね〜。まあ、わかんないならそれでいいけどね〜。そもそもISは自己進化するように作ったから、こういうこともあるよ。あつはつは（それに・・・もしいつくんを分解なんかしたら私が黒くんに殺されるからね・・・。ガタガタガタガタ）」

・・・何の解決にもなっていない。って、東さんなんか震えているよ  
うな・・・気のせいかな？

「あと「白式」に後付装備ができないのは・・・？」

「そりゃ、私がそうしたからだよ〜」

「ええっ！？東さんが「白式」を作ったんですか！？」

「そっだよ？でも、元々日本がそういう風に関係していたらしいよ。よく知らないけど」

「馬鹿たれ。機密事項を勝手にバラすな」

千冬姉がべしん！と東さんの頭を叩く。勿論加減なし。

「いたた……。ごめんごめん。ちーちゃん」

「わかればいい」

千冬姉が下がると……。セシリアが東さんに声をかけた。

「あ、あのっ！篠ノ之博士のご高名はかねがね承っておりますっ。もしよければ私のISを見ていただけないでしょうか！？」

有名人の東さんを前に興奮しているのか、セシリアの目がキラキラしていた。けど東さんは……。

「……。うん。悪いけどあんまり興味ないからいいや」

……。あれ？少し態度がマシになってる？千冬姉も驚いていた。

「そ、そうですね……。なら仕方ありません。いきなり聞いて申し訳ありません」

「別にいいよ。けど私は他の人のことはあんまり興味ないからできるだけ話しかけないでね」

「は、はい……」

……。えーっと、この人ほんとに東さん？昔は確か「人間の区別がつかないね。わかるのは篝ちゃんとちーちゃんといっくんと……。両親ぐらいかな？うふふ、興味ないからね、他の人間なんて」って言ってたはずだし、他人を本気で無視してたよな……。？

「・・・束。なにか変な物でも食ったのか？」

「ちょっとちーちゃん！その言い方は酷すぎるよ！私が変なことをしたって言うのかい!？」

「すみません。俺もそう思います。でなければ束さんがあんなことを言うはずが無いから・・・。」

「むく。私も少しは態度を直すことにしたんだよ（・・・黒くんにそうしろって言われたっていつか命令されたからね・・・）」

「・・・そうか。ならいい」

千冬姉が疑いの眼差しで束さんを見ている。まあ、そうだよな・・・。「あの」束さんが少しとはいえマシになるなんて・・・天変地異でも起きるかな・・・？」

「あー・・・ごほんごほん。まだ終わらないのですか？」

箒が咳払いしながら話に入ってきた。

「ん？もうおわるよ。はい終わりつと、んじゃ、試運転もかねて飛んでみて。箒ちゃんのイメージ通りに動くはずだから」

「ええ。それでは行きます」

箒が意識を集中させると、次の瞬間「紅椿」は物凄い速さで上昇し、一瞬で二百メートルほど上空で飛んでいた。・・・けど速さは「黒騎士」のほうが上だな・・・。

「うんうん。問題ないみたいだね。じゃあ刀使ってみて。右のが「雨月」左のが「空裂」だよ。武器のデータを送るね。」

武器データを受け取った箒は「雨月」と「空裂」を篠ノ之剣術流に構える。

「ここで親切な束さんの解説だよ。」「雨月」は対単一仕様の武装で打突に合わせて刃部分からエネルギー刃を放出、連続して敵を蜂の巣にする武器だよ。射程はアサルトライフルぐらいだけど「紅椿」の機動性なら問題ないよ。」

試しに箒が突きを放つと同時に周囲にいくつかの赤色のレーザー光が現れ、漂っていた雲を穴だらけにした。

「次は「空裂」ね。こっちは対集団仕様の武器で。斬撃に合わせて帯状の攻性エネルギーをぶつけるんだよ。振った範囲に自動で展開するから超便利。んじゃこれ打ち落としてみて、ほーい」と

束さんがいきなり十六連装ミサイルポッドを呼び出し、一斉射撃を行なった。

「箒！」

「やれる・・・！この「紅椿」なら！」

箒は右脇下に構えた「空裂」を一回転するように振るう。すると赤いレーザーが帯状になって広がり、ミサイルを全部撃墜した。

「すげえ・・・」

全員が「紅椿」のスペックに驚愕し、言葉を失う。けど……。

(……「黒騎士」のほうが強いな)

俺はそう思う。奴と戦った者としてはつきりとわかる。確かに「紅椿」の性能も武器も脅威的なものだ。だが、「黒騎士」はそれ以上だ。それに筭と奴では実力差がありすぎる。

(「黒騎士」に勝つには少なくとも千冬姉クラスの实力がいるからな……)

仮に千冬姉が「紅椿」を使っても「黒騎士」に勝てるかどうか……。俺がそう考え千冬姉をほうを見ると……。束さんを敵しい目付きで見っていた。

(千冬姉……？なんであんな顔をしてるんだ？あれじゃまるで敵を見ているような……)

「た、大変です！お、織斑先生っ！」

いきなり山田先生が大声を出す。一体どうしたんだろう。いつも慌てているけど、今回はいつも以上だ。

「どうした？」

「こ、これを！」

山田先生に渡された小型端末の画面を見て千冬姉の表情が曇る。

「特命任務レベルA……、現時刻より対策をはじめられたし……

「そ、それが・・・ハワイ沖で試験稼働をー」

「しつ。機密事項を口にするな。生徒達に聞こえる」

「す、すみません・・・」

「専用機持ちは・・・四組だけ欠席か。なら・・・」

千冬姉と山田先生が小声でやりとりをしているが・・・途中から手話でやりとりをしていた。あれって・・・普通のやつじゃなくて軍関係のやつか？

「そ、それでは私は他の先生達にも連絡してきます！」

「了解した。・・・全員、注目！現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動へと移る！今日のテストはすぐに中止し、各班ISを片付け旅館に戻れ！以後、許可無く室外に出たものは我々で身柄を拘束する！いいな！！」

「・・・はっ、はい！！」

不測の事態に女子達が騒ぎ始めるが、千冬姉の大声で全員が慌てて片付けを開始した。

「専用機持ちは全員集合だ！織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰！・・・それと、篠ノ之も来い」

「はい！」

箒が俺の隣に降りてきた。・・・そうか箒もこれで専用機持ちになつたんだよな。けど・・・。

(大丈夫なのか・・・?)

俺はまた「黒騎士」と戦うことになる。そんな予感がした。

??? Side

俺はいつもように「ラグナロク」をステルスモードにして奴等を眺めていた。

「・・・そろそろか」

俺は篠ノ之束とプライベート・チャンネルで通信をかけた。オープンはずな味いからな・・・。

「・・・俺だ」

『何の用だい黒くん？束さんはこれから忙しいのだよ』

「・・・お前が起こしたくせによくそんなことを言えるな」

『ふふふ、人聞きが悪いね。あれは勝手に「暴走」したんだよ?』



「暴走」・・・か。お前がそうなるようにしたんだろうが、やはり狂っているなこいつ。

『それに君にも戦えるチャンスがあるんだから、文句は無しだよ』

「・・・最初から戦つのは駄目か」

『あつたり前じゃん。なんで最初から戦いたいのかな?』

・・・「あれ」が起こる前に奴を殺したいのだが・・・、諦めるか。言うわけにはいかんし・・・。

「・・・わかった。切るぞ」

『ん〜。後、私の「頼み」をちゃんと実行してね?じゃないと・・・わかるよね?』

「・・・ああ」

こいつの「頼み」を聞くのはめんどくさい以外なんでもない。が・・・今はこいつの力が必要だからな、黙って聞いてやるとするか。俺は通信を切る。

「・・・にしても、あの機体とパイロットは・・・不運としか言えんな」

篠ノ之箒と「紅椿」のために無理矢理戦わされるのだから。さて・・・では行くとするか。

俺はそのまま奴等の戦場へ向かった。

Inside

## 第十九話（後書き）

意見やアドバイス、感想などどんどん送ってください！後、間違いや誤字もあればお願いします。

## 第二十話（前書き）

すみません。次からほんとの福音戦になります。申し訳ございません。では投稿します。

## 第二十話

一夏Side

「では、現状を説明する」

旅館の一番奥にある大座敷・風花の間で俺達専用機持ちと教師達が集められた。薄暗い室内に大型の空中投影ディスプレイが映し出される。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働をしていたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型軍用IS「銀の福音」が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があった」

いきなり千冬姉から説明された。・・・はい？軍用ISが暴走？なんで俺達に連絡がくるんだ？とりあえず他のメンバーを見ると・・・。箒を除く全員が厳しい顔つきをしていた。俺達と違って他は代表候補生だ。こついった非常事態に対処するための訓練を受けているんだろっな。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通過することがわかった。時間にして約五十分後。学園上層部からの通達により我々がこの事態を対処することになった。教員は学園の訓練機を使い空域と海域の封鎖を行うため、本作戦は専用機持ちに担当してもらおう」

淡々と説明を続ける千冬姉。・・・えーっと、つまり俺達で暴走した軍用ISを止めるってことか！？

「では作戦会議をはじめ。意見のあるものは挙手するように」

「はい。目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、福音は二カ国の最重要軍事機密だ。けして口外するな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視がつけられる」

「了解しました」

まったくこの状況についていけない俺に対して、セシリアをはじめ代表候補生の皆と教師達は開示された福音のデータを元に相談をはじめ。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……。わたくしのISと同じオールレンジ攻撃を行えるようですね」

「攻撃と機動の両方に特化した機体……。厄介ね。しかも、スペック上ではあたしの「甲龍」を上回ってるから、向こうの方が有利……」

「この特殊武装が曲者って感じがするね。ちょうど本国からリヴァイヴ用の防御パッケージが来てるけど、連続しての防御は難しい気がするよ」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルもわからない。偵察は行えないのですか？」

セシリア、鈴、シャル、ラウラの四人は真剣に意見を交わしている。……混乱が収まっているのについて行けなかった。情けない……

「無理だな。この機体は今も超音速飛行を続けている。最高速度は時速二四五〇キロを超えるとある。アプローチは一回が限界だろう」

「一回きりのチャンス・・・となるとやはり一撃必殺の攻撃力を機体で当たるしかないですね」

山田先生の言葉に全員が俺の方を見る。一撃必殺って、まさか・・・

「「零落白夜」か・・・？」

「正解よ一夏。あんたが福音を落とすのよ」

「それ以外ありませんわね。ただ問題は・・・」

「どうやって一夏をそこまで運ぶか、だね。エネルギーは全部攻撃に回さないと難しいし・・・、移動をどうするか」

「それに福音に追いつける速度が出せる機体でなければならぬ。超高度ハイパーセンサーも必要だろう」

「ち、ちよつと待て！俺がやるのか！？」

「「「当然」」」」

「織斑、これは訓練ではなく実戦だ。もし覚悟がないなら、無理強いはしない」

・・・「零落白夜」を使えるのは俺だけ・・・。それに「黒騎士」を倒すためにも強くならなければならぬ。なら・・・ここで逃げるわけには行かない。

「やります。俺が・・・福音を落としてみせます」

「よし。それでは具体的な作戦の内容に入る。この専用機持ちの中で最高速度が出せる機体はどれだ？」

「それならわたくしが。ちょうどイギリスから「ブルー・ティアーズ」の強襲用高機動パッケージ「ストライク・ガンナー」が送られて来ていますし、超高感度ハイパーセンサーもついています」

全てのISにはこの「パッケージ」という換装装備がある。「パッケージ」は武器だけではなく追加アーマーや増設スラスターなどの装備一式のことで、色々な種類がありこれを装備することで様々な作戦に対応することができる。

「オルコット、超音速下での戦闘訓練時間は？」

「二十時間です」

「ふむ、それならば適任——」

「待った待った。その作戦はちょっと待ったなんだよ！」

続きを言おうとした千冬姉の声がいきなり聞こえてきた底抜けに明るい声に遮られる。ちなみに声の発生源は天井からだった。俺達が見上げると・・・部屋のど真ん中の天井から束さんの顔が現れた。・・・何やっっているんですか。



「・・・山田先生、室外への強制退去を」

「は、はいっ。あ、あの篠ノ之博士・・・、とりあえず降りてきてください・・・」

「とうっ！ちーちゃん、ちーちゃん。もっというい作戦が私の頭の中にナウ・プリンティング！」

「・・・出ていけ」

束さんが天井からくるりと一回転して降りてきた。身軽だなこの人・・・。山田先生が束さんを室外に連れて行こうとするが、するりとかわされる。

「聞いて聞いて！ここは断・然！「紅椿」の出番なんだよっ！」

「・・・なに？」

「「紅椿」のスペックデータを見てみて！パッケージがなくても超音速機動が可能なんだよ！「紅椿」の「展開装甲」を調整して、ほいほいっ。ホラ！これでスピードはばっちし！」

なんだ「展開装甲」って？聞いたことがないぞ？俺がそのことを考えていると束さんが説明し始めた。

「説明しましょう！「展開装甲」ってのは。この天才の束さんが作った第四世代型ISの装備なんだよー」

はい！？第四世代型！？今って確か世界中でやっと第三世代型の一

号試験機ができたはず……。それをすっ飛ばしてなんで第四なんだ！？

「さーて、ここで心優しい束さんの解説。いっくんのためにね。ふふふ、まず、第一世代は「ISの完成」を目標とした機体で、次に第二世代が「後付武装による多様化」。そして第三世代が「操縦者のイメージ・インターフェイスを利用して特殊兵器の実装」。空間圧作用兵器やBT兵器、あとはAICとか色々だね。……で、第四世代が「パッケージ換装を必要としない万能機」という、現在机上の空論中のもの。はい、いっくん理解できたかな？」

「は、はぁ……。いや、その、えーと……。？」

「まあ、具体的に言つと……。」「白式」の「雪片式型」に使用されてます。試しに私が組み込んだ」

「「「「「え！？」「」「」」」

混乱している俺に束さんが更にとんでもないことを言った。そういや「零落白夜」を発動する時に「雪片式型」が変化していたけど……。まさかそれも「展開装甲」だったとは……。しかも、もし束さんの言う通りならば「白式」も第四世代型ということになる。

「それで、うまくいったのでなんと「紅椿」は全身のアーマ―を「展開装甲」にしてあります。システム最大稼働時にはスペックデータは更に倍プッシュだ！」

「ちよっ、ちよっと待たしてください！え？全身が「雪片式型」と同じ？それって……。」「

「うん、無茶苦茶強いね。一言でいうと最強だね」

千冬姉を除く俺達全員がぼかんとしていた。凄すぎるだろこの人。。。

「ちなみに「紅椿」の「展開装甲」はより発展したタイプだから、攻撃・防御・機動と用途に応じて切り替えが可能。これが第四世代型の目標である「即時万能対応機」ってやつだね。にやはは、私が早速作っちゃたよ。ぶいぶいって、あれ？何でみんなお通夜みたいな顔してるの？誰か死んだ？変なの」

変なのどこの話ではない。世界中が多額の資金に膨大な時間。そして優秀な人材の全てをつぎ込んで開発した第三世代型IS。それが、無意味というなら。。。こんな馬鹿げた話はない。。。ん？待てよ、もしかして。。。

「あの束さん。。。もしかして「黒騎士」も第四世代型なんですか？」

「「「「「！？」」「」「」」

その発言に全員が俺の方を向く。どうしたんだろ？

「。。。織斑、とんでもないことを言うな」

「え？」

俺なんか不味いことを言ったのか？

「はあく。いつくん、それはあり得ないよ。第四世代型は今の所私

にしか作れないだよ？もし「黒騎士」が第四世代型ならいっくんを殺そうとしている件に私が一枚噛んでいるってことになるんだよ？」

「……あ」

束さんの言う通りだ。何馬鹿なことを言っているんだ俺は。

「……束。前に言った件だが、あれがどういう機体か少しはわかったか？」

「……うん。さっぱりだね。まったく情報が無いし……」

束さんでさえも情報が無いって……じゃああの機体は一体……？

「わかったことがあるとすれば……あの機体は「存在するはずのない機体」ってことだけかな？」

「……え！？」「……」

「……どういう意味だ束」

「そのまんまの意味だよ。世界中が調べてもまったく情報が手に入らない。なら答えは一つ、「黒騎士」なんて機体は元々存在していない」。それしか考えられないんだよ」

「黒騎士」が存在しない……？そんな筈は無い。現に奴は俺を殺そうと俺の目の前に現れた。なのにそれが「存在しない」なんて一体どういふことなんだ？

「……今は考えても無駄ということか。話を戻すぞ、……束。「紅椿」の調整にはどれくらいの時間がかかる？」

「お、織斑先生!？」

「黒騎士」のことから福音の対策に話を戻す千冬姉。それに驚いたのはセシリアだった。この中で高機動パッケージを持っているセシリアだけだったため、作戦に参加できると思っていたんだろな。

「わ、わたくしと「ブルー・ティアーズ」なら必ず成功してみせませわ!」

「そのパッケージは量子変換してあるのか？」

「そ、それは……まだですが……」

「ちなみに「紅椿」の調整時間は七分あれば余裕だね!」

「よし。では本作戦は織斑・篠ノ之の両名による「あ、あの織斑先生……」「……何だ織斑」

千冬姉が作戦を決定する前に俺が遮る。

「そ、その……」「黒騎士」への対策はどうするんですか?」

「!……成る程な」

「はあ?何言ってるのよ一夏。「黒騎士」がここに来るはず無いじゃない」

「そうですね。今回は福音が勝手に暴走して起きた事態。「黒騎士」が関係するはありますがありませんわ」

「そうだよー夏。もし「黒騎士」が現れたら福音の暴走は「黒騎士」のせいってことになるよ？」

「奴に他の機体を暴走させる能力があるとは思えないが・・・」

確かに・・・、もし「黒騎士」にそんな能力があったら俺達をすぐに殺せる筈だ・・・。けど・・・。

「「黒騎士」が今回のことに関係していないとしても奴への対策は必要だと俺は思う」

奴は今まで俺が何か非常事態に遭ったびに現れた。なら今回も来る可能性は高い。

「・・・ふむ、確かに「黒騎士」への対策は必要だな。ならば・・・」

千冬姉が少し考える。そして・・・。

「本作戦の内容を少し変更する。織斑・篠ノ之の両名による目標の追撃と撃墜を目的とする。更に「黒騎士」が出現した時の対策として、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、鳳の四名には砂浜で待機してもらう。作戦開始は三十分後。各員、ただちに準備にかかれ」

「織斑先生！？それは・・・」

「山田先生、織斑の言う通り「黒騎士」が来ることを考えるべきだ。もし、福音との戦闘中に奴が現れれば間違いなくこの作戦は失敗する」

「た、確かに・・・」

「では、改めて作戦への準備にかかれ。手が空いているものはそれぞれ運搬など手伝える範囲で行動しろ。作戦要員はISの調整を行え。もたもたするな！」

「「「「「は、はい！」「」「」」」」

千冬姉に叱咤され俺達は急いで準備を始めた。この後俺は「白式」のセットアップとエネルギーの補給に高速戦闘について箒を除く皆からレクチャーしてもらった。箒は「紅椿」の調整を束さんにしてもらっていた。

（なんとしても成功させないとな。それと・・・）

また奴が来るなら・・・今度こそ「黒騎士」を倒してみせる。仲間達と共に。

?????Side

「・・・ふむ」

俺は奴等の作戦をとある場所で聞いていた。

「……篠ノ之束め。俺について余計なことを喋るとはな……後でどうなるか覚悟しておけ」

まあ、篠ノ之束に悪死悪鬼をするのは決定として、それにしても……。

「……ずれて」いるな。くくっ、それも面白いな」

また、今回も「本来」からずれていた。篠ノ之束を脅して奴特製の盗聴機で奴等の作戦を聞くことにしたのは正解だったようだ。

「……さて、これからどうなるか少し楽しみだな」

もしかしたらもつとずれるかもしれない。まあ、そうなればこっちも助かるがな。

「……あれ」が起こる可能性が消えるかもしれない」

だが、また別の可能性が起こるかもしれない。それはそれでかなり厄介だな。

「……これから先どうなるか……」

この世界が選ぶのは奴か俺か……。そして、どちらが消えるのか。

「……神のみぞ知る……。か。下らん」



この世界は俺が変えてやる。織斑一夏を殺すのはそのための第一歩に過ぎない。いずれ「奴等」も・・・必ず殺す。一人残らず・・・。そして篠ノ之束も殺し、最後に俺が「あれ」を起こす。それでこの世界は変わる。

(・・・必ずやってみせる。IS無き世界を作るためにも・・・)

俺は決意を固め、奴等との戦いへ備えて準備を済ませ始めた。

??? Side end

## 第二十話（後書き）

意見やアドバイス、感想などどんどん送ってください！後、間違いや誤字もあればお願いします。

## 第二十一話（前書き）

・・・かなり無理がある話かもしれませんが、  
けど、読んでいただければ嬉しいです。

## 第二十一話

一夏Side

時刻はもうすぐ十一時半。砂浜に俺達専用機持ちが集まっていた。福音をやるのは俺と篤、他の四人は「黒騎士」対策だ。にしても・・。

(「黒騎士」という言葉と海で暴走か・・・。この状況・・・、「あの事件」を連想させるな)

「白騎士事件」・・・。ISが世界中に知られることとなった事件。この名前を知らない人はまずいないだろう。

十年前、日本を攻撃可能な各国からミサイル二三四一発が一齐に八ツキングされ、制御不能に陥り・・・発射された。

誰もが混乱と絶望のまっただ中・・・世界で最初のIS。白銀の機体「白騎士」が現れた。中世の騎士を思わせる格好をした操縦者はなんと発射されたミサイル二二二一発を剣で「斬り落とし」、離れているものに対しては当時試作型の大型荷電粒子砲を「召喚して」打ち落とした。

超音速による格闘能力。物質を粒子から構成する能力にビーム兵器。世界は突然現れた脅威にして驚異に対して、愚鈍ではなかった。日本周辺各国はすぐに国際条約を無視して偵察機を飛ばした。

当時、最新鋭だった機体も多く投入されたが・・・、一方的な結果になった。「白騎士」はその強固な装甲とエネルギーシールドに守

られほぼ無傷だったが、各国の被害はミサイル二三四一発、戦闘機二〇七機、巡洋艦七隻、空母五隻、監視衛星八基を撃破あるいは無力化し、死亡者は0だった。

圧倒的なまでの戦力差があるにもかかわらず各国は部隊を投入したが……。 「白騎士」は日没と共に姿を消した。レーダーでも捉えることができず目視でも確認できない完璧なステルス能力。

その性能に……。世界は敗北した。そしてISは世界中の人々が知ることになり、あつという間に広がった。……。今でも「白騎士」のパイロットはわかっていないが……。おそらく千冬姉だろうな。現役時代に使っていたISとは違うけど。

そして……。今新たに世界中に知られている名……。 「白騎士」と真逆の存在……。 「黒騎士」。二度に渡ってIS学園を襲撃した事件を世界中は「黒騎士事件」と呼んでいる。

今も「黒騎士」について、世界中が情報を集めているが一切無い。あるのは奴と戦った時に手に入った分だけ。束さんは「黒騎士」は存在しないって言ってたけど……。

「一夏そろそろだぞ」

どうやらそろそろ時間のようだ。俺と筈は少し距離を置いて並んで立ち、一度目を合わせてうなづく。……。他の四人からなんか殺気を感じるんだけど……。と、とにかく始めるか。

「来い、 「白式」」

「行くぞ、 「紅椿」」

全身が一瞬だけ光り、俺の身体に「白式」が展開された。

「じゃあ、箒。よろしく頼む」

「本来なら女の上に男が乗るなど私のプライドが許さないが・・・、今回は特別だぞ」

俺は攻撃を担当するため、移動はすべて箒に任せることになる。つまり俺が箒の背中に乗る必要があるのだ。それを聞いた箒はイヤそうなことを言っていたのだが・・・、気のせいか？さつきから機嫌がいいように見える。

（大丈夫だろうか・・・？）

箒はまだ「紅椿」での実戦はしていない。いくら東さんが機体を調整しても箒自身はそうはいかないし・・・。それに「黒騎士」が来る可能性もある。

（何かあったら俺がフォローしないとな）

そう思い、俺は気を引き締める。

「それにしても、たまたま私達がいたことが幸いしたな。私と一夏が力を合わせればできないことなどない。そうだろうか？」

「・・・ああ、でも箒。先生達も言っていたけどこれは訓練じゃない。実戦では何が起こるかかわからないし、「黒騎士」も来るかもしれない。十分に注意してー」

「無論、わかっているさ。ふふ、どうした？怖いのか？」

「そうじゃねえって。あのな、箒——」

「ははっ、心配するな。お前はちゃんと私が運んでやる。大船に乗ったつまりでいれば——」箒「……なんだ鈴？」

浮かれている箒に鈴達が忠告した。

「あんだ、ちょっと浮かれているでしょ」

「さっき一夏さんが言った通り、これは実戦ですわ」

「そんな調子で戦ったら、致命的なミスを犯すよ」

「福音と戦っている間に「黒騎士」が来ることも充分あり得る。もっと気を引き締めろ」

「……ふん。こんな時に私が浮かれているわけないだろう。例えば「黒騎士」が来ても私と一夏で倒せば問題ない」

……駄目だ。鈴達が忠告してもまったく態度が変わらない。それに「黒騎士」を一夏と私で倒せばいいなんてことまで言い出した。正直ここにいる俺達だけで勝てるかどうかもわからないというのに。

『織斑、篠ノ之、聞こえるか？今回の作戦の要は一撃必殺だ。短期間での決着を心がける。そしてオルコット、デュノア、ポーデヴィツヒ、凰、お前達は「黒騎士」が現れれば即座に二人の援護をしろ』

「「「「「了解」「」「」「」」」」」

ISのオープン・チャンネルから千冬姉の声が作戦について再度説明された。

「織斑先生、私は状況に応じて一夏のサポートをすればよろしいですか？」

『・・・そうだな。だが、無理はするな。お前は「紅椿」を使い始めてからの実践経験は皆無だ。突然、なにかしらの問題が出るとも限らない』

「わかりました。できる範囲で支援をします」

一見落ち着いた返事をする筈だが、やはり口調は喜色に弾んでいる。セシリア達も心配しているようだ。

『・・・織斑』

「は、はい」

いきなり千冬姉がプライベート・チャンネルで通信してきた。俺は慌てて回線を切り替えて、返事をする。

『どうも篠ノ之は浮かれているな。あんな状態ではなにかを仕損じるやもしれん。いざとときはサポートしてやれ』

「わかりました。ちゃんと意識しておきます」

それから千冬姉はすぐにオープン・チャンネルに切り替え、号令をかけた。



『では、はじめ!』

号令と共に箒は俺を背に乗せたまま、一気に三百メートルまで飛翔した。なんてスピードだ……!この速さ……「瞬時加速」と同じか、それ以上だ……!箒は更に上昇し、たった数秒で五百メートルに到達した。

「暫時衛星リンク確立……情報照合完了。目標の現在位置を確認。……一夏、一気にいくぞ!」

「おう!」

箒は「紅椿」を加速させ、脚部と背部の装甲がバカリと開き、そこから強力なエネルギーを放出する。

(これが「雪片式型」と同じ「展開装甲」……そしてその完成型か)

「紅椿」の「展開装甲」は攻撃・防御・機動の全てに即時対応できると束さんは言っていた。しかも、ISアーマーのほぼ全てがこの「展開装甲」タイプなのだとか。けど……。

(それだけのエネルギーを一体どこから……)

「見えたぞ、一夏!」

「!!!」

ハイパーセンサーから目標を映し出す。「銀の福音」はその名の通

り全身が銀色で、頭部から生えた一对の巨大な翼が特徴的だ。資料によれば大型スラスタと広域射撃武器を一体化させたものらしい。  
(資料にあった多方向同時射撃って、どんな攻撃なんだ?)

高速で飛翔する福音を追いながら、俺は「雪片式型」を握りしめる。

「加速するぞ！目標に接触するのは十秒後だ！一夏集中しろ！」

「ああ！」

更に「紅椿」のスピードを上げる筈。その速度は「黒騎士」に匹敵する速さで、福音との距離をぐんぐん縮める。

「うおおおおっ！」

俺は「零落白夜」と「瞬時加速」を同時に使い、間合いを詰める。

(行ける！！)

「零落白夜」の刃が福音に触れる瞬間。福音はなんと最高速度のままこちらに反転、後退の姿となって身構えた。

(くっ！一度体勢を立て直しーいや、このまま押し切る！)

どちらにしてもこの間合いだ。引くのは無理がある。ならば、反撃が来る前に決着をつける！

『敵機確認。迎撃モードに移行。「銀の鐘」、稼働開始』

福音から抑揚のないの機械音声が聞こえた。だが、それには明らかに「敵意」を感じた。

そしてまた「零落白夜」の刃を振るうが、福音はそれをぐりん、と体を一回転しわずか数ミリの精度でかわす。

「くっ……！あの翼が急加速をしているのか！？」

高出力の多方向推進装置は他にも多く存在するが、ここまで精密な急加速ができるとは……。改めて「重要軍事機密」の意味を思い知らされる。

「箒！援護を頼む！」

「任せろ！」

長期戦になればこちらが圧倒的に不利だ。俺は再度福音に斬りかかるが……。

「くっ！」のっ……！！」

またひらりと紙一重でかわされる。「零落白夜」の残り時間が迫っていることもありつい大振りの一太刀を浴びせようとするが、福音にその隙を付かれてしまう。

「……！！」

スラスターでもある銀色の翼。その装甲の一部がまるで翼を広げるかのように開く。これは……砲口か！そして一斉に開いた砲口から大量の光の弾丸が撃ち出される。

「ぐうつ!?!」

弾丸は羽のような形を高密度に圧縮されたエネルギーでいくつかが「白式」の装甲に刺されると「爆ぜた」。

爆発するエネルギー弾丸。それが福音の主装備らしい。それにしても……。

(なんて連射速度だ……!)

まるで「黒騎士」の「シヴァ」の「ツインガトリングモード」並だ。幸い「黒騎士」より命中精度は低いが、なにせあの爆発弾だ。少しでも触れれば、そこを爆発でえぐられる。

「箒!左右から同時に攻めるぞ!左は頼んだ!」

「了解した!」

俺と箒は複雑な回避を行いながらも連射を続ける福音に二面攻撃を仕掛けるが、俺達の攻撃はかすりもしない。福音は常に回避をしながら反撃までしてくる。

「一夏!私が動きを止める!」

「わかった!」

箒は二本の刀で突撃と斬撃を行いながら腕部展開装甲から発生したエネルギー刃で福音を狙う。

(こっちの機体も化け物だな・・・！)

箒は更に「紅椿」の速さと「展開装甲」を駆使して福音の距離を詰める。この猛攻で福音が防御を使いはじめた。・・・これならいける！そう思つて「雪片式型」を握りしめるが、福音が「銀の鐘」で反撃してきた。

『La・・・』

甲高いマシンボイスと共に全方位に向けて全ての砲門からエネルギー弾が放たれた。

「やるなっ・・・！だが、押し切る！！」

箒が全てのエネルギー弾を紙一重でかわし、迫撃する。隙ができたが・・・。

「一夏！？」

「うおおおっ！！」

俺は福音の方ではなく直下海面へ向かい「瞬時加速」と「零落白夜」の二つを最大出力で行い、一発の光弾に追いつきそれをかき消す。

「何をしている！？せっかくのチャンスをー」

「船がいるんだ！海上は先生達が封鎖しているはず・・・ああくそつ、密漁船か！」

けれど、だからといって見殺しにはできない。「雪片式型」の光が

消え、「展開装甲」が閉じる。エネルギー切れ、か。これで唯一のチャンスと作戦の要も無くした。

「馬鹿者！犯罪者などをかばって……。そんなやつらは——！」

「箒——！」

「ツ——！？」

「箒、そんな……そんな寂しいことは言つな。言つなよ。力を手にしたら、弱いヤツのことが見えなくなるなんて……。どうしたんだよ、箒。らしくない。全然らしくないぜ」

「わ、私、は……」

明らかな動揺を浮かべ、刀を落とす。そしてその刀が空中で光の粒子となって消えた。具現維持限界だ。つまりエネルギーが切れたということだ。そして今は訓練ではない。実戦だ。

「箒いいつ——！」

俺は刀を捨ててすぐに箒の元へ向かう。残りのエネルギー全てを使つての「瞬時加速」。

（頼む！間に合ってくれ——！）

福音が再び一斉射撃を行おうとしていた。しかも、箒に照準を向けている。エネルギー切れのISの装甲は恐ろしく脆い。絶対防御分のエネルギーが残っていたとしても、あの連射攻撃を一度に受けたらひとたまりもない。

(頼む！頼む、「白式」！頼むっ！！)

間一髪の所で箒と福音の間に割って入れたが……。

「ぐああああっ！！」

箒を庇うように抱きしめた次の瞬間、福音の攻撃が俺の背中に降り注いだ。今の「白式」にエネルギーが残っているはずもなく、何十発の弾丸が俺に直撃する。アーマーは破壊され、身体中が悲鳴を上げる。だが……。

『警告！敵ISにロックオンされています！』

ハイパーセンサーが告げた。福音がもう一度俺達に向けて射撃を行おうとしていた。駄目だ、「白式」にもうエネルギーは残っていない……。この状態で攻撃を受ければ確実に死ぬ。せめて箒だけでも！俺が覚悟を決めた次の瞬間……。

ドゴオオオオン！！

福音の方から轟音が発せられた。セシリア達が助けてくれたのか……。？それを確認したくても気を失いそうな痛み of せいで見ることができなかった。俺は箒を一度だけ見た……。無事 of ようだ。何泣きそうな顔をしているんだよ箒……。まったく……。あ、リボン焼き切られてるけど……。髪を下ろしたのも悪くねえな……。

「一夏っ、一夏っ！一夏あっ！！」

「う……。あ……」

俺は海に落下し始めた。最後の力振り絞って箒の頭を守るように抱きしめる。大きな水音と共に全身に着水の衝撃が襲ってきた。俺は海面越しに福音の方を見る。俺を助けたのは・・・「あいつ」だった。何であいつが・・・？と思いながら、俺は気を失った。

一夏Side end



## 第二十一話（後書き）

意見やアドバイスを、感想などどんどん送ってください！後、間違いや誤字もあればお願いします。

## 第二十二話（前書き）

オリジナルです。また無理がある話になったかも……。読んでいただければ嬉しいです。

## 第二十二話

千冬Side

私は今啞然としていた。モニターであり得ないことが映し出されたからだ。

「ど、どういうことですか!? な、なぜこんなことが!？」

山田先生が慌てているが無理もない。私もはつきり言ってこの状況があり得ないと思っていた。なぜなら……。

「なぜ……、「黒騎士」が織斑君を助けたんですか!？」

そう、福音の攻撃から一夏を助けたのはあの「黒騎士」だった。これは一体……。もしか……。

「……山田先生。砂浜で待機している四人に織斑達を助けるように伝えてくれ」

「お、織斑先生!？ですが彼女達が織斑君達を助けている間に「黒騎士」が攻撃する可能性も……」

確かにその可能性はある。だが……。

「今の「黒騎士」にそのつもりはまったくないだろう。それよりも織斑達を助けるほうが先だ」

「な、なぜそう言い切れるのですか?」

「……「黒騎士」が織斑を助ける理由があるとすればおそらく……自分の手で織斑を殺すためだろうな」

「な、成る程……。しかしなぜ「黒騎士」はそこまでして自分の手で織斑君を殺そうとしているのでしょうか？」

私もそこが気になっていた。だが、奴の目的の意味がわからない以上考えても無駄なだけだ。ならば……。

「理由がどうあれ今の「黒騎士」は織斑を助けようとしている。だったら私達はそれを利用してもらおう」

「そうですね……。」「黒騎士」が福音の気を反らしている今が織斑君達を助けるチャンスですし……。」「黒騎士」はどうしますか？」

「放って置くのが一番だろう。」「黒騎士」と福音の戦いに巻き込まれたらあの四人ではひとたまりもない」

それに……。、どうやら「黒騎士」は我々が一夏を助けるための時間稼ぎをしているようだしな……。

「ですが……。このまま「黒騎士」が福音を倒してしまうことになればどうしますか？」

「おそらく今の「黒騎士」にそんなつもりはないだろうが……。、そうなればそのまま福音を回収するだけだ」

「……では、もし福音が「黒騎士」を倒してしまった場合は……」

「？」

「……福音が「黒騎士」を倒す……か。まずあり得ないな。今まで奴の戦いを見れば暴走している福音に負けるとは思えない。」

「……もしそうならば「黒騎士」を捕まえる最大のチャンスになるが……、無理だろうな」

「……一応「黒騎士」を捕まえるために他の教師達に連絡しておきますか？」

「……そうだな。万が一に備えて置いてもいいだろう。それとすぐに四人に連絡を」

「は、はい！」

(今回だけは……「黒騎士」に礼を言いたい所だな)

だが、次からはまた敵になる。そう思うと少し複雑な気持ちになった。

????? Side

「……やれやれ、俺がこんなことをすることになるとはな」

『敵機確認。迎撃モードに移行』

「・・・ふん」

福音から無機質な機械音声が鳴り、「銀の鐘」が俺に向けて一斉発射された。

「・・・来い「シヴァ」」

俺は福音の射撃をかわしながら「シヴァ」を呼び出すが・・・、流石にあれだけの弾丸を全てかわすのは少し無理があるな。

「・・・ツインガトリングモード」

福音の射撃に対して俺は「シヴァ」の「ツインガトリングモード」で対抗する。「シヴァ」のビーム弾と「銀の鐘」のエネルギー弾がぶつかり合い消滅する。

「・・・福音を倒したい所だが・・・、そうすれば奴と戦う機会を失うだけだな」

俺の獲物を殺そうとした福音を叩きのめしたいが・・・、篠ノ之束に何されるかわからんな。ただでさえ、今奴の「頼み」を破っているからな。

ビュビュビュビュン！！

「チツ！・・・考えてる時ぐらい待つてほしいものだな！」

福音がまた「銀の鐘」で射撃を行ってきた。・・・ふん。

ダダダダダダッ！！

俺はさっきと同じように「シヴァ」で相殺するが……。

「……全部は無理か。仕方ないな」

全ての弾丸を消すことはできず残ったやつはかわす。「シヴァ」が完全な状態なら簡単に消せたのだが……。

「……文句を言う前になんとかするか」

織斑一夏の方を見るが……、まだ救援に来ていないようだ。

「……はあ、後どれくらいこいつとやらねばならんだ」

思わずため息が出てしまう。しかし、あそこで福音を攻撃しなければ織斑一夏は間違いなく死んでいた。ずれすぎだろまったく……。

「……奴は俺が殺す。お前ごときにやらせはしない」

俺の言葉に反応したかどうかは知らないが福音が攻撃してくる。……これ以上福音に攻撃するわけにはいかないな。俺が福音を倒せばどんなことになるか。……少しやってみたい気もするが。

「……当たると思つか？そんな攻撃が」

俺は海上すれすれの所を飛行しかわす。福音の弾丸で派手な水しぶきが上がる。

「……攻撃できないというのも嫌なものだな」

「あの武装」をここで使うわけにはいかないからな……。なら、防ぎ続けるしか無いな。

「……さつさと来てくれよ。俺は気が長い方ではないからな」

「……あんまり長いことこうしているとイライラしてくるな。……もう福音を倒すか？」

「……いや、それは不味いな」

今考えたことを振り払う。……篠ノ之束のせいでストレスが溜まっているせいだな。終わったら奴でストレス発散してやるか。くっつ。

「……レーヴァテイン」「フェンリル」

俺は「あの武装」以外の武装を全て展開し、福音に対抗する。

ビュビュビュン！！

「……全て叩き落とす。「アームガトリングモード」」

俺は「シヴァ」を変形させ、左腕に纏う。「シヴァ」で撃墜しながら「レーヴァテイン」と「フェンリル」で防ぐ。

「……俺の機体もリミッターを外しているとはいえ……。長時間戦うのは避けたいな」

織斑一夏との戦いに備えてエネルギーはできるだけ残しておきたい。



かといってここで引けば織斑一夏が殺されるかもしれん。

「……織斑一夏を殺そうとしているやつが織斑一夏を助ける……か」

中々滑稽な状況だな。……ん？

「……あれは……ようやく来たか」

ハイパーセンサーで見ると代表候補生の四人がこっちに向かっていった。……後もう少しだな。

「……福音の気を反らさないとな」

俺と戦っているとはいえ、奴等が福音の攻撃を全てかわすとは思えない。元々福音の武装は一对多に向いている。

「……福音の攻撃を防ぎながら奴等を守るのは俺でも無理があるな」

まあ、本来奴等を守る理由など無いのだが……、織斑一夏を死なせないためだ。仕方ないな。

「……喰らえ」

俺は「シヴァ」を福音に向けて発射する。奴に当てないようにしたが……、どうだ？

『敵機武装情報を変更。最大出力での射撃を開始』

「……よりによってそれか？」

当たてないのだから加減してほしいものだ。

「……やっとか」

福音の一斉射撃を回避しつつ、織斑一夏の方を見ると代表候補生組が奴を旅館まで連れて行くこうとしていた。よし……後は……。

「……適当に戦って引くだけだな」

後少し時間稼ぎをすれば終わりだ。

『他の機体を確認。一斉射撃を行う』

「なにっ!?!」

福音が他の機体に気づきさっきと同じ一斉射撃の準備をしていた。これは不味い! 奴等は福音が攻撃することに気づいていても織斑一夏と篠ノ之箒を運んでいるこの状況では対処は無理がある。

「……チッ!」

俺は急いで代表候補生組の元へ向かう。

「「黒騎士」!?!一夏を殺すつもりー!」

「黙っている!?!」

「なっ……、いきなりこっちに来てそれはー！」

「待って！福音が！」

福音の方を見るとすでに一斉射撃をしようとしていた。

「くっ！この状況では……！」

やはり今のこいつらでは全部は防げないか……！ならば！

「織斑一夏を助けたければ協力しろ！」

「はあ！？なんでアンタに力を貸さなければなんないのよ！」

「そうですね！散々一夏さんを殺そうとしていたくせに今更なにを言ってますの！？」

「この状況で協力なんてできるわけないでしょ！一体何を考えてー！」「待て！」ラウラ！？」

全員がラウラ・ボーデヴィツヒの方を向く。……この状況を一番理解しているようだな。

「確かにこいつは信用できないが一夏達がいるこの状況を何とかするためには「黒騎士」の力が必要だ！私達だけでは福音の攻撃を防ぎきれない！」

「た、確かにそうだけど！」

「けどよりによって「黒騎士」の力を借りるなんてー！」

「来るぞ！」

「くくく！」「くくく」

福音が「銀の鐘」で一斉射撃を行う。俺はすぐに「レーヴァテイン」を仕舞い「シヴァ」を「ツインガトリングモード」にし、福音の攻撃を相殺するが……。

「くつ！全部は無理か！？」

全てを消すのはやはり無理がある。どうする！？

「ああっ！もう今回だけよ！」

「あなたを信用したわけではありませんわ！」

「一夏を助けるために協力するだけだからね！」

「我々が貴様に力を貸すとは思わなかったがな！」

「……ふん。こちらの台詞だ！」

代表候補生組と共に福音の弾丸を消していく。……やれやれまさかこんなことになるとは……。福音の弾が全て消えたのと同時に俺は「瞬時加速」で福音に近付き蹴りで吹き飛ばす。

「……さつさと織斑一夏と篠ノ之箒を連れて失せる。それと次会う時は織斑一夏を殺す」

「なっ……！アンタねえ！」

「やっぱりここで倒しておくべきですわ！」

「無理だよ！こんな状態で勝てるわけないでしょ！」

「今は一夏と筭を連れて帰るのが先だ！さっさと戻るぞ！」

俺と福音がやり合っている間に奴等がここから離れた。……ふう、では俺もここから離れるとするか。

「……じゃあな福音」

俺は海の中に入りステルスモードになる。エネルギーを補給しないといかな。一度篠ノ之束に会うとするか。俺はそのままその場を離れた。

千冬Side

「……「黒騎士」離脱しました」

モニターから「黒騎士」の反応が消える。……とりあえず何とかなったか。

「しかし……あの「黒騎士」が織斑君を助けるために凰さん達と協力するとは……」

「今回は「黒騎士」に感謝せざるをえんな。次来る時は敵だろうが」  
それにしても……、まさか福音と戦って一撃も受けていないとは  
な……。つくづく化け物だな奴は、その気になれば福音を倒せる  
だろう。なのに何故そうしなかった？

「……謎が多すぎるな」

「織斑先生？」

「何でもない。それよりすぐに救護班を呼べ。織斑の手当てを、後  
作戦メンバーには待機と伝えてくれ」

「わかりました。すぐに準備してきます」

山田先生が部屋を出ると……。私は手を強く握りしめる。

「情けない姉だな私は……」

弟を助けることができず一夏の命を狙っている奴に助けてもらって  
いる。これで元世界最強とはな……。本音を言えば一夏の傍にい  
てやりたい。しかし立場がある以上それはできないし、してもあま  
り意味が無い。

「……一夏」

私は誰にも聞こえない程の小さな声で呟いた。

「さあ〜て黒くん？私に何か言うことがあるんじゃないのかな？」

「・・・ああでもしなかったら、織斑一夏は死んでいたぞ」

私は今とある場所で「ラグナロク」の補給をしている。まったく福音と戦うなんて滅茶苦茶だよ黒くん。

「それについては感謝しているけど・・・私の「頼み」を破ったってことには変わらないよね？」

「・・・ああ、そうだな。で？何をすればいい」

ふふふ〜、素直だねえ黒くん。さ〜て、何しようかな？

「う〜ん。「ラグナロク」のデータをーって、待って黒くん！私の首元にナイフを突きつけないで！」

「・・・ここで殺したほうがいいようだな」

「あ、あはは〜。冗談だよ黒くん。私がそんなことをすると思う？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

え？何その「今更なに言っているんだ？」って目は？や、やめて！東さんをそんな目で見ないで！

「じ、じゃあこつこつのは？」

私は黒くんの目を見ないようにしつつ、ある提案を持ちかける。

「……断る、と言いた方がいいだろう。ただし、一回きりだ」

「まあ、しゃあないね。それでいいよ」

やれやれ、それにしてもまさか福音程度に負けちゃうなんて……。ちよつと甘く見ていたかな？

「ねえ、黒くん。君が最初からいっくんと戦いたかったのはいっくん達が負けるの知っていたからかい？」

「……いや、別の理由だ。まあ、奴等が負けるとは予想していたがな」

別の理由……。ね。聞いても恐らく無視するだろうね。

「……後どれくらいで補給が完了する？」

「大体三十分あれば充分だね。でもなんで補給するのかな？」

いっくんが倒れた以上、ここで黒くんが戦う理由が無くなるはずだ。なのに何故補給するのだろうか。

「……黙ってやれ」

「……はい」



黒くんに睨まれた。・・・すごく怖いんだけど・・・ま、それよりちゃちゃっとやりますか。

「ね。黒くんそういえばさ。なんで「ラグナロク」の「展開装甲」を使わないの？」

あれを使えばかなり楽になるはずだが、黒くんは今まで一度も使っていない。少し気になる。

「・・・お前作戦会議の時に言ったことを忘れたのか？」

黒くんが呆れながら言った。えと作戦会議の時・・・あ、成る程そういうことが。

「私が疑われないようにするためだね」

「・・・そうだ。第四世代型の特徴である「展開装甲」は今お前にしか作れない。そんな時に俺が「展開装甲」を使ってみる。真つ先にお前が疑われるだろが」

納得。黒くんとしてはまだ私が必要だから使うわけにはいかないよね。使ったりしたら世界中が私を必死になって探すだろうし。(今も必死になって探してるけど)私が「ラグナロク」の調整をしている以上、下手なことはできないね。

「ふふん。じゃあ黒くん私にマッサージしてね」

私は上から目線で言つと・・・。

「……いいだろう。マッサージしてやる（全身の骨が粉々になるまでな）」

「……あれ？なんか今とてつもなく嫌な予感がしたような……？」

「あ、あはは。や、やっぱいいよ。私はどこも疲れていないしね」

「……毎日変な体勢でいることが多いだろう？なら、尚更するべきだな」

「い、いいよ。わざわざ黒くんにしてもらわなくても。自分でマッサージ機でも作ればいいんだし」

な、なんでだろう！？断らなければ東さんの命が消えてしまう気がする！

「……マッサージ機よりもずっと上手く折……ごほんごほん。上手くやるぞ？」

「待って！今折るって言おうとしなかったかい！？」

ま、まさか黒くん……私の骨をへし折る気なのかい！？ま、まずい……！何としてもマッサージ（という名の拷問）を阻止しないと東さんの明日が消えてしまう！

「く、黒くん。私はさっき言ったやつを「ラグナロク」に仕込むからまた後でね！」

「……チツ、わかった」

やっぱり黒くん私に拷問するつもりだったんだね……。危ない所だったよ。次からは気をつけないと……。

「……補給と仕込みが完了したらすぐに言えいな」

「オツケー！」

断ったら恐ろしいことになりそうだしここは素直にしておこう！

「……それまでゆっくりするか」

「そうしておきなよ黒くん。じゃあやりますか」

私は「ラグナロク」の仕込みを始める。補給が完了するまでに終わらせませるか。

東Side end

## 第二十二話（後書き）

意見やアドバイスを、感想などどんどん送ってください！後、間違いや誤字もあればお願いします。

## 第二十三話（前書き）

福音戦決着です。後「白式」に変化が現れます。滅茶苦茶だと思いますけど……。楽しんでいただければ嬉しいです。次は黒騎士戦です。

## 第二十三話

### 第Side

旅館の一室に敷かれたベッドに一夏はもう三時間以上も横たわっていた。一夏の身体は福音の攻撃でせいで至る所に包帯が巻かれている状態だった。

（私のせいだ……。私がしっかりしていなかったから、一夏はこんな目に……。！）

作戦の前に一夏は私に何度も忠告した。鈴達も言っていたのに……。それをまともに聞こうともしなかった。

（私は……。どうして、いつも……。）

いつも力を手に入れるとそれに流されてしまう。それを使いたくなくなってしまう。暴力への衝動を抑えられなくなってしまう。

（私はなんのために修行をしていたのだ……。！）

私にとって剣術は己を鍛えるものではなく、律するためのもの枷だった。自分の暴力を押さえ込むの抑止力。だが……。それはちよつとしたことで壊れてしまう境界線だったのだと思い知らせられた。

（私はもう……。ISには……。）

私が一つの決心をつけようとしたとき、突然ドアがバンツ！と乱暴に開いた。その音に一瞬驚いたが今の私にはそっちに向く気力さえな

かった。

「あー、あー、わかつりやすいわねえ」

部屋に入ってきたのは・・・鈴だった。そして私の隣にやってくる。

「・・・・・・・・」

「あのさあ。一夏がこうなったのは、あんたのせいでしょう」

何も言えなかった。鈴の言う通り私のせいで一夏はこうなってしまった。ISの操縦者絶対防御、その致命領域対応によって一夏は昏睡状態になっており、ISのエネルギーが回復するまで目を覚ませなくなってしまう。

「・・・・・・・・」

「で、落ち込んでいますってポーズ？・・・つぎけんじやないわよ！」

いきなり鈴は私の胸ぐらを掴み、無理矢理立たせる。

「やるべきがあるでしょうが！今戦わなくてどうすんのよ！」

「私・・・は、もうISは・・・使わない・・・」

「ツーーー！！」

私がもうISを使わないことを言うと鈴に頬を打たれ床に倒れる。鈴は私をまた締め上げるように振り向かせた。

「甘ったれてんじゃないわよ……。専用機持ちっつーのはね、そんなワガママが許される立場じゃないのよ。それともアンタはー」

鈴と目が合う。その瞳にあるのは真つ直ぐな闘志だった。

「戦うべきに戦えない臆病者か」

「……………ど……………どうしろと言っんだ！もう敵がどこにいるかもわからない！戦えるなら私だって戦う！」

鈴の言葉で私の闘志に火がつく。私だってこのまま終わりたくない！そう思い立ち上がると鈴がふうつとため息をついた。

「やっとやる気になったわね。……………あーあ、めんどくさかった」

「な、なに？」

まさか……………私のためにわざとああ言ったのか？

「場所ならわかるわ。今ラウラがー」

「出たぞ。ここから三十キロ離れた沖合上空で福音を見つけた。ステルスモードになっていたが、どうやら光学迷彩は持っていないようだ。衛星による目視で発見したぞ」

鈴が話している途中でラウラが手にブック端末を持って部屋に入ってきた。それを見ると鈴はにやりとする。



「流石ドイツ軍特殊部隊。やるわね」

「ふん。それよりお前の方はどうなんだ？準備は終わったのか？」

「勿論。「甲龍」の攻撃特化パッケージもインストール済み。シャルロットとセシリアは？」

「ああ、それならー」

ラウラがドアの方を見るとすぐに二人が入ってきた。

「たった今完了しましたわ」

「こつちも準備万端だよ。いつでもいける」

「で、あんたはどうするの？」

専用機持ちが全員揃い、私の方を見る。私の答えはもう決まっている。

「私は・・・戦う。戦って勝つ！今度こそ福音を倒す！」

「決まりね。じゃあ作戦会議をするわよ。今度こそ福音を確実に墜とすために」

「ああ！」

私達は作戦会議を始めた。

一夏Side

ざあ・・・。ざああん・・・。

(ここは・・・?)

遠くから聞こえる波の音に誘われて俺はどこかもわからない砂浜を歩いていた。

(夏・・・なのか?たしか俺は・・・)

なにかがあつた気がするが思い出せない。ここがどこで今がいつなのかわからない。俺はいつの間にか制服を着ていて、ズボンの裾はすでに折り返した状態で素足のまま歩いていた。手にはいつ脱いだのか靴がある。

「ー。ー」

ふと歌声が聞こえた。とてもきれいで元気な歌声。それがなぜか気になり、声のする方に向かう。

「ラ、ラク　ラララ」

少女がそこにいた。その少女は波打ち際で踊るように歌っていた。踊るたびに眩いほどに白い髪が揺れ、それと白いワンピースは時折風に煽られふわりと舞う。

(・・・ふむ)

俺はなぜか声をかける気がせず、近くにある流木に座って少女を見つめた。

??? Side

(・・・この感じは・・・)

俺は今「ラグナロク」から不思議な感覚をしているのを感じた。

(・・・もうすぐか)

後少しすれば奴の「あれ」が終わる。それが俺には「わかる」。「知っている」ではなく「わかる」のだ。

(・・・「ラグナロク」だからか・・・?)

この機体だからこそ、あの機体の変化を感じているのかもしれない。

(・・・元々俺も「ラグナロク」も「存在しない」。それにISS自体完全に解明されていないからな)

いや、例え解明されてもこの現象がわかるわけがないだろうな。

(さて・・・向こうはどうだ・・・?)

俺が向こうを見ると・・・福音がいた。そろそろ奴等が来る頃だな。

（・・・ゆっくり見物させてもらおうか）

これから始まる福音と奴等の戦い。そしてそれが終わればようやく俺が戦うことができる。

（・・・正直言って織斑一夏と戦えない可能性があったからな・・・）

だが、また「何か」が起こる可能性もある。気をつけなければいかな。そう考え、向こうを見ることにした。

第Side

『・・・』

海上二百メートルに福音は静止していた。まるで胎児のような格好でじつづくまっている。「こちらにはまだ気づいていないな。」

『ラウラ頼むぞ！』

『ああ！』

プライベート・チャンネルでラウラに合図を送る。直後に福音にラウ

ラが放った八〇口径レールカノン「ブリッツ」の砲弾が命中した。

「初弾命中！続けて砲撃を行う！」

福音から五キロ離れた場所で浮かんでいるラウラは、福音が反撃に移るよりも早く次弾を発射した。

（敵機接近まで・・・四〇〇〇・・・三〇〇〇ーっ！予想より速い！）

ラウラと福音の距離があっという間に縮まる。その間もラウラは砲撃をしているが福音の攻撃によりまったく当たっていなかった。

「ちいっ！」

砲撃は反動を相殺するため機動と両立するのは難しい。機動力に特化している福音はラウラへ右手伸ばしながら接近する。だが問題ない。

「ーセシリア！！」

ラウラが叫ぶと同時に福音がステルスモードになっていたセシリアによって弾き飛ばされる。その手には大型B Tレーザーライフル「スターダスト・シューター」が握られている。

『敵機Bを確認。排除行動へと移る』

「遅いよ」

セシリアの攻撃をかわす福音を真後ろからシャルロットが襲つ。さ

つきのセシリアと同じステルスモードによる襲撃を行い、福音を更に追撃して体勢を崩すがすぐに「銀の鐘」で反撃した。

「おっと。悪いけど、この「ガーデン・カーデン」は、そのくらいじゃ落ちないよ」

今のシャルロットは実弾シールドとエネルギーシールドの両方を装備しており、その二つの盾で福音の弾丸を防いでいる。

そして、シャルロットの十八番「高速切替」で武器を呼び出し、タイミングの見計らって反撃する。シャルロット、セシリア、ラウラ、三人から射撃で福音に少しずつダメージを与える。

『・・・優先順位を変更。現空域からの離脱を最優先に』

「させるかあっ!」

一斉射撃を行った福音は、次の瞬間離脱しようとするがその前に私と背中に乗った鈴が海面から突撃する。

「離脱するより先にたたき落とす!」

背中から鈴が飛び降り、増設された両肩の衝撃砲が一斉に放たれた。いつもの見えない弾丸ではなく赤い炎を纏った弾丸だ。

「やりましたの!？」

「まだよ!」

『「銀の鐘」最大稼働 | 開始』

衝撃砲の直撃を受けてもまだ福音は倒れておらず、翼を外側に向けてエネルギー弾の一斉射撃を放った。

「くっ！！」

「篤！僕の後ろに！」

私はすぐにシャルロットの後ろに回る。前回の失敗をふまえ、「紅椿」の「展開装甲」は防御時に自発作動しないように設定したのだ。そうできたのは防御をシャルロットに任せられるからだが・・・。それでも福音の異常な連射を受け続けるのは危うく、シールドが一枚完全に破壊された。

「ラウラ！セシリア！お願い！」

「わかっている！」

「お任せを！」

シャルロットが後退すると同時にラウラとセシリアが左右から射撃をする。

「足が止まればこっちのもんよ！」

そして真下から鈴が突撃し、「双天牙月」と衝撃砲で福音に攻撃する。狙うは「銀の鐘」。

「もらったあああっ！！」

福音の攻撃を全身に浴びながらも鈴の斬撃は止まらず、衝撃砲の弾丸を放つ。そしてついに福音の片翼を斬り落とした。

「はあっ、はあっ……！どうよー！ぐっ！？」

片翼だけに翼になっても福音はすぐに体勢を立て直し、鈴に回し蹴りを叩き込み海に墜とした。

「鈴！おのれっー！！」

私は両手に刀を持ち、福音に斬りかかる。一瞬対応が遅れた福音の右肩に刀を食い込ませた。獲った！と思った次の瞬間、福音は左右両方の刀を手のひらで握りしめる。

「な、なに！？」

福音に両腕を最大まで広げられ、無防備な状態になる。それを狙い、残った翼の砲口を放とうしていた。

「箒！武器を捨てて緊急回避をしろ！」

だが、私は武器を手放さない。ここで引くわけにはいかない！

（ここで引いて、何のための……、何のための力かっ！！）

エネルギー弾が当たる寸前に、私はぐるんと一回転すると同時に爪先の「展開装甲」からエネルギー刃を発生させ、もう片翼を斬った。両翼を失った福音は海面に墜ちていった。

「はっ、はあっ……！！」



「無事か!？」

「私は・・・大丈夫だ。それより福音はー」

「私達の勝ちー」

ラウラが続きを言おうとした瞬間、海面から強烈な光によって吹き飛ばされた。光の中には青い雷を纏った福音がうずくまっていた。

「な、何だこれは!?! 一体何が起きているんだ!?!」

「まずい!これは・・・「第二形態移行」だ!」

ラウラの声に反応したかのように福音が顔を向ける。バイザーに覆われた顔からは表情は読み取れないが確かな敵意を感じた。私達はすぐに対応しようとしたが・・・遅かった。

『キアアアアアア・・・!!』

「なにっ!?!」

福音は野獣の咆哮のような声を出した次の瞬間、ラウラに襲いかかる。あまりにも速すぎたためラウラは反応できず足を掴まれる。そして、先程切断した頭部からゆっくりとエネルギーの翼が生えた。

「ラウラを離せえっ!」

シャルロットがすぐさま武装を切り替え、近接ブレードでの突撃をするが空いた方の手で受け止められる。

「よせ！逃げる！こいつは——」

ラウラは福音のエネルギーの翼に抱かれ、エネルギー弾を零距离を喰い、海に墜ちる。

「ラウラ！よくもっ……！」

シャルロットはブレードを捨て、ショットガンを呼び出し福音に向けて引き金を引いた。が……福音の装甲の至る所からエネルギー翼が生えそれがショットガンを吹き飛ばすと同時にシャルロットも吹き飛ばした。

「な、何ですの！？この性能……いくら軍用とはいえ、あまりにも——」

福音に向けて射撃をしようとしていたセシリアに福音が「瞬時加速」で近付く。両手両足同時着火による圧倒的な加速だった。

「くっ！？」

長大な銃は接近されると対処しにくい。セシリアは距離を置こうとしたがその前に銃を蹴られ、すぐに両翼から一斉射撃を喰い海に沈められた。

「私の仲間を……よくも！」

私は急加速で福音に接近し、二本の刀で斬りかかる。「展開装甲」を駆使し、福音の攻撃をかわしながら斬撃を行った。

「うおおおっ！！」

凄まじい格闘戦をしながら私は少しずつ「紅椿」の出力を上げ、福音を追い詰める。これならいける！と確信を持って「雨月」の打突を放つ。しかし……、

キュウウン……。

「なっ！？またエネルギー切れー！ぐあっ！」

その隙をつかれ、福音の右腕に首を捕まれゆっくりとエネルギーの翼に包まれた。ここまでか……！すまない、一夏……！

一夏Side

さざ波の音を聞きながら女の子を眺めていた。少女を見ているとなぜか懐かしい気持ちになる。

(……あれ？)

いつの間にか少女の歌が終わっていて、空を見つめていた。俺は気になり少女の隣に向かう。

「……どうかしたのか？」

声をかけてみるが、少女は何も答えない。少女が空を見つめている

ので俺もなんとなく空を眺めていると……。

「呼んでる……行かなきゃ」

「え？」

隣に視線を戻すと少女はもういなかった。……どこにいったんだ？ 周りを見るがもう人影は見あたらなかった。

「うーん……」

とりあえず俺は気のソファに戻ろうとすると……。後ろから声をかけられた。

「力を欲しますか……？」

「え……」

振り向くと……。波の中……。膝下までを海に沈めた女性が立っていた。その姿は白と黒が混ざった甲冑を纏っており、騎士のような格好をしていた。そして、二本の大きな剣が彼女を挟むかのように海に突き刺さっていた。

「力を欲しますか……？ 何のために……」

「んー……難しいことを聞くなあ」

何のために力を欲するか……か。

「……そうだな。友達……。いや、仲間を守るためかな」

「仲間を……」

「ああ。なんていうか……、世の中って結構色々戦わないといけないだろ？単純な力だけじゃなく、色んなことでさ。そういうときに……、不条理なこととかあるだろ。道理のない暴力からできるだけ仲間を助けたいと思う」

俺ってこんなことを考えていたんだなって思いつつ、返答する。すると……。

「では、そうでなければ……？」

「……？」

「道理のない暴力でなければ……、あなたはどうしますか……？」

……ああ、そうか。相手が望まずそれでも仕方なく人を傷つけたら……ってことか。……例えそうだとしても……。

「もし、そうだとしても俺は仲間を守りたい。この世界で一緒に戦う……仲間を」

「そう……」

「だったら、行かなきゃね」

「えっ？」

女性が静かに答えうなずくと・・・、また後ろから声をかけられた。振り向くとさっきの少女がいた。

「ほら、ね？」

人懐っこい笑みを浮かべながら手を取られる。にこりと微笑みかけられる。俺は照れながら・・・。

「ああ」

とうなずくと・・・いきなり世界が眩いほどの光を放ちはじめた。徐々に周りになっていく。夢の終わり、そう感じた。

(ああ、そういえば・・・)

あの女性は、誰かに似ていた。白と黒の・・・騎士。

第Side

「ぐづつ・・・！」

ぎりぎりとう首を締め上げる。福音の手は硬く私の首を掴んでおり、離せる状態ではない。そして進化した「銀の鐘」が私に向けて一斉に発射されようとしていた。

私の頭の中には一つのことだけが浮かんでいた。

会いたい。一夏に、会いたい。すぐに会いたい。今会いたい。ああ、会いたい。

「いち、か……一夏……」

知らず知らずの内に私は一夏の名を呼んでいた。さらに輝く翼に私は覚悟を決め、瞼を閉じる。

『!?!』

突然福音が私を手離した。なにがあつたのかわからず目を開けると福音が強力な荷電粒子砲によって吹き飛ばされた。

(な、何が起きて……)

「俺の仲間、誰一人としてやらせねえ！」

戸惑っていた私に声が聞こえた。さっきからずっと会いたいと願っていた人物の声。私が声をする方に向くとそこには白く輝く機体がある。

「あ……あ……あ……」

じわりと私の目尻に涙が浮かぶ。向こうを見えるのは新たな姿となつた「白式」を纏つた一夏だつた。

???? Side

(・・・まだか?)

少し前から俺の身体を包んでいた不思議な感覚は消えた。そろそろのはずだが……。ふと、福音を見ると強力な荷電粒子砲を受けて吹き飛んでいた。・・・来たか。

(「白式」第二形態・・・「雪羅」)

俺がそう思い、荷電粒子砲が発射された方向を見る。

(・・・?)

織斑一夏の方を見ると何か変な違和感を感じた。ハイパーセンサーでよく見てみると……。

「なっ・・・何だ・・・?何だあの「白式」は!?!」

俺は目を疑った。ハイパーセンサーに映っていたのは「白式・雪羅」ではなく、見たこともない「白式」だった。

「ど・・・どういうことだ・・・!?!な、なぜこんなことが・・・!?!」

俺は奴の「白式」をよく見てみると・・・、左腕に「雪羅」はあったが右腕にも何か楕円形の盾のようなものがあり、左手にもう一本のブレードがある。更にウイングスラスターの形が少し変わっており機体と一体化していた。



「まさか……、ずれがここまで影響しているというのか……？」  
しかし、いくらずれが影響しているとはいえ変わり過ぎている。ではなぜ……？

(……一体何が原因なんだ？なにかの影響——待てよ、「影響」……？)

まさか……、そうなのか？しかし、「そんなこと」があり得るのか……？

(……もし、そうだとすれば……)

あの見たことのない「白式」になったことに少し納得できるが……、それを証明できる方法がない。……あってもやるわけにはいかないからな。

(……まさか、こんなことになるとはな……)

俺がこっちに来たことでこの世界は変わり始めている。そして新たな可能性が生まれた……か。

(……面白い。見せてもらうぞ織斑一夏。新たな「白式」の力を……)

俺は織斑一夏と福音の戦いを眺めることにした。あの「白式」の力を見極めるために。

一夏Side

「い、一夏なのか!? 体は、傷は・・・!」

慌てている篝の元に飛んで答える。心配かけちまったな。

「待たせたな篝」

「よかつ・・・よかつた・・・本当に・・・」

「つたく、泣いているのか?」

「な、泣いてなどいないっ!」

やれやれ、説得力ないぞ篝。

「心配かけたな。もう大丈夫だ。あとこれやるよ。誕生日、おめでとうな」

「あっ・・・」

俺は持ってきたリボンを篝に渡す。今日は七月七日。篝の誕生日だ。プレゼントに何を買えばいいか悩んでいた俺はシャルに買い物付き合ってもらったんだけどな。

「それ、せつかくだから今使えよ」

「あ、ああ・・・」

「じゃあ、行ってくる。再戦と行こうか福音！」

右手に「雪片弐型」左手に新兵器の一つ「雪閃」せつせんを構え、斬りかかる。二本のブレードをかわした福音に新兵器「雪羅」で追撃する。

「逃がすかよ！」

「雪羅」は様々なタイプに切り替えられる武装。俺のイメージに応えるように指先から現れた二メートル以上のエネルギー刃のクロウが福音の装甲を斬る。

続けて右腕の新兵器「雪盾」ゆきたてで攻撃する。「雪盾」は「雪羅」と同じくいくつかのタイプになることができる。俺が念じると「雪盾」の形が変わり中に仕込んである四連式ガトリングガンが現れる。

「食らえ！」

ダダダダダッ！！

全ては当たらなかったがいくつかは確実に福音に命中する。

『敵機の情報を更新。攻撃レベルAで対処する』

福音が掃射反撃を行った。が、かわす必要はない。

「何度も食らうかよ！」

俺は左腕を前に出して飛ぶ。キンッ！と音がするのと同時に「雪羅」

が變形し、光の膜が広がり福音の弾丸を消す。

これは「零落白夜」によるシールド。エネルギーの消費こそ激しいが、福音には実弾兵器がないためこっちが圧倒的に有利だ。

「うおおおおっ！」

強化され、「白式」と一体化した大型ウイングスラスタブレード「雪空」は接近戦ではブレードとして使うことができる上に「二段階瞬時加速」が可能になっている。

福音に近付きながら同時に俺は「雪閃」を振るう。すると剣からエネルギー刃が飛び出し福音に直撃する。「雪閃」は「紅椿」の両方の武器を合わせたような武装で、更にエネルギー刃を剣に纏うことで「雪閃」の切れ味を上げることが可能だ。

。。  
これだけの装備があれば福音を倒すことできる！そう確信するが・

『状況変化。最大攻撃力を使用する』

まずい！おそらく次にする攻撃は周りへの一斉射撃だ。まだダメー  
ジから回復しきっていない鈴達に当たるかもしれない。

(くっ！守りきれるか!?)

俺が仲間の盾になろうとするが鈴に怒鳴られる。

「何やってんのよ！あたし達は代表候補生よ？余計な心配している暇があればさっさと片付けちゃいなさいよ！！」

「鈴……わかった！」

今の俺には仲間を信じることしかできない。ならどこまでも信じるだけだ。俺は「雪閃」を仕舞い、右手の「雪片弐型」と左腕の「雪羅」から「零落白夜」の刃を出して、再び福音へと飛び込んだ。

第Side

（一夏が駆けつけてくれた……！）

それだけで私の心は躍動し、熱を持って跳ねる。そして……。

（私は、共に戦いたい。あの背中を守りたい！）

私は強くそう願った。するとそれに応えるように「紅椿」の「展開装甲」から金色の粒子が溢れ出した。

「これは……!？」

ハイパーセンサーの情報から機体のエネルギーが急激に回復しているのがわかる。

——「絢爛舞踏」発動。展開装甲とのエネルギーバイパス構築……完了。

(まだ、戦えるのだな「紅椿」？ならば行くぞ！)

一夏から貰ったりボンで髪を縛り、気を引き締めて一夏の元へ向かった。

一夏Side

「おおおおっ！！」

「零落白夜」で福音のエネルギー翼を断つが、両方の翼を斬るのはかなり難しく、二撃目はかわされる。その間に翼は再度構築され、反撃してくる。

(くそっ！このままじゃあ……)

「白式」のエネルギーは後二〇%しかない。リミッターなしの福音が後どれだけのエネルギーが残っているか見当もつかない。どうする……！「あれ」で動きを止めようとしてもかなりの近距離でなければ使えない！

「一夏！これを受け取れ！」

箒の手が俺の「白式」に触れた瞬間、全身に電流のような衝撃と炎のような熱が走る。

「な、なんだ……？エネルギーが……回復！？箒、これは――

「」

「今は考えるな！行くぞ、一夏！」

「あ、ああ！」

俺は意識を集中させ、「雪片式型」から「零落白夜」の刃を最大出力で放出し、両腕で支えて振るう。

「うおおおっ！」

福音が俺の攻撃を回避し、俺に光の翼を向ける。かかった！

「箒！」

「任せろ！」

福音の翼を箒が断ち切る。更に「展開装甲」を使って急加速すると同時に回し蹴りが食らわせる。今だ！

「「雪盾」！」「シザーズモード」！」

俺はギリギリまで福音に近付き「雪盾」を変形させて、福音の右腕を捕まえる。そして動きが止まった福音の残りの翼をかき消す。そして止めを刺そうとする俺に福音が体から生えた翼で一斉射撃をしてきた。ここまで来たら、もう引かねえっ！！

「おおおおおっ！」

全身に福音の攻撃を浴びながら俺は福音に「零落白夜」を突き立て

ながら「雪盾」のガトリングを浴びせる。更に「雪空」の出力を最大まで上げしばらくしてやっと福音が停止した。

「はあっ、はあっ、はあっ……！」

アーマーを失った操縦者が海に墜ちる。まずい！

「……つたく、ツメが甘いのよ、アンタは」

ダメージから回復した鈴が操縦者をキャッチした。他の皆も無事のようにだ。

「やっと福音を倒したな！一夏！」

「ああ……。でも……」

「……まだ終わっていない。だろ？織斑一夏」

「」「」「！」「」「」

「来たか……。」「黒騎士」！！」

いきなり何も無い所から「黒騎士」が現れた。

「……さて、始めようか織斑一夏」

「鈴！その人を連れて旅館に戻れ！」

「で、でも一夏！」



「その人がいる状態だと足手まといになる！早く行け！」

「わかったわ……！すぐに戻るからそれまでやられるんじゃないわよ！」

鈴は旅館に向かって飛び立ち、残った俺達は「黒騎士」の周囲をぐるりと囲むように並んだ。

「……いい判断だ。しかし……、「白式」が第二形態になるとはな。名は何という？」

「……「白式・雪王」だ」

「……雪の王か。大それた名前だな」

「まあな……この前のようにはいかないぜ」

「……ふん。新しい力がお前らだけに与えられたとでも思っているのか？」

「な、なに!？」

こいつも新しい武装を持っているのか!？」

「……来い。「テュール」」

奴がそう言つと……、背中に漆黒の翼が現れた。あれが奴の新しい武器か。一体どんなやつなんだ……？俺達が翼を見ていると……黒いエネルギーが翼を覆った。なんだ……？

「・・・喰らえ」

いきなり「黒騎士」がくるりと回る。それと同時に「テュール」から羽のようなエネルギー弾が放たれた。あれはまさか・・・!?

「銀の鐘」!?

驚愕する俺達に大量の漆黒の羽が襲いかかった。

—夏Side end

## 第二十三話（後書き）

意見やアドバイス、感想などどんどん送ってください！後間違いや誤字があればお願いします。

## 第二十四話（前書き）

三度目の黒騎士戦です。楽しんでいただければ嬉しいです。ではどうぞ。

## 第二十四話

千冬Side

「お、織斑先生！あの武器は・・・！」

「ああ・・・、形や攻撃方法など少し違うが・・・。間違いなく福音の「銀の鐘」と同じもの・・・。いや、改良型か？」

福音との戦闘を終えた一夏達の前に現れた「黒騎士」。ここまでのら私達は驚かなかつただろう。しかし、奴が新しい武装「テュール」を使った瞬間私達は目を疑った。なぜ奴はあんな武器を持っている？

「福音の情報はアメリカ、イスラエルの二カ国で厳重に管理されているはずです！「黒騎士」は一体どうやってあの装備を・・・！？」

山田先生の言う通り福音の情報は簡単に手に入る代物ではない。しかも奴のは第一形態の福音以上の能力だ。

（「黒騎士」を開発したのがアメリカ、イスラエルのどちらかということか？いや、そうだとしてもおかしい。福音は最近完成したばかりのはず・・・。なのに奴のはその改良型だ）

どこかで情報を入手し、極秘で開発したのか・・・？いや、それも変だ。「黒騎士」の情報は世界中が探している。そんな状態であればどの武器を開発できるはずが無い。

（よく考えてみれば奴の武器は全て驚異的な能力を持っている。それらも一体どうやって開発したのだ？）

束が作ったという可能性が一番高いが・・・、それも変だ。束が一夏を殺そうとする奴にあんな機体を渡すとは思えない。なにかがおかしい。

(なんだこの違和感は・・・?)

私達は何かを見落している。「黒騎士」について何かを勘違いしている。

(・・・そもそも、全てが謎というのがおかしい。世界中が調べてもまったく情報が無い。その時点で私達は何かを勘違いしていたのではないのか?)

束は「黒騎士」は元々存在しないと云った。だが・・・。

(だとすれば「黒騎士」は一体何なのだ? 奴は亡霊とでも言うのか?・・・「存在しない」存在。矛盾し過ぎている)

・・・待て。「矛盾」・・・?

(・・・何だ。今何かを掴めそうな気が・・・。奴の目的、奴の機体、奴自身・・・)

考えてみるが・・・、駄目か。もう少しでなにかを掴めそうだったのだが・・・。仕方ない今は奴をなんとかするのが先だ。

「山田先生。他の教師達の準備はどれくらいで完了する?」

「・・・およそ、三十分といった所です」

・・・奴ならばそれだけの時間があれば充分一夏達を殺せるだろう。今私にできるのは一夏達を信じることだけ・・・。なんと情けない姉だ。

(・・・勝て一夏)

私の弟なら何とかなる。そう信じ、一夏達の戦いを見つめた。

一夏Side

「くっ!」

俺は「テュール」の攻撃をなんとかかわした。他の皆も無事のようにだ。

「・・・ほう、よくかわしたな。誉めてやるっ」

「うれしくねえよ。それよりも・・・どういうことだ!」

「・・・何のことだ?」

「惚けるな!お前のその武器・・・少し違つが福音の「銀の鐘」と同じものじゃねえか!」

「貴様どこで福音の情報を手に入れた!答えろ!」

俺達が「テュール」のことを問うと奴はふっ、笑う。

「……戦場でそんなこと聞く余裕があるなら、まずどうやったら相手を倒せるかを考えたほうがいいぞ」

「くっ……」

「……無駄な時間を使う気はない。……くたばれ」

「黒騎士」がまた「テュール」の弾丸を放つ。全方位に向けての斉射撃。しかも第一形態の福音以上の数のエネルギー弾だ。

「くそっ！これじゃあまるでもう一度福音と戦ってるようなもんじやねえか！」

「しかも奴は福音よりも強い！私達の機体が損傷を受けているこんな状態で勝てるのか！？」

「まずは時間を稼ぐべきだ！そうすれば教師達が来るはずだ！」

「問題はそれまでわたくし達が耐えられるか……ですわね」

「やるしかないよ！一夏を守るためにも！」

「……シヴァ」。「ツインガトリングモード」

奴が「シヴァ」を展開し、二つのガトリングにする。これはやばい！

「……発射」



ビュビュビュン！！ダダダダダッ！！

「シヴァ」と「テュール」から無数の弾丸が放たれた。さっきの福音以上だ。避けきれない！だったら……！

「「雪羅」！「シールドモード」！」

俺は「雪羅」を使い「黒騎士」の攻撃を全て消していく。あの二つの武器の攻撃はエネルギーでできている以上「零落白夜」で消せる。これならなんとか……。

「……ふん」

奴が俺に向けて「テュール」の弾丸を発射する。また「雪羅」で消してやる！と思ったが……。なんと奴の弾丸は「零落白夜」を貫通し、俺に直撃した。

「なっ！？うわあああああ！！！」

「一夏！？」

「どっいつこと！？」「零落白夜」はエネルギーでできた攻撃なら打ち消せるはずだよ！？」

「ま、まさか……。あれは実弾ですよ！？」

「奴の武器はエネルギー弾だけではなく実弾も放てるのか！？」

「……」「零落白夜」は物理的な攻撃にはあまり効果がない。残念

だったな」

最悪だ……！福音より威力があるだけならまだしも実弾も撃てるとは……。

「……ぼつつとしている暇はないぞ」

再び「テュール」を放つ。また実弾……だったら！

「「雪盾」！「シールドモード」！」

「……なに？」

俺は右腕を前に出して「雪盾」からエネルギーの盾を展開し、「テュール」の実弾を防いだ。

「……ほう。そんなことまでできるとはな。だが……」

「黒騎士」が実弾ではなく、エネルギー弾に切り替える。俺はなんとかわすが……気づかれたか。

「……成る程、やはり「雪盾」のシールドはエネルギー攻撃に弱いのか。エネルギー攻撃に強いならわざわざ「零落白夜」で防ぐ必要はないからな」

……奴の言う通り「雪盾」は実弾には強いがエネルギー弾には弱い。「雪羅」とは真逆と断言している。俺は「雪閃」を呼び出し「雪盾」と合わせて攻撃し、他の四人もそれぞれ離れて攻撃する。

「……ぬるい」

奴は俺達の攻撃を全てかわしながら「シヴァ」と「テュール」で反撃する。圧倒的な弾丸の数を前に俺達は近付くことすらできない。

(なんて攻撃だよ！どうやってたら接近できる！？)

俺は「黒騎士」の隙を探すため奴をよく見てみる。すると……。

(……あれ？あの翼、羽がどんどん無くなってる？それに纏っていたエネルギーも減ってる……。そうか！)

おそらく、「テュール」は纏ったエネルギーや羽の部分を弾にしている。つまり、それが無くなればこちらが接近するためのチャンスになる。

(なら、奴にどんどん攻撃させればいい。そして弾が切れた瞬間を狙い「瞬時加速」で近付く)

まだ、「シヴァ」が残っているがそれでもずっと回避しやすいはずだ。問題は……。

(両方が同時に弾切れを起こすってのはまずあり得ないな。どちらかが無くなったら行くしかねえ、それまでは耐えるしかない)

それともう一つ準備しておく。俺はラウラとプライベート・チャネルで会話する。

『ラウラ！』

『なんだ！一夏！』

『「テュール」の特徴がわかった。あれは多分、羽や纏ったエネルギーが弾になってる。どちらかが切れた瞬間に俺が接近するから隙を見てA I Cで奴の動きを止めてくれ!』

『成る程「テュール」の弾丸がどちらか一つになれば対処できる。わかった。だが、失敗するなよ!』

『勿論だ!』

この方法は一回きりだ。奴の実力を考えれば、二度目はない。俺達は少しずつダメージを受けながらも奴の弾切れを狙った。そして・・・ついに「テュール」の実弾が切れた。今だ!

「おおおおおっ!」

俺は「雪羅」のシールドを構えながら「瞬時加速」を使う。エネルギーの消費は激しいがこれで決めるしかない!「黒騎士」のエネルギー弾を消しながら奴に近付く。

「・・・ちっ」

奴は「シヴァ」を仕舞い、「レーヴァテイン」と「フェンリル」で俺と接近戦を行う。

「くっ!」のっ!

「・・・軽いな。さっさとー!」?

不意に奴の動きが止まる。ラウラが「黒騎士」の背後から現れる。



「鈴！」

「大丈夫？一夏、ラウラ」

「ああ、助かったぜ」

「もう少しで直撃するところだった」

鈴が奴に衝撃砲を撃ち、俺達をピンチから救った。

「・・・運がいい奴だな」

「悪かったな」

けどあいつ・・・、どうやってAICを食らっている状態で動いたんだ？

「ラウラ、あいつ・・・」

「ああ、私も驚いた。AICは確実に決まったはずだ。なのになぜ奴は動くことができたんだ？」

「え？ち、ちよつと。AICを食らって動けるはず無いじゃない。どういうこと？」

AICを一度食らえば、防ぐ方法はまず無い。最低でも二人はいないとなんとかできないはずだ。

「AICを無力化したというのか？」

いや、だったら奴の動きが止まるはずが無い。つまり……。

「AICを受けてから移動した……ってことになるな」

「そんなことあり得ないわ！一体どんな方法で避けたっていうのよ！」

鈴の言う通り、あり得ない。けど、実際に移動している。何かの能力……「能力」？まさか！？

「「テュール」の特殊能力……！」

「「！！！」」

「……よくわかったな、正解だ。「テュール」の特殊能力は「移動」。どんな状態であれ、好きな場所に動くことができる」

「瞬間移動のようなものか……！」

広範囲に攻撃できる上に一気に離脱することが可能な武器「テュール」……。これも厄介だ。

「……そろそろ死ね」

「黒騎士」が攻撃を再開し、俺達に目掛けて撃ってくる。

「離れる鈴！ラウラ！」

「「わかった！」」

「……逃がさん」

奴は距離を取ろうとする俺達を追いながら「シヴァ」を連射してきた。

(くっ……。さっきのが決まらなかったのはかなりキツイ……)

残りエネルギーを見るが、「零落白夜」は後二回が限度だ。それで決めるしかない。

(篝のさっきしたあれが出来ればいいんだけど……)

エネルギーが全開になればこっちも少し楽になる。

『篝！さっきやったあれ……もう一度できないか!?!』

『……すまない。やれるかどうかわからない。あれが何故発動したのかわかっていないんだ』

駄目か……となれば……、やはり後二回の「零落白夜」で決めるしかないか。だが、どうする？

(致命的な隙を作ればいいんだけど……)

奴の実力は俺達よりも遥かに上だ。そんなやつがそう簡単に隙を見せるとは思えない。

(……一回だけなら奴の隙を作る方法がある)



福音との戦いではまだ使っていない「雪空」の奥の手……。いくら奴でも初めて見る武器なら対応が少し遅れるはずだ。

「……どうやって倒せるかを考えるのは良いことだがそれは安全な時にやるべきだな」

「なっ!?!」

いつの間にか「黒騎士」が接近していた。俺が考えている間にここまで近づいていたのか!

「……死ぬ」

「そう言っただけで簡単に死ぬやつはいねえよ!」

「黒騎士」は俺と接近戦をしながら「テュール」で周りにいる皆が俺の援護できないように攻撃していた。あの翼……。後ろに撃つこともできるのか!

「……仲間の心配よりもまずは自分の心配をするんだな」

「うるせえ!」

俺と奴では差ははっきりしている。俺は徐々に押されるが……。突然奴が離れた。

「……ちっ(少し時間が掛かるな)」

どうやら「テュール」がエネルギー切れになったようだ。俺はすぐさま距離を取り、他の皆と一緒に攻撃するがまったく当たらない。

「・・・あと一度だけでも隙が出来ればいいんだけど・・・。「移動」が厄介だ。あれで離れられたら簡単にかわされる。」

（・・・何か無いのか、決定的な弱点は）

あれほどの能力があるなら何か欠点の一つでもあるのでは・・・と思うが・・・あつたら苦労してないよな・・・。

「!・・・つたく考える時間ぐらいくれよな!」

「シヴァ」のガトリングが俺達を狙う。

（でも「黒騎士」にしては単純な攻撃だな・・・）

いつものように正確な射撃ではなく、適当に撃っているという感じだ。「テュール」のエネルギーが溜まるまでの時間稼ぎか・・・でもなんで時間を稼ぐ必要があるんだ? 「テュール」を撃つためか・・・? 「移動」の能力があるんだから接近戦をしている間にチャージすればいいはず・・・。

（何かを警戒している・・・? でも何を・・・?）

奴が警戒するなら「零落白夜」だけだ。でもそうだとしても奴なら大した問題ではないはず・・・。

「・・・そんなぬるい攻撃が当たると思うか?」

「ぬるくて悪かったわね!」

「あなたの滅茶苦茶な攻撃と比べないでほしいですわ!」

「六対一で一撃も受けない方がどうかしてるよ！」

「くっ、認めたくはないが・・・本当に奴は教官以上の実力をもっているのか！」

「何故貴様は「紅椿」以上の性能の機体を持っている！答えろ！」

「・・・答える訳が無いだろう」

俺達が一斉に攻撃しているがやはり当たらない。そうこうしている  
と・・・奴が再び「テュール」を撃ち出した。チャージが終わった  
のか・・・！

「・・・「Rシステム」発動」

奴は俺達を追い詰めるかのように「Rシステム」を使い、武器の威力を上げる。どうする・・・！機体のエネルギーも残り少ない。このままでは「零落白夜」を使うことも出来なくなる。なら一か八か・・・！

「これで決める！」

「・・・一か八かの突撃か。ギリギリまで「零落白夜」は使わないつもりか。わざわざそれにつき合う必要はない」

「黒騎士」は攻撃しながら後退しようとするが、皆がそれを阻む。これならいけるかもしれない！後は・・・！

『ラウラ！もう一度だけAICを使ってくれ！』

『何を考えている一夏！？奴にA I Cは効かないのはわかっているはずだ！』

『それでもだ！俺が一瞬だけ隙を作る！だから頼む！』

『・・・わかった！後一度だけだぞ！』

『充分だ！』

奴にA I Cは効かないわけじゃない。「移動」を使うにしても一瞬だけとはいえ時間が必要のはずだ。ならばその一瞬を狙う！

「おおおおっ！！！」

「・・・邪魔だ」

奴は周りにいる皆を「テュール」で吹き飛ばし、「レーヴァテイン」で俺を迎え撃つ。まだだ・・・！

「・・・終りだ。織斑一夏」

「お前がな！」「零落白夜」発動！！」

「・・・？何もー！！！」

奴が「レーヴァテイン」を振るう瞬間に俺は「零落白夜」を発動させる。「雪片式型」でも「雪羅」からでもなく・・・「雪空」から「零落白夜」の刃を展開する。これが「雪空」の切札。「零落白夜」の翼だ。

「何！？ウイングスラスタから「零落白夜」を発動させただと？だがそんなもの……なっ！？？」

予想外の攻撃に一瞬だけ奴は驚く。その隙にラウラがAICを発動させ「黒騎士」の動きを止める。後は「テュール」の能力が発動する前に奴を斬る！間に合え！！

「うおおおおっ！！！」

「くっくっくっ！！！」

斬った感触はある。やったか！？

「くっく……、吹き……飛べ……！！！」

奴は少し苦しみながら「テュール」を無差別に周囲にばらまいた。俺達が少し食らった瞬間に奴は海に入り、また「テュール」を適当にばらまく。

「皆避ける！！！」

全員「テュール」の弾丸をかわし奴の様子を見るが……、いつまで経っても来ない……。まさか！？

「……反応無し、逃げられたな」

「くそっ！後ちょっとだったのに！！！」

「完全に決まってなかったのね……」

「・・・仕方ありませんわ。それよりもわたくし達の無事を喜びましょう」

「・・・そうだね。「黒騎士」を逃がしたのは悔しいけど・・・、今は僕達の勝利を受け入れよう」

「・・・ようやく終わったのか、だが・・・」

「・・・これで全てが終わったわけではない。また「黒騎士」は来るだろう。それまでもっと強くならなければならない。」

もうすでに空は暗く、まだ終わっていないのだと俺達に言っているようだった。

???Side

「・・・くっ、・・・うっっ」

俺は今海から上がり機体をステルスモードにした状態で森に隠れている。

「はあっ、はっ、・・・まさか・・・あんな能力まで・・・はあっ、・・・あつたとはな・・・」

俺は意識をしっかりさせ、呼吸を整える。幸い完全に「零落白夜」

を食らわなかったおかげで気を失わずにすんだ。間一髪の所で「テユール」の能力を使い直撃をさけたがあれは運がよかっただけだ。後一瞬でも遅ければ今頃間違はなく奴等に捕まっていただろう。

「・・・ふ、ふふっ」

気づけば俺は笑っていた。自分が助かったことで安心したのだろうか？それとも奴があれほど強くなっていたことが嬉しいのだろうか？・・・おそらくは両方だな。

「くくくっ・・・まさか俺が二度も追い詰められるとはな・・・」

油断などまったくしていなかった。なのにこの様だ。今回は完全に負けた。俺と「ラグナロク」は奴等に敗北させられたのだ。

「ふふっ・・・だが・・・次は無いぞ・・・」

もうあのような手は二度と食らわない。俺を逃がしたことを後悔するがいい織斑一夏。

「はあっ・・・はあっ・・・。少し休んだら・・・篠ノ之束の所に・・・行くとするか・・・」

今は身体を休めよう。また奴等と戦うためにも・・・。

(だが・・・次からは少し戦いにくくなるな)

出来ればこの戦いで織斑一夏を殺したかったが・・・。失敗した以上、次のチャンスまで待つしかない。しかし・・・。

(・・・次からは「奴等」も現れるからな・・・)

その事を考えると自然と手に力が入る。・・・織斑一夏よりも先に「奴等」を殺してしまえそうだな。いっそのことそうしてしまおうか？

(・・・落ち着け。今は身体を休めろ。それが最優先だ)

俺は沸き起こる怒りを抑え、体の疲れを取ることに集中した。

???? Side end



## 第二十四話（後書き）

意見やアドバイス、感想などどんどん送ってください！後間違いや誤字もあればお願いします。

## 第二十五話（前書き）

投稿します。少し滅茶苦茶なところがあるかもしれませんが。

## 第二十五話

一夏Side

「作戦完了。．．．と言いたい所だが、お前達は独自行動により重大な違反を犯した。帰ったらすぐに反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングを用意してやるから、そのつもりでいろ」

「……………はい……………」

俺達は帰還してすぐに腕組みで待っていた千冬姉にきつく言われ、今は大広間で全員正座の状態で三十分以上説教されている。ちなみにセシリアの顔色が真っ青になりはじめている。．．．そろそろやばいな。

「あ、あの．．．織斑先生。もうその辺で．．．。怪我人もいますし……………」

「……………ふん」

「じゃ、じゃあ、一度休憩してから診断しましょう。ちゃんと服を脱いで全身を見せてくださいね。——あっ！勿論男女別ですからね！織斑君！」

．．．わかってますよ。．．．てか、なんで皆「脱いで」のあたりで自分の体を隠すんだよ．．．。俺ってそんなにジロジロ見たりするようなやつに見えんのか？凹むぞ。

後、山田先生から水分補給のためにスポーツドリンクを受け取る。

夏は結構汗をかくからなあ、ちなみにぬるめの温度だ。

「いてて……。口の中切れてるなこれ」

なんかさつきから口の中が痛いと思ってけど……。とりあえず今日の夕食でわさび醤油は控えないと……。って、千冬姉なんですちをじーっと睨んでるんだ？

「……しかしまあ、よくやった。福音だけではなく「黒騎士」も戦ってよく全員無事に帰ってきたな」

「え？あ……」

なんだか照れくさそう顔をしていたように見えたけど……。なんだかんだで千冬姉は俺達の身を案じてくれてるってことか。俺は心の中で感謝しておく。直接言えば嫌がるだろうし……。ん？なんかさつきから女子一同がこつちを睨んでるいるんだけど……。なんで？

「あの、織斑君？皆の診察をしますから、ええとー」

「「「「「とつとと出ていけ！」「」「」「」

俺は慌てて廊下に出て襖を閉じると同時に深くため息を吐いた。

「ふう……」

ともかく今回の戦いは終わった。まだやらなければならぬことは沢山ある。……いずれ「黒騎士」と決着はつけなければならぬ。けどー

(仲間を守れたよな俺は)

俺と・・・「白式」は。

?????Side

「・・・だいぶ楽になってきたな」

「零落白夜」を受けたダメージから回復した俺は篠ノ之束の所に行こうかと考えるが・・・。

(・・・この時間ならば会うのは不味いな)

おそらく後少し時間が経てば、織斑千冬と話している可能性が高い。下手をすれば俺と織斑千冬が会ってしまう。

(・・・流石にそれは避けたいな)

となると・・・どこかで時間を潰すしかないな。

(・・・海に行くか)

夜の海でも見るとするか。ついでに奴等のやり取りでも見るとしよう。

(・・・また酷い目に合うんだろうな)

そう考えると少し顔がにやけてしまう。・・・ゆっくり見物させてもらおうか。

一夏Side

「ぶっつ・・・」

俺は旅館で食事を済ませた後、軽く一休みしてから旅館を抜け出し、夜の海を少し満喫した。海から上がり、耳の中の水を抜いてから近くの岩場に腰を下ろして満月を見上げた。

(そういえば俺、なんか夢を見たような気がするんだが・・・どんなだったっけ?)

起きた頃ははつきり覚えていたような気がしたが・・・今はもうまったく思い出せない。とても大切なことだった気がするのに・・・なんでだろう?後・・・。

(・・・なんであの時「黒騎士」は俺を助けたんだろう?)

考えられるのは・・・俺を自分の手で殺すため・・・か。でも、何故「黒騎士」はそこまでして俺を殺そうとしているんだ?

「い、一夏・・・?」

突然後ろから名前を呼ばれ振り向くと・・・、そこにいたのは水着姿の篝だった。

「篝・・・？そついや昨日海で見かけなかったけど・・・」

「あ、あんまり見ないでほしい・・・。お、落ち着かない・・・」

「す、すまん」

慌てて篝から目を反らす。篝の水着姿ははつきりと脳裏に焼き付いている。白いビキニタイプの水着・・・かなり肌の露出度が高く・・・その、なんとというか、セクシーだった。

（ま、まずい、これはかなり気恥ずかしい・・・）

とりあえず落ち着こうとするが中々うまくいかない。篝は一メートルほど間を開けて隣に座り、ますます意識してしまう。

「え、えーと・・・だな。そ、その水着、似合ってるな・・・いいんじゃないか？」

と、とりあえず俺は他愛もない話をしようとしたが、出てきた言葉は考えていたものとはかなり違っていた。な、なんでだろう？

「こ、これは、その・・・勢いで買ってしまっ・・・い、いざ着ようとする、かなり恥ずかしくて・・・」

・・・成る程、だから初日の自由時間で見かけなかったのか。だったら別のを買えばよかっただろうに。

「・・・なあ、箒」

「な、なん・・・です、か？」

「いや、なんでそんな変な敬語をしてるんだ？普通に喋ろっぜ」

「う・・・そ、それはお前が・・・おとしやかな女がいいと言うからだろう・・・」

あ、あれか・・・。確か臨海学校の説明をしていた日の朝の時に俺が言ったんだよな・・・。何度も俺の部屋に勝手に侵入してくるラウラの積極性を削ぐために言ったんだけど・・・その後ラウラが箒に言ったんだよな・・・。

「いや、けどさ、箒はいつも通りの方がいいと思うぞ。そんなに無理して合わせる必要ないだろ？」

「う・・・む。これでいいか・・・？」

うん、やっぱりそっちの方が箒らしいな。

「おう。いつも通りだな。そっぴや髪大丈夫か？焼けてないよな？」

「あ、ああ。リボンがなくなっただけだ。そ、それに、リボンも・・・新しいのをもらったしな・・・」

「お、おう。改めて誕生日おめでとうな」

「う、うむ・・・。あ、あ・・・ありが・・・とう・・・」



最後の方、声がかなり小さくなって聞こえなかったけど、何が言いたいのかはわかる。にしても・・・箒にはやっぱりポニーテールが似合うな。

「そ、その・・・だな。お、お前大丈夫なのか？その、ケガをしていただろう」

「ん？あー、目が覚めてISを起動して、気がついたら治ってたぞ」

「ば、馬鹿なことを言うな！そんなことがありえるわけー！消えている・・・。本当になんともないのか・・・？」

「ああ、治った。ほらあれじゃないのか？ISの操縦者保護機能」

「あれは保護するだけだろう。傷が治るなど、聞いたことがないぞ」

何か別の理由があるのかな・・・？ま、怪我が治ってるから別にいいけど・・・。

「まあ、いいんじゃないか？治ったんだし」

「よ、よくない！私のせいで、お前が怪我をしたというのに・・・こんな風に簡単に許されると困るのだ・・・」

やれやれ、どうしたもんだか。俺としては怪我が治っているんだからどうでもいいんだけど箒は納得しない様だし・・・。じゃあない罰を与えるか。

「じゃあ箒、今から罰をやるぞ」

「う、うむ・・・」

俺は箒の方に向くとぎゅっと瞼を閉じていた。まったくしょうがないなあ、コイツは。俺は箒の額をびしり指で弾く。

「ほい、終わり。次からは気を引き締めて行動しろよ」

「なっ・・・！ば、馬鹿にしているのか！？あんな程度で・・・！」

「まあまあ、落ち着けよ箒」

「だ、黙れ！私は武士だ！誇りを汚されて落ち着いてなどー！」

「わ、わかった箒！その、一度離れてくれ！当たってる！」

「！..！」

ようやく胸が俺に当たっていることに気づいた箒は俺から離れ、胸を抱くように腕を組み、俺をじっと見る。

「・・・い、意識するのか？」

「はい？」

「だ、だからだな！い、異性として意識するのか、と聞いているのだ・・・」

ガシツ！と腕で捕まれ、そのまま・・・む、胸の谷間に引っ張られてしまう。・・・え、えと箒さん・・・？

「うん……」

「そ、そうか……。そう、なのだな……」

俺はついつい肯定してしまう。けどこの状況じゃあ仕方ないかもしれない。……はつきり言って可愛いと思うし……。今も密着した状態のため自分の胸の鼓動が聞こえてしまいそうだと思うほど、俺と箒は近づいていた。不意に俺と箒の視線が合い……。見とれてしまった。月明かりに照らされた顔が、あまりにもきれいで――

「せ、セシリア！？アンタなんでここにいのよ!」

「鈴さんこそ！か、勝手に旅館を抜け出して、どうなっても知りませんわよ」

「さて、一夏は……」

「ら、ラウラに鈴にセシリア？な、なんでこんなところに……?」

……や、やばい。今は鈴とセシリアとラウラとシャルだ。ここにいたら見つかってしまう。箒と二人きりの状態を見られたら、何されるか……。

「ほ、箒……向こうに行くぞ」

「い、一夏？きやつ……」

俺は箒の手を引いて岬の方に向かう。……ここで少し隠れれば大丈夫だろう。

「い、一夏……。いきなり、こんな人気のない所に……。わ、私も困るぞ……」

「え？」

篤が何か言っていたからそっちに向くと……。

「ん……」

えっ！？ほ、篤さん！？な、なんで目を閉じて、やや唇を上向きに突き出すんですか！？けど……。静かに待っている篤の顔はやっぱりきれいで……。俺は引き込まれるかのようにゆっくりと顔を近づけて……

ごっつ。

（な、なんだ？）

目を開けると……「ブルー・ティアーズ」のビットが俺を狙っていた。やべえ！

「うわああっ！？」

ズバシユッ！と放たれたレーザーを間髪でかわす。あ、危なかった……。けどこれがここにあるってことは……

「ほう……」

「よし、殺そう」

「何してるのかな一夏・・・？」

「ふふっ、うふふふっ」

「逃げるぞ！箒っ！」

「えっ？きゃあっ!？」

四人の声が聞こえたの同時に箒を抱えて逃げ出す。・・・そういや先月もこんなことあったな・・・。「黒騎士」に殺される前に仲間達に殺されそうな気がする。そう考えている俺を銃声が追ってきた。・・・誰か助けてくれ・・・。

??? Side

「……………あいつらは本当に織斑一夏のこと好きなのか…………？」

今俺の目の前では・・・、織斑一夏と篠ノ之箒、そして代表候補生組による命をかけた追いかけっこが行われている。命がかかっているのは織斑一夏だけだが……。

「…………嫉妬というレベルではないな…………」

いくら篠ノ之箒に嫉妬しているとはいえ、それを織斑一夏にぶつけ

るのはどうかと思うぞ……。

「……本当に俺が殺す前に奴等が殺しそうだな……」

そんなことは無いと言いたいが……、何故か否定できない。……  
大丈夫だよな？

「……そろそろ向かうか」

俺は篠ノ之東が言っていた場所に少しずつ向かった。奴等のやり取りを見ながら……。

東Side

「「紅椿」の稼働率は「絢爛舞踏」を含めて四二パーセントかあ。  
まあ、こんなところかな？」

黒くんと戦って無事だった様だし……。とりあえずは一安心かな？

「さてと……」

私はあるデータを出す。ある二機のフラグメントマップだ。そして……。

「一致した……か。どういう事かな……？」

その二つのデータを重ねる。すると完全に一致した。

(・・・フラグメントマップは各ISが独自に発展していく道筋・・・似ているものはあっても完全に一致するなんてあり得ない・・・)

このデータ通りだとすれば・・・あの二機はまったく同じ道筋を歩んだということになる。でもそれはあり得ない。ではこれは一体・・・？

(・・・もう一つおかしいことが起きてるし・・・)

別のディスプレイを呼び出す。そこには「白式・雪王」の戦闘映像が映し出されていた。

(・・・これも変なんだよねえ)

いくらなんでも変わり過ぎている。第二形態になっただけでこんなことになるだろうか？

(・・・今までのいつくんの戦闘データのことを考えてもこれはおかしいね・・・)

ISは色々な経験を元に進化する。つまりその経験が多いほどより強力な進化を果たすということだ。だが、「白式」はまだ三ヶ月くらいしか動かされていない。そんな短い期間で得た経験でここまで進化するだろうか？

(うーん。別の機体から経験を吸収したってこと？けどそんな現象聞いたことが無いし・・・)

まあ、その事は後で考えるとして……。

「それにしても「白式」には驚かされるなあ。まさか操縦者の生体再生まで可能だなんて、まるで……」

「まるで「白騎士」のようだな。コアナンバー〇〇一にして最初の実戦投入機、お前が心血を注いだ一番目の機体にな」

私が「白式」のことを考えていると後ろから声をかけられる。誰なのかはわかっている。

「やあ、ちーちゃん」

「おう」

私はちーちゃんの方を向く気はない。ちーちゃんもそうだろう。どんな顔をしているのか別に見なくてもわかる。私とちーちゃんにはそんな確かな信頼があるのだから。

「ところでちーちゃん、問題です。「白騎士」はどこに行ったんでしょうか？」

「……「白式」を「しろしき」と呼べば、それが答えなんだろう？」

「せいかい。さすがちーちゃん。「白騎士」を乗りこなしただけのことはあるね」

「白騎士」はそのコアを残して解体され、第一世代型を開発するの



に大きく貢献した。そしてそのコアは「ある事件」を境に行方がわからなくなりいつしか「白式」に組み込まれていた。まあ、実は私が持っていて「白式」に組み込んだんだだけ。

「たとえばの話だけど、コア・ネットワークでちーちゃんの機体である「白騎士」と「暮桜」が情報をやりとりしていた。そうすれば、もしかしたら、同じワンオフ・アビリティーを開発したとしても、不思議じゃないよねえ」

「……………」

だんまりかな？別にいいけど。

「それにしても、不思議だよねえ。あの機体のコアは分解前私が確実に初期化したはずなんでけどね」

「不思議なこともあるものだな」

確かにこのことについては私にもわからない。けど問題はない。

「……………そうだな。私も一つたとえ話をしよう。例えば、ある天才が一人の男子の高校受験場所を意図的に間違わせるとする。そこで使われるISをその時だけ動かせるようにする。すると、本来男が使えないはずのISが使える、ということになる」

ふむふむ、中々興味深いたとえ話だけど……………。

「それだと継続的に動かないよね？」

「そうだな。お前は、そこまで長い間同じものに手を加えることは

しないからな。・・・で、どうなんだ？とある天才」

「どうなんだろうねー。うふふ、なんで「白式」が動くのか、私にもわからないんだよねえ」

「いつくんはIS開発に関わってないはずだし、本当にわからない。まあ、実はもう一人「例外」がいるんだけど。」

「ふん・・・。まあいい。次のたとえ話だ。とある天才が大事な妹を晴れ舞台でデビューさせたいと考える。そこで用意するのは専用機と、そしてどこかのISの暴走事件だ」

・・・ばれてたか。ま、ちーちゃんなら気づくだらうね。

「暴走事件に際して、新型の高性能機を作戦に加える。そこで天才の妹は華々しく専用機持ちとしてデビューというわけだ」

「へえ、不思議なたとえ話だねえ。すごい天才がいたものだね」

「ああ、すごい天才がいたものだ。かつて、十二カ国の軍事コンピユーターを同時にハッキングするという歴史的な事件を自作した、天才がな」

ふふふ、あれがなかったら世界は変わらなかったもんね。

「ねえ、ちーちゃん。今の世界は楽しい？」

「そこそこにな」

「そうなんだ。私はつまらないね。ISをただの兵器としてしか使

わないこの世界なんかね。もしかしたら「黒騎士」も私と似たような考えなのかもね」

「黒騎士」がいつく人を狙う理由・・・今の世界と関係しているのかもしれない。

「・・・お前と「黒騎士」が似ているというのか？」

「さあね。あ、そうだちーちゃん。私なりに「黒騎士」について考えたんだけど・・・聞きたい？」

「・・・聞かせてもらおうか」

「うふふ、じゃあ言うね。多分「黒騎士」の機体はー」

ちーちゃんに私の予想した「ラグナロク」の正体を話す。さて、どんな反応をするのかな？

「な、なんだと・・・！？冗談はやめる束・・・」

「冗談だと思う？私はそう思わないよ。だってもしそうだとしたら全てが謎って理由がわかるもの」

「確かに・・・もしお前が言っていることが本当だとすれば納得できるな。だが、そうだとすれば操縦者は何者なんだ？」

・・・言ったらまずいね。これ以上黒くんのことを話すわけにはいかないし、それに言ったらちーちゃんはどんな反応するか・・・。予想は出来るけど。

「さあね。まったく予想できないよ。わかっているのはいつくんに恨みがあるってことだけだし」

「……そうか」

「ふふふ、バイバイちーちゃん」

?????Side

(……余計なことを)

俺は篠ノ之束の近くにステルスモードで姿を消したまま篠ノ之束と織斑千冬の会話を聞いていたが……。

(……だが、流石篠ノ之束といった所か)

俺と「ラグナロク」の正体について確信しているようだな。まあ、俺の目的の意味まではわかってないだろうな。……わかるはず無いだろうがな。

(……ん?)

ふと見ると篠ノ之束がいなくなっていた。……俺も行くかと考え、飛び立とうとするが……。

「……少し話をしないか「黒騎士」？」

「!？」

「やはりいたか……」

「……完全に気配を消していたのだが……よくわかったな」

まさか見つかるとは……織斑千冬を甘く見ていたか。いや、流石というべきか。

「……少しだけならばいいだろう」

「……では、単刀直入に言う。何故一夏を狙う？」

「……恨みがあるからだ。これでいいか？」

「……次だ。お前は一体何者だ？」

「……言っわけないだろう」

言えばとんでもないことになるからな。

「……では次だ。何故、今私を殺そうとしない？」

「……いずれは殺す。今戦わない貴様を殺すつもりはない」

「……最後だ。お前にとってこの世界はなんだ？」

「……この手で変えるもの」

「・・・そうか。話かけてすまないな」

「・・・去らばだ」

俺はそのまま篠ノ之束がいる所に向かって飛び立った。

???Side end

## 第二十五話（後書き）

意見やアドバイス、感想などどんどん送ってください！後間違いや誤字もあればお願いします。

## 第二十六話（前書き）

今回で原作の三巻が終わります。次から夏休み編です。



## 第二十六話

一夏Side

翌朝。朝食を済ませた後ISやその装備を回収して十時が過ぎ、全員がそれぞれのバスに乗る。

「あゝ……」

今の俺の状態は……ボロボロだ。昨日代表候補生組に追い回された上、勝手に旅館を抜け出したのがばれ、また千冬姉に説教された……三時間ちよつとしか寝てない状態であの撤収作業はかなりきつい。本当に死にそうだ……。

「……すまん。誰か飲み物持ってないか……？」

「……ツバでも飲んでいろ」

「知りませんわ」

「あるけどあげない」

せめて飲み物を飲もうとして声をかけたが、断られた。鈴は一組だからいないし……後は筭だけだ……。

「なっ……何を見ているか！」

ボツと赤くなつた次の瞬間、べしっ！とチョップを繰り出してきた……結構痛いんだけど。

「ふ、ふんっ！」

・・・誰もくれない様だ。これも俺の不徳のせいか。はあ・・・。

「うー・・・しんどい・・・」

少しでも何か飲みたいけど・・・買おうとしてももう無理だし・・・  
、どうしよう。

「くくくくい、一夏さんつ」「」「」

「うん？」

四人同時に俺に話しかける。もしかして・・・、俺に飲み物をくれるのか！？ありがたいぜ！

「ねえ、織斑一夏くんっているかしら？」

「？はい。俺ですけど・・・」

突然誰かに呼ばれ、返事をする。車内に見知らぬ女性が入ってきた。二十歳くらいの金髪の女性で恰好はおしゃれなブルーのサマースーツを着ていた。・・・誰だろう？

「君が織斑一夏くんか。へえ」

謎の女性がそう言つと、俺を興味深そうに見る。な、なんなんだろ  
う？

(・・・気のせいかしら)

?なんか今言つた様な・・・?と、というかそんなに見られると恥  
ずかしいんですけど・・・。

「あ、あの・・・あなたは一体・・・?」

「私はナターシャ・ファイルス。「銀の福音」の操縦者よ」

「えー」

この人がーと思う前にいきなり俺の頬に彼女の唇が触れた。  
え?

「チュツ……。これはお礼。ありがとう白いナイトさん」

「え?あ、う・・・?」

「じゃあ、また会いましょうね。バイ」

「は、はあ・・・」

そのままナターシャさんはひらひらと手を振りながらバスから降り  
る。とりあえず俺も手を振ってナターシャさんを見送った。・・・  
何故かイヤな予感がして振り向くと・・・。

「浮気者め」

「一夏つてモテるねえ」

「本当に、行く先々で幸せいっぱいなのでしょうね」

「はっはっはっ」

すたすたとこっちに向かって歩いてくる四人。・・・もう覚悟するしかないな。・・・理不尽だ。

「」「」「はいー!どづぞー!」「」「」

四つの五〇〇ミリリットルのペットボトルが俺に向かって投げつけられる。・・・正直死ぬぞあれは。

443

千冬Side

「おいおい、余計な事はしないでくれ。ガキ共の相手は疲れるんだぞ」

やれやれ、まあ一夏のせいでもあるが・・・。

「思っていたよりもずっと素敵な男性だったので、つい」

彼女は少しはにかみながら言う。・・・まあ、一夏に多少の魅力は

あるだろうが……、余計な事はしないでほしいものだ。

「ふう……。それよりもう動いて平気なのか？」

「ええ、私はあの子に守られていましたから」

「……やはり、そうなのか？」

「ええ。あの子は私を守るために、望まぬ戦いをした。強引なセカンド・シフト、コア・ネットワークの切断……。あの子は私のために、自分の世界を捨てた」

やはり彼女は福音に守られていたのか……。さつきから戦士のような気配を纏っているが……。余程許せんのだろうな。

「だから、私は許さない。あの子の判断能力を奪い、全てのISを敵に見せかけた元凶を……。必ず追って、報いを受けさせる」

福音のコアは無事だったが、今回の事件を起こしたことで凍結処理が行われそうになったからな……。

「……何より飛ぶことが好きだったあの子が翼を奪われそうになった。相手が誰であろうと、私は許しはしない」

「あまり無茶なことはするなよ。この後も、査問委員会があるんだろ？しばらくはおとなしくしたほうがいい」

「それは忠告ですか？ブリュンヒルデ」

IS世界大会「モンド・グロツソ」で総合優勝者に授けられる最強

の称号・ブリュンヒルデ。・・・正直言って私はその名で呼ばれるのは好きではないな。

「アドバイスさ。ただのな」

「そうですか。・・・後、彼等以外であの子と戦った者はいますか？」

「・・・「黒騎士」が織斑を助けるために時間稼ぎをしていたが・・・それがどうした？」

・・・いきなり奇妙なことを言い出したな。なんだ？

「・・・確か「黒騎士」は彼を殺すために戦っていたのでは・・・？」

「・・・自分の手で織斑を殺すために助けたのだ。実際、福音との戦闘後に織斑を殺そうと現れた」

「・・・そうですか」

「・・・何か気になるのか？」

どうも彼女は「黒騎士」のことが気になっているようだが・・・何故だ？

「・・・少し似ていた感じがしたので」

「・・・似ていた？誰に？」

「……いえ、私の思い過ごしでしょう。忘れてください」

「……なんだ？彼女は「黒騎士」から一体何を感じたのだ？

「……「黒騎士」があの子と似たような武器を使ったと聞きましたが」

「……ああ、そのせいでまた世界中が騒がしくなっている。「福音のデータを盗んだ」「黒騎士」が今回の暴走事件を起こした」「それがアメリカ、イスラエルの言い分だそうだ。ふざけているな」

「……「黒騎士」を手に入れるための言い訳といった所でしょう」

確かに「黒騎士」は福音と同じ様な武器「テュール」を使ったが、「黒騎士」が福音のデータを盗んだという理由にはならない。福音の凍結を避けるためもあるだろうな。

「……今回の一件で世界中が「黒騎士」を手に入れようとより必死になっている。……無駄になるだろうがな」

「……でしょうね。私も「黒騎士」が今回の事件を引き起こしたとは考えにくいですね」

もし「黒騎士」が今回の事件を引き起こしたなら福音と一緒に一夏を殺そうとするはずだ。……無関係でもなさそうな気がするが。

「まあ、なにせよ今はおとなしくしておけ。私に言えるのはそれだけだ」

「あの子も無事なことですし……そうしておきましょう。……」

しばらくは、ね」

私と彼女は一度だけ視線を交わす。またいずれと、私はそのままバスに乗った。

??? Side

「……ん」。まあ、無事で何よりって所かな？」

私は今自分の研究室で、ある二機のISを開発しながら「彼」と彼等の戦闘映像が流れているディスプレイを見ていた。

「……「彼」が向こうに行ったことでこんなことになるとはね」

ある意味私が望んだ展開でもあるが……。

「……「白式・雪王」か」

まさか「白式」があんな進化を果たすとはね……。

「あー疲れた。……何見てんだあんた？」

「……何かのデータですか？」

「おや、少し早いけど……今日の訓練が終わったのかい？」



私が彼等の戦闘映像を見ているとあの二人が部屋に入ってきた。訓練が終わったのかな？

「ああ、あれぐらいならもう終わった」

「それより・・・何を見ているんですか？」

「ん〜。彼等の戦闘映像だよ。君達も見たらどうだい？」

私はそう言い二人に見せる。

「・・・どうなってんだよこれ、滅茶苦茶じゃねえか」

「・・・あの人が向こうに行ったのが原因ですか？」

「多分ね。最もそれだけが原因って訳じゃないみたいだけど」

おそらく「白式」の変化の理由は・・・。

「他に何かあんのかよ？」

「「ラグナロク」が原因だと思うよ」

「あの機体が・・・どういことですか？」

う〜ん。どうしようかな？私も完全にわかっているわけじゃないし・・・。

「まあ、気にしなくてもいいよ。結果として「白式」がパワーアップしたんだし」

「どうせ完全にわかってないんだろ」

「……ばれちゃったか。でもこの現象はやっぱりそうなのかな？」

「なんせ本来ならあり得ないことだからね。私にも予想外だよ。これはね」

「まあ、私達にとってはこうなった方がいいですけど……」

彼等が強くなれば「彼」に勝つ可能性は上がる。だが……。

「この程度のパワーアップじゃあ「ラグナロク」にはかなわないだろうね」

「……あなた、ただけあの機体を強力なやつにしたんだ？」

「……ごめん。あの機体は元々「戦闘」のために造ったわけじゃないし……」

「……成る程あのための機体ですか」

「……うん」

「……やっぱりあの機体強くし過ぎたかな。まあ、それでも「ラグナロク」に勝ってほしいんだけど。」

「……「ラグナロク」に勝たなきゃ意味が無いからね」

「……今のままじゃあ、勝つどころか間違はなく殺されるぞあい

つら」

だよねえ。．．．けど私は彼等にかけてみたい。彼等なら「彼」と「ラグナロク」を倒すことができるよ。」

「「ラグナロク」は世界中のデータを元に開発したからね。今はまだ四つしか武器は使えないけどあれが完全な状態になれば、彼等じゃあまず勝てないだろうね。」

「「ラグナロク」が完全体になるまでにはかなりの時間が必要になる。彼等にはそれまでに「彼」に匹敵する強さになってほしい。」

「はあ、本当にとんでもない機体ですね。」

「でもいくつか制限をかけているんだろ？確かワンオフ・アビリティーも封印しているんだよね？」

「あれはやばいからね．．．。」

「「ラグナロク」のワンオフ・アビリティー．．．あれとんでもない能力だからね。まあ、制限が無くても使わなかったと思うけど。」

「．．．どういう能力なんですか？」

「．．．ごめん。あんまり言いたくないんだ。」

「．．．そうかい。なら、さっさと俺達の機体を完成させてくれよ。」

「はいはい。わかっているよ。」

にしても・・・あの二機をこの二人が使うつて・・・不思議な感じがするね。ふふっ。

「さて、このままにもなければいいんだけどね」

「しばらくは大丈夫でしょう？」

「俺達としては「奴等」をぶっ飛ばしたいんだけどな」

・・・うわあ。二人から殺気出てるよ。まあ、仕方ないけど・・・。

(私が一番恐れていることは・・・「ラグナロク」が第二形態になることなんだよね・・・)

「白式・雪王」になっても「ラグナロク」にかなわかった。もし今の状況であの機体がセカンド・シフトをすれば・・・。

(彼等は確実に殺される・・・。あのプログラムは一回きりだし・・・)

後は・・・天に祈るしかないね。・・・ムカつくけど、さてと。

「んじゃ、続きをしますか」

「俺達はもう休むけどいいよな？」

「いいよ。また、明日も訓練だし」

「では、失礼します。・・・あまり無理しないようにしてくださいね」

「ふふっ、ありがと。ゆっくり休んでらっしゃい」

私が言うと二人は部屋を出る。今日はもうちょっとがんばろっかな？

私は少し上機嫌になりながらあの二機への作業をした。

??? Side end

## 第二十六話（後書き）

意見やアドバイス、感想などどんどん送ってください！後間違いや誤字もあればお願いします。

## 機体説明「白式・雪王」（前書き）

白式の説明です。新しい装備以外は簡単に説明しています。ちなみにしばらくした後、少し内容を変更します。

## 機体説明「白式・雪王」

「白式・雪王」(びやくしき・せつおう)

「白式」の第二形態。本来ならば「雪羅」のはずだったのだが、何かの影響を受けこの形態となった。詳しい原因は不明だが「ラグナロク」が関係しているらしい。攻撃力や防御力は上がっているものの「零落白夜」が使える武器が増えたため、「白式・雪羅」よりも更に燃費が悪くなっている。

### 基本装備

近接ブレード「雪片式型」

原作通りの装備で特に変化はない。

近接ブレード「雪閃」(せつせん)

「白式・雪王」になって現れた武装の一つ。「紅椿」の「雨月」と「空裂」の両方の特性を持ち、更に剣自体にエネルギーを纏うことで切れ味を上げることが可能。ただし、「零落白夜」は使えない。

多機能武装左腕「雪羅」(せつら)

「白式・雪王」になって現れた武装の一つ。原作通りの能力で特に変化はない。

多機能武装右腕「雪盾」(ゆきだて)

「白式・雪王」になって現れた武装の一つ。実弾を防ぐエネルギーシールドに実弾のガトリング、敵の動きを止める「シザーズモード」等が使える。ただし、「雪盾」のエネルギーシールドはエネルギー攻撃には弱い。「雪羅」とは真逆と言っているいい装備。



ウイングスラスタブレード「雪空」(ゆきぞら)

「白式・雪王」になって現れた武装の一つ。第一形態よりも出力が上がり、「二段階瞬時加速」が可能の上、ブレードとして使うこともできる。そして「雪片式型」「雪羅」と同じく「零落白夜」が発動でき、発動するとスラスタから「零落白夜」の翼が現れる。翼でエネルギー攻撃を防いだり敵を斬る等、変則的な使い方ができる。

機体説明「白式・雪王」(後書き)

間違いや変な所があれば言ってください。

## 第二十七話（前書き）

オリジナルの話です。楽しんでくれると嬉しいです。

## 第二十七話

東Side

「やつほー黒くん。ちゃんここにこれたね」

「・・・きちんとした情報をくれたからな」

私と黒くんは前にいた場所ではなく、新しい所でまた姿を隠している。さうで、久々にあの子に会わないとね。お、来た来た。

「やつほーくーちゃん。おひさし相変わらず可愛いね」

「お久しぶりです東さま。もう一人の方は・・・？」

「・・・話していないのか？」

あ、そういえばくーちゃんには話してないや。まあ、いいか。

「今日からここに住む同居人だよ。ほら、自己紹介して黒くん」

「・・・学生寮か。「黒騎士」と呼ばれている。後俺は男だ。以上」

「驚きましたね・・・織斑一夏以外にISを使える男がいたとは・・・それにあなたがあの「黒騎士」・・・顔は見せてくれないのですか？」

くーちゃんの問いに黒くんが少し黙ってしまう。うーんどうしようかな？・・・よし。

「黒くん見せてあげて」

「・・・何故だ？」

「クーちゃんを驚かせー」

続きを言おうとした次の瞬間、ガキンツ！！という音がし、黒くんとクーちゃんが互いの近接ブレードを展開してぶつかり合っていた。

「・・・ほう」

「東さまに危害を加える者は許しません」

「・・・知るか。こいつがふざけた理由を言ったからちよっと脅しただけだ」

・・・うわあ、一触即発の状況になっちゃった。と、とりあえず黒くんを落ち着かせよう。

「ごめんごめん黒くん。東さんが謝るから剣を引っ込めてほしいな」

「・・・いいだろう」

黒くんが「レーヴァテイン」を引っ込めるとクーちゃんも武器を引っ込めた。ほう・・・。

「ありがとう黒くん。やっぱりクーちゃんに顔を見せてくれないかな。その方がこっちも色々都合がいいし」

「……そつちの都合など知ったことか」

「死にたいのですか？」

黒くんが断るとクーちゃんが黒くんを睨む。……まずいね。

「……面白い事を言うな。お前<sup>ご</sup>ときが俺を倒せるとでも？」

「やってみなければわかりませんよ」

「はあ……、クーちゃん落ち着いて。クーちゃんじゃあ黒くんには勝てないから」

「なっ……!?!?くっ、わかりました」

黒くんとクーちゃんじゃあ、生身でもISでも差がありすぎるからね〜。

「黒くんお願い。見せてあげて。ね？」

「……はあ、わかった」

渋々黒くんがその素顔を出す。

「……!?!?あ、貴方は一体……!?!?」

やっぱり驚くよねえ。私もそうだったし。

「……篠ノ之束、こいつさっきから目を閉じているが……見え

ないのか？」

黒くん気になってるね。まあ、クーちゃんにとって視力なんてどうでもいいんだけど。

「……答えるつもりはない、か。少なくとも顔を認識することはできるよつだな」

「そうそう、それだけで充分でしょ黒くん」

「……そうだな」

黒くんはクーちゃんが気になるみたいだね。あ、そうだ。

「黒くん。福音が凍結されなかったこと知ってる？」

「……なに？」

やっぱり知らないか。にしてもアメリカもイスラエルもムカつくことをするね。

「今回の福音の暴走事件は君のせいになされているんだよ。「ラゲナロク」を手に入れるためと福音の凍結を避けるためだろうね」

「……成る程な、お前のせいで俺が大変な目に逢うというわけか」

黒くんが私を責めるような視線で私を見る。……反論できない。

「……まあいいか、寧ろそうなった方が後々楽だな」

「……?どういう事かな?後々楽って……。うん。聞いても多分言わないだろうね。」

「黒くん。クーちゃんと戦ったりしないでね」

釘刺しておかないとね。もし二人が戦ってもクーちゃんがやられるのは明らかだ。

「……こいつが俺に喧嘩を仕掛けない限りはな」

「貴方が束さまに何か危害を加えようとするれば、容赦なく貴方の命を頂きます」

「……無理だな」

「……確かに無理だね。けどクーちゃんのことだから何としても殺そうとするだろうね。でも、黒くんにはいつくん達を強くするために利用されてもらわなければ困るんだよね。」

「クーちゃん、仕返しならいいけど、黒くんを殺そうするのは駄目だよ」

「!……わかりました」

「……ふん。俺を使って奴等を強くしようしているわけだからな。今死んでもらうのは困るといった所か」

「だいせいかい。それにまだ「ラグナロク」を調べたいってのもあるからね。あれ調べるには君が必要なようだし」



「……ああ、基本的に「ラグナロク」は壊れないが、俺が死ねば壊れるようになってる。データも機体も全てな」

厄介だねえ。まあ、あれほどの機体だし当然かな？

「というわけだよーちゃん。わかったかい？」

「……はい」

渋々といった感じだね。黒くんは……特に気にしてないね。☒  
太いのかな？

(お前程ではないと思うが……)

ん？黒くん何か言った様な……気のせいかな？

「んじゃあ、話も大体片付いたし黒くんの寝るところ決めないとね」

「床で充分でしょう」

くーちゃん……。いくらなんでもそれは酷いと思うよ。それに黒くんが納得するはずー

「……わかった、それでいい。で、食事はまだか？」

「いいの!?!」

「……?前の場所でも床で寝ていただけろう」

ま、まあ、確かにそうだけど……。本当にいいのかな？ちらりと

くーちゃんの方を見るとくーちゃんも驚いていた。

「……えっと、その、さっきのは適当に言っただけなんですけど……」

「……そうか、俺は別にどこでもいいしな」

「は、はあ……」

うん。やっぱり部屋を用意した方がいいね。もし、黒くんに行つてほしい時に彼の体調が悪かったらシャレにならないし。え〜と使える部屋は……と、あった。

「黒くん。私についてきて、部屋に案内するから」

「……ああ」

「くーちゃん。私が黒くんを部屋に案内している間に夜ご飯作っておいて」

「は、はい。しかし……」

「い〜のい〜の、さ、黒くん行くよ」

私が部屋に案内しようとするのと黒くんは黙って付いてきた。……なんかペットみたいな感じがしてなごーー

「……おい、今すさまじくムカつく感じがしたんだが」

ギ、ギクツ！黒くんがこっちを睨んでる。ま、まずい何とかして誤

魔化さないと……。

「き、気のせいだよ。ほら、さっさと行くよ」

「……わかった（後で拷問するか）」

……どうやら束さんは後で黒くに拷問されてしまうようです。どうしよう……。後でなんかで対処しとかないと。

「……篠ノ之束」

「な、何かな？黒くん」

「……さつきあいつ何故か言い淀んでいたが……もしかして飯が作れないのか？」

「そうでもないよ。ちゃんと黒焦げになったパンやゲル状のご飯が作れるし」

「……それは作れていないだろう。というか黒焦げのパンはともかくゲル状のご飯ってなんだ？」

「さあ？」

食べれるなら私は気にしないしね。それにクーちゃんの料理が上手くなる必要があるしね。

「……なんであいつに食事を作らせた？」

「だって女の子なんだから」飯の一つは作れないと駄目でしょ？」

「……だったらあいつに料理を教えてやれ」

「無理！だって束さんは色々忙しいもん」

そんな余裕はないしね。それに教えてもらうにしても人がいないからねえ。

「……なら、俺があいつに料理を教えてやるうか？」

「え？いいの？」

まあ、そうしてくれれば私も助かるけど……。確か黒くんは基本的に訓練以外は暇だろうしね。

「じゃあ、そうしてくれる？」

「……ああ」

ふん、黒くんって結構人がいいのかな？

「でもなんでくーちゃんに料理を教えてくれるの？」

「……俺の体調が悪くなったら困るからだ」

「え？あれ食べた程度で体調が悪くなるとは思えないけど？」

「……黒焦げのパンでもやばいのにゲル状のご飯だぞ？なんでお前そんなもの食って平気なんだ？」

普通だと思うけどな。てかあれ程度で体調を崩すかな？ま、いいや。それよりも・・・着いたね。

「はいここが君の部屋。少し狭いけどいい？」

「・・・寝れば充分だ」

「そう？まだ部屋は散らかっているけど・・・」

「・・・後で俺が片付けておく」

「オッケー。じゃあ、夜ご飯食べに行くよ」

「・・・ああ」

何か不安そうな感じの黒くんだけど、別に大丈夫だと思うな。さて、さっきの部屋に戻りますか。

私と黒くんがご飯のためにさっきの部屋の戻ると・・・。

「・・・おい、篠ノ之束」

「なに？黒くん？何か文句でもあるの？」

「・・・文句しかないな」

「・・・申し訳ございません」

ありゃりゃ、くーちゃん小さくなっちゃったよ。もう黒くんのせいだよ？

「・・・お前がきちんと教えなかったからだろ。なんだこれは？」

「なんだって・・・ご飯。色々あるじゃん」

今回は黒焦げのパンに変色したサラダと真っ黒焦げの玉子焼きにピンク色のスープか。充分だね。私が食べようと手に取るうとした瞬間黒くんに邪魔される。

「・・・死ぬぞこれは」

「大丈夫だよ。慣れてるし」

「・・・慣れてなければどうなんだ？」

もう黒くん心配性だな。私は平気なのに。

「・・・はあ、おい」

「は、はい。私に何か・・・？」

「・・・次からは俺が料理を手伝ってやる。いいな？」

「あ、ありがとうございます。しかし・・・、いいのですか？」

「・・・構わん。俺自身のためもあるがお前も美味しいご飯を篠ノ之

束に食べてもらいたいだろう」

「で、ではお願いします」

へえ。くーちゃんが素直だねえ。まあ、私も美味しいご飯は食べたいけど。

「……ひとまず今日は俺が料理を作る。その謎の物体は全部片付けておけ」

「……はい」

黒くんが言うどくーちゃんの料理が処分されてしまった。……食べたかったな。

「……今度にしる」

「はい」

それから数十分後に黒くんが作った料理が部屋に運ばれてきた。うん、美味しそう。

「……これでよし。食うといい」

「は、はい。では」

「いったつだきまゝす」

私とくーちゃんがご飯を食べる。ちなみにメニューは手軽に作れるサンドイッチとスープだね。

「……今日は時間がなかったから簡単なものにしたが……」

「じゅっびゅんだやよ。 (もぐもぐ) おいひいね」

結構多めに作られたサンドイッチをガンガン食べる。もうちょっと食べよつと。

「……食べながら喋るな。まったく……で、どうだ?」

「は、はい。美味しいです」

「……そうか、では俺も食べるか」

黒くんも自分が作った料理を食べる。何か家族っぽいね。少し時間が経った頃には黒くんの料理は全部なくなっていた。

「ふう〜。ご馳走さま。美味しかったよ」

「ご馳走さまでした」

「……ご馳走さま。皿は俺が片付けておく」

「手伝いましょうか?」

「……好きにしろ」

黒くんがぶっきらぼうに言い、部屋を出るとクーちゃんも一緒に出た。やっぱり何か家族っぽいね。……利用しあっている関係だけだ。



「ゲプツ。食べ過ぎたかな？」

美味しかったからね。ついつい食べ過ぎちゃったよ。クーちゃんもあれほど上手くなるのかな？楽しみだね。

「うーん。少し暇だし・・・黒くんの部屋を片付けようかな？」

今は黒くんも後片付けしているしね。たまにはいいですよ。

「んじゃ、黒くんの部屋にレッツゴー」

少しして黒くん部屋に到着。さして、お片付け開始。

「・・・面倒くさい。何か一気に片付けられないかな？」

掃除を始めてから数分後・・・ぜんぜん片付いてない。もう、一気に吹き飛ばすか。え〜とこれを使おうと。

「この小型爆弾で片付けましょ」

部屋の中央にセットして充分離れて、よし十秒前。九、八、七、六・・・待つのがめんどいポチツとな。

ドカーンッ！！ドコッ！！

？今何か変な音がしたような・・・？まあ、いいや。さて、部屋の中はどうなったかな？

「うーん。すっきりしたかな？」

「……ああ、おかげでな」

……え？今黒くんの声が部屋の中から聞こえたような……？

「……ふむ、せっかくお前が部屋を片付けてくれたんだ。お礼をしないとなあ……」

部屋の中を見ると黒くんがボロボロになっていた。ま、まさかさっきのドゴツ！…って音は黒くんが爆発で何かに当たった音……？ま、まずい……。このままだと黒くんに殺される……。

「……さてとお礼をしてやる」

「あ、あはは。それは今度にしてくれると嬉しいな」（ダラダラ）

「……遠慮するな。確実に殺……ごほんごほん。なんでもない」

「ちよつと！今殺してやるって言いそうになったよね！？」

く、黒くんから凄まじい殺気が……。な、何とかしない殺される……。そ、そうだ！

「助けてくーちゃんー！」

「……もう寝ているぞ？」

ふっ、どうかな？くーちゃんを甘く見ているね。私が叫ぶとタッタッタとこっちに向かってくる。来たねくーちゃん！

「どうしたのですか東さま？」

「助けてくーちゃん！黒くんに殺される！」

「……成る程、黒さん。私は言いましたよね？東さまに危害を加えようとすれば命を頂く、と」

「……こいつのせいで俺は死にかけたのだが？」

「……何をしたのですか？東さま」

「……よし！とりあえず誤魔化し——」

「……こいつが俺の部屋を片付けようとして爆弾を使い、俺はその爆発に巻き込まれ死にそうになった。以上」

「……東さま」

くーちゃんから非難の視線が突き刺さる。……私だって反省してるんだよ？

「はあ……、黒さん申し訳ありません。ですが東さまに危害を加えるつもりならやはり貴方の命を貰います」

「……展開」

黒くんが「ラグナロク」を纏い、一瞬でくーちゃんの背後に回る。

「なっ……!?!?」

「・・・少し寝ている」

トントン・・・と首に手刀を軽く叩き込みくーちゃんが気絶する。

「・・・これでお前を助ける奴はいないな」

「そ、そんな・・・（ガタガタガタガタ）」

も、もう駄目・・・。私はここで死んじゃうんだね。黒くんを見ると全装備を展開している・・・私を確実に仕留める気なんだね。

「・・・悪死悪鬼開始」

「い、いやあああああああー！！！」

観念した私は黒くんの拷問を受けました・・・なんで部屋を爆弾で片付けようとしたんだろ私。

ちなみに次の日怒ったくーちゃんが黒くんと戦っていたのはまた別の話。

束Side end

## 第二十七話（後書き）

意見やアドバイス、感想などどんどん送ってください！後間違いや誤字もあればお願いします。

## 第二十八話（前書き）

投稿します。ちょっと無理があるかも・・・。

## 第二十八話

?????Side

「……なあ」

「……はい」

「……何故俺達はここにいるんだ？」

「……申し訳ございません」

俺達は今……ウォーターワールドにいる。はあ、何故こうなったんだ？

数時間前……。

「ねえ〜。黒くんちょっと頼」……断る「早いよ！」

「……お前のことだ。どうせ厄介なもの押し付ける気だろう」

こいつが頼む時は大抵厄介なことしかないからな。

「う〜。まあ、それは今度にしようと……、後はこれどうしたらいいかな〜って、思ったから聞きにきたんだよ」

「……?これは……」

篠ノ之束から紙切れのようなものを受けとる。……今月できたばかりのウォーターワールドのチケットか。

「……お前、これをどこで手に入れた?」

「いいじゃん。そんなことどうでも、それよりこれさ〜今日で期限が切れちゃうんだよね〜」

チケットを見ると確かに今日までだった。……何が言いたいんだこいつ。

「……はつきり言ったらどうだ?」

「むう。ならばつきり言っね。黒くんくーちゃんと一緒にここで遊んでおいでよ」

「……すまん。もう一度言ってくれ」

おそらく今のは聞き間違いだろう。今度はしつかり聞くとしよう。

「も〜。ちゃんと聞いてよ黒くん。くーちゃんと一緒に遊んでおいでって言ったんだよ」

……聞き間違いでは無いようだ。何考えているんだこいつ?」

「……お前正気か?俺にここで遊んでこいと?」



「うん」

「・・・お前、俺のことを忘れてないだろうな」

「モチのロン。大丈夫だよ黒くん。そのまま行けって言うてはいないんだから」

「・・・変装して行ってこいということか。面倒くさい以外のなんでもないな。」

「・・・却下だ。大体何故俺があいつと行かなければならんのだ」

「え〜。いいじゃん。黒くんとくーちゃんのいい思い出になるよ?」

「・・・知るか」

俺があいつと仲良くする理由が無い。というか篠ノ之束を殺そうとしている俺があいつと仲良くできるだろうか?

「行ってよ〜黒くん」

「・・・断る」

「いい気分転換にはなると思っよ?」

「・・・確かにそうかもしれないが・・・」

わざわざプールで気分転換する必要も無い。

「む〜。じゃあ黒くん、断れば君のご飯に薬品を仕込むよ?」

「・・・やった瞬間地獄に叩き込むぞ」

「・・・ごめんなさい。ね、黒くん行ってよ、お願い」

「・・・なんでそこまでして俺とあいつを行かせたいんだ？」

「それや、くーちゃんが楽しんでいる姿を見たいんだよ。けどくーちゃん一人で行っても寂しいでしょ？」

「・・・心を読むな。だが、ことーゴフツ!？」

「ここで俺の意識が途絶え・・・。」

気がつくところだった。多分スタンガンで気絶させられた後ここに運ばれたのだろう。・・・油断してしまった。戻ったらどうなるか覚悟しろよ篠ノ之束・・・!!

「・・・あの、落ち着いてくれませんか？」

「・・・ああすまん。というか俺にカツラを被されているがこれは・・・」

「黒さんの正体を隠すためでしょう。あの機体もありませんし」

ちなみに今の俺の髪型は銀色のロングヘアだ。こいつの親戚らし

くするためか？「ラグナロク」は篠ノ之東が持っているのだろっ。

「・・・はあ、もう来てしまったしな・・・入るか」

「・・・はい。すみません黒さん」

気にしなくてもいいだろうに、まあ、せっかく篠ノ之東がここに連れてきてくれたんだ。今日は楽しむとしよう。・・・帰ったら勿論悪死悪鬼だが。

それから少ししてから俺達はウォーターワールドに入って行った。

鈴Side

「ん？」

「あは？」

今日は一夏のデートで待ち合わせ場所のウォーターワールドのゲート前でセシリアに会った。・・・何でここにいるのかしら？

「これは、どうも。鈴さん」

「う、うん？セシリア、こんにちは」

多分あっちも」どうしてここに？」って思っているんですけど・

……。まあ、一夏を待ちますかと考え待つ、が。

……。来ない。

(だあっ！遅い！なにやってんのよ！)

「どづしたのかしら……」

どうやらセシリアの待ち人も遅れてるようだけど……。それより一夏よ！もう二十分ぐらい遅れてるし……。もう！

(あいつ昔っから、ここぞって時に遅れてくるんだから……)

とりあえず携帯で話しかけようとした瞬間に、それが鳴り響く。表示された番号は一夏のだった。

「もしもし！？あんた今どこで何してんのよ！？」

『あー、今学校で「白式」のデータ取りのために研究員が来るから待つてるんだ。ほら先月第二形態になったから、改めてデータが欲しいんだとさ。えーと……。すまん。今日は行けそうにない』

「なあっ！？」

な、何よそれ！てか、そんな用事があったんだったら昨日の内に言い……

『いや、実は昨日連絡しようとしたんだけど、お前電話に出ないし、部屋に行ったら寝てるって言われたからさ』

「・・・・・・・・」

た、確かに昨日は今日のために八時に寝て、携帯電話の電源も切った上に、同室のティナに緊急時以外起こさないように言った。

（ーっって、バカああ！こ、これが、緊急時でしょうが！！）

『とうわけでだ。セシリアにチケットをやったから、一緒に楽しんできてくれ』

・・・はい？え？今一夏何て言った？

「はい？セシリア・・・って、どういうこと？」

『あれ？そこにセシリアいないか？ゲート前で待ち合わせって言ったんだけど』

・・・・・・・・。。。

「コイツを殺していいかしら・・・」

『お、おい、何物騒なこと言ってんだ鈴。大丈夫か？』

一夏の呑気な発言にあたしは完全に切れた。

「だ、大丈夫なわけないでしょうが！な、なんてことをしてくれたのよアンタは！」

『うわっ。いきなり怒鳴るな。・・・あ、はい、わかりました。わりい、もう行かないとならないから悪いけどセシリアにも説明して

おいてくれ。じゃあ』

ぶつつ。っと電話は切れてしまった。な、なんでこんなことに……。あたしはどうしようもない怒りからわなわなと携帯電話を握りしめる。後一秒セシリアが声をかけるのが遅かったらあたしは間違いなく携帯電話を地面に叩き付けていただろう。

「あの、鈴さん？どうなさったの？」

「ふ、ふふ、セシリア……よく聞きなさい……。一夏は来ないわ」

「……………」

フリーズしたわね。無理もないけど。

「一夏は来ない」

「……………はい？ええと……なぜ？というか、どうして鈴さんが……？」

「今日、あたしとあんたがデートすることになったのよ！」

「ええ！？わ、わたくしは一夏さんに誘われてここに……」

「だからそのチケットは元々あたしが用意したの！わかる！？」

呆然とするセシリアが二回まばたきをしてからあたしに話しかけて

くる。

「・・・鈴さん。とりあえず、中に入ってから説明していただきましょう。それに・・・どういふことなのかゆっくり聞きたいので」

「・・・説明するしかないわね。ったくなんでこんな状況になったのよ。」

「??? Side

「・・・ふじ」

とりあえず適当に泳いで今は一休み中だ。あいつは・・・いた。

「・・・どうだ?」

「楽しいです。あまり泳いだことがないので」

「・・・そうか。なら思いっきり楽しむといい」

「はい。それと・・・」

なんだ?何か報告することでもあるのか?・・・となると篠ノ之束のことか?

「・・・代表候補生がいます。セシリア・オルコットと凰鈴音の二

人です」

「・・・なに？」

俺が周りを見ると確かに代表候補生の二人がいた。・・・そういえば今日か。

「・・・どうなされますか？」

「・・・放っておけ。俺は変装しているし、まさか「黒騎士」がここで遊んでいるなど思わんだろうからな」

「・・・それもそうですね。機体ありませんし・・・下手な行動は避けるべきですね」

下手に動けば最悪俺の正体がばれるかもしれん。

「・・・ああ、昼までまだ時間がある。もう少し泳ぐとしよう」

「はい」

俺達がまた泳ごうとした瞬間、園内放送が響き渡った。

『では本日のメインイベント！水上ペアタッグ障害物レースは午後一時より開始いたします！参加希望の方は十二時までにフロントへとお届け下さい！優勝賞品はなんと沖縄旅行五泊六日の旅をペアでご招待！』

「・・・ほし」



優勝賞品には興味は無いがレースにはあった。だが、こいつはやらんだらうな。

「……あの、その、黒さん。さ、参加してもいいでしょうか？」

「……なに？」

驚いたな……てっきりこういうことには興味無いと思っていたのだが。

「……成る程、目的は優勝賞品か」

「い、いえ、せつかなので……やってみたいと思ったのですが……駄目でしょうか？」

「……ふむ」

俺もこいつも考えていることは同じ……か。まあ、いいだろう。

「……構わん。俺もやってみたいからな。行くぞ」

「は、はい。ですが……あの二人も参加するみたいなので……」

「……大丈夫だろう。俺の顔はお前と篠ノ之束しか知らない。ばれる心配はほぼ無いだろう」

もし、ばれてもすぐに逃げればいいだけだしな。

「……行くぞ。さっさと登録して飯を食つぞ」

「は、はい。わかりました」

レースに参加するため受付に向かう。少しして到着した。

「・・・俺達も参加していいか？妹が出たがっているのだが」

「え、えーと・・・」

おそらく女性だけを参加させたいがこいつのことを考えているのだろう。

「す、少しお待ちください」

「・・・ああ」

受付の人が電話で誰かと話している。おそらくは主催者だろう。

「はい・・・はい・・・わかりました。待たせて申し訳ございません。いいそうです」

「・・・すまない」

「いえ、主催者の方も納得してくだされたので、後そちらの方です  
が目は・・・？」

「・・・問題ない。目を閉じているのは癖のようなものだ。見えて  
はいる」

「そうですか。ではどうぞ」

許可を得た俺達は偽名で登録し、食事を取ることにした。ちなみに俺以外の男は受付で「お前空気読めよ」という無言の笑みに退けられた。

「・・・時間までゆっくりするか。今体力を使うとレースの時がきつい」

「・・・そうですね。後さっき妹と言ったのは誤魔化すためですか？」

「・・・ああ、上手く行ってよかった。飯を食いに行くぞ」

「・・・はい」

俺達はとりあえず飯を食うため売店に向かった。

鈴Side

「さあ！第一回ウォーターワールド水上ペアタッグ障害物レース、開催です！皆さん！参加者に大きな拍手を！」

その言葉に合わせて会場から拍手の嵐が巻き起こる。・・・すごいわね、にしても・・・。

「まさか男がいるとはね」

「ええ、おそらく隣の妹さんのためでしょう」

このレースの参加者で唯一の男。そっちの方を見るとそいつも準備体操をしていた。髪は銀髪でそいつに対して周りからブーイングが発せられているがまったく気にしてない。

「……ねえセシリア」

「何ですの鈴さん？」

「あいつ……なんか気にならない？」

「……少し気になりますが……別にどうでもいいのでは？」

セシリアは特に気にしていないがあたしは何故か気になる。……どこかで会ったような……？

「それより鈴さん。優勝賞品を手に入れることに集中すべきですわ」

「……そうね」

なんか釈然としないけど……今はレースに集中しますか。

「優勝賞品は南国の楽園・沖縄五泊六日の旅！みなさん、がんばってください！」

なんとしてもこれを手に入れないと……！

(いくら唐変木の一夏でも、若い男女が二人で南国の島に行けば……)

・)

(夏は人を変えと言いますし、夏休み最後の思い出ということではなら・・・)

ふと、セシリアと目線が合う。

「えへっ」

「あはっ」

(セシリアからは、なんか考えて奪いましょう)

(鈴さんからは、何か代わりの物で譲っていただきましょう)

セシリアが笑みを浮かべているけど、多分あたしから賞品を奪うつもりでしょうね。そうはいかないわよ。

「では！再度ルールの説明です！この五〇×五〇メートルの巨大プール！途中にある障害をクリアしながらその中央の島にあるフラッグを取ったペアが優勝です！がんばってください！」

あたし達はルールを聞きながらコースを見直す。結構厄介ね。泳いで渡るのは無理だし、プールに落ちたら一からやり直しかな。なかなかよくできているけど。

(参加者が一般人なら・・・ね)

多分セシリアも今あたしと同じ事を考えているわね。代表候補生であるあたし達が一般人に遅れをとることはそうそうない。

「さあ！いよいよレース開始です！位置について、よい・・・」  
パンっ！競技用ピストルの音が鳴り、参加者が一斉に駆け出した。  
このレース絶対に勝つ！

??? Side

「・・・甘い」

「そんな攻撃が当たるとでも？」

開始直後妨害をしてきたペアを軽くいなしプールに落とす。このレース妨害ありだから・・・。さて、どうするか。

男の俺が水着を奪うわけにはいかないしな。となると・・・逃げ切るのが一番だな。

「・・・一気に行くぞ」

「はい」

他のペアの妨害をかわしながら障害を軽々とクリアしていく。ふと後ろを見ると代表候補生の二人も迫って来ていた。

「やりますね。流石代表候補生といった所でしょうか」

「・・・奴等も案外手段を選ばないな」

奴等は妨害してくるやつの水着を奪って行動できないようにしていた。そして互いに連携して障害をクリアしていた。

「こ、これはすごい！高校生の二人組と兄妹の二人組が凄まじい速さで障害をクリアしていきます！」

「ははん！余裕！」

「地雷原に比べれば簡単ですわね」

「・・・やるな」

「このままだと・・・追いつかれますね」

俺達と奴等では奴等の方が速い。仕方ないな、こいつがちっこいしな・・・。

「ちっこい言わないでください」

「・・・すまん」

・・・地雷を踏んだようだ。後優勝出来そうなのは俺達を合わせて四組か。俺達と奴等が最後の島にたどり着くが・・・。突然トップの二組が反転してきた。

「・・・ふん、俺達に勝てるってもー」

「あつはつはつ。一般人があたし達候補生に勝てるでもー！」

「おおつと、一位の木崎・岸本ペアに二位の橋本・雨崎ペア！ここで得意の格闘戦に持ち込むようです！」

・・・はて？今何か変な単語が聞こえたような？

「・・・待ってください。格闘戦？」

「・・・はい？得意の・・・なんですって？」

「トップのお二人は先のオリンピックでレスリング金メダル、柔道銀メダルのペアに二位の二人は柔道と空手の金メダルペアです！二組共仲がよいと聞いてましたが、競技は違えど息はピッタリですね！」

「え・・・？何金メダル！？ていうか、この四人体つきが違うんだけど！？」

「何でそんな奴等が参加しているんだ！？」

マッチョ・ウーマンと呼ぶのがお似合いな四人はそれぞれ俺達に向かつて来た。ちなみにレスリング、柔道のペアは代表候補生ペアに柔道、空手のペアが俺達に襲いかかってきた。

(これはまずい・・・！)

俺はともかくあいつは体格差がありすぎる以上戦力にならない。つまり二対一で戦うことになるが・・・かなりきつい。



「はあああああっ!」

「・・・くっ!」

柔道、空手ペアの猛攻に俺達は追い詰められる。・・・逃げ場無し。どうする!? 飛べればなんとかなるけど流石にそれは・・・、ん? 「飛ぶ」?・・・一か八かやってみるか。

「おい!」

「は、はい!何ですか!?!」

「俺に向かって全力で走れ!いいな!」

「え?し、しかし・・・」

「いいからやれ!」

「わ、わかりました!」

あいつはすぐに俺に向かって全力で走る。タイミングを見計らって俺はあいつの方に向き、両腕で「足場」を作る。俺の考えに気づいたあいつが俺の両腕に乗る。と、同時に俺は両腕をゴールの方向目掛けて全力で振り抜く。

「ぶべっ!!--」

?今何か聞こえたような・・・?俺があいつの方を向くと凰鈴音もゴールに向かって飛んでいた。間に合うか!?

「「たあああああつー!!」」

二人の声が響く、先にフラッグを取ったのは……鳳鈴音だった。負けた……か、後ちよつとだったのだが。

「ありがとう、セシリア。あんたのおかげよ」

「後ちよつとだったのに……!」

悔しそつだなと考えていると……。

「ふ、ふ、ふ……」

なんだ？まるで地獄から響くような笑い声が……。？と思つた次の瞬間十五メートル以上の水柱が立ち、中から「ブルー・ティアーズ」を纏つたセシリア・オルコットが現れる。

「今日という今日は許しませんわ！わ、わたくしの顔を！足で！鈴さん！」

……まさか鳳鈴音のやつ、跳ぶためにセシリア・オルコットの顔を足場にしたのか？そりゃ怒るわな……。

「はっ、やろつっての？」甲龍「!」

……おい、こんなところでISを展開するな。このままだとまずいな。

「……どつします??」

「・・・このまま帰るぞ。騒動に巻き込まれるのはごめんだ」

「そうですね」

もうすでに奴等は戦っており、観客もそっちに注意が向いている。今なら簡単に帰れるだろう。

「・・・行くぞ」

「わかりました」

俺達はウォーターワールドをこっさり出る。ちなみに俺達が出たのと同時に爆発音が鳴り響いた。やれやれ。

鈴Side

「とにかく！こっぴつたことは！金輪際！しないでくださいね！」

「はい・・・」

今あたし達はさっきまで水着を着ていた司会のお姉さんに事務室で説教されている。あたし達が戦ったせいでレース会場のプールは半壊し、天窓も一部割れてしまった。

「はぁ、まったく・・・！」

「あ、あのう……優勝はどうになりましたか……？」

「……景品、もらえると思ってるの？」

「す、すいません……何でもありません……」「

ギリリと殺し屋のような目で睨まれた。……やっぱり駄目か。

「もう少ししたら学園の方からあなた達の身柄の引き取り人が来るからおとなしくしてなさいよ」

「「はあ……」「

もう五時過ぎてるんだけど……まだかしら？

「はい、……ああ、はい。わかりました。迎え来たわよ。さっさと帰んなさい」

「失礼しました……」

はあ、何やってんだろあたし。結局一夏とデートは出来ず、景品も貰えず、ここには迷惑かけちゃったし……。

「お、なんか暗いな。さてはたつぷり絞られたんだろ」

「「……え？」

「よっ」

聞き慣れた声にあたし達が顔を上げると……一夏がいた。

「本当は山田先生が来るはずだったんだけど、緊急の仕事があったデータ取りが終わった俺が代わりに……うわっ!？」

一夏が何か言っていたけど、そんなこと関係なしにあたしとセシリアが一夏の胸ぐらを掴む。よくもまあ、ノコノコとこれたもんね・

・!

「あんだねえ……!」

「一夏さんのせいで!せいで……!」

「ま、待て。なんかしらんが悪かった。……よし、何か奢ろう。甘いものかどうだ?な?」

ふん。だったらきっちり奢ってもらおうよ。

「……@クルーズ」

「……期間限定の一番高いパフェ」

「ぐあ」

「なに、イヤなの?」

「断れる立場でしょうか?」

「わかったよ……」

「たく、これでも緩くしてあげてるのよ?感謝しなさい。」

「さ、行きましょうか」

「あーずるいわよセシリア！一夏！あたしとも組みなさいよ！」

「な、なんだよ二人共。ていうかー」

「歩きにくい、でしょ？（ですわね）」

「……………」

もう、一夏の唐変木。なんであたし達の好意に気づかないのかな？

「ま、今回はこのくらいで勘弁してあげるわ」

「でも、次はありませんわよ？」

「はいはい」

夕暮れの中あたし達はファミレスに向かって歩く。今はこれで我慢してあげるわ。今は……ね。

??? Side

「…………どこだ？篠ノ之束…………？」

「落ち着いてください……！」

秘密ラボに戻った俺は早速篠ノ之束に「お礼」をしようとするが・  
・あいつの姿が見えない。

「……安心しろ篠ノ之束。今回はきちんとした「お礼」だ。ちや  
んと極楽に連れてってやる……！」

「それって殺してますよね!？」

俺が篠ノ之束を捜していると不意に……。

ガタッ。

物音がした。俺がそっちの方を向くと……。

「……あ」

篠ノ之束がいた。フッフ、サテ「オレイ」ヲシテヤラナイトナ。

「……ヨオ」

「な、何かな？黒く〜ん？(ダラダラダラダラ)」

「……キョウノ「オレイ」ヲシテヤロウトオモツテナ。サア、ハ  
ジメヨウカ」

「ま、待って！何かカタカナになってるよ!?!凄まじく嫌な予感し  
かしないよ!?!」

「に、逃げてください束さま！黒さんは本気で殺すつもりです！」

シノノタバネガニゲダス。オレハシガミツイテイルコイツヲキゼツサセ、イツキニシノノタバネノマエニタツ。

「く、くーちゃん。そ、そんな・・・だ、だれかーいやあああああああああー！！！」

シノノタバネニ「オレイ」ヲカイシした。・・・復讐完了。

ちなみに次の日起きたらあいつに喧嘩を売られることになった。まあ、仕方ないか。

??? Side end



## 第二十八話（後書き）

意見やアドバイスを、感想などどんどん送ってください！後間違いや誤字もあればお願いします。

## 第二十九話（前書き）

えー、滅茶苦茶です。．．．すいません。

## 第二十九話

東Side

昨日の惨劇から一夜明け、次の朝私は黒く人を捜していた。あ、いたいた。

「黒く〜ん」

「……………」

「どうしたの黒くん？変なものを見たような顔をして？」

「…………お前よく生きているな。俺は本気で処…………ごほんごほん。お礼をしたのに」

「…………誤魔化せてないよ黒くん。というかお礼と言いながらなんで「よく生きているな」って言うのかな？やっぱり昨日のは処刑だったんだね。」

「まあね。東さんはまだ死ぬわけにはいかないからね」

「…………そうか（なんであれを受けて、生きているんだ？こいつ人間か？）」

失礼だよ黒くん。私はれっきとした普通の人間だよ。

「…………なあ、今何故か「それはない」と聞こえたのだが…………？」

「気のせいじゃないかな？それより黒くん。そろそろと思うけど・・・どう？」

「・・・ああ、今日起きて「ラグナロク」を確認したら新しい武装が使えるようになっていた」

やっぱりか。早く見てみたいな。わくわく。

「なら黒くん。その武装を使うためのいい機会があるんだけど・・・どうかな？」

「・・・面白そうだな。で？何をすればいい？」

「「ゴーレム？」と戦ってほしいんだ」

「・・・ほう。新しい「ゴーレム」か」

「うん。私は「ゴーレム？」の戦闘データが取れるし、君は新しい武装に慣れることができる。どう？」

「・・・いいだろう。いつやるんだ？」

ふふっ、乗ってきたね。けど、すぐにはできないんだよね。

「一週間後かな？最終調整がまだ終わってないし」

「・・・わかった。準備ができたと言ってくれ」

「ほい。今日も黒くんは訓練かい？」

「……ああ、それが終わればあいつの相手をしないとな」

くーちゃんとか。昨日のあれのせいだね。さうて、「ゴーレム？」  
の調整を続けようつと。

?????Side

「……暇だな」

篠ノ之束の提案を受けて三日後、俺は特にすることが無いのでぶらぶらしていた。

「……どこかで買い物でもするか……?」

何もしないよりは、まだましだろう。

「……篠ノ之束」

「なんだい黒くん？準備はまだ終わってないよ?」

「……外で気分転換をしようと思ってな。いいか?」

「うん。別にいいけど……変装ぐらいはしてね?」

まあ、当然だろうな。俺も正体をばらすつもりは無いし……。

「・・・ああ、そのつもりだ。で・・・いいか？」

「いいよ。君も気分転換したくてたまらないみたいだし」

今日はそういう気分なんだろうか？この前ウォーターワールドに行つたばかりなのにな。

「・・・では行ってくる」

「行つてらっしゃい。何か土産品を買ってきてね」

・・・旅行ではないのだが・・・こいつにとっては似たようなものか？まあいいか。では、出発だ。

俺は「ラグナロク」を展開し、そのまま空に向かって飛んだ。（勿論ステルスモードで）

509

シャルロットSide

「ふう、疲れたな」

「まさか最初のお店であんなに時間を使うとは思わなかったね」

今日、僕はラウラの服を買うためにラウラと一緒に買い物をしていった。けど、さっきのお店で何故か周りの人達から写真を撮らせてほしいと言われ、そのせいでかなり時間が経ってしまった。

ちなみに今は昼でオープンテラスのカフェでご飯。僕はラザニア、  
ラウラは日替わりのパスタを食べている。

「しかしまあ、いい買い物はできたな」

「せっかくだからそのまま着てればよかったのに」

結構可愛かったのに。なんでそうしなかったんだろ？

「い、いや、その、なんだ。汚れては困る」

あ、成る程。多分理由がわかつちやった。

「ふうん？もしかして、お披露目は一夏に取っておきたいとか？」

「なっ！？ち、違う！だ、断じて違うぞ！」

やっぱり。ラウラも素直に言えばいいのに。まあ、でも知らないフ  
リをしてあげよう。

「そっか。変なこと言ってごめんね」

「ま、まっただ」

「ラウラ。フォークとスプーンが逆だよ？」

「~~~~~！」

そこまで動揺していたんだね。ちなみにその事に気づいたラウラは

顔全体が真っ赤になった。可愛いな。

「う、午後はどうする？」

「生活雑貨を見て回ろうよ。僕は腕時計見に行きたいな。日本製の時計が欲しかったし」

「腕時計が欲しいのか？」

「うん、ラウラは何か日本製で欲しいのはないの？」

僕が言うとラウラが少し考える。どんなものが欲しいのかな？

「日本刀だな」

「・・・女の子的なものはないの？」

「ない」

「・・・はあ、ある程度予想していたけど・・・」

「・・・どうすればいいのよ、まったく・・・。はあ・・・」

ふと隣のテーブルの女性がため息を漏らすのに気づき隣を見る。どうやら何か悩んでるみたいだけど・・・。

「ねえ、ラウラ」

「お節介はほどほどにな」



・・・読まれちゃった。でも嬉しいな。

「僕のこと、ちゃんとわかってくれてるんだね」

「た、たまたまだ。・・・で、どうしたいんだ？」

「うーん、とりあえず話だけでも聞いてみようかな」

何か悩みがあるなら、解決してあげたいしね。

「あの、どうかされましたか？」

「え？ー！？」

女性が僕達を見るなり、いきなりイスを倒す勢いで立ち上がり、そのまま僕の手を握る。え、え？な、何なの？

「あ、あなたたち！バイトしない！？」

「「え？」」

?????Side

「・・・こんなものでいいか」

暇潰しも兼ねての買い物で人通り買って今は一休み中だ。

「・・・平和だな」

ふと周りを見るが、やはり平和という感じがする。・・・この平和をいつか自分の手で壊すことを考えると・・・少しだけ躊躇ってしまふ。

(・・・何を躊躇っているんだ俺は)

ここに来る前からずっと考えていたことなのに・・・何故今更迷う。

(・・・まだ割りきれていない、か)

・・・今はその事を忘れよう。それより・・・。

「・・・どこで飯を食うか」

そろそろ一時だ。流石に腹が減ったので食事を取ろうと思い、辺りを見回す。

「・・・あそこでいいか」

ふと目についたお店「@クルーズ」に向かい、中に入る。

「いらっしやいませ！お一人様ですか？」

「はい」

流石に店に入っている間は普通の人のような話し方にするか。

「ではこちらへどうぞ」

店員に案内され空いた席に座る。・・・何故か騒がしいな。

「どうなされましたお客様？」

「え？い、いや、少し店が騒がしいから気になっただけですよ」

「成る程、おそらくあの二人のせいでしょう」

俺が店員が言った方を見ると・・・そこには代表候補生のシャルロット・デュノアとラウラ・ボーデヴィツヒがいた。

(・・・なんであいつらがここにいるんだ？)

アルバイトか？と思ったが・・・代表候補生は国から金を支給されているからそれはないな。・・・となると人助けか？まあどうでもいい、さっさと食って帰るか。俺は適当なメニューを注文し、待つことにした。

シャルロットSide

「デュノア君、四番テーブルに紅茶とコーヒーお願い」

「わかりました」

また、カウンターから飲み物を受け取りトレーに乗せてお客さんの元に運ぶ。

「お待たせいたしました。紅茶のお客様は？」

「は、はい」

この人か。さて渡す前にこの店の「サービス」が必要か聞かないと。

「よろしければこちらでお砂糖とミルクを入れさせていただきますが、どうなされますか？」

「お、お願いします。さ、砂糖とミルク、たっぷりです」

「わ、私もそれでっ」

「かしこまりました。それでは、失礼いたします」

要望に応え、二人のお客さんのカップに砂糖とミルクを加えかき混ぜる。

「どござ」

「あ、ありがとう・・・」

・・・どうしたんだろ？お客さん二人ともギクシャクしているけど・・・まあいいかな？

「それでは、また何かありましたら何なりとお呼び出してください。お嬢様」

メニューを運ぶ終わったので、また別のメニューを運ぼうとカウンターに戻らないとね。それにしても……。

（結構、接客業って大変だよな。ラウラは大丈夫かな？）

仕事をこなしつつ、ラウラを捜すとちょうど三名の男性客のテーブルで注文を取っていた。

「ねえ、君可愛いね。名前教えてよ」

「……………」

「あのさ、お店何時に終わるの？一緒に遊びにー」

ラウラが口説こうとしている客の台詞を遮り、ダンッ！とテーブルにコップを叩き付けた。……ラウラ気に入らないのはわかるけどそんな態度じゃあ駄目だよ。

「水だ。飲め」

「こ、個性的だね。もっと君のことよく知りたくなっー」

オーダーを取ることラウラはテーブルを離れ、カウンターに着いて何かを告げて、少しして出されたドリンクを持って行った。

「飲め」

「え、えっと、コーヒーを頼んだ覚えは……」

「何だ？客でないのならとっとと出て行け」

「そ、そうじゃなくて、他のメニューも見たいんだけど・・・」

あの人結構しつこいね、無駄なのにさ。今の社会で初対面の女子に声をかけるなんて余程の馬鹿か勇者かだろうけど・・・明らかに前者だよ。

「た、例えば、コーヒーにしてもモカとかキリマンジャロとかー」

「はっ。貴様ら凡夫に違いがわかるとでも？」

「いや、その・・・すみません・・・」

・・・ラウラそういうことは言っちゃ駄目だよ。まあ、相手も黙っているからいいけど。

「飲んだら出て行け。邪魔だ」

「はい・・・」

ドイツの冷氷は今でも健全・・・か。

「デュノア君、五番テーブルにコーヒーとサンドイッチお願い」

「あ、はい」

カウンターから別のメニューを渡されたのでそれを受け取って運ぶ。えーと五番テーブルは・・・あそこだね。

「お待たせいたしましたお客様。どうぞコーヒーとサンドイッチでござります」

「ああ、どう……も……!?!?」

……?何だろうこのお客さん。僕の顔を見て驚いてる……?

「……どうなされました?」

「あ、いえ、少し知り合いに似ていたので驚いただけです」

「そうでしたか。それはすいません」

なんだ僕の顔が知り合いに似ていたからか。びっくりした。

「いえ……こちらこそ驚いてすいません。こちらこそ……ね」

「……ゾクッ!」

「!?!?」

バツ!!

何故かこのお客の笑顔を見た途端、全身から寒気がして思わず一歩下がってしまった。

(な、なに今の……!?!?)

「……どうしたんですか?」

「えっ!? あ、な、なんでもありません!」

「……さっき感じた寒気はもう消えていた。な、なんだったの……?  
?」

「……大丈夫ですか?」

「は、はい。ご心配をおかけしてすみませんお客様。では失礼します」  
とりあえずこのお客さんから離れカウンターに戻る。僕を心配して  
かラウラが話しかけてきた。

「どうしたシャルロット?」

「う、うん。ちょっとね」

「……何があった? 明らかに変だぞ?」

「……あの人が気になるんだよ」

「あの人? 誰だ?」

「ほら、向こうの……黒っぱい茶髪の人」

ラウラにさっきのお客さんのことを言う。ラウラが少し考え……。

「……私が少し探ってみようか?」

「え? でも……」



「もし、奴がどこかのスパイや犯罪者ならその場で捕まえればいいだろう?」

「・・・そうだね。でも気をつけて」

「ああ」

そついいラウラがさっきのお客さんの席に向かう。

「デュノア君!今度はこれを運んで!」

「は、はい!」

またメニューを渡され、運んでいく。・・・気をつけてねラウラ。

????Side

(・・・少しやり過ぎたか)

俺の頼んだメニューを運んできたのがシャルロット・デュノアだったのは驚いたな。少しからかうために殺気を当てたのはまずかったか?ま、何にせよ。

(さつさと食って帰るか)

サンドイッチを軽く食べようと手に取ったが……。

「おい」

「?……!はい何ですか?」

今度はラウラ・ボーデヴィツヒがこっちに来た。……やれやれ、厄介なことになりそうだ。

「貴様何者だ?」

「……はい?」

いきなり何を……?

「貴様は何者だと聞いている。名前は?出身地は?どこに住んでいる?」

……まずいな。誤魔化すことはできるが万が一調べられたら、こっちの素性がばれるかもしれん。

「何故答えない?」

「言う理由が無いでしょう?それに勝手に人のことを聞こうとしないでください」

「ふむ、貴様の言う通りだな」

「だったら——」

「いきなり話し掛けられて、そこまで冷静でいられるとは大した奴だな」

「……しまった。少しでも動揺しているフリをするべきだった。……仕方ないな。」

「……何が言いたいんですか？ドイツ代表候補生ラウラ・ボーデヴィツヒ」

「貴様……。どうやら当たりのようだな。大人しくしてもらおうか」

「……ふう、俺が大人しくするような奴に見えます？」

「ならば力づくで大人しくさせるだけだ」

俺とラウラ・ボーデヴィツヒが互いを睨み合い動こうとした瞬間――

「全員、動くんじゃねえ！」

三人組の男が怒鳴りながら店内に入り込んできた。そして次の瞬間銃声が鳴り響き、悲鳴が上がった。

「きゃあああっ！？」

「騒ぐんじゃねえ！静かにしろ！」

「……ちなみに三人組の格好は見るからに漫画に出てくるような強盗だった。……古。」

「あー、犯人一味に告ぐ。君達はすでに包囲されている。大人しく投降しなさい。繰り返すー」

「・・・なんか」

「・・・警察の対応も」

「・・・古・・・」

・・・同意見だ。なんだ？どこのドラマだ？

「ど、どうしましょう兄貴！このままじゃ、俺達全員ー」

「うるたえるんじゃねえっ！こっちに人質がいる以上、あつちは大  
人しくするしかねえさ」

確かにその通りだ。俺達がいなければ・・・だが。

「へ、へへ、そうですね。俺達にはコイツがあるし」

そう言つて男はショットガンを天井に向かって威嚇射撃を行う。一部の蛍光灯が割れ、パニックになった女性客が悲鳴を上げる。それをリーダーと思われる男がハンドガンを撃つて黙らせる。

「大人しくしてな！俺達の言うことを聞けば殺しはしねえ。いいな  
？」

悲鳴を上げた女性が顔を真っ白にしながらコクコクとうなずき、声  
が漏れないように口をつぐむ。・・・可哀想に。

「おい、聞こえるか警官ども！人質を開放してほしいのなら逃走用の車を用意しろ！勿論、追跡車や発信器なんかつけるんじゃないやねえぞ！」

威勢良く言いながら、警官隊に向かって発砲する。パトカーのフロントガラスを割っただけだが、周囲の野次馬がパニックになるのは十分だな。

「へへ、奴等大騒ぎしてますよ」

「平和な国ほど犯罪はやりやすいつて話、本当ッスね！」

「まっただ」

・・・さて、どうするかな。やろうと思えばやれるが・・・俺が上手くここから逃げるために利用させてもらおうか。・・・どうやらラウラ・ボーデヴィツヒはこの状況を何とかするつもりの様だしな。

「なんだ、お前。大人しくしてろっていうのが聞こえなかったのか？」

店内で強盗以外にただ一人立っているラウラ・ボーデヴィツヒにライダーが近づいてくる。少しイライラしている感じがするが・・・こいつらのせいで俺を捕まえることが出来んからだな。まあ、こいつらが来なくても無理だがな。

「ねえ、兄貴。時間はたっぷりありますし、その間この子に接客してもらいましょーよ！」

「お、俺も賛成っ。メイド喫茶って入ったことなくて・・・」

「お前らなあ・・・」

手下二人の発言に少し呆れながら、リーダーは空いている席にどか  
つと腰を下ろす。・・・馬鹿な奴等だ。

「はあ、まあいい。ちょうど喉が渴いてたしな。おい、メニューを  
持ってこい」

ラウラ・ボーデヴィツヒはうなづくことなく、カウンターの中に入  
り、氷がたっぷり詰まった水を持ってきた。

「・・・なんだ、これは？」

「水だ」

「あの・・・メニューを欲しいんすけど・・・」

「黙って飲め。・・・飲めるものならな」

突然ラウラ・ボーデヴィツヒがトレーをひっくり返し、宙に舞う氷  
水を三人組目掛けて弾いた。

「いってええっ！？な、なっ、何しやがっ・・・」

三人組にすばやく氷の弾丸を当て、怯んだ男に膝蹴りを叩き込む。

「ッざけやがって！このガキ！」

リーダーがすぐにハンドガンを放つが・・・当たらんだろうな。現にラウラ・ボーデヴィツヒは店内のあらゆるものを上手く使って防いでいる。

「あ、兄貴っ！？こ、こ、こいつツーーー」

「うるたえるな！ガキ一人、さっさと片付けてーーー」

「ーーー一人じゃないんだよねえ、残念ながら」

いきなり背後から現れたのはシャルロット・デュノアだった。・・・少しため息をついているがラウラ・ボーデヴィツヒのせいだろうな。

「なっ！？このツーーー」

「あ、執事服でよかったかな。思いつきり足上げてても平気だし」

シャルロット・デュノアはリーダーの拳銃を手ごと蹴り上げ、その勢いを利用しショットガンの男の肩にかかと落としを叩き込む。・・・ふむ、流石代表候補生、素人では相手にならん。

「目標2。制圧完了。ーーーラウラ、そっちは？」

「問題ない。目標3、制圧完了」

「ふっ、ふざけるなあっ！お、俺がつ、こんなガキどもにつ・・・」

さっき蹴られたせいで折れた指とは逆の左手に予備のハンドガンで二人を狙うが、それよりも先にラウラ・ボーデヴィツヒが一直線に

飛び出し、初弾をかわしたシャルロット・デュノアがトレーに乗っていた拳銃を上手くラウラ・ボーデヴィツヒに渡し、リーダーの肩間に突きつける。

「遅い。死ね」

「えっ。ラウラ、待っ—」

ガツン！リーダーの額にグリップが叩き込まれ、男は倒れる。

「全制圧、完了」

「・・・はあ。一瞬びつくりしたよ・・・」

「ああ言えば、素人なら怯むからな。より安全な制圧方法だ」

「いや、まあ、そうなんだけど」

「・・・奴なら本当に撃ちかねないと思っているのだろうな。」

「お、俺達助かったんだ！」

「やった！あ、ありがとう！メイドさんに執事さん、ありがとう！しばらくして、助かったとわかったのか店内が騒がしくなり、その様子を見て、警官隊も詰めよってきた。」

「ふむ、日本の警察は優秀だな」

「ラウラ、まずいよ！僕達は代表候補生で専用機持ちなんだから、



公になるのは避けないと！」

「それもそうだ・・・が、奴を捕まえてからだな」

「酷いですね。事件に巻き込まれた「ただの一般人」に対して」

代表候補生の二人が俺を睨む。

「・・・「ただの一般人」がこんな状況の中、平然としているのか？」

「大人しくしてもらいます」

奴等が俺に向かってこようとした瞬間――

「捕まってムシヨ暮らしになるくらいなら、いつそ全部吹き飛ばしてやらあっ！」

どうやら完全に気絶していなかったリーダーが革ジャンを広げ、プラスチック爆弾の腹巻きが現れる。・・・あのサイズならここら一体は吹き飛ばせるな。

「わー・・・」

「最後まで古々・・・」

確かになあ・・・。

「あきらめが悪いな」

ラウラ・ボーデヴィツヒが男の隙を作り、その間にシャルロット・デユノアがもう一つの拳銃を受け取る。ちなみに俺は自分の痕跡を消してから支払いを済ませておく、逃げるためにな。俺が支払いを終わらせたのと同時に――

ダダダダンッ！

「「チェック・メイト」」

奴等が放った合計十発の弾丸が的確に起爆装置と爆薬の信管、そして導線だけを撃ちぬいていた。さて、失礼させてもらっぞ。

シャルロット Side

「まだやる？」

「次はその腕を吹き飛ばす」

二丁の拳銃を突きつけられた男は情けなく震えながら謝った。

「す、すみませんっ！も、もうしま――」

「シャルロット！奴がない！」

「えっ！？」

店内を見渡すとさっきの茶髪の男がいなくなっていた。

「逃げられた・・・！」

「・・・とりあえずここから離れるぞ」

「・・・そうだね」

ぐずぐずしているとマスコミ関係者も来る。僕達はすぐに店内を立ち去り、さっきの男を捜したが・・・もつどこにもいなかった。

??? Side

「・・・さて、帰るか」

奴等から上手く逃げ切った俺は「ラグナロク」を展開し、買ったものを運んでいた。

「・・・これで充分か？」

「一応色んなものを買ったが・・・、これでいいだろうか？」

「・・・にしても、危なかったな」

強盗の三人組が来ていなければ間違いなく戦闘になっていたからな。

「……これからは余計なことをしないようにするか」

それにしても……今回といい、この前といいなんで代表候補生に出くわすんだ？

「……まあいいか」

俺は特に気にすることなく篠ノ之東の秘密ラボへと向かった。

??? Side end

## 第二十九話（後書き）

意見やアドバイスを、感想などどんどん送ってください。後、間違いや誤字もあればお願いします。

### 第三十話（前書き）

投稿します。オリジナルです。後、アクセスが60000、ユニークが6500を突破しました。ありがとうございます！

ちなみに後書きに「ゴレム？」の簡単な説明が載っています。

## 第三十話

東Side

今日は黒くんと「ゴーレム?」の戦闘の日。まあ、間違いなく黒くんが勝つだろうけど。

「黒くん。調子は?」

『・・・問題ない』

ちなみに私とくーちゃんは部屋の外でガラス越しに黒くんと「ゴーレム?」を見ている。

「何分で終わるでしょうか?」

「三分もあれば充分でしょ。黒くんなら」

黒くんと「ラグナロク」なら簡単に終わるだろうね。それよりも・・・。

「早く見たいな。新しい装備」

「一体どんなものなのか・・・私も気になりますね」

『・・・来い「グングニル」』

黒くんの手に粒子が舞う、そしてそれが集まり徐々にある形になっていく。

「あれは・・・ランス？」

「のようですね。接近戦用でしょうか？」

うーん。確か「グングニル」って「命中」の能力だったよね。なのになんでランスなんだろ？てつきり、射撃武器かと思ったのに。

『・・・まだか？』

「あ、ごめんごめん。じゃあ、戦闘開始」

「もう少し普通に言った方がいいと思いますが・・・」

????Side

篠ノ之束の抜けた声と同時に「ゴーレム？」が襲いかかってくる。

「ゴーレム？」と比べればかなり速いが、「ラグナロク」と比べれば大したことはない。

俺は奴のブレードを両方かわす。ちなみに「ゴーレム？」は黒いマネキンのような姿で両腕の肘から先がブレードになっており、両肩には大きめの物理シールドが装備されている。頭部もバイザー型のような形状だ。



「・・・明らかに接近戦型だな」

また、「ゴーレム？」が近づく。俺は「ゴーレム？」の両腕のブレードを「グングニル」で捌く。・・・さて、もう少し「グングニル」だけでやるとするか。

俺は後退の「瞬時加速」で下がりながら「グングニル」に内蔵してあるスナイパーライフルの実弾を放つ。

「・・・あまり効かないか」

「ゴーレム？」の物理シールドで簡単に防がれる。・・・あれが少し厄介だな。先にあれを壊すか。

俺は距離を取りつつ、物理シールド目掛けて「グングニル」のビーム弾を撃つ。

「・・・結構硬いな」

何発か放つがあまり壊れていない。チャージして放ったほうがいいか。

「・・・チャージ」

「グングニル」のエネルギーを溜めるが、その間にも「ゴーレム？」は攻撃してくる。少しの間かわし、チャージが完了する。

「・・・発射」

俺はまた後退すると同時に「グングニル」を撃ち、右肩のシールドを先に破壊する。シールドが壊れた右側から攻める。

「……ふむ」

何度か攻撃するが思っていた以上に「ゴーレム？」の格闘能力が高く、中々致命傷を与えることができない。

「……レーヴァテイン」

俺は右手に「レーヴァテイン」左手に「グングニル」を構え、「ゴーレム？」と接近戦を行いながら「レーヴァテイン」で「ゴーレム？」のブレードと両肩を溶かす。

「……右腕もらった」

溶けて脆くなった右腕のブレードをエネルギーを纏った状態の「グングニル」で突き刺し、切断する。

「……次は左腕だ」

ブレードを一本無くした「ゴーレム？」だが、それでも残ったブレードで俺に襲いかかる。しかし、残った左腕だけでまともな格闘能力を発揮できるわけもなく、俺は残った左腕も簡単に壊す。

「……そろそろ終わりだ」

俺は「グングニル」をフルチャージする。一旦後退し、チャージが完了すると「グングニル」からエネルギーが溢れ、十字閃のような形になる。そして俺は「グングニル」を「投げた」。

『……………!?!?』

「ゴーレム?」は「グングニル」を避けようとスラスターを最大出力にして後退する。

「……………無駄だ」

後退する「ゴーレム?」を「グングニル」が追跡し、「ゴーレム?」を貫通して真っ二つにした。

「……………終了」

俺が言ったのと同時に真っ二つにされた「ゴーレム?」が爆散した。

538

東Side

「うわゝ。すごいねゝ「グングニル」」

「ええ、最後に黒さんが「グングニル」を投げた時は驚きましたが……………」

ああいう使い方だったんだねゝ。にしても「ゴーレム?」が壊れちゃったけど、まあいいや。

「……………いいデータは取れたか?」

「バツチリだよ」

戦闘を終えて、黒くんが部屋に入ってきた。

「……コアが少し壊れてしまった」

「大丈夫だよ。直しておくから」

黒くんが少し壊れた「ゴーレム？」のコアを私に渡す。「グングニル」で壊れたのかな？

「すごい威力ですね。機体を貫通した上にコアも損傷させるなんて」

「……まだあれで半分なんだがな」

「あ、あれで半分なんですか!？」

黒くんが言ったことに私も驚く。あの威力で半分なら全力で放てばどうなるんだろう。

「……まあ、無人機相手だから使ったんだが」

だよねえ。あれ、人を相手に使ったら間違いなく死んじゃうね。

「……「シヴァ」の出力も上がってきたしな」

「そっぴやそっぴだね、二、三日前に五割になったんだっけ?」

「……ああ、機体の出力もようやく六割まで出せるようになった

「からな」

あの速さでまだ六割って……。つくづく規格外の機体だね。

「……次はあの武装か。楽しみだ」

「？また、「テュール」の時と同じようになってるの？」

「……その様だ。どうやらランダムで次の武装がわかるようになってるらしい。」

「変なの、いつそのこと全部わかるようにすればいいのに」

なんでそんなややこしくしているんだろ？ま、どうでもいいか。

「それより次の武装ってどんなやつなの？」

「……攻撃力だけなら「ラグナロク」の中で最強の武装だ」

「……え？攻撃力最強？「ラグナロク」の武装の中で？」

「ど、どんな武装なんですか？」

「……その内わかる」

勿体ぶるな。すっごく気になる。今使える五つの武装だけじゃなく、他の武装を差し置いてまで言う攻撃力だけなら「ラグナロク」最強の武装。……教えてほしいな。

「……言う気は無いからな」

「ちえ、じゃあ「ラグナロク」最強の武装って何？」

「……大体予想できるだろう。お前なら……な」

「……やっぱり「あれ」？」

「……さあな」

黒くんは惚けるが、今まで「ラグナロク」を見てきた私にはおおよそ予想できる。多分「あれ」だ。

「……俺は少し寝てくる。何かようがあれば起こせ」

「はーい。その時は頼むね。くーちゃん」

「……私ですか？」

「うん。東さんはこれからさっきの戦闘データを元に新しい「コーレム」をどう作るか考えなければならぬからね」

くーちゃん以外に頼める人いないもん。

「……わかりました」

「……大変だな。お前も」

「……ありがとうございます黒さん」

む。私が無理矢理押し付けているって言うのかい？

「・・・似たようもんだろ。そろそろ昼寝してくる」

「じゅっくり〜」

「お休みなさい」

そのまま黒くんは部屋を出て、私とクーちゃんがこの部屋に残った。

「東さま」

「なんだい？クーちゃん」

「さっき話していた「ラグナロク」最強の武装というのは一体何なのですか？」

「・・・どうしよっかな。まだ予想なんだけど・・・ま、いつか。」

「私が「ラグナロク」を調べている間にね、一つ気になるのがあったんだよ」

「それは一体・・・？」

「あの機体の武装は全てが何らかの特殊能力を持っているのはクーちゃんも知ってるよね？」

「はい。東さまが教えてくれましたから」

いずれ「ラグナロク」に対抗するために教えたんだけどね。まあ、教えた程度で黒くに勝てるわけないけど。

「レーヴァテイン」は「高熱」、「シヴァ」は「変形」、「フェンリル」は「強化」、「テュール」は「移動」、そして「グングニル」は「命中」

「いずれも強力な能力ですね」

「うん。私が気になってやつは……一つじゃないんだよ」

「一つじゃない……？ま、まさか東さま……！？」

気づいたようだねくーちゃん……。私が言おうとしたことに。

「今くーちゃんが考えてる通りだよ。私が気になったやつはね……。特殊能力が「複数」あつたんだよ」

「ま、待ってください！確かあの機体は一つの武装に能力は「一つ」だけのはず……！？」

そう、くーちゃんの言う通り、一つの武装に能力は「一つ」だけのはずだ。なのにあの武装は「複数」の能力を持っていた。

「私も見た時は驚いたよ。名前しかわからなかったけど……。多分あの武装は「ラグナロク」で最強の武装だと思う」

「い、一体それはどんな……？」

「……その武装の名前は……」「ユグドラシル」

「「ユグドラシル」……」



まだどんな武装かはわからない。けど、間違いなく危険なやつだということだけははっきりしている。

「・・・ねえ、くーちゃん。「ラグナロク」についてどう思う？」

「え？規格外の機体だと思いますが・・・」

「言い方を変えよつか。なんで「ラグナロク」が造られたと思う？」

「織斑一夏を殺すためでは？」

「・・・本当にそうだろうか。本当にいつく人を殺すため「だけ」に「ラグナロク」は造られたのだろうか？」

「それだけのためには・・・変だと思わない？」

「とうとうと・・・？」

「あまりにも「凄すぎる」「んだよ。いくらなんでも一人を殺すためだけにしてはね」

「・・・確かにそうですね。では一体「ラグナロク」は何のために造られたんでしょうか？」

問題はそこだ。もし、それが分かれば黒くんの本当の目的がわかるはず・・・。

「いつく人を殺すことだけが目的でないとすると・・・」

「……もう何人が殺すつもりということですか？」

「……なんだろう。それも違う気がする。もっと別の理由……。」

「うん。まだ情報が少ないからね……。」

「……結論を出すのは無理がありますね」

「うん。後「何か」が足りないね」

後もう一つ黒くんについて「何か」わかれば、答えが出ると私は確信している。

「前に作るうとしたあれができれば手っ取り早いんだけどね」

「……何を作っているんですか？」

「人の過去を覗く機械」

「……またとんでもないものを」

だって黒くんの過去を覗けばすぐにわかるじゃん。

「バレないようにしなければ、黒さんに殺されますよ？」

「その時は助けて！ねっ!？」

「……私では黒さんに敵いませんが……。」

「……何としても勝って、クーちゃん」

「……できれば苦勞してないと思えますが……」

「……やっぱり？はあ、黒くんに見つかからないようにするって言っても……無理があるよねえ。」

「そろそろ四時ですので私は晩御飯を作りに行きます」

「もうそんな時間？時間が経つのが早いね。今日はクーちゃんが作るの？」

「はい。黒さんに今日は一人で作ってみると言われたので」

「そついや黒くん。クーちゃんに料理のことを色々教えていたね。どれだけ上達したのか楽しみだね。」

「では失礼します」

「がんばってね」

「はい。では」

「そつ言つとクーちゃんは部屋を出た。さーてと。」

「私もがんばりますか」

新しい「ゴーレム」について考え始める。どんな風にしようかな？

?????Side

『……お前には何も守れない』

黙れ……!

『……これはお前のせいで起きたことだ』

五月蠅い……!何も喋るな……!

『……貴様の存在が多くの人を死に至らしめた』

違う……!お前らがいなければ……こんな……こんなことは起きなかった!

『……何も守れない自分に絶望しながら死ぬがいい』

……死ぬのは貴様だ!!

「死ぬ……!」

「な、何を……!?!」

気がつく……俺はナイフをこいつに突き立てていた。さっきのは……。

(夢……?)

よりによってあの時の夢とは……。

「……すまん。少し気が動転していた」

「は、はい。……大丈夫ですか？明らかに顔色が……」

「……大丈夫だ。気にするな」

俺は呼吸を整え、ナイフを仕舞う。こいつが来たということは……。

「……飯か何か別の用事か？」

「そ、そうです。食事の準備が終わったので黒さんを起こしに来たのですが……」

「……起こそうとした瞬間、俺がいきなりお前にナイフを突き立てた……ということだな」

「はい……」

「……こいつに迷惑かけてしまったな。」

「……すまなかった」

「い、いえ。私は何ともないので気にしないでください」

「……そう言ってくれれば少し気が楽になる。」

「……少ししたら飯を食いにいく」

「わかりました。では先に待っています」

あいつが部屋を出ると俺は壁にもたれる。

(・・・あれから十年近く経ったというのにな・・・)

まだあの悪夢を見ることになるとはな・・・。

(・・・俺は一生あの悪夢を見続けるのだろうか?)

・・・それでもいいか。もし、死ぬまで見ることになっても・・・。  
もうどうしようもないのだから。

「・・・飯食うか」

俺は今考えたことを振り払うように部屋を出る。ちなみにあいつの料理の腕は俺が教えたこともあって少しは上達していた、・・・ちよつとだけ美味かったな。

????Side end

### 第三十話（後書き）

「ゴーレム？」

「ゴーレム？」と違い、格闘能力に特化した無人機IS。両腕の肘から先がブレードになっており、両肩に大型の物理シールドが装備されている。ちなみに黒いマネキンのような姿。

## 第三十一話（前書き）

夏祭りの話でオリジナルです。次は一夏達サイドです。



## 第三十一話

東Side

「ん〜。黒くんはどこかな〜?」

私は今黒くんを捜して、色々部屋を見回っているが……どこにもいない。それからもう少し捜すと人影が見えた。あれは……。

「くーちゃん」

「何ですか東さま?」

くーちゃんだった。相変わらず堅いな〜。もっと気楽に話しかけてほしいな〜。ま、それは後で言うとして今は黒くんだ。

「黒くんどこにいるか知らない?」

「黒さんなら、まだ外で訓練中です。もう少しで終わると思います」

「そっかあ。じゃあ、もうちょい待ちますか」

訓練中の黒くんに邪魔したらとんでもない目に逢うからね……。  
さてと。

「……どつやって時間を潰そっかな?」

新しい「ゴーレム」についてはほぼ終わっちゃったしね〜。また、コアでも作るのかな?それとも、黒くんを嵌めるためにトラップで

も仕掛けようかな?・・・止めた方がいいね。下手したら死んじやう・・・。

「東さま。よければお菓子を作りましょうか?」

「お菓子か。いいね!すぐに作ってくーちゃん!」

「はい」

返事をするのすぐにくーちゃんはキッチンに向かった。黒くんのおかげでくーちゃん、料理が上手くなってきたからね、楽しみだよ。

「それまでどうしよっかな?」

色々考えて、とりあえず「ゴーレム?」の仕上げでもすることにした。

「ふんふんふん」

鼻歌をしながら「ゴーレム?」の開発を数十分間続けていると。

「東さま。お菓子ができました」

くーちゃんが部屋に入ってきた。と同時にいい匂いがしてくる。

「今回は簡単なクッキーにしました」

「美味しそうだね」

今までなら真つ黒焦げだったけど、今はきちんとしたクッキーだもんね。

「後、紅茶もあります。どうぞ」

「うんうん。優雅な時間って感じだね」

「・・・開発室でなければな」

「あ、黒くん。やっと訓練が終わったのかい？」

私がクッキーを一つ食べようとした瞬間、黒くんが入ってきた。

「・・・おやつか、お前が作ったのか？」

「はい。黒さんもどうですか？」

「・・・せっかくだ、頂くとしよう」

くーちゃんが紅茶を入れてから、私と黒くんはクッキーを食べる。

「うん。美味しいね」

「・・・もう少し焼いた方が良かったな、それだけで後は問題ない」

「ありがとうございます」

さうて、紅茶も頂こうと。

「いいね、紅茶も美味しいよ」

「・・・悪くはない、と言った所だな」

「そうですね・・・。また教えてください黒さん」

「・・・時間があればな」

「なんかこうしていると家族って感じがするね」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

あ・・・、まずいこと言っちゃった？え、えーっと。そ、そうだ！

「ね、ねえ黒くん。今度篠ノ之神社で夏祭りをやるから、クーちゃんと一緒に行ってみたいらどうだい？」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

「く、黒くん？黒くん！？」

「！・・・すまん。聞こえてなかった・・・で、なんだ？」

「だからクーちゃんと一緒に篠ノ之神社でやる夏祭りを楽しんできたらどうだい？って、言ったんだよ」

「・・・そうか」

明らかに上の空ってやつだね……。な、ならクーちゃんに言おう！

「クーちゃん、黒くと一緒にーっって、クーちゃん!？」

「は、はい！何ですか東さま？」

クーちゃんもか……。こうなったら！

「黒くん！クーちゃん！今度一緒に夏祭りに行ってね！わかった！？」

「あ、ああ……」

「は、はい……」

これでよし！まったく二人共暗くなっちゃうんだから、もう……。まあ、私のせいなんだろうけど、多分。

「……な、なあ、お前はいいのか？」

「ん？私はいいよ。ていうか、私が行ったら色々不味いでしょ」

「……確かにそうだな」

いつもの黒くんならまず言わないことなのに……。

「ほら！もうすぐ五時だし夜ご飯を作るよ！」

「……わ、わかった」

「で、では、私が作ります」

・・・なんか危ないなあ。黒くんもどこかぼーっとしてる感じがするし・・・。

「今日は私が作るよ。二人は休んでおくこと、いい？」

「・・・・・・・・わかった」

「・・・・・・・・はい」

ちなみにその後も二人共暗い状態が続いていた。・・・不用意なことを言わなきゃよかった。

二人が暗い雰囲気になった日から数日後、私は黒くんとくーちゃんを夏祭りに行かせようとしているが・・・。

「ほら、さっさと行くー！」

「・・・・・・・・しかし」

「この前行ってくつて言ったでしょ？だから、さっさと行きなさいー！」  
黒くんが行きたがらないんだよねー。

「・・・・・・・・この前は適当に言っただけー」

「……黒くんの顔のこと、ばらすよ?」

「……お前もまずいことになるだろう。まったく……」

黒くんが呆れながら言う。やっと黒くんらしくなったね。数日間ば  
ーっとしてたからねえ。

「……まあ、お前がそこまで言うんだ。行ってやる」

「はいはい、お願いします。これでいい?」

「……ふん」

その後黒くんを変装させて、くーちゃんと一緒に行かせた。もう、  
手間かけさせないでよ。

??? Side

俺達は篠ノ之束の秘密ラボを出て、二、三時間後に篠ノ之神社に到  
着した。

「……結構賑やかだな」

「ええ、こんなに人が多いとは思いませんでした」

周りを見ても全て人……とまでは言わないが、それでもかなりの人がいた。

「……別々に楽しむか？」

「……私はそうでないほうがいいです」

「……ふむ、こいつがそう言っている以上、無理に別々になる必要はないな。」

「……では二人で一緒に楽しむか。行くぞ」

「はい」

さて、どれからいくか……色々あるから迷うな。

「あれはどうでしょう？」

「……ん？くじ引きか」

祭りの定番の一つだな。まあ、気楽にやるか。

「……くじ引き二回」

「どうも！五百円だよー！」

「……先に引け、俺は後でいい」

「はい」



金を払いこいつが引いてから、俺も引く。こいつが四十二番で、俺が六十五番か。

「えーっと、これとこれだよ！」

こいつはビーズでできたアクセサリ、俺は風船でできた剣をもらった。・・・大人にこれはないだろう。

「また、いらっしやい！」

「・・・気が向いたらな。行くぞ」

「はい」

これどうする・・・？流石にこれを持ったまま歩くのは恥ずかしいぞ。

「私が持ちましょうか？」

「・・・頼む」

・・・助かったな。こいつなら持っていてても変じゃないからな。次はどうするか・・・。

「次はあれをしませんか？」

「・・・輪投げか」

これも定番だな。まあ、金は篠ノ之東から充分もらっている、やるとしよっ。

「……一回いくらだ？」

「三百円だよ！どうするお客さん？」

「……お前からやるといい」

「さっきは私が先でしたので今度は黒さんからどうぞ」

「……なら、そうしよう」

俺は二人分を払い、輪投げを楽しんだ。俺は全部外れ、こいつはサイフの所にリングが入った。

「やるねえお嬢ちゃん！ほら、景品だよ！」

「ありがとうございます」

輪投げ屋の人からサイフを受け取り、また、別の場所を回る。今度は……。

「……スーパーボールすくいか」

「せつかくなので勝負しませんか？」

「……面白い。いいだろう」

俺とこいつで勝負か。どっちが勝つか？俺達はそれぞれの分の料金を払う。

「・・・では」

「開始です」

俺達のモナカが同時に水をくぐる。

「・・・まずは一つだ」

俺は早速一つすくう。こういうのは少しコツがいるからな。この勝負もらったか？チラリとあいつの方を見ると・・・すでに三つすくっていた。

「・・・やるな」

「なんとなくできました」

・・・本気でやったほうがいいな。下手したら負ける。開始から一分経ち、俺が七つ、あいつが九つ。・・・勝てるか？

「・・・！ちっ」

「焦りましたね。黒さん？この勝負・・・私の勝ちです」

少し冷静さを欠いてしまい、モナカが半分破けてしまう。不利だな・・・。だが俺は気にせず一気にすくう。

「！やりますね・・・。そんな状態でーあっ！」

今度はあいつが俺の勢いに少し焦り、モナカを破いてしまう。しかも、全部だ。

「・・・それではもうできまい」

後は俺があいつよりも多くすくうだけだが・・・俺のモナカもポロポロだ、いけるか？

「・・・後一つ」

また一つすくい、あいつと俺の数が同じになった。これで決める！  
と思ひ、また一つすくったが・・・。

「・・・！これではもう無理だな」

ついに俺のモナカも全部破けてしまった。・・・同数か。

「引き分けですね」

「・・・そうだな」

終わった後、いくつかスーパーボールをもらつ。久々に楽しい勝負  
だったな。

「・・・少し腹が減つたな」

「そうですね。いくつか遊びましたし、そろそろ食べましょう」

腹が減つては戦はできぬ・・・。って、戦闘しに来たわけなのに  
何故こう考えた？

「どうしたんですか？」

「……少しアホなことを考えただけだ」

「……はあ」

珍しそうに俺を見ている。まあ、そうなるだろうな。さっきの考えたことはすぐに忘れて祭りを楽しむか。

「……何から食べる？」

「たこ焼きから食べてみたいです」

「……わかった」

俺達はすぐにたこ焼き屋を捜し、すぐに見つかる。さっさと買つか。

「きゃあっ!?!」

「!?!」

たこ焼き屋に向かう最中に誰かにぶつかる。

「……すまん」

「い、いえ、こちらこそすいません」

俺がぶつかってしまった人の方を見る。

「……五反田蘭」

「えっ？」

「・・・なんでもない」

俺がぶつかつたのは織斑一夏の友人の妹、五反田蘭だった。周りには同級生らしき女子がいる。・・・最近色々な奴と会うが・・・何故？

「あ・・・、さっき私の名前を言いましたけど・・・」

「・・・知人に聞いた。いきなり名前を言つてすまない」

「あ、いえ、そういうことだったんですね。怪しんですいません」

とりあえず誤魔化す、下手したら正体がバレるからな。

「兄さん。早く行きましょう」

「・・・そうだな」

「兄妹なんですか？」

「・・・ああ、それより俺達と話すよりも知り合いと喋るといい。せつかく夏祭りに来たのに楽しまなければ損だろう」

「あ、はい。では失礼します」

やっと五反田蘭が俺達から離れる。たこ焼き屋に二人分払って、たこ焼きを受け取る。

「ふー、ふー、はむ……。美味しいです」

「……そうか」

俺も一口頂く。……中々だな。さつさと食べて……。と。

「……次はどれにする？」

「焼きそばにしましょう」

たこ焼きを平らげ、次に焼きそばを食つことにした。

「……焼きそば屋は……」

「あそこにー！」

「……どうした？」

「……織斑一夏がいます。それにさつきの人と篠ノ之箒も」

「……はあ、会う可能性があるとは言え、何故出くわすんだ？しかも、これで全員か。」

「……さつさとここから離れるぞ。万が一俺が「黒騎士」だとバシたら困るからな」

「変装してますから大丈夫だと思いますが……。それでも慎重になる必要はありますね」

「……そういうことだ。向こうに行くぞ」

「はい」

俺達はすぐに織斑一夏達から離れ、別の焼きそば屋で食べることにした。

焼きそばを食べ終えてから、他の食べ物も回り、色々楽しんだ。

「・・・なあ」

「何ですか？」

「・・・少しの間、別々に動いていいか？」

「・・・わかりました。では私はあの鳥居の前で待っています」

「・・・すまん」

「いえ、黒さんも何か事情があるようですので」

「・・・今度別の料理を教えてやるか。あいつが遠ざかると俺は再び歩き出す。・・・さて、行くか。」

?????Side end



### 第三十一話（後書き）

意見やアドバイス、感想などどんどん送ってください！後、間違いや誤字もあればお願いします。

## 第三十二話（前書き）

夏祭りの続きです。最後の方がオリジナルです。

## 第三十二話

一夏Side

今俺は篠ノ之神社で開かれてる夏祭りを箒と一緒に楽しむために箒を待っていた。あ、やっと来た。

「遅いぞ箒。待ちくたびれぞ。ーーお？浴衣だ」

「い、一夏っ！？い、いたのかっ。ぜ、全然気がつかなかったぞっ  
」！

・・・明らかに普通じゃないな。こういう時は・・・褒めた方がいいかな？

「へえ。浴衣似合ってるぞ箒」

「そ、そうか！？わ、わっ、私もそう思っていたところだ！」

益々慌てるようになってしまった。まずかったかな？なら、落ち着くようにリードしてやったほうがいいな。

「さて、色々楽しもうぜ。夏祭りに来るのも二年ぶりだし。一通りあるから選ぶのには困らないな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「箒？」

「な、なんだっ!？」

さっきから筭が返事をしないので、顔を近づけて話しかけると、いきなり距離を取った。・・・どうしたんだ？

「こら、暴れるな。人にぶつかるだろ」

「う、うむ。すまん」

「で、最初はどこに行く？」

「そ、そう、だな・・・」

適当に周りを見る。どれからにしようかな・・・？あ、そっぴや。

「なあ、筭って金魚すくい苦手だったよな」

昔は一つもすくえなかったもんな。

「い、いつの話だ！今の私が違っぞ」

「ふーん。じゃあ、勝負しようぜ。負けた方が食べ物おごりな」

「いいだろう。望むところだ」

こうして筭と金魚すくい勝負することになったので目的の屋台を捜して、数分後到着。料金を払ってと。

「あ、でも筭、浴衣だよな。大丈夫か？」

「問題ない。心配も手加減も無用だ」

「そうか。なら勝負だ！」

「望むところ！」

俺と箒のモナカが同時に水をくぐる。絶対勝つ！

「いや、悪いなー箒。焼きそば奢ってもらっちゃって」

「な、納得いかん……」

勝負の結果は三対二で俺の勝ち。本当は三対三の引き分けになりそうだったのだが、箒の器から金魚が一匹跳ねて水槽に戻ってしまい、その間に俺達のモナカが破けて、そのまま俺の勝ちとなった。

「あの金魚め……真剣勝負に水を差すとは……」

「金魚だけにな」

ちよつとしたギャグを言ったら箒に睨まれた。……変なこと言っただか俺？

「ま、いつまでもむくれてるなよ。ほら、焼きそば食べよ箒。つまいぞ」

そう言つて、焼きそばを少し箸でつまんで箸に向ける。少ししてから箸は食べた。

「ん、ぐ。お、思ったより、うまいな・・・」

「だろ？それに、箸も腹減ってるだろ。神楽やってたし」

「う、うむ。そ、そう、だな・・・そうかも、しれないな・・・」

神楽やってた時の箸綺麗だったな。もう一回見てみたいけど今は祭りを楽しむか。

「の、喉が渴いたなっ？」

「そうだな。人混みのせいで暑いし、何か買いに行こっか？」

「う、うむ」

俺も箸も喉を潤すため、飲み物を買いに少し歩く。

「――あれ？一夏・・・さん？」

「お？」

突然誰かに声をかけられる。どこかで聞いた声だなと思いつつ、振り向くと蘭がいた。

「おー、蘭か」

「き、奇遇、ですね・・・」

「そうだな。あんまり知り合いに会わないと思っていたら会うもんなんだな。弾は？」

「さ、さあ？家で寝てるんじゃないですか？」

蘭の格好も箒と同じ浴衣姿で、髪は結い上げて後ろで縛っている髪型だった。

「へえ、蘭の浴衣姿って初めて見たな。結構似合ってるぞ」

「そ、そう、ですかっ。あ、ありがとうございます……」

浴衣姿を褒めたら、蘭もさっきの箒と同じようになった。……ま  
ずいこと言ったかな？

「会長が照れてるー。めずらしー」

「そっかあ。なんで他校の男子や同校の女子になびかないのかなと思  
ってたけど、これが理由かあ」

「会長、ふぁいとっ」

蘭の後ろにいた、浴衣姿の一行が何か言ってるけど……なんだろ  
うっ？

「蘭この子達は学校の友達？」

「え、えっと、その生徒会のメンバーで……」

「今日は秋の学園祭のアイデア探しに来たんです」

「祭りを学ぶには祭りに行かないと！ってことで」

「でも、そろそろ帰ろうかなーって思ってたー」

「え？何を勝手に決めー」

あれ？蘭もそのつもりじゃなかったのか？どういことなんだろう？

「じゃー、会長」

「私達は帰りますんでー」

「また学校でお会いしましょう」

「アデューー！」

「えっ、あつ、こら、待ちなさっー」

蘭が言い終える前に四人は浴衣姿とは思えない早さで人混みに消えていった。そして、俺と蘭と箒がこの場に残った。

「え、えっと、そのっ、あの子達、ふ、ふざけるのが好きで、ですねっ」

「あー、なんかわかる」

「け、けして、悪い子ではないんですっ、ないんですよー!？」



「あ、ああ」

「！す、すみませんっ！」

さっきの子達のフォローをしていた蘭が俺に詰め寄ったことに気づくと何故かバツと俺から離れた。

「あー・・・ゴホンゴホン！」

突然箒がわざとらしい咳払いをした。あ、そういや二人共互いのことあまり知らないよな・・・よし。

「箒。紹介するな。えっと、こっちが五反田蘭。前に話した弾の妹だ」

「五反田蘭です」

蘭が箒に対して事務的なお辞儀をする。もっと気楽にすればいいのに。

「で、こっちが篠ノ之箒。俺のファースト幼なじみ。前に言ったっけ？」

「いえ、お名前だけしか」

「そうか。まあ、とりあえずよろしくな。ほら、箒」

「し、篠ノ之箒だ。よろしく」

「よろしく」

篤もまた事務的な挨拶をして、そのまま数秒間沈黙が流れ、二人共俺の方を見る。

「……………」

「な、なんだよ」

「いや」

「別に」

やけに真剣な表情で俺を見つめるため、少し怯んでしまう。俺は少し考え……。

「なあ、一緒に回るか？」

俺がそう言つと篤はがくつと頭が垂れ、蘭は逆にぱあつと言いそうな表情になった。なんで正反対になつたんだ？

「ほら、蘭の連れ帰っちゃったし。あ、もしかして、蘭も帰るのか？」

「いえ、帰りません！ぜひ一緒に一緒にさせてください！」

「じゃ、色々見て回るか」

「はいっ」

「ああ……」

なんでそんなに凹んでるんだ。篝のやつ？蘭はあんなに上機嫌なのに。ま、いい・・・かな？

「そついえば、蘭って昔は弾と来てたのか？」

「えっ、ええ、まあ。お父さんが女の子だけで行くのは危ないからと言っていたので」

成る程なあ、確かに物騒な事件って結構あるしな。俺にも「黒騎士」のことがあるからな・・・。

「あの一夏さん。危ないと言えば、最近「黒騎士」ってというのが一夏さんを狙っているって聞きますけど・・・」

「知ってるのか蘭？」

「は、はい。最近ニュースで流れてますから」

まだ、俺の情報は制限されているはずだけど・・・。事件のことだけ放送されてるのか？

「今や全世界では「黒騎士」の名を知らんやつの方が少ないらしいからな」

だろうな・・・。蘭も知っていたぐらいだし。

「・・・二人共今は「黒騎士」のことは忘れて夏祭りを楽しもうぜ」

このままだとなんか空気が重くなりそうだ。今日はせっかく夏祭り

なんだし、もっと気楽になってほしい。

「そ、そうだな」

「す、すみません。私のせいで・・・」

「いいよ。心配してくれたんだろ？ありがとうな蘭」

「は、はいっ！」

また蘭がぱあつとした表情になる。・・・何故か篝の方から殺気がするけど無視しよう。

「じゃあ、回るぞ」

「はいっ」

「・・・ああ」

・・・まだ篝から殺気がする。なんかしたか俺？

「きゃっ！？」

「あ、ごめんなさい」

「い、いえ、こちらこそすみません」

「大丈夫か、蘭？」

突然蘭がすれ違った人とぶつかり、倒れそうになったので蘭を支え

る。

「あ……えっ、うっ、あっ……!」

蘭がぱたぱたと手を動かして暴れる。な、なんで暴れるんだ？

「お、おい？」

「あ、あ、ーアレですっ!」

ずびしっ! 蘭が指さす方向には射的屋があった。

「もしかして得意なのか？」

「え、ええっ、まあっ」

「じゃあ行くっぜ。筭あんまり離れるとはぐれるぞ。ほら」

俺は蘭と筭の手を握り、射的屋に向かう。

「へい、らっしゃーい」

「おじさん、三人分ください」

「お。両手に花とはうらやましいねえ。よしっ、おまけ無しだ!」

「ええっ? いや、せめて女子の分だけでもまけてくださいよ」

「がっはっはっ。無論断る」

豪快な笑顔で断られる。なら仕方ないと思い、俺は三人分の代金を払う。

「まいど。おお、兄ちゃん、甲斐性あるなあ。最近のガキにしちゃ珍しい」

「でしょう？だからおまけをー」

「断然断る。モテるやつは男の敵だ。がはは」

気はいい人だが駄目のようだ。てか、俺あんまりモテてないですよ？

「……………」

俺達はそれぞれ鉄砲を受け取り、弾を込めて構える。ちなみに蘭はスナイパーの眼差しで狙いを定めている。

「おー、なんか本格的だな。がんばれ、蘭」

「はい」

ぶっきらぼうに言う蘭だが、それほど集中しているようだ。そして……。

ぱーんっ！べしっ。ーっ！ぱたん。

「そ、その鉄の札を倒すとは……！え、液晶テレビ当たり……っ！」

「え？えっ？え……？」

蘭が撃った弾が一番難しいのを倒した。俺は勿論周囲の観客も多いに盛り上がった。

「すげえな、お嬢ちゃん！絶対に誰にも倒せないようにーっなんでもない」

「は、はぁ・・・」

「すげえな蘭。液晶テレビをゲットするなんて」

俺がばちばちと拍手すると、周りの観客も拍手し始める。

「がっはっはっ。赤字だ赤字！ちくしょう、持ってけ！」

「ど、どうも・・・」

「よかったな」

「そっでしようか・・・」

・・・なんで落ち込んでるんだ？液晶テレビを手に入れたのだから、もっと喜べばいいのに。

「ぐっ・・・」

ちなみに箒の方はすでに五発の弾を撃って、まったく当たってなく、残り一発だけとなった。

「相変わらず下手だなあ、箒」

「う、うるさい！ゆ、弓なら必中だ！」

「そんなことしたら景品壊れるだろ。・・・しょうがねえな」

俺は自分の残った弾と、すでに弾を装填済みの鉄砲を渡す。

「大体、お前は構え方が変なんだよ。こう、腕を真っ直ぐにしながら、射線に対してーーー」

「・・・・・・・・」

俺は箒に撃ち方のアドバイスを一通り教える。さっきから黙ってるけど・・・集中しているのかな？

「こんな感じだな。よし、撃ってみるよ。ちゃんと狙えよ？」

「わ、わかっている！」

箒がそう言った次の瞬間、つい引き金を引いてしまう。

ぺしーん。ーーーぽとり。

「お！ぬいぐるみが当たったな」

さっきの蘭と同じように札が倒れ、箒はクッションとして使えそうなサイズのペンギンが当たった。

「おー、嬢ちゃんもよく当てたなあ。がっはっはっ、今日は大損だ」



「・・・隣のだるまが欲しかったのだが・・・」

「うん？」

「いえ、なんでも」

篤が何か言っていたが、やけに嬉しそうな表情で景品を受け取った。

????Side

「・・・もういいか」

今俺はある場所で夜空を見上げていた。・・・いい景色だ。

「・・・そろそろ戻るか」

いつまでもあいつを待たせるわけにはいかないしな。

「・・・あれ？誰がいる？」

「・・・？」

ふと、後ろから声をかけられ振り向くと・・・。

(織斑一夏に篠ノ之篤・・・！？しまった、時間を使いすぎたか・・・！)

俺は一瞬焦るが、すぐに落ち着く。奴等は俺が「黒騎士」だと思わ  
んだろうからな。

「……ああ、すまん。そろそろ帰るから気にしないでくれ」

「い、いえ。にしてもよくここを見つけてましたね」

「……たまたま見つけてな。いい場所だな、ここは」

「ええ、ここを知っているのは俺達とその姉だけでしたから」

「……そうか、なら俺は許可なく君達のお気に入りの場所に来て  
しまったことになるな。すまない」

「別にいいですよ」

「……ふふっ、それはどうも、では失礼させてもらっ」

……これ以上、何故かこいつと話したくなかった。俺はすぐにこ  
の場を離れ、あいつが待っている鳥居に向かった。

## 一夏Side

さっきの男の人が見えなくなつて、少し経つとすぐに花火が上がつ  
た。

「おっ！はじまったな、花火！」

「ああ……」

「ん？どうした筈？」

「……」

筈の方を見ると、何故か落ち込んでいた。少し気になるが今は花火を見ることにした。

「お、すごい」

次々と花火がパツ、パパツと瞬く。様々な色の花火がとてもきれいだった。

「きれいなものだな……」

「ああ、そうだな」

花火を見ていると筈が俺の左腕に腕を絡めてきた。

「なんだよ？」

「このくらいは許せ」

「まあ、いいけど」

何のことはわからなかったけど、特に気にしないで花火の方に視

線を戻す。さつきちよつとだけ見た筈の横顔はどこか誇らしげな表情だった。・・・いずれは「黒騎士」と決着を着けなければならぬ。けど今は、この時を楽しもう。一度しかないこの夏を。

一夏Side end

一夏達が花火を見ているのと同時刻、とある場所で二人の男が夏祭りを楽しんでいる人達を眺めていた。

「・・・けつ、呑気なもんだぜ。平和ボケってやつか？」

「・・・そう言うな、良いことだろう？」

「・・・そりゃ、そうだけどよぉ・・・」

「・・・はいはい。しかしまさか、「こんな時」に来るとはな」

そう言いながら二人の男は夏祭りに来ている人達を羨ましそうに見ている。そして彼等の手首にはそれぞれ何かのアクセサリーが付いていた。

「さてと、いつやるんだ？」

「もう少しかかる。俺達の隠れ場所を捜すのとこいつらの整備をしないといけないからな」

「ちえ、すぐにあいつらを殺したいのによお」

「その気持ちはわかる。だが、もう少し待て。準備を怠るわけにはいかないからな」

イライラしている赤い短髪の男を黒い長髪の男が宿める。

「ちっ、早く」これ「使いたいのによお」

「……ふう、お前は我慢という言葉を知らないのか？」

「知らん」

赤髪の男が自信満々に言い放つ。それを聞いて黒髪の男が呆れる。

「……お前に聞いた俺が馬鹿だった」

「んだとお!？」

「……さっさと行くぞ。これから忙しくなるからな」

「おいこら!さっきのことを説明しろ!」

「隠れ場所が見つかったらいくらでも説明してやる。行くぞ」

「ちっ、わかったよ。後でちゃんと説明してもらっせ」

「ああ(しても無駄だと思っが)」

二人の男は闇の中へと消えていった。



## 第三十二話（後書き）

意見やアドバイス、感想などどんどん送ってください！後、間違いや誤字もあればお願いします。

### 第三十三話（前書き）

投稿します。・・・もうほとんどオリジナルです。・・・すみませ  
ん。



### 第三十三話

とある日の夜、ある場所に赤髪と黒髪の二人の男がいた。

「そろそろだよなあ。で、この施設であつてるよな？」

「ああ、ここで間違いない。問題は・・・」

「ここに俺等の欲しい情報があるかどうか、だよな？」

この二人の目的はある情報を手に入れること、そのためにこの施設を襲撃しようとしているのだ。

「ここ以外にも二つあるが・・・そこにあるかどうかもわからんかな」

「ちつ、もつとちゃんとした情報を渡して欲しいもんだぜ」

「仕方あるまい、相手が相手だからな。寧ろ、よくこれだけの情報を集めたな、と誉めてもいい所だ」

「つたく、ほんと忌々しい奴等だぜ。後何分だ？」

「残り一分だ。始めるぞ」

黒髪の男が合図を出すと、赤髪の男が嬉しそうに笑う。

「やっとか、さっさと暴れたくてウズウズしてたからな。・・・行

くぜ。「キヤンサー」

「・・・スタートだ。「サジタリウス」

二人が機体の名を言うと、すぐに二人の周りに粒子が現れ、身体を包む。そして粒子が消えるのと同時に薄い朱と鮮やかな黄色の二機が現れる。二機共、「全身装甲」の機体だ。

「作戦開始だ」

「暴れるぜえ」

「キヤンサー」を纏った赤髪の男が先に突撃し、「サジタリウス」を纏った黒髪の男が周囲に向かってビーム状の矢を放つ。すぐさま施設から武装した人々が現れる。

「はっ、雑魚共が」

赤髪の男が敵を嘲笑うように言うと、直後に両手首と両肩、両足首からまるで蟹のハサミのようなビットが発射される。

「あ、IS!？」

「だ、だが、あんな機体見たことモー」

「寝てる雑魚共!」

赤髪の男は六つのビットを敵にそのまま直撃させ意識を奪つ。

「く、くそっ!何故ここを狙う!？」

「ああん？何故？そんなのここが「あの組織」と関係してる施設だからに決まってるだろうが」

「！？き、貴様何処でその情報を――」

「さっさと寝てる」

赤髪の男はまるでビットを呼吸するかのように自然に動かしながら、両手に展開したブレードで敵の意識を奪う。

「ちっ、出来るだけこいつらの命を奪わずに命令をきちんとこなせ、か。無茶な命令だぜ、まったく」

『そう言っつな、出来るだけ人を殺さないようにやれるならそれが一番だろう？』

「そうだけどよお・・・」

『文句を言う暇があればさっさとやれいいな？』

「ちえ・・・お、入口はっけーん。んじゃ、行くかあ」

赤髪の男が施設の入口に侵入し、最深部に向かう。一方黒髪の男の方は・・・。

「・・・来ないな」

周囲を見渡すが・・・自分達以外のISが出てこないのに気づく。

「・・・外れか、後は情報を手に入れるしかないな」

黒髪の男は周りにいる敵を全て気絶させた後、もう一人の報告を待つことにした。

「後五分。さっさと終わらせろよ」

『分かってるつーの！けどよお、結構数を多くて中々進めねえんだよ！』

「・・・ふむ、ならば」

黒髪の男は急いで施設の真上に向かう。

「ー発動、・・・そこか。チャージ、・・・発射」

施設の真上に到着した黒髪の男は両肩に搭載された巨大なクロスボウの片方のエネルギーを溜め、中央目掛けて放った。

ドコオオオオン！！

クロスボウの攻撃を受け、施設の中央に人が簡単に入れるようなサイズの穴が現れる。と、同時にもう一人から怒鳴り声が響く。

『おい！てめえいきなりぶっぱなすんじゃないやねえ！もう少しで当たるところだったじゃねえか！てか、メインサーバーや人に当たってないだろうな！？』

「ああすまん、事前に言うのを忘れていた。だが、道は出来ただろう？それに「サジタリウス」の能力で調べたから問題ない」

『ならいいけどよぉ・・・ああもう、後で何か奢れよ!』

「わかった。それよりもすぐに終わらせる。後四分だ」

『りょーかい! 暴れるぜえ!』

(・・・大丈夫か?)

赤髪の男は興奮すると暴走してしまうことがある。それを止めるのが黒髪の男の役目なのだが・・・。

「後は任せるしかないな、俺は周りを見る必要があるしな」

今回の作戦は外側と内側に一人ずつしか配置できないため、こうするしかなかったのだ。赤髪の男が戦えば暴走することもある以上、外で指揮するのは無理がある。

「後三分、さてどうなるかな?」

現在、赤髪の男の方は・・・。

「おつ、あそこだな。失礼するぜ」

この施設にあるメインサーバーに到着した。残り時間も後僅かのため、急いでアクセスし、情報を検索するが・・・。

「・・・ちつ、まったく無えじゃねえか。外れかよ」

欲しい情報は何一つ存在していなかった。赤髪の男はそれに苛立つ。

「おい、情報無しだ。今から戻るぞ」

『・・・そうか、残念だすぐに戻ってくれ。後、ちゃんと「あれ」  
を使えよ?』

「わかってるつーの。ーー発動」

赤髪の男が何か言っていると機体から煙が現れる。赤髪の男はそれを撒きながら黒髪の男の元へと戻る。

「すぐにこの場を離れ、次に行くぞ」

「おう、残り二つに例の情報があればいいんだけどなあ」

「そうだな、だが、無駄口を言う前に離れるぞ」

「へいへい。レッツゴー」

二人の機体は脚部から「展開装甲」を発動させ、驚異的な速さでこの場から離れた。

その後二人は残りの場所も調べたが結局、有力な情報はまったく得られなかった。

「あゝあ、結局手がかり無しかよ。ちくしょう」

「……なら、しばらくはおとなしくするしかないな」

「しばらくって……いつまでだよ？」

「今度IS学園で行われる学園祭の日までだ」

「……暇で死んでしまいそうだ。んなことするくらいなら、いつそのこと俺達だけで「あの組織」を潰せばいいんじゃないか？」

「……はあ」

赤髪の男が言ったことにまた、黒髪の男が呆れる。

「簡単に奴等を潰せていれば苦労していない。それに俺達の目的はそれだけじゃないのを忘れたか？」

「そついや、「あの人」を仲間にしなきゃならねえんだっけ？」

「そつだ、そのためにもこれ以上襲撃する必要は無い。わかったら隠れ家に戻るぞ」

「へいへい、でもよお。俺達とこの機体があれば充分じゃねえか？」

「だといいんだが……」

黒髪の男はあることを考えていた。それは……。

(襲撃した施設にいた奴等が変な単語を言っていたな……。確か「黒騎士」だったか？聞いたことの無い言葉だが……。どういうこ

とだ？)

「おい、戻らねえのか？」

「！ああ、すまん。戻ろうか」

二人はそのまま何処かへと消えていった。

東Side

「ふんふんふん。何か面白いこと無いかな？」

私は今、暇つぶしのために世界中のデータを(勝手に)見ている。  
犯罪？何それ？美味しいの？

「ふんふん。・・・？何だろこれ？」

データを見続けているとある項目で止まった。

「・・・今日午前零時から四時にかけて三つの施設が襲撃された。  
犯人は分かっておらず、現在も捜索中。犯行の手口から見て同一犯  
と思われる」か

ふん。どこの誰だか知らないけど、ご苦労なことだね。・・・  
あれ？



「尚、犯行現場は三つとも別々で中には距離が一万キロ以上離れた場所もあった」……？」

「どういうこと？そんなに離れた三つの場所をたった四時間で片付けたってこと？」

「ってことは……ISでやったのかな？」

しかし、三つの場所の距離を合計するととも今の機体では四時間で着くような距離ではない。仮に「紅椿」の「展開装甲」を最大出力で使ったとしても、まだ足りない。

「黒くんの「ラグナロク」なら出来るけど……」

今の世界に現在の「ラグナロク」と同じ速さを出せる機体があるとは、とても思えない。それに今まで黒くんはこういう行動をとったことがない。つまり……。

「「ラグナロク」以外に驚異的な出力を出せる機体がある……？」

けど、そんなこと不可能だ。現在「ラグナロク」の次に強力な機体は「紅椿」だ。となると……。

「まさか……？」

黒くんと「同じ」存在が現れた……？

「……調べた方がいいね。この事件」

またとんでもないことになりつつある。後手に回れば間違いなく不

利になる。

「・・・もし黒くんと「同じ」だとすると・・・今の「ラグナロク」と互角かそれに匹敵する程か、あるいは・・・」

「ラグナロク」以上の機体があるかのいずれかだ。

「・・・今は徹底的に調べないとね。後は黒くんにもこの事を言うかどうか、だけど・・・」

少しの間考え・・・言うことにした。おそらく、近い内にまた謎の存在が現れる可能性がある。いずれわかるなら、今言った方がいい。それにそうしなければ黒くんにどんな目に逢わされるか・・・。

「んじゃ、調べますか」

久々に私は本気をだし、調査を開始した。さて、これからどうなるやら・・・。

## 一夏Side

今俺は自宅で皆と一緒に昼食を食べている。大人数になってしまったので昼は手軽な麺物になった。にしても・・・。

「来るなら誰か一人ぐらい事前に連絡くれよな」

「仕方ないだろう、今朝になってヒマになったのだから」

「そうよ。それともいきなりこられると困るわけ？」

「わ、わたくしは、ケーキ屋さんに寄っていて忙しかったので」

「ご、ごめんね。うっかりしちゃってて」

そっか、ならしゃあないよな。そっいゃ……。

「ラウラは箒達より遅かったけど……何かあったのか？」

「……本国と少し話していたのでな。それで遅れた」

何だ？ラウラの雰囲気が変わった……？まるで軍人のような気配だ。……おそらく聞いても答えないだろうな。遅れると言えば……。

602

「そっいゃ、千冬姉も遅れるって言ってたな」

「そっなのか？」

「ああ、なんでも緊急の用事が出来たとか」

「何なの？緊急の用事って？」

「それがわかってないんだよ。今朝起きてすぐに千冬姉からそう言われたんだ」

あの時の千冬姉の表情は真剣そのものだった。一体何があったんだ

るっ？

「……やはりか」

「え？」

今ラウラ「やはり」って……言ったよな？

「おいラウラ、お前何か知っているのか？」

「……すまん、詳しいことを言うわけにはいかんだ。本国からそういう命令が出されているからな」

「ラウラそれ、もしかして今日起きた事件のこと？」

「事件？」

「ええ、なんでも三つの施設がいきなり襲撃されたという事件ですわ」

いきなり襲撃って……まるで「黒騎士」のようだな。にしてもなんで施設を襲撃したんだ？

「世界中がこの事件について気になっているんだよ」

？なんで世界中が気になっているんだ？確かに三つの施設が襲撃されたのはとんでもないことだけど、それだけで世界中が警戒するものなのか？

「犯人はこの三つの施設をたった四時間で片付けたのだ。しかも合

計すれば一万五千キロ以上かかる距離をな」

「よ、四時間！？そんな距離をたったそれだけの時間で終わらせたのか！？」

確か福音でも最高速度は時速二四五〇キロを超える程だったはずだ。仮に福音が全速力で向かったとしても足りない。「紅椿」が「展開装甲」を使って最大出力で向かったとしても途中でエネルギー切れを起こすため、無理がある。

「仮に私の「紅椿」で着いたとしても・・・施設を片付けるだけの時間が無い。とても不可能だ」

こんな滅茶苦茶なことができるとすれば・・・。

「「黒騎士」だけだろうな」

「けど、今まであいつは俺を狙うことしかしてないぞ？」

「そうよね・・・でも「黒騎士」以外にこんな芸当ができる奴なんていないわよ？」

確かにそうだ。あいつならこんな滅茶苦茶なことができるかもしれない。でも何故か違う気がする。

「なあ、そもそも今回の事件を起こしたのが「黒騎士」だっていう証拠はあるのか？」

「一切無い。だが、こんなことが可能なのは奴だけだ。世界中もそう思っている」

「けど、別の奴がやったていう可能性はないのか？」

「あのねえ一夏、「紅椿」でも無理なんだよ？なら、残るのは「黒騎士」しかないでしょ？」

「んじゃあ・・・例えば極秘で開発した機体があったとか」

「それも有り得ないですわ。「紅椿」は篠ノ之博士直々に造り上げた機体ですし、現在「紅椿」以上の機体は「黒騎士」だけですわ」

・・・セシリアの言う通り「紅椿」は今に世界に二機しかない第四世代型機体だ。東さん以外においそれと作れるものではない。でも、だったら「黒騎士」は何なんだ？開発者も何処で作ったのかもわからない機体が「紅椿」以上の性能を持っている。どう考えてもおかしい。俺達は「何か」を勘違いしているんじゃないだろうか？

「はいはい。そろそろこの話は終わりよ。せつかくの夏休みなのにこんなこと考えても意味ないでしょ？」

「そうですね、今日は一夏さんの家でゆっくりしましょう」

「うん、僕もそう思うよ。そろそろ食器を片付けようよ一夏」

「あ、ああ・・・」

すでに昼食は全員済ませているが、俺がラウラに聞いたせいでこういう話になったんだよな。さっさと終わらせるか。

ちなみにこの後、鈴が持ってきた様々なボードゲームやカードゲー

ムで遊んだり、皆で晩御飯を作ったりしたけど・・・俺はその間もずっと襲撃事件のことが気になっていた。

??? Side

「・・・よく寝た」

「起きましたか黒さん」

「・・・ん？」

目を覚ますと誰かに声をかけられた。この声は・・・。

「・・・お前か」

「はい、昼食ができましたので、また起こしに来ました」

また、ということはおそらく朝食の時も起こしに来たのだろう。

「・・・すまん。では、一緒に行くぞ」

「はい。後、束さまが黒さんに朝食か昼食を済ませたらすぐ私の部屋に来てほしい、と言っております」

「・・・？」

何の用件だ？「ラグナロク」のことについてだろうか？

「・・・わかった。では食うか」

「はい。ちなみに東さまは朝から部屋に閉じ籠っております。おそらく今も何かを調べているかと思えます」

「・・・珍しいな」

あの篠ノ之東が一生懸命調べているとは・・・何か気になるな。

「・・・さつさと食うぞ」

「はい」

その後すぐに昼食を済ませ、篠ノ之東の部屋に向かった。さて、どんな用事だ？

「・・・入るぞ」

「いいよ」

・・・いつもの様なふざけた感じが一斉しないな。とりあえず入るか。

「・・・失礼する。さて、何か変な物でも食ったか？」

「ちよつと！人が真剣に話そうとしてるのにそれは無いでしょ！」

「・・・なら、頭を強く打ったか？お前が真剣になるなど、天変地



異が起こる確率より低いからな」

「酷いよ黒くん！それじゃあ、まるで私がいつもぐうたらしてる駄目人間のようにしか聞こえないよ！？」

「……ある意味お前は駄目人間だろう。まあ、俺が言うことでもないか。」

「……何の用だ？」

「さらつとスルーしたよね黒くん！？……もう、本題に入るよ？」

「……ああ」

これ以上こいつをおちよくるのはやめるか。どうやら本当に真剣な話のようだからな。

「これを見て欲しいんだよ黒くん」

「……これは」

今日の午前零時に起きた三つの施設の襲撃事件……。？妙だな。こんな事件無かつたはず……。俺がこつちに来たからか？

「……篠ノ之束、お前何故この事件を俺に見せた？」

「気にならない黒くん？」

「……少しだけな。だが――」

「……この三つの施設が「亡国機業」と関係していたとしても？」

「……待て篠ノ之束、今何と言った？」

襲撃された施設全てが「亡国機業」と関係していただと？

「……その話本当だろうか？」

「うん、間違いなく。向こうは上手く隠しているけど私には意味ないね」

こいつのことだからな、つくづく大した天災だ。

「何か今嫌な感じがしたけど……まあいいや。それよりもどう思う黒くん？」

「……気になるな。まず、襲撃者はどうやってその情報を手に入れたか、そして……」

「どんなISを持っているか、だよな？」

「……ああ、「亡国機業」と関係している施設を襲った以上、機体が無ければ話にならんからな」

奴等相手に生身で戦うわけ無いからな。

「だよねえ。もしかしたら君の機体以上かもよ？」

「……あり得ないな」

俺の「ラグナロク」より強い機体があるはずない。あの人が作ったんだからな。それにこいつは「戦闘」用では無いからな。

「ふう〜ん。凄い自信だね？ま、私も「ラグナロク」より強い機体があるとは思えないけど・・・どうやら相手も君と「同じ」のようだからね」

「・・・成る程、それなら納得だな」

・・・厄介だな。襲撃者の目的は今の所「亡国機業」を潰す以外わかっていない。・・・できればこっちに引き込みたいな。

「東さんは襲撃者が君と違う考えであることを祈りたいね」

「・・・ふん」

こいつからしたら、これ以上織斑一夏の命を狙う奴が増えるのは困るだろうな。

「・・・襲撃者について他にわかったことはあるか？」

「まったくだね。世界中も今回の襲撃事件は君のせいとしか考えないだろうね。ほんと馬鹿ばかりだよ」

それが普通だろう。寧ろ、他のやつからしたらお前が考えてることの方がおかしいからな。

「また、嫌な感じがしたんだけど？」

「・・・知らん（チツ、どんどん勘が鋭くなってるな）」

「ふうん？ならいいけど。用件はこれで全部だよ」

「……そうか、なら訓練でもするとしよう」

「手を打たないのかい？」

「……やっても無駄だろう」

情報が無い以上、こっちから動くのは不利だからな。

「それもそうだね。」ゆっくり〜」

「……ああ」

……これから面白くなりそうだな。さあ、どうなる？

千冬Side

「……やっと終わったか」

「ええ、仕方ないですけど……」

私達はさっきまでIS学園で今日起きた襲撃事件についての緊急会議をしていて、さっきようやく終わった所だ。

「やはり、今回の事件も「黒騎士」が起こしたと考えているのがほとんどだったな」

「？織斑先生はそう考えていないのですか？」

「・・・ああ、私は今回の事件に「黒騎士」は無関係と考えている」

「ですが、あんな芸当ができるのは「黒騎士」以外いないと思います」

確かに「黒騎士」なら可能だ。しかし・・・。

「今まで奴の行動を考えると、今回の事件は変だ。何故奴が施設を襲う必要がある？」

「私もそれは気になりますが、施設の人々の状態からしても「黒騎士」以外あり得ないと思います」

被害に逢った人々は今回の事件についてまったく覚えていなかった。どうやら何者かに記憶を消されたらしく、事件のこと「だけ」を忘れていた。

「確かに「黒騎士」なら記憶を消す能力を持つ武装があっても不思議ではない。しかし、そうだとするとやはりおかしいのだ」

「どういうことですか？目撃者を消すためにー」

「そこがおかしいのだ。奴の存在はすでに全世界に知られている。なのに何故今更記憶を消そうとする？」

「あつ！」

山田先生も気付いた様だな……。私が引つ掛かっていたことに。

「た、確かに妙ですね……。目撃者を消すために使うならその武装を使用するまで織斑君に接触しないはずですし……」

「そうだ。だが、奴はその武装を使う前に何度も現れている。この事を考えても奴は自分の存在を隠すつもりは無いということだ」

正体こそ謎だが、それ以外は奴は堂々とさらけ出している。そんな奴が記憶を消すとは思えない。

「じ、じゃあ、織斑先生。まさかこの事件は……」

「そうだ、「黒騎士」以外の「誰か」がやった、ということになる。しかも、相当な手練れがな」

だが、私達がそう言った所で結論は変わらないだろう。すでにこの事件は「黒騎士」が起こしたことに決定している。査問委員会がわざわざ謎の存在を探すとは思えない。他の国もそんなことに労力を使おうとは思えないだろう。

「後、わからないことは施設が襲われた理由だな」

「ええ、謎の存在は何故三つの施設を襲ったのでしょうか？」

おそらく「何か」あったのだろうな。襲撃者が手に入れようとした「何か」が。

「「黒騎士」だけでも厄介だというのにその上、謎の襲撃者までいるとはな……」

「何が起ころうとしているんでしょうか……」

……近い内に間違いなく何かが起ころ。私達はそれに対処するしかない。

私はいずれ来る嵐の予感を感じていた。

千冬Side end

### 第三十三話（後書き）

意見やアドバイスを、感想などどんどん送ってください！後、間違いや誤字もあればお願いします。



### 第三十四話（前書き）

またオリジナルの話です。今回滅茶苦茶なシステムが出てきます。ちやんと説明出来るかな・・・？

## 第三十四話

東Side

この前起きた謎の襲撃事件から一週間以上が経った。IS学園では二学期が始まっている。私は今も襲撃事件のことについて調べているが一切情報は無かった。

「はあ、ここまで存在を隠しきれんなんで・・・襲撃者も相当な実力者ってことか」

「・・・かなり手際がいい。少なくとも国家代表クラスでなければ相手にならんだろうな」

黒くんも襲撃者について誉めている。今のいつくん達じゃあ、襲撃者相手に一対一で勝てる要素が無いってことか。

「うう、不安要素だらけだよ」

「・・・そうでもないだろう。奴等が「亡国機業」と関係している施設を襲った以上、上手くいけば奴等を引き込めるかもしれんぞ？」

「でもそれって、黒くんの味方になる可能性もあるってことだよ？」

そうなれば最悪だ。黒くん一人でもいつくん達を倒せるのに襲撃者まで黒くんと一緒にいつくんを狙ったら、もう打つ手無しだ。

「・・・そうなった方が俺としては都合がいいがな」

「そりゃそうでしょ……。はあ、何とかならないかな？」

「……何とかしようにも、奴等がまったく動かない以上、どうしようも無いだろう」

「だよな。居場所もわからないし、かといって私や君が迂闊に動くわけにはいかないし」

片方は世界中が探している世界最高の天才、もう片方も世界中が探している世界最強の襲撃者。その私達が下手に動ける訳がない。

「……今度の学園祭まで待つしかないな」

「……来るかな？」

「……間違いなく来る。「亡国機業」が動く以上な」

「成る程ね。でも、襲撃されたのにノコノコ来る？」

「……奴等からすれば新型のISを奪う数少ないチャンスだ。襲撃されたからといってこのチャンスを見逃すとは思えない」

確かに今IS学園には十人の専用機持ちがいる。内一人はまだ完成してないけど、それでも九機の専用機がある。「亡国機業」は最近ISを集めようとしているから来るってわけか。

「そして、襲撃者が「亡国機業」を狙っている以上、学園祭の時に来る可能性は高いってことだね？」

「……ああ、しかし今度の学園祭は派手な祭りになりそうだな」

「そうだね。君に襲撃者、そして「亡国機業」か。・・・とんでもないことになりそうだね」

ある意味戦争だよこれ、嵐の予感ってレベルじゃないよ。

「・・・何にせよ、俺は織斑一夏を殺すだけだな」

「なら私はそれを全力で阻止するだけだね」

「・・・やってみる。できるのならばな」

黒くんが不敵に笑う。正直できるとは思っていない。が、やるしかない。ちーちゃんやいっくん、篝ちゃんのためにも。

「・・・所で学園の方はどうだ？」

「学園？確か生徒会長がいっくんに接触して今いっくんのコーチをしているらしいよ？」

「・・・そうか」

黒くんはやはりなと付け加えた。黒くんだろうから、この事も知ってたんだろうね。

「ちなみにいっくんが生徒会長にコーチしてほしいって、頼んだらしいけどね」

「・・・あ、またか。原因は俺だろうな」

黒くんに勝つたためって所だね。後は多分襲撃者に対抗するためかな？

「……どこまでずれるのやら、……少し楽しみだな」

ふうん、それは私も期待したいな。あ、そうだ。

「ねえ黒くん。君なら襲撃者の機体の特徴がわからない？」

「……一つだけなら予想できる。だが「あれ」は……」

「……どうしたの？」

何故か黒くんが言いづらそうになっている。それほど厄介なやつってこと？

「……多分あのシステムは取り除いているかもしくは……」

「……ねえ黒くん。それどんなやつなの？そんなに強力なの？」

「……強力と言えば強力なんだが……それ以上に「危険」なんだ」

「「危険」？まさか「Rシステム」みたいなやつじゃないよね？」

「……いや、「Rシステム」より危険だ。下手すれば死ぬ」

死ぬ！？って言うが、一体どんなやつなの！？

「……「BCFシステム」通称ブレイン・コントロール・フィールド・システム。それがさっき言ったやつだ」

ブレイン・コントロール……。名前を聞く限りあれしか考えられないんだけど……。

「それもしかして洗脳じゃないよね……？」

「……違う、脳で「操作」するシステムだ」

「何を「操作」するの？」

「……攻撃だ。自分の攻撃や武器を「操作」することができる」

……何か凄く嫌な予感しかしないんですけど。

「……ねえ黒くん。まさかと思うけど……「ブルー・ティアーズ」の「偏向射撃」みたいに攻撃を操るってこと？」

「……その通りだ。機体を中心に一定の空間に特殊なフィールドを発生させ、自分の攻撃や武器がそのフィールドから離れるまで自由に操れる。ちなみに操作している間も自分は簡単に動ける」

……そんなのアリ？要するに、自分の攻撃全てを操れるってことでしょ？ビームだろうが実弾だろうが関係無く自在に操り、その間も自分は動くことができるなんて反則だよ……。あれ、でも確か黒くんは……。

「ねえ黒くん。これを下手に使うと命を落とすって、言うてけどなんだ？？」

「……篠ノ之束、お前一度にどれだけのことを考えられる？」

「え？えーっと、五つはいけるよ」

「・・・では、仮に百発の弾丸を自分の意思で全部別々に動かせるか？」

「そんなことしたら脳がパンク・・・って、まさか・・・？」

「・・・そうだ、このシステムは脳に異常な負担を掛けてしまう。どれだけ処理能力が高いやつでも三十分使えば脳が完全に壊れる。だから危険なんだ」

「・・・とんでもないね。道理で「ラグナロク」には無い筈だよ。

「でも、考える数を減らせば平気なんじゃないの？」

「・・・そうはならない。BCFは脳に通常の数十倍の負担を掛けることで操縦者の処理能力を桁違いに上げ、その状態で攻撃や武器を操作するシステムだ。つまり・・・」

「考える数を減らした所で、脳そのものへの負担は減らないから意味がない、か」

「・・・ああ、一度使ったことがあるが・・・気が狂いそうだった」  
「だろうね、自分の脳の限界を無視して処理しているんだから。」

「黒くん。それ、何分使ったら危ないの？」

「・・・平均で二十分だ。それを過ぎれば徐々に脳が壊れ始め、三

十分経てばどんなやつでも確実に死ぬ」

「・・・酷いシステムだね。まだ、「Rシステム」の方が数段ましだよ」

「・・・だろうな。だが、もしこの欠点を解消すればどうなる？」

「・・・そんなのあり得ないでしょ。でも負担を軽減するぐらいなら可能かもしれない。欠点さえ無ければこのシステムは非常に強力なんだし。」

「・・・まあ、多分使わないと思うが」

「けど警戒する必要があるね」

制限時間はあるとはいえ、その時間の間は自分の攻撃がほぼ命中するってことだからね。」

「けど黒くん。このシステムの対策って言っても・・・何があるの？」

「・・・驚異的な速さを出してかわすか、盾で攻撃を防ぐか、攻撃そのものを打ち消すか、この三つだな」

「・・・どれも難しいんですけど。盾で防いだり攻撃で防ぐのはともかく速さでかわすって、そんなことできるの「ラグナロク」ぐらいでしょ。」

「・・・後は制限時間まで耐えるか、といった所だ」



どれもキツイね……。ガトリングの様な威力の弱いやつなら防げても、大型の大砲やビーム、荷電粒子砲を喰らって何度も耐える盾なんてそうそう無い。

「……まあ、まともに戦えるのは「ラグナロク」ぐらいだろうな」

「後、他の機体だと「紅椿」かな？」

「紅椿」の「展開装甲」で何とか渡り合えるぐらいだ。厄介以外なんでもない。

「……「ユグドラシル」が使えれば楽何だがな……」

「あれは多分最後の方だと思っよ？」

「……だろうな。あれは最早「武装」というレベルでは無いからな」

「……一体どんな武装なの？武装という枠を超えた兵器ってこと？……想像したくないね。」

「ほんと、規格外だよね君の機体。襲撃事件を起こした機体も充分規格外だけど」

「……これからはその「規格外同士」の戦いになるかもしれんぞ？」

「……寒気がしたんだけど」

「……くくっ、そうか」

私は今可能な限りでの「規格外同士」の戦いを想像する。……  
……うん、正直割り込みたくないね。間違いなく瞬殺されちゃう。

「……そろそろ夜飯の時間だな」

「あ、ほんとだ」

いつの間にか時間は午後六時になるうとしていた。黒くんと話している間にここまで経ってたんだね。

「東さま、黒さん、そろそろ夜御飯の時間ですが……」

丁度いいタイミングでくーちゃんが部屋に入ってきた。

「私も今行こうとしてたんだよ。黒くんも一緒に行こうよ」

「……そうだな」

私は黒くんとくーちゃんの三人で一緒に部屋を出て一緒にご飯を食べた。今日の料理もくーちゃんが作った料理で日に日に上手くなっていた。美味しかったな。

東Side end

### 第三十四話（後書き）

意見やアドバイス、感想などどんどん送ってください！後、間違いや誤字もあればお願いします。

## 第三十五話（前書き）

二人組、東、亡国機業の話です。次から学園祭編です。

### 第三十五話

とある場所、二人の男の隠れ場所。ここでは今赤髪の男が退屈そうにゴロゴロしていた。

「ああ〜暇だ〜。なあサジタリウス。適当に暴れていいかあ？」

「……死ぬか？キャンサー？」

「……すいません」

サジタリウスのとてつもなく禍々しいオーラを見てキャンサーはすくに謝る。

「まったくお前は……俺は今機体の整備で忙しいんだ。暇ならゲームでもしてる。どうせ持ってきているんだらう？」

「ま、まあな。あはは……」

キャンサーは苦笑いをしながらポケットから携帯ゲームを出す。

「……まったく、なんでお前はゲームばかりやるんだ？その気になればとんでもない天才になれるというのに……」

「いいじゃねえか。楽しいぜゲーム」

「……才能の無駄遣い以外、何でもないな。俺達の中で一番脳の処理能力が高いやつがよりによってゲーム好きなんだからな」

キャンサーは一度に十以上のことを判断できる程の処理能力を持つ。だが、本人は訓練以外はゲームばかりやっており、他の仲間からも呆れられている。

「うつせ。俺がどうしようが俺の勝手だ」

「・・・開き直るな。だからお前「バカニ」って言われてるんだろ  
うが」

「そのアダ名を言うんじゃないやねえ！　たく、わかったよ何すりゃいいんだ？」

渋々キャンサーはゲームを仕舞う。ちなみに「バカニ」はバカと力ニ（キャンサーだから力ニ）を合わせた彼のアダ名で、彼はこう呼ばれるのが一番嫌い。

「ある情報を調べて欲しい」

「「亡国機業」かよ？　でも、こっちじゃあ、あいつらの情報ほとんど無いぞ？」

「いや、奴等じゃない。「黒騎士」という奴についてだ」

「「黒騎士」？　なんだそれ？　そんな奴いたか？」

「いなかった筈だ。だから調べて欲しい。もしかしたら俺達と「同じ」やつかもしれん」

その言葉を聞いてキャンサーの目が細くなる。

「俺達より先に来たやつがいるってことか？面白そうじゃねえか。手応えのありそうなやつと戦えるかもしれねえんだからよお」

「・・・少しは考えるバカニ。俺達と「同じ」なら仲間にした方がいいだろうが」

「だからそのアダ名で呼ぶな！・・・けどそいつが仲間にならなかつたどうするんだ？」

「その時は消えてもらう。俺達の邪魔をするなら容赦はしない」

サジタリウスが冷たく言う。目的の障害になるものは容赦なく消すのが彼の信条だ。

「おゝ怖い怖い。流石、俺達の中で一番冷酷なやつだぜ。なあ、サジタリウス」

「・・・何とでも言え、それよりさっさと調べろ」

「へいへい、了解」

そう言い、ディスプレイで調べるキャンサー。とてつもない早さキ―ボードを叩き、色々な情報を検索する。

「えーっと、「黒騎士」の情報は・・・・・・うわあ」

「どっした？」

「滅茶苦茶あるぞこいつの情報。これじゃあ手間が掛かる」

最早「黒騎士」の存在は全世界に知られているため、様々な情報があるのだ。

「・・・ふむ、どうやら色々動いている様だなそいつは。どれくらい掛かる?」

「この中から本物の情報を集めようとすりゃ三日は掛かる」

「充分だな。学園祭までは余裕で間に合う」

「それまでするのが大変なんだけどよぉ」

めんどくさそうに言うキャンサー。彼にしてみればその間ゲームが出来ないので拷問以外のなんでもなかった。

「さっさと終わらせて、好きなだけやればいいだろう」

「はっい。そうするぜ」

「さて・・・あのシステムの調整をしなければならんな」

「後はもう一つあんだろ?あの機能を調整しないとBCFシステムはまったく役に立たねえし」

「そうだな。基本的にBCFは失敗作だからな」

驚異的な能力を持つBCFシステムだが、それ以上にリスクの方が多すぎるため実戦ではまともに使えないのだ。



「このシステムを実戦レベルに使用できるまでに相当な時間が必要だったからな」

「……そのせいであの人達はまともに生活することも出来なくなつたしな」

「……だからこそ、俺達は成し遂げなければならんだ」

「……そうだな。そのためにも必ず「亡国機業」を潰す。俺達から大切な物を奪った奴等を一人残らず殺す。絶対にな」

二人から強烈な殺気が発せられる。常人ならすぐに気絶する程の殺気だ。

「……だからといって、無差別に殺したりはするなよ」

「……わかってるよ。俺達が殺すべき奴等は「亡国機業」の中で重要な存在だけだからな」

「わかってるならいい。さっさと終わらせるぞ」

「おう」

話が終わると同時に二人はそれぞれの作業を再開する。自分達の目的を成し遂げるために。

「ふう、やっぱり情報無しか。黒くんが言った通り学園祭まで待つしかないね」

私はこの前の事件の情報を引き続き調べているが、やはりまったく無かった。けど、このまま何もしないというのも嫌だったが、一行に進展しない。黒くんと違い、襲撃者は最近現れたばかりだ。向こうがこっちの情報を手に入れることはできても、こっちが向こうの情報を入手するのは不可能に近い。

「……うう、どうしょ？」

「……おとなしくしていればいいだろう」

「あ、黒くん」

私がどうしようかと考えていると黒くんが部屋に入って来た。あの様子だと訓練は終わったみたいだね。

「……今の状態でどう足掻いても、無駄なだけだ。それなら別のことをした方がいい」

「だけど、このまま何もしないっていうのも嫌なんだけど」

「……だったら「ゴーレム？」の改良でもしたらどうだ？」

改良ね。今の所それぐらいしかないか。後は……あ。

「黒くんBCFシステムの欠点についてもっと詳しく教えてくれな

いかな？」

「……いいだろう。まず、一つ目は脳の負担による制限時間だ」

これはこの前聞いたことだね。確か平均で二十分しか使えないだったね。

「……二つ目はこのシステムは使えば強い、という訳でもないことだ」

どういう事？全ての攻撃を操れるならそれだけで充分強い筈だけど……？

「……全ての攻撃を操作できてもそれを上手く操れなければ意味がないからな」

あ、そういう事か。素人が使っても下手したら自分の攻撃を自分で消す事になったり、自分に当たったりするかもしれない。そもそもBCFで処理能力を上げて、いきなり自分の処理能力が桁違いに上がったならその差に戸惑うだろう。一つしか考えられない人が突然百のことを考えても、それを完璧に発揮するのは無理だ。

「BCFを使おうとしたらそれなりの実力と使いこなすための訓練が必要って訳か」

「……そうだ。で、三つ目だが……BCFは発動すると同時に脳の痛みが発生し、徐々に痛みが増すんだ。つまり……」

処理したくても脳の痛みが邪魔でまともに処理出来ないって事か。欠点ばっかじゃんこのシステム。

「改良型とか・・・無いよねえ」

「・・・まず、無いな。BCFを改良しようとするれば、優秀な人材にかなりの時間がある。しかも、下手すればその人材は死んでしまう。わざわざこんな失敗作を改良するやつはいないだろうし、そもそもデータがほぼ無いからな」

「だよな。開発者もこんな失敗作、すぐに処分する筈だし」

処分しなければその開発者は頭がどうかしているとしか思えない。

「・・・？何故か今「お前が言うな」と言いたくなつたぞ？」

「ふん。変な電波でもキャッチしたんじゃない？」

最近黒くんが変なことを言うけど・・・大丈夫かな？

「・・・別にいいか。それより説明はこれで終わりだ」

「ありがと。これだけの欠点があつて使う人がいるとは思えないけど・・・」

「・・・そうとも言い切れんからな」

リスクこそ大きすぎるが、効果は絶大なシステムだ。何かの改良を加えたBCFが無いとは限らない。

「・・・そろそろ失礼するぞ。ちょっと昼寝したい気分なんでな」

「んじゃ、ごゆっくり」

黒くんが部屋を出て少しするとクーちゃんが入って来た。

「東さま。例の荷物が届きました」

私はその言葉に即座に反応する。ついに……！ついに来たね……！

「ふふふ……ありがとクーちゃん。それ、すぐに私の部屋に置いて」

「は、はい」

これで……これでようやく黒くに復讐できる……！ふふふ、黒くん……。飛びっきりの屈辱を味あわせてあげるね……。……！！

「た、東さま？あの荷物には一体何が入っているのですか？」

「気になるクーちゃん？仕方ないね。言っておけるよ！あの荷物には……」

私はクーちゃんに届いた荷物の中身を教え、復讐の内容を話す。どんな反応するかな？

「あ、あの東さま……そんなことをしたら間違いなく黒さんに殺されると思いますが……」

クーちゃんが顔を真っ青にしながら言う。ふっ、私が対策を練って無いと思ったのかい？

「大丈夫だよくーちゃん……。そのための準備は完璧だから……。うふふ」

「や、止めた方がいいかと……」

「何言ってるんだいくーちゃん？君に手伝ってもらわないと困るんだけど？」

「わ、私もするのですか!？」

当然じゃん。くーちゃんがないと復讐が出来ないしね。

「やってくれるよね。くーちゃん？」

「……はい」

これで良しと、私はくーちゃんに作戦の内容を話し、準備する。後は学園祭まで待つだけだね……。うふふ、今度こそ覚悟するんだね黒くん!!

東Side end

とある場所とある時間。今この場所に二人の女性がいた。一人は薄い金髪の美女でもう一人は黒髪の少女、「亡国機業」の幹部、スコールとエムだった。

「……ふっ」

「……ため息か？スコール？」

「……ため息も出るわよ。結局あの襲撃事件の犯人はわからなかったしね」

「……何故襲撃者は我々と関係している施設を襲うことができたかも不明だからな」

彼女達は先月起きた襲撃事件の調査をしていたが、まったくわからなかった。情報は完璧に隠していた筈なのに何故バレたのか。襲われた施設についてはすでに手は打っているため問題ないが……。

「どの国も調べたけど……こんな無茶苦茶なことが可能な機体なんて無いわね……」

「……例の「黒騎士」がやったのか？」

「「黒騎士」が襲撃したにしては妙よ。全世界に知られている存在が今更、自分の存在を隠す筈無いわ」

前から調査している存在「黒騎士」。その圧倒的な実力と驚異的な性能を持つ機体。「亡国機業」としては是非手に入りたい存在だが、これについてもまったく不明だった。

「……謎だらけか」

「ええ、どこで作られたかも開発者が誰かもわからない。篠ノ之束が作ったにしては妙よね……」

「・・・奴が気に入っている織斑一夏を自分で殺そうとする筈無いからな」

「・・・嫌な予感しかしないわね」

「・・・だが中止する訳にもいかないだろう。「リムーバー」も既に用意されている。やるしかあるまい」

彼女達は今度IS学園で行われる学園祭に乗して潜入するつもりなのだ。

「エム、貴女にはオータムが失敗した時に彼女を救助してもらおうわ」

「・・・わかった」

「さて、少し休みー」

ドガアアアアン！！

「「!?!?」」

突如聞こえた爆音。二人はすぐにそれぞれの機体を展開し、その発生源の場所に向かう。到着すると・・・。

「オータム!?!」

「ス、スコール・・・」

「亡国機業」の一人オータムがボロボロになって倒れていた。彼女



が纏っている機体もかなりの損傷を受けていた。スコールは何があつたのか聞こうとすると……。

「……ふん。話を聞かないからそうなるんだよ雑魚が」

「まったくです。もう少し冷静さというのを学ぶべきです」

突然声が聞こえた。スコールとエムが構えながらそちらに振り向くと、男女のペアがいた。一人は茶髪の屈強な男で身長が百九十もあつた。もう一人は濃い青髪の女性で眼鏡をかけていた。

「誰だ貴様等……!?!」

「まさか……貴方達が例の襲撃事件の犯人かしら?」

「……違うな、俺達じゃない」

「私達は貴女方に協力しに来たのです」

「私達に協力……?それにそつちの彼は……?」

茶髪の男の方を見ると手首に何かアクセサリーを付けていた。

「ふん、来い。——」

男が何かの言葉を発するといきなり男の身体に機体が展開された。

「IS……!?!」

「馬鹿な!今世界でISを使える男は織斑一夏だけのはずだ!それ

「なんだその機体は!？」

「・・・どうでもいいだろが。そんなこと」

「ええ、重要なのは私達が協力しに来たという点でしょう?」

「・・・確かにそうね。・・・お願いしていいかしら?」

「「スコール!？」」

スコールの対応にエムとオータムは驚く。いきなり襲撃した奴等が「協力しに来た」と言ってもそれをすぐに信用できる筈が無い。にもかかわらずスコールは二人を受け入れたのだ。驚かない方がおかしい。

「スコール・・・こいつら信用できるのか・・・?」

「・・・ここで戦うのはまずいわ。おそらくこの二人は私達以上の実力を持っている」

「良くわかりましたね。大した観察眼です」

「・・・それにそっちの彼は見たことの無い機体を持っている。多分貴女もそうなんでしょう?」

「その通りです。はっきり言いまししょう。貴女達が束になってかかって来ても私達には敵いません」

「何・・・!？」

「んだと・・・!?!」

青髪の女性の言葉にエムとオータムは怒る。完全に見下している言い方だ。

「落ち着きなさいエム、オータム。貴女も挑発しないでくれないかしら?」

「ふっ、挑発? 私は事実を告げただけです」

「・・・面白い。だったらやってみろ」

また、見下した言い方をする青髪の女性に対し、エムが襲おうとする。

「やめなさいエム!」

「・・・ちっ」

「お前も止める。これから協力する相手と険悪な状況になってどうする」

「・・・わかりました」

エムはスコールが宥め、青髪の女性も茶髪の男が忠告した。

「・・・改めて聞くぞ。俺達の協力を受ける気はあるか?」

「・・・ええ、受けましょう。貴方達の力・・・「亡国機業」のた

めに役立ててもらいます」

「わかりました。一つ言っておきますが、私達の機体は本人にしか使えません。機体のデータを取りたいければ私に言う様に」

「わかったわ。貴方達の部屋に案内しましょう。それと貴方達の名前を教えてくださいます」

「・・・コードネームしか言えんがそれでいいか？」

スコールは少し考え・・・それでいいことにした。余計な詮索をすれば危険と判断したからだ。

「それで構わないわ」

「・・・俺は「タウラス」だ」

「「ピスケス」と申します」

「タウラスにピスケス・・・。星座の名前ね。まあ、それはともかく、これからよろしくねタウラス、ピスケス」

「ああ」

「ええ」

スコールはその後二人を部屋に案内し、彼等に今度の作戦の内容を告げた。

### 第三十五話（後書き）

意見やアドバイスを、感想などどんどん送ってください！後、間違いや誤字もあればお願いします。

## 第三十六話（前書き）

学園祭編のプロローグのようなものです。

## 第三十六話

東Side

今日はIS学園で行われる学園祭の日だ。そして、私が黒くんに復讐する日でもある。ふふふ・・・さて、始めないとね・・・。黒くんは・・・いた。

「黒くん」

「・・・・・・?」

「どづしたの?」

「・・・今何故か、とてつもなく嫌な予感がしたんだが・・・?」

ちっ、勘がいいね黒くん。まずはさりげなく普通に話してからだね。

「気のせいだよ。それより君が今日、学園に入るための準備は出来てるからね」

「・・・了解」

「後、黒くん。今回の「頼み」、忘れてないよね?」

「・・・勿論だ」

今回黒くんに頼んだことは二つ、一つはいつくん達と戦う時は十分経てば撤退すること、もう一つは例の襲撃者がもしいつくんを狙

つていたらそつちを先に倒すこと、この二つだ。

「……そろそろ変装するか」

IS学園に潜入するため、黒くんが変装しようとする。……この時を待っていたんだよ……!

「黒くん。私が早速服を用意するから少し待っててね」

「……ああ」

私はすぐに例の荷物の中にある服を取り出し、黒くんに見せる。

「……何の真似だ篠ノ之束？」

「何の真似って……黒くんが変装するための服だよ？」

「だったら何故女物の服なんだ!？」

そんなの決まってるんじゃない。黒くにこれを着せるためだよ……  
うふふふふ。

「……冗談だよなあ？篠ノ之束？」

「冗談じゃないよ黒くん？ほら、IS学園って女の方が圧倒的に多いから潜入するなら女に変装した方がいいじゃん」

「断る!!そんな服着てたまるか!!」

「え〜?でも、こっちの方が潜入しやすいよ?」



「……そうか、お前いつもの仕返しをするつもりだな？」

あ、バレた。流石黒くんだね。

「違うよ。私は黒くんの為にこの服を用意したんだよ？」

「……つまり俺に飛びつきりの恥をかかせる為に用意したという事か」

……やっぱり誤魔化せないか。まあ、別にいいけどね。

「……篠ノ之束え、いい度胸だなあ？俺にそんな服を着せようとするとはよお……」

こわっ！！黒くんから今までとは比べ物にならない程に凄まじい量の殺気が放たれてる！！……落ち着くんだ篠ノ之束、冷静に対処するんだ！！

「くくくっ、どうやら飛びつきりの悪死悪鬼を喰らいたいらしいなあ……？」

「やれるならやつてみたら？」

私はわざと黒くんを挑発する。彼をもっと怒らせ、黒くんの後ろの方を見る。

「今だよくーちゃん！」

「は？ーゴフッ!？」

「……すいません黒さん」

くーちゃんが黒くんの背後からスタンガンを当てて気絶させる。作戦成功！！

「うふふ、やっと……やっと私の復讐が成功したんだね！！」

「……ごめんなさい」

くーちゃんが黒くんに謝っていた。気にしなくてもいいじゃん。

「さて……黒くんの着せ替えタイム。ふふふ」

「ほ、本当にやるのですか束さま？」

「当たり前だよ！！今まで怨みを何万倍にして返してやるんだから！！！」

私は手際よく黒くんの服を剥ぎ、用意していた服に無理矢理着せる。ついでにロングヘアーのカツラを被せて、と。

「うんうん、可愛くなったね〜黒くん。くーちゃんカメラの準備出来てる？」

「あ、あの束さま……これ以上はもう止めた方が良いかと」

「何言ってるのくーちゃん！！女装させた黒くんの写真を撮っておかないと安心出来ないでしょ！！この写真で黒く人を脅迫しとかないと私に明日は無いだよ！！！」

「否定出来ませんね・・・」

そう、私は最初から黒くんの女装した状態の写真を撮るつもりだったのだ。けど、普通にスタンガンをぶつけようとしてもまずかわされる。かといって不意討ちをしようとしても、その前に「ラグナロク」を展開されて失敗に終わる。だから黒くんに服を見せ、更に挑発することで彼の平常心を欠かせ、その隙に気配を消したくーちゃんが気絶させたのだ。さてと・・・!

「ほら、早く!!黒くんが目を覚ます前に少なくとも百枚は撮らないと!!」

「撮りすぎです!十枚でいいでしょう!?!」

「甘いよくーちゃん!!私は最高千枚撮るつもりなんだから!!」

「やり過ぎです束さま!そこまでやりますか!?!」

当然!!と言うか、これでもまだ少ないぐらいだよ!!今まで黒くんに受けた痛みに比べればね!!

「ほら、くーちゃんも撮るんだよ!!」

「私もやるのですか!?!」

「・・・ここまで来てくーちゃんだけ逃げるつもりは無いよね?」

「・・・はい」

これで良し！！今更くーちゃんだけいい子ぶるなんて許すと思っ？

「イツツ、撮影タ〜〜イム」

「・・・許してください黒さん」

この後私とくーちゃんですくくんの女装写真を撮る千枚以上撮り、くーちゃんに頼んで黒くんをES学園に送ってもらった。黒くんが帰って来た時が楽しみだね〜

????.Slide

「う、ううう・・・？」

俺が目を覚ますと・・・目の前にあいつがいた。周りを見ると何処かの倉庫の様だ。

「・・・お前か、ってなんだこの格好は!？」

「・・・「めんなさい黒さん」

今の俺の格好は明らかに女の格好だった。上は普通のスーツだったが、下はロングスカートでパットとカツラも付けられている。・・・まさか？

「・・・ほっ」

「どっしましたか？」

「・・・下着まで女物では無かったから安心した」

これで下着まで女物だったら間違いなく普通でいらなかっただろう。

「・・・戻つたら必ず殺してやる・・・！！」

「・・・ちなみに束さまは黒さんが目を覚ます前に黒さんの女装姿の写真を千枚以上撮ってました・・・」

「・・・知るかそんなこと・・・！！それで俺を脅迫しようとしてもその前に殺してやる！！」

「お、落ち着いてください黒さん！今は自分の目的を果たす事に集中してください！」

くっ・・・！！今すぐ秘密ラボに戻って篠ノ之束を殺してやりたいが・・・！！こいつの言う通り今は俺の目的を果たす事に集中しなければならん・・・！！

「・・・篠ノ之束に戻つたら死んだ方が良いと思える程の拷問を受けさせてやると言え、いいな！！」

「・・・私にはしないのですか？」

「・・・どうせ無理矢理させられたのだろう？」

「……はい」

こいつがこんな事をするとは思えないからな。

「……ふう、では行くとするか」

「黒さん。これをどうぞ」

俺は篠ノ之束が用意していた偽の名刺や証明書を受け取り、学園祭に向かった。

??? Side end

「とつちやく。これがIS学園かあ」

「黒騎士」がIS学園に着いた時、キャンサーもIS学園の入口に着いていた。そして、サジタリウスとの通信を開く。

「さてと……着いたぜサジタリウス」

『そうか、俺の作った偽の証明書は持っているよなキャンサー?』

「もっちろん。んじゃ、入るぜ」

『……無理はするなよ』

「わかってるよ。俺もこんなところで死ぬ気はねえ」

『そろそろ切る。作戦の成功と無事を祈る』

サジタリウスがそう言うと同時に通信は切れた。

「さて・・・、作戦開始だ」

「黒騎士」とキャンサーが学園に入ったのと同時刻、IS学園から少し離れた場所に「亡国機業」の一人オータムがいた。

「さてとそろそろIS学園に行くか」

「失敗するなよオータム」

オータムが向かおうとした後ろから声を掛けられる。声を掛けたのは新しく入った新入りの一人タウラスだった。

「うるせえ！新入りの分際で私に忠告するんじゃないやねえ！」

「ふん、その「新入り」に完膚なきまでに叩きのめされたやつはどこのどいつだ？」

「ケンカ売ってんかてめえ！！」

タウラスとオータムが互いに睨み合う。すぐに一触即発の状況にな

るが……。

「……そこまでにしる。タウラス、オータム、ここでやり合っても意味が無いだろう」

「……エムか」

「亡国機業」の一人エムが現れ、仲介に入る。

「黙れエム！てめえも新入りのくせに私に忠告するんじゃないやねえ！」

「なら、さっさと行けばいいだろう。今回はお前がやるんだからな」

「けっ、言われなくともさっさと行くぜ。てめえらの面見るだけでイライラするからな」

そう言い、オータムはすぐにこの場を離れ、IS学園に向かった。

「お前も変なやつだな」

「……何の事だ？」

「惚けるな。オータムに持たせた「リムーバー」、あれの欠点を知っているんだろう」

「……知っていたのか」

「ああ、スコールも何考えてるんだか」

二人共今回の作戦はほとんどの確率で失敗すると予想しており、運



が良ければ成功する程度しか考えていない。

「今回の作戦は宣戦布告のためと言った所か？」

「・・・そんな所だ。ピスケスを待機させたのもそれが理由だ」

今回の作戦メンバーにもう一人の新入りピスケスはいない。スコールはまだ彼女の存在を隠す気だったので仕方なかった。だが、それはまったく意味が無い事だった。

（恐らくはキャンサーがIS学園に潜入し、目的の人物と会う役。サジタリウスが撤退するオータムを捕まえる役だろうな）

実はタウラスとピスケスはキャンサーとサジタリウスの仲間だ。この事はまだ「亡国機業」には伝えておらず、自分達が来ていることも彼等には伝えていない。

（・・・怒るだろうなあいつら。だが、俺達は俺達のやり方でこの世界を変えてみせる。例え、お前らを敵に回したとしてもな）

「・・・私は向こうで待機するぞタウラス」

「ああ」

タウラスとしては今回現れる可能性の高い「黒騎士」に会ってみたかったが、今回はオータムが潜入するように伝えられたので諦めるしか無かった。

（いずれ「黒騎士」と会ってみたいものだ）

今は引くが次の機会では会おうと考えているタウラス。その後二人はすぐに他の場所で待機した。

今IS学園にとってもない嵐が起きようとしていた。

### 第三十六話（後書き）

意見やアドバイス、感想などどんどん送ってください！後、間違いや誤字もあればお願いします。

## 第三十七話（前書き）

少し遅れました。投稿します。

## 第三十七話

?????Side

「……さてどうするか」

俺は今I.S学園の階段の踊り場にいた。今回の目的は二つ、一つは当然織斑一夏を殺す事、もう一つは謎の襲撃者に会う事だ。

「……今すぐに織斑一夏と戦うという手もあるが……」

だが、良い手とは言えない。襲撃者に会う可能性が無くなる上、下手すればもつと厄介な事になる。襲撃者の機体や目的を確認するためにも今はおとなしくした方がいいだろう。

「……適当に回るか」

学園祭で色々な出し物をやっているため、時間を潰すのには困らない。「あの出し物」が始まるまでは色々楽しむとしよう。

「……二年生や三年生の出し物でも見るか」

一年生の教室でも見ようと思ったが、今は止めて別の場所を回る事にした。

「……賑やかな祭りになりそうだ」

ふと、俺はそう思った。今ここには俺と謎の襲撃者に「亡国機業」のオータムがいる。オータムは大したこと無いが、襲撃者は別だ。

一切情報が無いためどれだけの機体や実力を持っているのかもわかっていない。おまけに何人いるかも不明だ。

「・・・警戒するべきは襲撃者だな。後は織斑千冬と更識楯無ぐら  
いか」

実力を考えて、厄介なのはこいつらだけだろう。だが、織斑千冬や更識楯無は俺や襲撃者の様な機体は無い以上、俺の脅威にはならんな。

「・・・実力はともかく、機体の差は圧倒的だからな。まあ、仕方がないが」

そろそろ動くとするか、長時間同じ場所にいれば怪しまれるしな。まずは・・・。

「・・・三年生の所にも行くか」

二年生には更識楯無、一年生には織斑一夏達がいる。おとなしく動くなら奴等がいけない場所の方がいい。

「・・・では楽しむか」

今は「黒騎士」ではなく、「一般人」としてこの学園祭に参加する  
としよう。今は・・・だが。

「はあー、忙しいぜ」

一年一組の出し物「ご奉仕喫茶は朝から大忙しだった。・・・具体的に言つと俺が引つ張りだこな状態で、他は楽しそうにしてるけど。

「いらっしやいませ　こちらへどうぞ、お嬢様」

一番楽しそうにしているのはシャルでメイド服が良く似合っていた。それを褒めたせいか、朝からずっとにこにこしていた。・・・機嫌が良すぎる気もするけど。

接客班は俺とシャルとセシリアに箒とラウラだった。この出し物を提案したラウラはともかく、箒まで接客するのは意外だったな。ちなみにラウラがこの出し物を提案したと千冬姉に言つと爆笑していた。かなり意外だったんだろうな。

メイド服を着て働く皆を見ると前に弾が「メイド服とスク水とブルマに反応しない男はいない！」と言つてたのを思い出す。・・・よくわからん。

まあ、それはともかく、残りのクラスメイトは調理班と雑務に分かれて忙しそうに働いている。でも今一番大変そうなのは・・・。

「はい、こちら二時間待ちです」

「学園祭が終わるまでは開店してますから大丈夫ですよ」

廊下の長蛇の列を整理しているクラスメイトだった。待ち時間によ

る苦情にもしつかり対応しているが、やっぱり大変そうだ。なんせ、朝より列が長くなっている。大丈夫かなと思いつつ、ひよいつと顔を出す。

「あ！織斑くんだ！」

やばい、見つかったと思っていると、すぐに列を整理していたクラスメイトが何人か来て、俺を教室内に押し込める。

「こら！出ちや駄目でしょ！」

「ますます混乱度合いがあがっちゃうよ！」

「お楽しみは最後まで取っておかないとねー」

？お楽しみってなんだ？なんかイベントでもあるのか？

「「「いいから戻る！」「」」

まあ、とりあえず戻るか。接客しないといけないしな。

「おーい、その執事さーん。テーブルに案内してくんねえかあ？」

少し大雑把な口調を聞き、振り返るとそこには赤髪の女の子がいた。歳は俺と同じぐらいかな？

「ち、ちょっと！あんた何してんのよ！」

また、声がしたのでそっちに向くと・・・。



「鈴……？何してんだお前？」

チャイナドレス姿の鈴がいた。一枚布のスカートタイプでかなり大胆にスリットが入っており、真っ赤な生地に龍のあしらいと金色のライン。……かなり凝ってるな。

「う、うるさい！うちのクラスは中華喫茶やってのよ！あたしがウエイトレスやってるのに、隣のこのクラスのせいで全然客来ないのよ！まったく！」

そう言われてもなあ……。でもなんでこのクラスにここまで大勢の客が来るんだろう？

「あのさあ、執事さん。知り合いと話すのは勝手だけど、それより先にあたしをテーブルに案内してくんない？」

「す、すみません！」

さっきのお客さんがしびれを切らし、少しイライラしていた。すぐに案内しないと。

「ま、待ちなさいよ！そいつにはあたしを案内してもらうんだから！」

「んなこと知るか。あたしの方が先に来たんだし、先にこの執事さんに声を掛けたのもあたしだ。なら、先に案内してもらうのはあたしだろ？」

「う……」

赤髪のお客さんの言う通り、先に案内して欲しいと言ったのはこの子だ。だったら、彼女を優先しなければいけない。

「鈴、悪いけど他の人に案内してもらってくれ」

「・・・わかったわよ」

赤髪の子を少し睨んでから筭に案内してもらおう鈴、後で何か奢ろうかな？

「んじゃ、頼むぜ執事さん」

「はい。それではお嬢様、こちらへどうぞ」

「お嬢様？なんだそりゃ？」

「そう言うのが当店のルールなのです」

「ふーん。ま、どうでもいいや」

赤髪のお客さんは特に気にすることなく俺に付いてきて、俺は彼女を空いてるテーブルに案内する。

「あんがと執事さん。にしてもすごいなこのテーブルやイス。これ、かなり高いやつだろ？」

「ええ、知り合いが用意した物です」

この教室の内装にはあちこちでかなりの値段がする調度品が置いてあり、全てセシリアが手配したもので特にテーブルやイス、ティー

セットはすごくこだわっている品物だった。

「それで、ご注文は何になさいますか？お嬢様」

「うーん、色々あるなあ……。執事さん、この中でおすすめのやつって何？」

「それなら、当店おすすめのケーキセットはいかがですか？」

「んじゃ、それを三つ」

「三つ!？」

「あれ？まずかった？」

そんなに食べて大丈夫なのかな……。？まあ、お客さんが言ってるんだからそれで良い……。かな？

「えっと……。当店おすすめのケーキセット三つですね。少し時間が掛かりますが……」

「んー、ならその間この席に座って話してくんない？待ってるのって暇だし」

どうしよう……。？とりあえず周りを見るが今は問題なさそうだな。

「お嬢様が良ければ構いませんが」

「あたしは気にしないぜ。それに世界で唯一ISを使える男と話ができる機会なんてそうそう無いしな」

「では失礼します。お嬢様」

お客さんの許可を得て、正面に座る。と同時にお客さんが俺の顔をじろじろ見始めた。な、なんだろう？

「あ、あのお嬢様？」

「へえー、ふうーん。そんな顔なんだなあんた」

「は、はい」

「・・・なあ、アンタさあ。なんでISを使うんだ？」

「え・・・？」

い、いきなり何なんだこのお客さん？

「だーから、なんでアンタはISを使うんだって聞いてんだよ」

「なんで・・・ですか？」

そついや、俺がISを使った理由って・・・この学園に入ってテストのために「白式」をもらってからだよ・・・。

それからセシリアとの戦いで千冬姉の名前を守って決めて・・・、それからクラス対抗戦で「黒騎士」と戦って仲間も守ると決めた。だから俺は・・・。

「仲間を・・・大切な人を守るためです」

「・・・かつこいいじゃん。まるでヒーローみたいだな」

「ヒーロー・・・？」

「そ、あんたは仲間や大切な人のために戦ってるんだろ？そう言うのがヒーローってやつだと思っぜ」

「でも俺は・・・」

弱い・・・。一人じゃ「黒騎士」を倒すことができない。いつも誰かがいなければ俺は誰かを守ることができない。そんな俺をヒーローと呼べるだろうか？

「まったく、何落ち込んでるんだよ。アンタは仲間や大切な人を守って決めたんだろ？だったらその思いをどこまでも貫けば良いんだよ」

「あ・・・」

・・・そうだ。俺は決めたんだ。「黒騎士」から仲間を守ると、なら俺は彼女の言う通りどこまでもその思いを貫いて見せる。強くなっつて見せる。

「そろそろ出来たみたいだな。持ってきてくれよ執事さん」

「あ、はい」

どうやら、彼女と話している間にメニューを作り終えた様だ。俺はキッチンに向かい、ケーキセット三つを渡す。

「お待たせしました、お嬢様」

「どうも執事さん」

メニューを受け取ったお客さんは早速フォークを使い、ケーキを一つ食べ始める。・・・そうだ。

「あの、お嬢様」

「何執事さん？」

俺が話し掛けたので食事を中断するお客さん。

「その・・・名前を教えてくださいませんか？」

「んあ？うーん。名前か……。まあ、いいぜ。あたしは蟹子って言うんだ」

蟹子？変わった名前だけど……。

「うわっ！？」

突然俺の目の前に扇子が差し込まれ、ぱんつと開いた。そこには「天然」と書かれていた。これは……。

「やれやれ、まったく一夏くんはどれだけの子をたらしこむのかな？」

「せ、先輩？」

現れたのはIS学園の生徒会長にして、学園最強の称号を持つ二年生更識楯無その人だった。ってなんでメイド服着てるんですか。このクラスのものなのについての間には拝借したんですか？

「その格好はー」

「楯無、名前で呼んでって言ったでしょ」

「た、楯無さん」

「よろしい」

「・・・ちっ、更識楯無か」

「・・・え？」

今蟹子さんが楯無さんのフルネームを言った？それに舌打ちしたよ  
うな・・・？楯無さんの方を見ると・・・楯無さんも蟹子さんを睨  
んでいた。

「・・・何者かしら貴女？」

「・・・どこにでもいるただの「一般人」だよ。ごちそうさん」

ケーキセットを全て食べきった蟹子さんはそのままお金を払い、教室を出た。

「・・・一夏くん。あの子の名前は？」

「確か「蟹子」って言ってましたけど・・・」

「・・・そう、警戒した方が良いわね」

・・・何者なんだろうあの人。悪い人には見えなかったけど・・・。

「さて・・・、私もお茶しようかしら」

「接客しないんですか・・・」

「うん」

「だったらなんでその格好を・・・いや、もういいです」

はあ、ため息を漏らすと教室に騒がしい女子・・・新聞部のエース  
黛薫子さんが入ってきた。

「どうもー、新聞部です。織斑執事の取材に来ましたー」

「あ、薫子ちゃんだ。やつほー」

「あ！ たっちゃん！ 似会うねーメイド服。そうだ、せっかくだし織  
斑くんとのおツーショット撮っていい？」

そう言いながらすでに何枚か撮ってる黛先輩。ちなみに楯無さんは  
「いえい」とピースしていた。そしてもう何枚か撮ると・・・。

「やっぱり女の子も写った方がいいわねー。たっちゃんはオーラが  
ありすぎだし・・・。そうね、他の子達にも来てもらおうかな」



「いいわねそれ。その間は私が店のお手伝いするわ」

「うんうん、それでいきましょう。メイドさん来て」

「……こうして俺の意思とは関係なしに写真撮影は始まりました。ちなみに一緒に写ったのはセシリア、ラウラ、シャル、箒の四人だった。」

—夏Side end

「ふー、美味かったぜ」

さつき教室を出た女性、蟹子。そしてその正体は……。

「……でも、なんで俺がこんな格好しなきゃならねんだ？」

キャンサーだった。サジタリウスがIS学園に潜入するために彼を女装させていたのだ。

「いくら織斑一夏に会っためとは言えよ……なんで女装しなきゃならねんだ？」

ぶつぶつと文句を言うキャンサー。だが、サジタリウスの命令でもあるので断れなかった。

「さて……少しの間おとなしくするか」

彼がさつき余計な事をしたせいで更識楯無に目を付けられてしまった。しばらくは「一般人」として行動した方がいいと考える。

「織斑一夏に会うチャンスはまだあるしな。ゆっくりするか」

それにしても、と思うキャンサー。さつき自分が言った「蟹子」という適当な名前のことを考えつい、にやけてしまう。

「もうちょっとマシな名前を言えば良かったな」

ま、別にいいかと考え、すぐに忘れるキャンサー。

「よし！この「祭」を精一杯楽しむか！」

彼が今言った「祭」とはこの学園祭と・・・もうすぐ始まる戦いのことだ。

少しずつ確実に・・・戦いまでの時間が迫ろうとしていた。

### 第三十七話（後書き）

意見やアドバイス、感想などどんどん送ってください！後、間違いや誤字もあればお願いします。

## 第三十八話（前書き）

学園祭編の続きです。ではどうぞ。

## 第三十八話

一夏Side

セシリア、ラウラ、シャル、箒の四人との撮影を終えた俺は学園に招待した親友、弾に会うために正面玄関に向かおうとしていた。俺がいない間は代わりに楯無さんがやってくれるから大丈夫だろう。

「じゃあ、ちょっとお願いします」

「うん。行ってらっしゃーい」

すぐに執事服を脱いで廊下に出る。途中、声をかけてくる女子に返事をしながら正面玄関に向かうと・・・。

「ちょっといいですか？」

「はい？」

階段の踊り場で声をかけられた。

「失礼しました。私、こういうものです」

声をかけた女性は手早く名刺を取り出し渡してくる。・・・えっーと、IS装備開発企業「みつるぎ」渉外担当・巻紙礼子さんか。

「織斑さんにぜひ我が社の装備を使っただけないかなと思いついて」

・・・またこういう話か。「白式」に装備提供を名乗り出てくる企業は次々と出てくる。世界で唯一ISを使える男である俺の機体「白式」に装備を使ってもらう事で企業の名を上げようとしているのだ。

おまけに「白式」の元々の開発室である倉持技研が未だに「白式」の後付武装を開発できていないため、各国の企業から次々とお誘いが来ている。

けど「白式」が拒絶している以上、どうしようもない。後付武装に使われる拡張領域は機体によって異なる。しかし、それ以外にもコアとの相性も必要で、「白式」は「雪片式型」以外の武装全てを拒否しているため、他の武装を使う事が出来ない。

ちなみに俺がラウラ戦の時、マニュアルで射撃武器を使ったため、第二形態で射撃・格闘・防御をこなす「雪羅」が生み出されたらしいが・・・。他の三つ「雪閃」「雪盾」「雪空」は不明らしく、何故この三つが生み出されたかわかっていない。

「その・・・こういうのはちょっと・・・とりあえず学園側に取っ  
てからお願いします」

「そう言わーー」

「はいはい。仕事熱心のようにけど・・・そこまでしたらどうか  
しらっ」

巻紙さんの台詞を遮ったのは、茶髪のロングヘアの女性だった。

「学園にも許可を取ってないのにしつこく迫るのは不味いと思うわ

よ？どうやら彼も急いでいるようだし・・・、これ以上彼を引き止めるのは無粋でしょう？」

「・・・わかりました。確かにこれ以上しつこく言うのは織斑さんに失礼ですね。・・・すみません織斑さん」

「い、いえ、じゃあこれで」

茶髪の女性のおかげですぐにこの場を離れる事ができた。いい人だったなあ。

????Slide

俺は階段の踊り場で織斑一夏を「亡国機業」の一人オータムから離し、俺とオータムがこの場に残った。

「・・・いい度胸だなてめえ。この私の邪魔をするなんてよ・・・。どうなるかわかってんだろうなあ？」

「クスッ・・・」

俺はわざと微笑む。我ながら上手くできるもんだな。・・・男のくせに。

「何がおかしいんだてめえ！」

「だって……貴女程度の實力で私を倒すような事を言ってるものだから……つい」

「てめえ……！ここで死にたいらしいな……！」

「ふふつ、「亡国機業」の犬ごときが私を倒せると思ってるのかしら？」

生身でもISでも俺の方が遙かに上だというのに。相手の力量がわからんのかこいつは？

「っ！どうやらこの場で……ん？」

「……？」

俺に襲いかかろうとしたオータムが止まった。……何だ？誰かがこいつに通信をかけたのか？

「ああ！？おとなしくしているだ！？新入りの分際で私に忠告してんじゃねえ！」

新入り……、エムか。どうやら何処かで俺とこいつの話聞いていたのか。オータムを止めるために通信したと言った所か。

「大体てめえらは氣にくわねえんだよ……！入ったばかりのくせに……！」

……待て、今こいつ「てめえら」と言ったよな？……一人じゃないのか？しかも、そいつらは最近入ったばかりと言ってたよな……？



(・・・どういう事だ？エム以外の「誰か」が最近「亡国機業」に入ったというのか？)

例の襲撃者か・・・？まさかあの襲撃事件はこいつらに会うために起こしたのか？・・・にしてはやり過ぎだな。こいつらに会うためなら一ヶ所だけを襲撃してこいつらが来るまで待てばいい筈・・・、となると・・・。

(まさか・・・俺や襲撃者以外にも「誰か」来ている？)

そもそも俺が来ている以上、他の奴等が来る可能性なんていくらでもある。俺以外にも俺と同じ様な事を考えている奴がいて当然だろう。

(だが、あの人以上に「あれ」を完成させる人がいるのか？)

・・・駄目だ、情報が少なすぎる。とてもだが、今ここで結論を出すのは不可能に近い。

「・・・くっ、わかった」

どうやら俺が考えている間にオータムの方は終わったみたいだ。

「けっ、命拾いしたなクソ女。じゃあな」

そのままオータムがこの場を去る。・・・思わぬ収穫があったな。

「・・・よし」

人気の少ない場所に移動し、俺は篠ノ之東に通信をかける。この事を伝えた方がいいと思ったからだ。

「……俺だ」

『ん？黒くん？何の用かな？もしかして、私の僕になりたいのかな？』

「……今すぐお前を殺しに行こうか？」

この格好の事でまた俺の全身から抑えきれない殺気が溢れ出す。・  
・やっぱり今すぐ秘密ラボに戻って殺そうか？

『ふふ〜ん そんな態度で良いのかい黒くん？今私には君の女装写真という最強の武器があるんだけどな』

「……ふん、俺の顔がバレていないのにそんなのが役に立つと思  
うか？」

『だったらこれ、ばらまこつと』

「……すまん、俺が悪かった。やめてくれ」

……例え、バレてなくても俺の女装写真が世界中にあるのは耐え  
られん。……隙を見て全部消してやるがな。

『それで良いんだよ黒くん で、何の用かな？』

やっと本題に入れる……。こいつのせいで話が激しく脱線したか  
らな。

「……篠ノ之束、この前の襲撃事件……覚えてるよな？」

『うん、あれを調べたから君と「同じ」存在が来たのがわかったんだし』

「……どうやらそいつら以外にもまた俺と「同じ」やつが来たらしい」

『……冗談だよな？』

「……まだはつきりしてはいないが……来ている可能性は高い。学園やその周囲を調べてくれないか？」

『……わかったよ黒くん。もし、その予想が当たってたら相当ヤバイもんね』

今ここにいる襲撃者だけでも厄介だというのに……今はできることをやっておくか。

「……頼む」

『任せて黒くん、何かわかったらすぐに伝えるから、じゃあね』

通信が切れる。……面白くなりそう、か。下手すればそんなレベルではすまん。

(こうなると……やはり「ラグナロク」の制限を何とかしたいな)

今使える武装は全部で六つ、まだこれで半分にもなっていないからな。

……。かといって篠ノ之束に頼んでもやらんだろっし……。不安要素だらけか。

(……。だがやるしかない。俺の目的を果たすためにも……。絶対に)

……。今はまだゆっくりするか。焦ってもろくな事にならん。

(……。とりあえず、また適当に回るか)

「あの出し物」をやるまでか、篠ノ之束から何か情報を得るまではおとなしくする事にした。

一夏Side

正面玄関前で待っていた弾と合流した俺は一緒に回る事にした。まずは手近にあった……。あれ？あの人は……。

「蟹子さん？」

「……。んあ？ああ、さっきの執事さんか。また会ったな」

さっき教室で会った蟹子さんだった。て言うか……。

「……。凄い量ですね。そんなに食べて大丈夫ですか？」

「ん？（モグモグ）大丈夫大丈夫、あたし太りにくい体質だから  
蟹子さんの両手には色々な食べ物があつた。さっきケーキセットを  
三つ食べたのにまだ食うんですか……。」

（おいー夏、誰だよこの子。結構可愛いじゃん）

弾が俺と蟹子さんが親しそうに話しているのを見て気になった様だ。

（さっきうちのお店に来たお客さんだよ）

（なんで名前知ってるだよ？）

……詳しく言うのもめんどくさいな。適当に言っておこう。

（ちょっと気になったから名前を聞いたんだよ）

（おいおい、既に何人もたぶらかしておいて、まだ手だす気かよ？）

はあ？何の事だよまったく、こいつ最近変なことばっか言うなあ。

「おい執事さん、さっきから何ひそひそ話してんだ？」

「えーと……友達に蟹子さんの事を説明していたんです」

「ふーん、そっか。あたし蟹子って言うんだ。よろしく」

「え、えと……五反田弾です」

お互い軽く自己紹介を済ませるけど……。

「あの蟹子さん。なんで名字を言わないんですか？」

さつきから下の名前は言ってるけど何故か名字は明かしてない。なんでだろう？

「・・・名字がややこしいから下で言ってるんだよ。そろそろあたし他の場所に行くから、じゃあな執事さん。五反田さん」

「「あ、はい」」

そのまま蟹子さんは離れていった。・・・さつき一瞬だけ殺気を感じた様な・・・悪い人じゃなさそうだし気のせいかな？

「じゃあ、行こうぜ弾」

「おう」

この後俺達は近くにあった美術部のクラスで爆弾解体ゲームをやつてから、鈴の所で一休みした。

一夏Side end

「ちよつとヤバかったな。危なかったぜ」

買い食いをしながら急いでさつきの場所から離れるキャンサー。織

斑一夏に名字の事を問われた時、一瞬だけ殺気を出してしまったのだ。

「まあ、多分大丈夫だろ？」

「何が大丈夫なのかしら？」

「!？」

当然声をかけられたので振り向くと、そこには更識楯無がいた。

「貴女やっぱり怪しいわね。身柄を調べさせてもらおうかしら？」

「やーなこつた、なんでそんなことされなきゃならねえんだ？」

「貴女が怪しいからよ。痛い目に逢う前におとなしくした方がいいわよ？」

「はっ、てめえごときがあたしに敵うと思ってるのか？」

その言葉に楯無は少しイラツとする。自惚れてはいないが自分はロシアの国家代表だ。それなのにてめえごときと言われたのだ。

「過剰な自信は身を滅ぼすわよ？私が誰なのかわかって言ってるのかしら？」

「あつたりめえだ。たかが国家代表ごときがあたしに勝てるんでも？」

二人から少しずつ殺気が放たれる。互いが動こうとした瞬間、楯無

から電話の着信音が鳴り響く。

「……いいかしら？」

「……ああ」

楯無がポケットから電話を取り出す。しばらく会話をし、電話を切る。

「悪いけどお姉さん今からやらないといけないことができちゃった。今回は見逃してあげるわ」

「ふん、こっちの台詞だ」

「じゃあね」

楯無がいなくなったのを確認してからほっとするキャンサー。もう少しで余計な戦闘になりそうだったからだ。

「一難去ってまた一難ってやつか。にしてもあいつが引いたってことは……もうそろそろか」

後少し経てばもう一つの「祭」が始まる。楽しそうにしながらキャンサーは「祭」の開始場所に向かった。

とある場所、「亡国機業」の一人エムと新入りタウラスがさっきの



事で呆れていた。

「まったくあいつは……」

「……実力は無いくせに無駄な自信だけはあるからな」

「まあ、それはともかく……そろそろ始まる様だ。いつでも行けるなエム？」

「……ああ、だが私一人で充分だ。お前が出る幕は無い」

エムはオータム程ではないとは言え、タウラスやピスケスを嫌っている。出会った時に見下されていた件とその後タウラスとの模擬戦で一方的に叩きのめされたせいだ。

「……ふん、子供だな。そんなに叩きのめされた事が悔しいか」

「黙れ……！」

隠していたナイフでタウラスに襲いかかるエムだが、いとも簡単にあしらわれる。

「……この作戦が終わったら、また模擬戦をしてやる」

「……言っただな？なら、今度こそ貴様を叩きのめしてやる」

「……楽しみにしておこう（不可能だろうがな）」

その後は比較のおとなしくしていたエム。次こそタウラスを敗北させようと考えているのだろう。

エムとタウラス、二人が動き出す時間も迫ろうとしていた。

### 第三十八話（後書き）

意見やアドバイス、感想などどんどん送ってください！後、間違いや誤字もあればお願いします。

### 第三十九話（前書き）

一夏対オータムです。原作とかなり違います。次はオリジナルです。

## 第三十九話

一夏Side

「なんで・・・なんで俺がこんな目に逢わなきゃならないんだ!？」

今俺は・・・武装した数十人以上のシンデレラに追いかけてられる。

とりあえず俺は何故こうなったのかを思い出す。確か俺は楯無さんから生徒会の出し物シンデレラを手伝う様に頼まれて・・・、それから王子様の服装と王冠を身に纏って舞台（第四アリーナ）に立ち、演劇が始まると同時にまず鈴に狙われて・・・次はセシリアの狙撃に襲われ、シャルに助けられて逃げると箒とラウラの二人に攻撃された。そして最後に大量のシンデレラが襲いかかってきた

・・・理不尽だ。なんで皆この王冠をそんなに欲しがってるんだ？王冠を外して逃げようとしても、王冠を外すと全身に電流が流れるので無理だった。なので俺は今大勢のシンデレラからどうすればいいかと考えつつ、セツトの上を走り回っていた。

「見つけたぞ、一夏!」

まずい!箒が日本刀を構えつつ接近してきた!

「その王冠をよこせ!そうすれば・・・そうすれば・・・!」

「そうすれば・・・何なんだ?」

「ええい！とにかくよこせ！断れば斬る！」

なんで！？断つたぐらいで俺は死なねばなんのか！？理不尽にも程があるぞ！？この際「黒騎士」でもいいから誰か助けてくれ！！

「こちらへ」

「えっ？」

俺はいきなり誰かに足を引っ張られ、セツトの上から転げ落ちた。

??? Side

「……………大丈夫……………だよな？」

俺は今観客席で織斑一夏達の演劇？を眺めていた。下手したら死ぬぞあいつ……………。せめて武器は無しにしておけよ…………。

「……………ん？」

ふと見ると舞台から織斑一夏が消えていた……………始まったか。

「……………さて「祭」の開幕だ」

俺はすぐに席を立とうとしたが……………。

「……？あいつ……？」

観客席の出口の方を見ると赤髪の女が立っていた。そしてアリーナの方を見る事なく観客席を出た。妙だな……。他の観客は演劇に夢中なのにあの女だけ興味が無い様な気がする。

「……まさかあいつが……？」

例の襲撃者……か？

「……少し様子を見るか」

奴の行動から目的が分かる可能性は高い。他の情報を得るためにもここは慎重に動くとするか。

一夏Side

「着きましたよ」

「はあ、はあ……。ど、どうも……」

俺は誰かに誘導されるまま、セットの下をくぐり抜け更衣室に来た。俺が着替えた場所だった。

誰が俺をここまで連れて来てくれたのかを確認するためその人を見ると、その人はさっき名刺をくれた巻紙礼子さんだった。

「なんで巻紙さんが・・・」

「はい。この機会に「白式」をいただきたいと思ひまして」

「・・・え？」

何言っているんだこの人？「白式」をいただく？

「いいからさっさとよこせよ、ガキ」

「・・・冗談ですよね？」

「冗談でてめえみたいながキと話すかよ、マジでムカつくぜ」

その笑顔から嫌な予感がして巻紙さんから離れる。「黒騎士」がする笑みと少し似ていたからだ。あいつの方がよっぽど嫌だけど。

「・・・あなた一体・・・」

「ああ？私か？企業になりました謎の美女だよ。これでいいか？」

・・・どう考えても敵としか思えない。なら！

「来い！」「白式」！

俺は緊急展開でISスーツごと「白式」を呼び出す。通常よりもエネルギーを多く消費するがこの際仕方ない。

「ふん、やっとか。行くぜガキ！」



「!?!」

女の背後からスーツを引き裂き、鋭利な爪が飛び出す。クモの脚に似た黄色と黒の爪で数は八つで先端は刃物のようになっている。

「くらえ!」

「くつ!!」

八つの装甲脚から銃口が現れ、弾が発射された。俺はそれを天井に向かって緊急回避を行いかわす。

「やるじゃねーか!」

天井で止まった俺は「雪羅」をクロウモードで「雪盾」をシザーズモードで起動させ、女に向かって振るうがかわされる。

「何なんだあなた!?!」

「ああん?私か?私は悪の秘密結社「亡国機業」の一人、オータム様だ!これでいいかあ!?!」

オータムが機体を完全に身に纏うと、機体を細かく操作しながら俺の攻撃をかわすと同時に脚の銃口から実弾を放つ。

「くたばれ!」

左右から来る八つの銃口からの集中砲火を俺はまた天井に向かって跳び、天井に着いた瞬間にスラスターを使って前転気味に懐へ潜り

込む。それを行いながら「雪片式型」を呼び出し、斬りかかる。

「甘え！」

八本の装甲脚が「雪片式型」を完全に挟み込む。簡単には抜けないか・・・だが！

「甘いのはそつちだ！」

「なに！？」

俺は「雪盾」で装甲脚の一つを捕まえ、同時に展開が完了した「雪閃」をエネルギーを纏った状態で爪を一本切り裂き、更に身体を回転させ背後のウイングスラスターブレード「雪空」でもう一本斬る。

「くそがつっ！」

オータムは残り六本となった装甲脚をすぐに離して後退、と同時にマシンガンを構築し、弾丸を放つ。

「「雪盾！」」

俺は「雪盾」をシールドモードにして弾丸を防ぐ。あの程度の威力なら簡単に防げる！

「ちっ！厄介だな！」

オータムは装甲脚を全部格闘モードにして接近する。俺は「雪盾」のガトリングと「雪閃」で接近を防ぐ。

「くっ！ガキの分際で！」

オータムを放つ弾丸を回避しながら「雪盾」と「雪閃」で応戦する。楯無さんの特訓で得た経験が俺の助けになっていた。

「おおおおっ！」

「ちっ！さっさとくたばれよガキ！」

装甲脚を射撃モードに切り替えたオータムは手に持ったマシンガンと一緒に俺に向けて連射する。俺は「雪盾」を再びシールドモードに切り替え、弾丸を防ぎながら接近する。

「くらえっ！」

「ちいっ！」

「雪盾」と「雪閃」で牽制しながら「雪片式型」と「雪羅」を交互に振るう。がオータムは複雑でしなやかな機動でかわす。

どうやら奴の機体の背中から伸びた装甲脚はそれぞれ独立したP I Cを展開しているため、あれほどの機動を行える様だ。

けどこいつの実力は「黒騎士」に比べれば遥かに劣る。機体も起動性こそ高いが後は大したことは無い。・・・あいつと比べる方がどうかしてるな。

けど、まだ完璧に奴を捉えることが出来ない。こいつの動きを予測して「瞬時加速」を行い、「雪盾」で動きを止め、一気に決めるしかないな。それまでは回避や防御に集中する。

「（くそっ！こいつ思ってたよりやるじゃねえか！なら！）そうそう、良いこと教えてやるぜ。第二回モンド・グロツソでお前を拉致したのはうちの組織だ！感動のご対面だなあ、ハハハハ！」

「！！」

こいつらが・・・！こいつらが千冬姉の邪魔をしたのか・・・！

「だったら、あの時の借りを返してやらあ！！！」

「フン、ちょっとはやるかと思ったが所詮はガキか。真つ正直から突っ込んできやがって・・・よお！」

指先であやとりのようなものいじり、それを俺目掛けて投げつけ、俺の目の前でぱんつと弾け巨大な網となった。どうやらエネルギー体できてるようなので「雪羅」で切り裂こうと考えたが、その前に糸は全身に巻きついてしまった。これじゃあ動けない！

「フウ、少し手こずったぜ。けどクモの糸を甘く見るからそうなるだけ？」

くっ・・・！あんな挑発にのるなんて！もがく俺を見下ろすオータム、その手には見たことがない四本脚の装置があった。なんだあれは・・・？

「んじゃあ、お楽しみタイムと行くこうか。お別れの挨拶はすんだか？ギャハハ！」

「な、なんのだよ！？」

謎の装置が俺に取り付けられ、俺の身体を固定した。

「決まってるだろうが、てめーのISとだよ！」

「なっーーーーがああああっ！！」

俺の全身に電流に似たエネルギーが流され、激痛が襲いかかる。

「さて、終わりだな」

電流が収まると謎の装置のロックが外れ、糸からも解放された。するとオータムの顔が驚愕する。

「！？な、なんで何とも無いんだよ！？」

？どういう意味だ？いや今はそれよりこいつを倒す方が先だ！

「くらえ！」

俺は力を振り絞って殴りかかる。隙だらけだったオータムの腹に命中し、吹き飛ぶ。

「ぐっ……！て、てめえ！なんで「剥離剤」が効かないんだよ！？」

「剥離剤」？名前からして多分ISを剥がすためのもの……つまり機体を強制解除するやつか？けど今はそんなことどうでもいい！

「知るか、そんなこと！」

今も奴は「剥離剤」とやらが効かなかつた事に驚き、隙だらけだ。これで決める！

「零落白夜」発動！！」

「っ！しまった！！」

「雪片弐型」「雪羅」の二つから「零落白夜」を発動させ、「雪片弐型」と「雪羅」を大きく振りかぶる。

「喰らええええええ！！」

「ぐあああああ！！」

六本の装甲脚を集中させ、俺の斬撃を止めようとしたオータムだったが、二本の「零落白夜」の刃は止まらず、装甲脚を全て切り裂いた。

「ば、馬鹿な……」

装甲脚を破壊されたオータムの動きがスローモーションになったように遅く……いや、違うな。あいつが遅いんじゃない、俺が速いのか。

「ぐあっ！！」

俺はそのまま「瞬時加速」で威力が増した蹴りをオータムに叩き込み、オータムは吹き飛んで壁に激突した。かなり威力があつたせい、その衝撃で壁の一部が崩れて、向こう側が見えた。まずい！

「逃がすか！」

「くそっ……！こんなガキ一人に……！」

ブシュツ！という音がし、オータムのISが本体から離れた。

「な、何！？」

「一夏くん！」

光を放ちはじめた装甲は数秒後、大爆発を起こした。

「……あ、あれ？何ともない？」

「大丈夫？一夏くん」

「……楯無さん？」

どうやら俺は巻き込まれる寸前の所で楯無さんに助けられた様だ。

「いつの間に……って、その機体は？」

今楯無さんの身体には今まで見たことのないタイプの機体が展開されていた。

「これは私の機体「ミスティアス・レイディ」特殊な水を操る事ができるの。綺麗でしょ？」

「ええ……」

周りを見ると水のヴェールが俺と楯無さんを包んでいた。おそらくこれで俺を守ってくれたのだろう。あの距離で自爆に巻き込まれたらいくら絶対防御があっても無傷ではすまなかっただろう。

「！そう言えばあの女は！？」

「逃げられたわ。ISのコアも、多分自爆寸前に取り出しているわね。それにしても無茶するわね。下手すれば自分だって危なかったでしょうに。……所で一夏くん」

「はい？」

「君の機体……一度「剥離剤」を喰らった事があるの？」

「い、いえ……あれが初めてでしたけど」

「おかしいわね……「剥離剤」は一度受けた機体には効果は無いけど、初めての機体なら効く筈なのに……」

「そっぴゃ、あいつも驚いていたな。でもなんで効かなかったんだろ？」

「まあ、後で念のため、君の機体を調べて見ましょう。異常が無いとは限らないしね」

「あ、はい。じゃあ、そろそろここを――」

「離れさせる訳にはいかねんだよなあ。悪いんだけどよお」

「「！？」」



ドゴオオッ!!と言つ轟音と共に壁の一部が崩れる。まさか!?

「来たわね・・・!!」

「黒騎士」!!」

「残念だけど外れだ。お二人さん」

「えっ!?!」

「なっ!?!」

崩れた壁の向こうから現れたのは・・・「黒騎士」ではなく、見たことのない機体だった。

「な、何だお前は!?!」

「黒騎士」と同じ「全身装甲」タイプ・・・?」

「ふわあゝ。さて、始めるかあ」

あれ・・・?この人の声、何処かで聞いた事があるような・・・?

「くつくつくつ、何処かで聞いた事がある声だなんて思ってたんだろ?・・・もう忘れたのかい「執事さん」?」

「!!まさか・・・蟹子さん!?!」

「あの時の・・・!やはり捕まえた方が良かったわね・・・!」

ど、どういう事なんだ！？なんで蟹子さんが機体に乗ってるんだ！？しかも、見たことない機体に！？」

「あゝ執事さん。悪いけどあたし「蟹子」って名前じゃ無いんだよねえ。あれ、適当に言っただけ」

「えっ！？」

「やっぱりね。変な名前だと思ったわ」

じ、じゃあ、俺は適当に言った名前に騙されていたのか？・・・なんか情けない。

「あゝ悪いけどもう一つ嘘ついてるんだねえ。「あたし」じゃなくて・・・「俺」なんだよ執事さん」

「！？」

「ま、まさか・・・男！？」

「だいせいかい。俺は男だ。声は女っぽいけどな」

訳が分からない・・・。蟹子さんが見たことない機体に乗ってると思えば、その名前は適当に言った名前だったし、その上実は俺と同じ男・・・？

「で、でも今世界にISを使える男は俺だけの筈・・・！？」

「そうよ！一夏くん以外に「例外」がいるなんて聞いた事が無いわ

「！」

「だろうなあ……。ま、んなこと俺にはどうでもいいんだけど。そろそろ本題に入っつていいかい？」

本題……。？何の事だ？

「そう言えば、まだ君が何故ここに来た目的がわかってないわね」

「へえ、少しは頭が回るんだな更識楯無。けど、あんたに興味は無い。俺は目的は……。あんただよ。執事さん」

「お、俺……。？」

この人の目的は俺……。？どういう事なんだ？

「！まさか「黒騎士」と同じように一夏くんの命を……。！？」

「なにっ！？」

この人もあいつと同じなのか！？よく考えてみればこの人は「黒騎士」と同じ「全身装甲」タイプの機体を持つてる。なら、あいつの仲間という可能性だってある！

「余計な事言わないでくんねえか？俺の目的は執事さんを連れて行く事なんだからさ」

「えっ……。？」

連れて行く？なんで？と言うか、この人は「黒騎士」の仲間じゃな

いのか？

「君「黒騎士」の仲間じゃないの？」

「あつたりめえだ。さて、執事さん。おとなしく付いてきてくれると嬉しいんだけどなあ」

「……」

少なくともこの人「黒騎士」とは関係無い様だ。けど、なんで俺を連れて行くこうとしているんだ？

「返事はどつちだい執事さん？」

「……理由を言ってくれば内容次第では構いません」

「ま、それが妥当だろうな」

この人に今俺を殺すつもりは無いと言っても、理由が分からない以上は簡単に付いて行く訳には行かない。もしかしたら途中で殺される可能性だってある。

「残念だけど……彼を連れて行かせる気は無いわ。君が何者なのか分からない以上ね。寧ろ君にはおとなしくしてもらっわ。色々聞きたい事があるしね」

「はぁ……しゃあねえか。だつたら力ずくだな」

「……それは困るな」

「「「!?!?!」」」

この声と口調……間違いない!今度こそあいつだ!

「「黒騎士」……!?!」

「……ふん」

もう片方の崩れた壁から「黒騎士」が現れた。

「へえ……あなたが「黒騎士」か」

「……ああ」

「……これはヤバイわね」

楯無さんの言う通りこの状況はヤバイ……!片方は「黒騎士」もう片方は謎の機体の持ち主。「黒騎士」は勿論、もう一人の方の實力も機体の性能もわかっていない。迂闊に動けない……!!

「けっ、なんであなたが執事さんを殺そうとしてるか、なんてのは俺にはどうでもいい。俺の邪魔をするなら……消すだけだ」

「……同意見だな。こつちもそう考えていた所だ。織斑一夏を殺すのを邪魔するなら……お前から殺す。それだけだ」

「……ゾクッ!!」

(っ!な、なんて殺気だよ……!!)

二人から凄まじい量の殺気が放たれている。一般人がこの場に来たらずくに失神するだろう。かと言う俺は身体中が震えだし、まったく止まらなかつた。楯無さんの方を見ると・・・俺のように震えてはいなかつたが、その表情は真剣そのもので、冷や汗をかいていた。

(駄目だ・・・！今の俺じゃあ、この二人には絶対勝てない・・・！！)

殺気を感じただけで力の差がはつきりわかってしまう。絶望的なまでの実力の差が。俺が楯無さんや千冬姉クラスの実力を持っていたとしても勝てる気がしなかつた。

「・・・ふん、先にあんたを消してやるよ。俺の目的の邪魔になるようだからなあ」

「・・・こつちの台詞だ。お前はここで殺す」

「へっ！上等だ！！ついてきな！ここじゃあやりづらいだろ！！」

「・・・いいだろう！！」

朱い「全身装甲」を纏った人と「黒騎士」が同時に更衣室を出る。

二人はわずか数秒足らずで第三アリーナの遙か上空に到達していた。

「な、なんてスピードなの！？「黒騎士」はともかく、もう片方も「紅椿」のスピードを遙かに超えているじゃない！？」

「両方化け物だ・・・！！」

二人共肉眼ではもう見ることができない距離にいるため、ハイパー

センサーで見っていた。二人は今にも激突しそうな状態だった。

「くっ！一夏くん！早く私達もー！ー」

「無理です・・・！！」

「・・・えっ？」

「あの二人なら俺達が行った所ですぐに殺される・・・！！少なくともどちらか一人になった状態の上で数人で挑まないと勝てる可能性すらありません・・・！！」

「い、一夏くん・・・？」

はつきり言っただけ俺はあの二人が怖い・・・！！さっき感じた殺気を思い出し、また全身が震え出す。

「落ち着きなさい一夏くん！！」

「っ！？」

楯無さんはいきなり俺を抱きしめる。そのおかげか徐々に全身の震えが収まってきた。

「・・・わかってるわ一夏くん。今の私達じゃあ一対一では勝てない敵だって、私も冷静になるから君も落ち着きなさい」

「は、はい」

「一夏くん。あの二人が怖くて仕方ないんでしょう？・・・悔しい

けど私も同じよ。怖いからこそ、それを誤魔化すために戦おうとした。まったく情けないわね」

・・・楯無さんも怖かったんだ。あの楯無さんが・・・。

「けど、一夏くん。片方はともかく「黒騎士」は君が絶対に倒さなければいけない存在よ。君が仲間を守るためにもね。だから戦いなさい。大切な人を守るために」

・・・そうだ。俺は決めたんだ。仲間を大切な人を守るって・・・、だから戦う！！

「ありがとうございます楯無さん」

「うん、良い目になったわね。一夏くん」

「楯無さんのおかげですよ」

「あら、どうも。さて、すぐに織斑先生に連絡するわ。少なくとも私達だけじゃ敵う相手じゃないしね。後はどちらか一人になった瞬間に攻撃を仕掛けるわよ」

「はい」

楯無さんが俺から離れ、俺と楯無さんはあの二人に視線を戻す。今から始まるであろうつかつて無い戦いを見るために。



?????Side

「んじゃ、そろそろ始めようか「黒騎士」さん？」

「……ああ」

俺とこいつは上空二千米メートル以上の場所でお互いブレードを展開し、構えていた。

「……始める前にいくつか聞きたい事がある」

「なんだよ？手身近に言ってくれよ」

「……お前も俺と「同じ」なのか？」

「へえ、その言い方……やっぱりあんたもか。顔は見えないから誰か分からないけどまあいいや。あんたの言う通り俺とあんたは「同じ」だよ」

やはりこいつは俺と「同じ」存在か。一瞬でも気は抜けんな、今までの奴等とは格が違う。

「……次だ。何故織斑一夏を連れて行くこととする？」

「必要だから。これでいいか？」

……「必要」か。何となくだが、読めてきたな。こいつの目的が。

「……最後だ。名は何と言う？」

「あ、そう言えば名乗ってないな。俺は「キャンサー」だ。この機体の名前でもあるけどな」

「キャンサー」・・・蟹座か。機体の名でもあるのか。

「・・・充分だ。では、始めようか。「規格外」同士の戦いをな」

「くくくつ、楽しませてくれよ」「黒騎士」!!」

「・・・ふん、お前こそ期待外れ、なんて事無いようにしてくれよ」  
「？」

「ああ・・・勿論だぜえ!!」

「・・・行くぞ!!」

「ぶつつぶしてやるよ」「黒騎士」!!」

俺とキャンサーは同時に「瞬時加速」を行い、お互いのブレードを振るう。互いのブレードがぶつかり合う。

「・・・成る程やるな・・・!!」

「てめえも・・・な!!」

互いにすぐに離れ距離を取る。・・・楽しみだ、一対一でまともな戦いになりそうだからな。

俺とキャンサーの激戦の幕が切って落とされた。

Inside

### 第三十九話（後書き）

意見やアドバイス、感想などどんどん送ってください！後、間違いや誤字もあればお願いします。

## 第四十話（前書き）

黒騎士対キャンサーです。楽しんでいただければ嬉しいです。

## 第四十話

千冬Side

「織斑先生、謎の機体と「黒騎士」の戦闘が始まりました」

「そうか、他の教師達や篠ノ之達の準備はどうだ？」

「いつでも行けます。……ですが何故あの二人の戦闘が終わってからののですか？」

「「黒騎士」はともかく、もう一人の実力はまったく不明だ。「黒騎士」の実力を知りながらと一対一でやり合おうとしている以上はかなりの実力があると考えるべきだ。それに機体の性能も未知数だ。ここは慎重にした方がいい」

もし仮に奴が「黒騎士」と互角の実力を持っているとすればかなり危険だ。それと……。

「山田先生、ボーデヴィツヒとオルコットのの方はどうだ？」

さつき学園に侵入した「亡国機業」の一人オータムを捕まえるためあの二人を行かせたが……上手くいっただろうか？

「わかりました、……ボーデヴィツヒさん。オルコットさん。そちらの状況を詳しく……えっ!? ほ、本当ですか!？」

「どうした山田先生？」

「そ、それが・・・また未確認の機体・・・しかも、二機の「全身装甲」の機体が戦闘しているとの報告が！」

「なんだと!?!」

また別の機体が現れたと言っのか!?!

「映像を出します!」

山田先生が映像を切り替える。そこには今黄色の機体と灰色の機体が戦闘を行っていた。

「なんだこの機体は・・・!?!」

「両方共「黒騎士」や謎の機体同様、データがありません! 正体不明の機体です!」

これで合計四機もの謎の機体が現れた事になる。もはや異常自体と言っレベルではない。

「待機している教師の半分をそっちに回せ! ポーデヴィツヒやオルコットには援護が来るまで手を出すと伝える!」

「はい!」

「黒騎士」の件だけでも厄介だと言っのに更に二機も正体不明の機体が現れた。しかも、この二人の実力は見る限り全盛期の私以上だ。こうなると「黒騎士」と戦っている奴もこの二人と同レベルの実力を持つている可能性が高い。

「（くっ！こうなれば私も出るしかない！）山田先生！訓練機を―  
機用意してくれ！私も出る！」

「すぐに用意します！」

・・・私が出た所で状況が良くなるとは思えない。だが、ここでじ  
っとしている等できない。私はすぐに部屋を飛び出し、戦いの準備  
を済ました。

??? Side

「どうしたあ！かわしてばっかかよ「黒騎士」!!」

「・・・くっ!!」

今俺はキャンサーの攻撃をかわすのに精一杯だった。キャンサーは  
十二のビットと両手にあるガトリングを駆使し、嵐のような攻撃を  
続けていた。こちらも「シヴァ」のガトリングと「テュール」で反  
撃するが・・・。

「はっ！そんな攻撃が通るかよ！」

キャンサーのビットから強力なエネルギーシールドを展開され、防  
がれてしまう。奴のビットは防御と攻撃の両方が可能なものだ。し  
かもシールドは生半可な攻撃では破ることが出来ない。おまけに威  
力も相当なものだった。



(十二のビットを全て正確に操りながら両手のガトリングで俺を正確に狙っている。こいつ・・・射撃能力なら俺以上か！)

奴のビットは攻撃する時ハサミを広げてから中の銃口でビームや荷電粒子砲を放つ。その時は攻撃するためシールドを展開していなかった。何とかしてそこを突きたいのだが・・・、広げている時間は一秒にも満たないため無理があった。そのため破壊するにはシールドを上回る攻撃力を持つ武器で破壊するしかない。

(今の「ラグナロク」で破壊できる武器は・・・「シヴァ」「グングニル」ぐらいか、後は・・・)

新しく使える武装だが・・・あれは隙が出やすい奴だ。こいつ相手にはそうそう使えない。それに織斑一夏用にとっておきたい。

(となると「グングニル」がいいな。「シヴァ」で出来なくは無いが・・・)

「グングニル」と違い、「シヴァ」には追尾能力は無いため当てづらい。しかし、まずはあのビットを何とかしないと攻撃が通らないなら！

「来い「グングニル」！「アームカノンモード」！」

「へっ！いくら武器を変えても無駄だぜ！」

「どっかな？」

「何っ！？」

「シヴァ」と「グングニル」のエネルギーをチャージし、まず「グングニル」を投げる。狙いは奴ではなくまずビットだ。

「はっ！武器を投げるなんてー！んなっ！？」

奴目掛けて投げた「グングニル」は途中で方向を変え、ビットに向かう。すぐにキャンサーはビットのシールドを展開するが、「グングニル」はそれを貫通し、ビットを破壊した。

「ちっ！」

「よそ見している暇は無いぞ！！」

俺はキャンサーが「グングニル」に気を取られている隙にフルチャージした「シヴァ」でもう一つビットを破壊する。ようやく二つか。

「くそっ！ならこれでどうだ！」

キャンサーはまたビットで攻撃する。それをかわし、反撃しようとしたが・・・今度は拡散式のビームや荷電粒子砲を放ってきた。しかも、一つのビットにつき四つの攻撃、つまり全部で四十の閃光が襲いかかって来た。これはヤバイ！

「くっ！」

俺はそれを機体を細かく動かしてかわすがキャンサーはビットを俺の周囲に配置し、一斉に拡散攻撃を放つ。俺は「フェンリル」や「グングニル」で何本かは弾くが全部は無理で、無数の閃光が俺に直撃する。

「よし！決まったあ！！」

「調子に乗るな！！」

「！？効いていねえ！？」

俺は直撃する前に「ラグナロク」の「展開装甲」を使って攻撃を防いだ。ビットが拡散式だったため、一発の威力が弱くなっていた。そのおかげでシールドエネルギーは減っていない。不意を突かれたキャンサーに「瞬時加速」で接近し、「レーヴァテイン」を展開、「グングニル」と合わせて攻撃する。

「やべっ！」

キャンサーもすぐに両手に近接ブレードを展開し、応戦する。「レーヴァテイン」が奴の剣に触れる瞬間、奴の剣がパカッと二つに割れ、中からビームブレードが現れる。

「仕込みブレードか！」

「正解！てめえの武装の能力もちゃんと調べてるんだよ！」

互いのブレードが何回かぶつかり合った後、すぐに後退する。直後にさっきまで俺がいた場所にビットによる攻撃の嵐が降り注いだ。

「ちいっ！当たると思ったのによ！」

「簡単にやられるつもりは無い！」

距離を取った俺はキャンサーのビットとガトリングによる攻撃を回避しつつ、「レーヴァテイン」を引っ込め、「シヴァ」を再展開すると同時に「グングニル」と「シヴァ」のチャージを開始する。

「またそれかよ！」

「何とでも言え！」

俺は再びチャージした「グングニル」をビット目掛けて投げ、「シヴァ」でキャンサーを狙った。

「防御も回避も無理なら破壊してやるよ！」

キャンサーはビットで「グングニル」を狙い攻撃し何発かが「グングニル」に当たる。ビームコーティングしてあるため簡単に壊れる事はない。しかし……。

「あれ？どっか行っちゃった。なんでだ？」

「命中」の能力は「グングニル」が目標に当たる前に他の何か当たると効果を失う。狙ったビットに当たる前に奴の攻撃が当たってしまったため、「グングニル」はそのまま一直線に飛んでいつてしまった。とりあえず俺は「グングニル」を仕舞い、再び展開する。気付かれてなければ良いんだが……。

「ん〜。あの様子だと……標的に当たる前に攻撃に当たったからかな？」

「……」

「だんまり、って事は正解か。威力が高いとこだけ注意した方がいいな」

「・・・馬鹿ではない様だ」

「うつせえ！」

・・・気づかれた以上「グングニル」は簡単には通用しないか。となると・・・後はどうにかして接近するしかないな。

(エネルギーは少し消費するが「展開装甲」で攻撃を防ぎながら接近する。これしかないか)

俺は脚部と胸部の「展開装甲」を同時に発動させ、突撃する。一気に決める！

「「展開装甲」・・・成る程、さっきそれで攻撃を防いだのか」

ボウン、ボウンと変な音がした。何だ？この音は？まるでシャボン玉を作った様な・・・。

『警告！前方に複数の高密度エネルギー体を確認！』

いきなりハイパーセンサーが警告を鳴らし、とりあえず俺は止まる。周りを見るが何もない。・・・どういう事だ？

「じゃあな「黒騎士」」

俺が止まっている間に距離を取ったキャンサーがピンツと指を鳴らす。嫌な予感がした俺はすぐに離れようとしたが・・・遅かった。

ドゴオオオオオン！！

俺はいきなり現れた大爆発に飲み込まれた。

一夏Side

俺は今信じがたい光景を目の当たりにした。あの「黒騎士」が突如発生した大爆発に飲み込まれたのだ。つまり……。

「「黒騎士」が……負けた？」

「なんて威力……！まるで「ミスティアス・レイディ」の奥の手「ミストルテインの槍」のようだよ……！」

楯無さんが何か言っていたが俺には聞こえなかった。今まで俺達を苦しめてきたあの「黒騎士」が負けた……。今俺の頭にはその事しか考えられなかった。

(……なんでだ？なんで俺「嬉しい」と思えないんだ？)

今まで俺の命を狙っていた「黒騎士」が負けた。つまり、もうこれ以上あいつに狙われる事は無いのだ。なのに……何故喜べないんだろう？

「……！楯無さん！あれ！」

「えっ?・・・!」

煙が晴れると・・・そこには「黒騎士」が立っていた。所々装甲は壊れているが無事の様だ。

(あれ?俺今なんでほっとしたんだろ?)

まるで「黒騎士」に負けて欲しくないみたいだ。・・・どうしてだ?

「まだ終わってないわね・・・。「黒騎士」が二度も同じ手を喰らうとは思えないけど・・・あの損傷なら負けるかもしれないわね」

「・・・けど、多分「黒騎士」が勝つと思います」

楯無さんが珍しそうに俺の顔を見る。・・・まあ、そうだよな。まるで俺の命を狙っている奴を俺が応援してようなもんだし・・・。

「もしかして一夏くん・・・。「黒騎士」に負けて欲しくないないの?」

楯無さんを相手に誤魔化しても無駄だよな・・・。正直に言おう。

「・・・はい。何故かは分からないんですけど・・・俺は「黒騎士」に勝って欲しいと願っているみたいなんです」

「多分・・・「黒騎士」が自分の手で君を殺そうとしているみたいに一夏くんも自分の手で「黒騎士」を倒したいって思ってるんじゃないかしら」

「そう・・・なんででしょうか？」

俺が・・・自分の手で「黒騎士」を倒したい？強いからこそ倒したい・・・その強さを越えたいと願っているって事かな・・・？

「！一夏くん。どうやら再開するみたいよ」

俺はその言葉に反応し、「黒騎士」を見つめる。・・・俺が言うのも変だけど・・・勝て「黒騎士」。

???Slide

「・・・あれ喰らって、良く生きてるな。あんた」

「・・・機体に助けられたからな」

爆発が危険な点は爆風とその時発生する高熱だ。「ラグナロク」は装甲に特殊なナノマシンを使用しており、高い耐熱性を持っている。そのおかげで受けたダメージはほとんど爆風によるものだ。・・・まあ、それでも機体は損傷したが寧ろこの程度で済んだと考えるべきだな。

「続けるぞ、キャンサー」

「へっ！今度こそあの世に送ってやるよ！」



さっきの変な音はおそらく奴が何かの武器を使った音……。そして、その武器は目に見えない特徴を持っていて、奴の合図で爆発する……。か。今度はそれを利用してもらおう。

「一気に終わらせてやるよ！」

「……そう上手くいくかな？」

またビットとガトリングで攻撃するキャンサー。俺はそれをかわそうとするが……。さっきの爆発でいくつかのスラスタが壊れたように、出力が落ちている。おまけに「テュール」も損傷している。「グングニル」と「レーヴァテイン」は無事だが「フェンリル」は左の方が壊れており、「展開装甲」もほぼ使えない……。キツイな。だが、負ける訳にはいかん！

ビームと荷電粒子砲の雨を回避しながら再び「シヴァ」を展開する。

「「ツインカノンモード」！」

「シヴァ」を変形させて、両肩に装着する。「アームカノンモード」程ではないが、ビットを壊せるぐらいの威力はあるモードだ。

「……発射！」

両肩の「シヴァ」を連射する。が、簡単にかわされる。まあ、奴程の実力者相手にこんな大雑把な攻撃が当たる訳無いか。

「はっ、どうした「黒騎士」？もう打つ手無しか？んじゃ、終わらせてもらっぜー！」

今度はキャンサーが突撃してくる。勿論その間もビットやガトリングによる攻撃を行っていた。奴から来るなら都合がいい。だが……。

(こいつBCFを使っていないが……取り除いているのか?)

キャンサーはこの戦いが始まってから一度もBCFを使っていない。使えばすぐに周囲の空間が変化するためわかるのだが……。やはりリスクがあるため使っていないのか?それとも使わずとも勝てると考えているのか?だとすれば勝機はある。

(狙うは奴がさっきの武器を使う瞬間だ。そしてあの武器で決める!)

「喰らいなあ!!」

「……っ!!」

ギイン!ギイン!と武器がぶつかり合う音が何度も鳴り響く。そして……。ハイパーセンサーがさっきと同じ警告を告げていた。さっきの武器の音は武器のぶつかり合う音を出す事で隠していたのか。

「くっくっくっ、結局俺には一撃も当てられなかったなあ「黒騎士」?」

「……そうだな」

「けどよぉ、俺相手にここまでやるなんて大したもんだぜ。……なあ、俺達の仲間にならないか?」

「・・・なに？」

「だからあく仲間にならないか、って聞いてんだよ。あんたをこのまま消すのは惜しいんだよ」

「・・・無理だな」

俺の目的は織斑一夏を殺す事、こいつの・・・待てよ？こいつさっき・・・。

「はあ・・・んじゃしゃー」おい「なんだ？」

「・・・お前さっき「俺達」の言ったよな？・・・仲間がいるのか？」

「ん？ああ、もう一人いるぜ。後しばらくすれば何人が来るけど二人か・・・、どうやらキャンサーはいつでも俺を殺れると油断しているため、ペラペラ喋っている様だ。・・・よし。」

「・・・なあ、お前の機体にはBCFシステムは無いのか？」

「あるぞ？出来れば使いたくないけどな。たった一時間しか使えないし」

「一時間・・・やはり改良型があったのか。にしても制限時間を三倍に増やすとはな・・・。」

「・・・どうやって制限時間を増やしたんだ？」

「負担を弱めたんだよ。ま、そのせいで処理能力は十倍程度しか上がらないけどな」

「成る程・・・しかし負担を弱めても脳の痛みは消せない筈だ。その欠点はどうした？」

「悪いけどそれは言えねえ。て言うか、さっきから色々聞いてるけど・・・まさか仲間に伝えてんのか？」

・・・流石に気づくか。だが、これだけ聞いたら充分だな。

「・・・さあな」

「ふん、まあいいや。最後にもう一度だけ聞くぜ「黒騎士」。俺達の仲間にならないか？言っておくけど、さっきよりも更に強力な爆弾をあなたの周囲に設置したからな」

・・・それは脅迫だろう。ま、俺の返事は決まっているがな。

「・・・断る」

「・・・そうかい。んじゃ、さよならだ」

キヤンサーがまた指をピンツと合図を送る。・・・今だ！！

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオ！！

「あゝあ、これで終わりかあ」

「・・・ああ、お前の負けでな!!」

「なっ!?!」

キャンサーの背後から現れた俺は新兵器「ミヨルニル」を展開、右手に残った「フェンリル」で強化し、キャンサーに直撃させる。

「ぐああああああ!!」

「ミヨルニル」を喰らい、吹き飛ぶキャンサー。俺は更に残った脚部の「展開装甲」を最大出力を使用して追撃する。そして、体勢が崩れたキャンサーに追い付き、「ミヨルニル」を大きく振りかぶる。

「終わりだキャンサー!!」

「そ、そんな・・・俺が・・・!?!」

「喰らえ!!」

俺は全ての力を右手に込め、全力で「ミヨルニル」を振り下した。

「う、うわああああ!!」

もう一度「ミヨルニル」を喰らったキャンサーは第三アリーナに向かって墜落し、遮断シールドに衝突した。そして、そのまま観客席に転げ落ちる。すぐに俺は追いかけて、キャンサーを見下ろした。

「あ、あの状態からどうやって避けたんだよ・・・!?!」

「・・・「テュール」の能力は知らないのか?」

「た、確か「テュール」は「移動」・・・ああっ!!」

「・・・そうだ。お前が合図を送った瞬間に「移動」を発動させ、お前の背後に回った。そして、「ミヨルニル」を叩き込んだというわけだ。最早機体はボロボロ、シールドエネルギーもほぼ残っていない  
まい」

「・・・ああ、にしても「ミヨルニル」・・・？そっういや、「ゲン  
グニル」つてのも知らなかったぞ・・・？」

良く調べているなこいつ。まあ、知らなくて当然なんだが。

「・・・この二つは最近使った武器、知らなくて当然だ」

「・・・納得、通りで情報が無い筈だぜ。て言うか、俺が油断して  
なきゃ負けてなかったんだよな・・・でも負けは負けだ。さっさと  
殺せよ」

「・・・潔いな。だが、殺すつもりは無い」

「・・・何でだよ？言っとくけど、あなたの仲間になるつもりは無い  
いぜ」

「・・・そんなことわかっている。正確に言うと殺すつもりが無い  
というよりも・・・殺す事が出来ないというのが正解でな」

「・・・は？あんた戦う前に俺に向かってーって、こっういう事  
か」

「……ああ」

俺が上空を見ると……織斑一夏達と教師達が待機していた。

「……今回は見逃してやる。さっさとここから失せろ」

「……ちえ、しゃあないか。礼は言わねえぞ？」

「……構わん」

ゆっくりとキャンサーが立ち上がる。直後に遥か上空から教師達に向かつて大量の閃光が襲い掛かった。そして、教師達だけを戦闘不能にする。

「……これでよし、借りは返したからな？」

「……余計な事を」

だが、これで織斑一夏達との戦闘に集中できるな。流石に今の状態であれだけの数を相手にするのは疲れる。

「次は負けねえからな「黒騎士」」

「……楽しみにしておこう」

「じゃあな」

その後キャンサーはビットを上手く駆使して、すぐに学園から逃走した。

「・・・さて、第二回戦を始めるぞ織斑一夏」

「いつでもいいぜ」

俺がアリーナ上空に到達すると、すぐに俺の周りを包囲する織斑一夏達。ちなみに残ったメンバーは織斑一夏以外に織斑千冬、更識楯無、篠ノ之箒、凰鈴音、シャルロット・デュノアだ。残りは向こうだろうな。

「今度こそ貴様を捕まえさせてもらうぞ」

「いくら「黒騎士」でも、さっきの戦いでかなり消耗しているでしょ？」

「その状態で私達に敵うと思っているのか？」

「さっさと降参した方が良くない？」

「卑怯かもしれないけど。でも遠慮はしないよ」

「・・・く、くくっ、はははっ!?!」

「「「「「「!?!?!?!?!」」」」」」

やれやれ・・・笑わせてくれる。こっちが弱っているから勝てるんでも思っているのか？

「・・・調子に乗るなよ。この状態でもお前らを殺す事ぐらいできる。お前らが一斉にかかってこようとも問題ない。お前ら全員がかかって来てもキャンサー一人に劣る程度の実力と機体しかないから



な」

「な、なんですって!?!」

「侮辱するつもりか貴様!」

「徹底的に叩きのめしてあげるよ!」

俺が事実を言うと鳳鈴音、篠ノ之箒、シャルロット・デュノアの三人はすぐにでも俺を攻撃しようと武器を構えていた。

「……キャンサー?」

「多分さっきの奴の事でしょうね」

「ふむ……、キャンサーか」

残りの奴等は冷静だな。実力差がわかっているからだろう。例えば、この状態でも油断していないのは大したものだ。……織斑千冬だけ何か考えているようだ。……さて。

「……来い「ミヨルニル」」

さっき仕舞った「ミヨルニル」を再び展開する。それを見た織斑千夏達は……。

「……ハンマー?」

「正確に言うと……ウォーハンマーってやつね」

「そんなので私達とやり合うわけ？」

「なめられたものだな」

「そんな隙だらけの武器・・・役にたつと思う？」

「全員戦闘に集中しろ！！今までの奴の戦いを忘れたか！！」

奴等が色々言う中、織斑千冬だけが気を引き締めていた。・・・流石だな。

「はい！！！！」

「はい、はい！！！！」

織斑千冬の渴で全員が気を引き締める。・・・油断してくれた方が楽なんだが・・・まあいい。

「・・・気を引き締めるのは良いことだ。だが・・・無駄だ」

「どういう事だ！？」

俺はふつ、と笑ってから「テュール」の「移動」で織斑一夏の懐に潜り込む。

「・・・」一撃「で終わるからだ」

「なっ！？」

「「「「「夏くん！？」「「「「「」

俺はそのまま「ニヨルニル」を織斑一夏に向けて振るった。

???Side end

## 第四十話（後書き）

意見やアドバイス、感想などどんどん送ってください！後、間違いや誤字もあればお願いします。

## 第四十一話（前書き）

少し時間が遡って、ラウラやセシリア、サジタリウス達の話になってます。次は一夏達対「黒騎士」の戦いの続きです。

## 第四十一話

「黒騎士」とキャンサーが戦闘を始める少し前、IS学園から逃げ出している最中のオータムは今回の事で怒り狂っていた。

（くそっ！何が簡単な仕事だ！ふざけやがって！あのガキ！）

今回の潜入は本当なら織斑一夏が寮の部屋にいる時に襲うという計画だったのだが、更識楯無が突然同居したため、変更したのだ。

（大体あのガキとあの二人は組織に入った時から気に入らなかったんだ・・・！）

いつも他人を見下した様な目をした少女エムと自分を敵どころか障害とすら見なかった二人、タウラスとピスケスを思い出す。ちなみに今回の潜入計画と「リムーバー」を用意したのはエムだ。

（大体なんで効かなかったんだよ！？「白式」に耐性があるなんて話聞いてねえぞ！）

「リムーバー」は一度使うとISに耐性ができてしまうため、二度目はない。しかし、「白式」は過去に「リムーバー」を受けたという話は聞いてなかった。考えられるのはエムが知ってて報告しなかったか、エムさえも知らなかったかのどちらかである。だが、オータムはエムが知ってて隠していたのだと考える。

（くそっ、あのガキ絶対に殺す！よくもこの私の顔に泥を塗ってくれたな！）

それから少ししてようやくIS学園から離れ、公園に着いたオータムは喉を潤そうと左右を見つめると水飲み場を見つけ、そこで少し間水を飲み続けたオータム。すると突然水が止まった。

(なんだ？壊れてんのか・・・？)

そう思い、蛇口を見ると・・・縦に伸びる水が途中で遮られていた。

「なっ!?!」

オータムはすぐにこれがAICだと気づき、離れるが着地しようとした足をAICに固定され、背中から倒れてしまう。

「クソッ！ドイツのISだな!?!」

「その通りだ、「亡国機業」。すでに狙撃手がお前の眉間に狙いを定めている。抵抗は無駄だ」

林から隠れていたラウラが姿を現す。

「くっ・・・!!」

「洗いざらい吐いてもらおう。貴様らの組織について全てをな」

軍人でもあるラウラは「亡国機業」についての情報を少しだが、持っていた。そして、今回の騒動で「亡国機業」が相当大きな組織だと理解していた。

「お前のISはアメリカの第二世代型だな。どこで手に入れた。言え」

「言うわけねーだろうが！」

ISのコアを作る技術はまったく公開されていない。となると後はどこかから奪ったものだということになる。そして、奪われた国も国防に関する重大な過失のため、公にすることはできない。ISを強奪することができる組織力は決して、小さくないということだ。

「よかるう。私は尋問の心得もある。長い付き合いになりそうだな」

ラウラがオータムを捕らえようとした瞬間、セシリアからのプライベート・チャンネルが開いた。

『離れてラウラさん！一機来ますわ！』

「何!？」

ラウラがセンサーを広げようとした次の瞬間、右肩をレーザーで撃ちぬかれた。

「ぐづつ!!--!」

急いでラウラは左目の眼帯を外し、「ヴォーダン・オージエ」を発動させる。が、続けて撃ち込んできたレーザーを避けるのが精一杯だった。

『ラウラさん!下がって!』

セシリアはすぐに攻撃を放ってきた機体に照準を向ける。



『あの機体は・・・まさか!?!』

接近してきた機体はセシリアが見たことのある機体BT二号機「サイレント・ゼフィルス」。シールド・ビットを試験的に搭載した機体でそのデータにはセシリアのデータも入っていた。

「何をしている!早く撃てセシリア!」

「くっ・・・!」

セシリアはすぐにレーザーライフルによる狙撃を行なうが、シールド・ビットに防がれる。それならビットで攻めようとビットを射出したが、敵の狙撃によって墜とされた。

(超高速機動下での精密射撃!?しかも、こんな連射速度で!?)

自分以上の技量に驚愕するセシリア。相手は通常の六つの射撃ビットを使ってセシリアを追い詰める。

それならとミサイル・ビットによる奇襲を行ったが、相手が放ったビームが弧を描いて曲がり、全てのミサイルを打ち落とした。

(これは・・・BT兵器の高稼働時に可能な偏光制御射撃!?現在の操縦者ではわたくしがBT適性の最高値のはず!それが、何故!?)

「何をしている!かわせ!」

「っ!?!?」

セシリアに攻撃が当たる直前にラウラがセシリアを突き飛ばし、かわりに受ける。ようやく我に返ったセシリアだが、すでにエムはオータムの側にいた。

「迎えに来たぞ、オータム」

「私を呼び捨てにするんじゃないやねえ！それにあいつはどうした!？」

「あいつなら待機させている。私一人で充分だからな」

エムはラウラに小型レーザー・ガトリングを浴びせ、オータムに近づけない様にしながら同時にピンク色に光るナイフでAICを切り裂いた。

「この程度か、ドイツの遺伝子強化素体」

「貴様！何故それを知っている!？」

「言う必要は――」

エムが続きを言おうとした瞬間、突如強力なビームが彼女を襲った。

「ぐあああああああ――!」

「――なっ!?!」

流石のエムも対処できず、まともに喰らい吹き飛んだ。

「な、なんだ……!?!」

「・・・目標確認、これより作戦を開始する」

「くくく!?」「くくく」

ビームが放たれた方向から黄色の「全身装甲」、機体を展開したサジタリウスが姿を現す。

「な、なんだ貴様!?!」

「何者ですの!?!」

「く、こいつ!?!」

「その機体は・・・!?!」

「・・・戦闘開始」

返事すること無くサジタリウスはいきなり「瞬時加速」を行い、両肩の巨大なクロスボウの様なものからビームブレードを展開、エムに襲いかかる。

「くっ!」

直ぐ様ビットを射出し、対抗するエム。サジタリウスはそれを難なく避け、両手の弓の様なライフルからビームの矢を放つ。シールド・ビットでそれを防ごうとしたエムだが、矢はそれを容易く貫通し、機体に直撃した。

「ああっ!?!」

「・・・弱い」

「き、貴様・・・!」

あの二人と同じ、自分を見下した様な視線を送るサジタリウス。エムは通常の攻撃が通用しないと判断すると今度は「偏光射撃」による攻撃を放つ。だが、サジタリウスは両肩と両足にあるクロスボウらしきものからビームシールドを展開し、機体を上手く動かして防ぐ。しかも、その間に両手のビームライフルで反撃までしていた。

「馬鹿な!? 初見で「偏光射撃」を防いだだと!?!」

「・・・そんなぬるい攻撃が当たると思っているのか雑魚」

「貴様あ!?!」

雑魚と呼ばれ、冷静さを欠くエム。さっきと同じ「偏光射撃」を行おうとしたが・・・。

「・・・BCFシステム起動」

サジタリウスがBCFを起動、サジタリウスを中心に五キロに渡って特殊なフィールドが展開された。

「な、なんだこれは!?!」

「あの機体を中心に謎のフィールドが展開・・・?」

「おい!これは・・・!?!」

「貴様！何故――」

「・・・くたばれ雑魚」

驚愕しているエム達を無視して両手、両肩、両足から一斉に攻撃を放つサジタリウス。合計六つのビームがエムに襲いかかる。

「くっ！！」

それを回避しようとしたエム、しかし、サジタリウスの攻撃は途中で機動を変え、エムを追跡する。

「これは・・・「偏光射撃」！？」

「だが、「ブルー・ティアーズ」以外にあれが可能な機体は無いはずだ！！どういう事だ！？」

「あの機体まさか・・・！？」

「・・・「偏光射撃」等と一緒にするな」

「！貴様やはりそれは――」

続きを言おうとしたエムをまた遮り、攻撃を続けるサジタリウス。さっきと同じ一斉射撃を行い、合計十二の攻撃を上手く操っていた。それを必死になってかわすエム。しかし、攻撃を避ける事に集中していたせいでビットが隙だらけになっていた。そして、それを見逃すサジタリウスではなく、新たに六つの攻撃を放ちビットを全て墜とした。

「し、しまっー」

「・・・寝ている雑魚が」

サジタリウスはエムがビットに気を取られた一瞬の隙を狙い、操っていた十二の攻撃全てを直撃させる。エムは持っていたガトリングもナイフもそしてシールド・ビットも全部破壊された。

「そ、そんな馬鹿な・・・この私が・・・」

「・・・やはり雑魚だな。五分もかからなかったぞ」

サジタリウスがBCFを起動させてからたった四分ちよつとでエムは全ての武装を失った。BCFが如何に強力なものかという事と、それを自在に使いこなすサジタリウスの技量が非常に高いという事がはつきりわかる。

「・・・貴様はここで死ぬエム。情報を得るために必要なのはここにいるオータム一人で充分だ」

「なっーガハッ!?!」

全ての武装が破壊され、手も足も出ないエムにサジタリウスは容赦無くその腹に蹴りを入れる。急いでその場を離れようとしたエムだが、サジタリウスの機体の方が圧倒的に速いため、すぐに追い付かれ攻撃された。その後も徹底的に全身に蹴りや拳を打ち込む。その光景にラウラは目を反らす。前に自分もサジタリウスと同じ事をしたからだ。

ドカツ!!バキッ!!ドコッ!!

すでにまともに戦う事が出来ないエムにまだ攻撃を続けるサジタリウス。最早戦いではない、リンチだ。

「やめる!！」

ラウラの言葉に反応し、攻撃を中止するサジタリウス。ラウラはこれ以上、目の前にいる奴の行動に対して黙っている事はできなかった。

「・・・何の用だ、ラウラ・ボーデヴィツヒ」

「これ以上はもう必要無いだろう!！今すぐそいつらを私達に引き渡せ!！」

「・・・断る。こいつらにはもっと苦しんでもらわなければ困る。こんな程度ではこちらの気がすまない」

「なら、力づくで離してもらいますわ!！」

セシリアもこれ以上いたぶろうとしているサジタリウスに対して腹を立てていた。

「・・・何故庇う?こいつらは犯罪者だ。情けをかける必要は無い」

「それはこの国や他の国の法律が決めることだ!！貴様に決める権利は無い!！」

「・・・黙れ」

「「っ!!」」

いきなりサジタリウスから強烈な殺気が放たれる。あまりにも強烈過ぎたためラウラとセシリアは一瞬気絶しかけていた。

「……こいつらに法律で裁かせる権利等与えるものか。邪魔するなら少し痛い目にあってもらう」

エムとオータムに注意を向けながらラウラとセシリアに対峙するサジタリウス。辺りが少しの間静かになり、ラウラとセシリアが突撃しようとした瞬間、サジタリウスが何かに気づいた。

「伏せる!!」

「「えっ!?!」」

「ちっ!!」

先程サジタリウスがエムに不意打ちを仕掛けたのと同じ様に今度は強力な荷電粒子砲がラウラとセシリアに襲いかかった。突然の事で反応できなかった二人をサジタリウスが守った。

「……何故私達を助けた？」

「……ここで死んでもらうのは困る」

「どっぴい意味ですか?」

「……説明する気は無い、それにそんな余裕も無い。来るぞ」



荷電粒子砲が放たれた方向から今度は灰色の機体が現れた。サジタリウスと同様「全身装甲」の機体「タウラス」だった。

「タ、タウラス・・・」

「来んのが遅えんだよ！このデカブツ！」

「文句があるならエムに言えオータム、そいつが「一人で充分」と言ったから待機してただけだ」

「けっ！」

「タウラス・・・？」

「確か・・・牡牛座ですわね」

突如現れた存在に警戒するラウラとセシリア、会話をしている以上は仲間だろう。二人がそう思っていると・・・。

「・・・どういっつもりだ」

「・・・」

タウラスとサジタリウスが睨み合う、周りもそれを感じたのか二人に注目する。そして・・・。

「何故・・・何故お前がそっちにいるタウラス！！裏切るつもりか！？」

「・・・その通りだ、サジタリウス」

「……なっ!?」「」

その言葉に他の全員が驚く。無理も無いだろう。なにせ、サジタリウスはタウラスに「裏切るつもりか」と聞いている。つまり……。

「タウラス! てめえこいつの仲間なのか!？」

「……ああ。だが、安心しろオータム、エム。俺はお前らに協力すると言ったはずだ」

「元仲間という訳か、道理で貴様と同じシステムを使えるはずだ」

「そういう事だ、さっさと退却しろ。まだ機体は動くだろう」

「わかった……貴様に任せる」

エムがオータムを掴み、離脱しようとするが、ラウラとセシリア、そしてサジタリウスがそれを阻止しようとする。タウラスはBCFを起動させ、背中のミサイルポットと腰にある二つの荷電粒子砲と両肩のビーム砲、更に両足のレールカノンと両手のビームライフルを一斉発射、三人の足止めをする。三人が攻撃を防いでいる間にエムとオータムはこの場を離脱した。

「……逃げられたか。タウラス貴様……どうなるかわかってい  
るだろうな?」

「ああ、始めるぞサジタリウス。俺達の戦いを、な」

「……いいだろう。裏切り者は俺がこの手で殺す」

「行くぞ!!」

「戦闘開始だ!!」

またタウラスが一斉発射を行なう。サジタリウスはさっきの一斉射撃に今度は腰から矢の形状をしたビットを射出する。サジタリウスが放ったビットがタウラスのミサイルを貫通、そしてそのまま機体を狙おうとするがタウラスのビームライフルによって撃墜される。

そしてそのビームはサジタリウスのビームによって消滅し、そのビームもまたタウラスによってかき消される。それから少しして攻撃が減少し、また新たに攻撃する二人、そして、それも二人の周りを自由自在に飛び回る。たった数秒で攻撃が放たれ、消滅する。それが次々と繰り返される。

それを見たラウラとセシリアは呆然とした。戦いの規模が違いすぎる。彼等の実力は勿論、機体の性能も桁違いなのだ。まるで「黒騎士」……いや、それ以上の化物が戦っている様だ。

「何ですのあの二機は……」

「機体も実力も差が有りすぎる……化物だ」

勝てない、はつきりとわかってしまう。圧倒的過ぎる。あの二人からすればこちら等、障害にすらならない。それほどまでに強すぎるのだ。あれに勝てる可能性があるとするればおそらく「黒騎士」だけだろう。

「……!は、はい何ですか山田先生?」

「・・・こちらの状況の説明ですか？」

彼等から離れ、しばらく二人の戦いを眺めていると山田先生からのオープン・チャネルが開く。そちらの状況を教えて欲しいとの事だった。二人はオータムを取り逃がした事と謎の機体同士が戦っていると説明した。山田先生は増援の教師達が来るまで一斉手を出さないように伝え、通信を切った。

「手を出すな、か・・・」

「出す勇氣すらありませんわ・・・」

あんな戦いに割り込めばすぐに倒される。いや、割り込む事すらできるかどうかも怪しい。あの二人の戦いは最早「戦闘」ではなく「戦争」のレベルだ。もしかしたらそれすら超えているかもしれない。

次々と現れる様々な音と爆発、それらを眺める事しかできない二人だった。

一方タウラスとサジタリウスの戦いはいつこうに進展していなかった。二人合わせてすでに軽く五百以上の攻撃を行いながら二人はまだ一撃も受けておらず（盾やシールドで受けたことを除くと）シールドエネルギーはまったく減っていなかった。

タウラスが全方向からの攻撃を行おうとするがその前にサジタリウスに大半を潰され、逆に包囲されそうになる。タウラスは急いで数ヶ所を狙い、攻撃を攻撃で打ち消す。そして、包囲から抜け出すとサジタリウスが接近していた。

「なっ……！？正気かサジタリウス！？」

「……勝つためなら攻撃を受けることぐらい何ともない！！」

そう言うサジタリウスだが、機体がかなり損傷していた。BCFを起動させるとその範囲内は攻撃が縦横無尽に飛び交う。その空間の中、敵に向かって突撃するのは自分から攻撃に当たりに行くようなもの、つまり自殺行為に近い。にも関わらずサジタリウスは突撃を行ったのだ。これはサジタリウスの方が先にBCFを使ったため、このまま均衡した状態が続くと先に制限時間を迎えてしまう。なら、その前に先手を打つしかない。そう考えたのだ。

「零距离からの一斉射撃を喰らえタウラス！！」

「くっ！！させるか！！」

こちらも一斉射撃を行おうとしたタウラスだが、サジタリウスの方が早く間に合わない。なら周りにある攻撃で対抗するしかない。そして、二人同時に無数の攻撃が彼等を直撃した。

「うわあああああ！！」

「くっくっくっくっ！！」

互いに無数の攻撃を受け、吹き飛ばす。二人の機体はシールドエネルギーがほぼ残っていない状態になり装甲もボロボロになっていた。

「くっ……！まだ倒れていないのか……！！」

「残念だがな……！後一瞬でも反応が遅かったら死んでいたぞ……」

「！！！」

タウラスは全身の「展開装甲」を間一髪の所で発動させた。おかげで大ダメージは受けたが致命傷には至っていない。一方サジタリウスもさっきの突撃で受けたダメージと今の攻撃でボロボロになっていた。

「……何故だタウラス。何故よりによってお前が裏切るんだ？」

「……………」

「お前は俺達の中で一番……」

続きを言おうとサジタリウスを攻撃し、台詞を遮らせたタウラス。その反応でサジタリウスは何かを悟った様だ。

「……お前まさか……」

「……さあな、だが一つ言っておく。俺は織斑一夏を殺す。必ずな」

「……………そうか、なら俺はお前を殺す。あの人は俺達にとって必要な人だからな」

二人はまた集中する。機体のエネルギーはお互い後一撃でも喰らえば0になる。二人は今まで以上に集中し、攻撃しようしたが……。

「そこまでだ！二人共おとなしくしろ！」

学園から送られてきた訓練機を纏った教師達に邪魔される。二人は

それを見て戦闘を中止する。機体は後一撃でも受ければアウトな状態だ。万が一の可能性を考え、互いと戦うことを止めた。ただし、「互い」と……だが。

「……ふん、雑魚共の分際で俺達の戦いを邪魔するとはな」

「……興が削がれたな。サジタリウス今回はここまででどうだ？」

「……いいだろう。俺は今とても気分が悪い。こいつらには憂さ晴らしになってもらおう」

「同意見だ。では……やるぞ」

「……ああ」

二人は教師達に向かって同時に攻撃を開始した。二機のBCFによる一斉攻撃を訓練機で防ぎきれはらずも無く、教師達は数分足らずで全滅させられた。

「……じゃあなサジタリウス」

「……次は殺す。いいな」

「……覚えておこう」

その後すぐに撤退したタウラス。それを少しの間見つめてからサジタリウスも離れようとする。

「待ちなさい!!--」

「このまま貴様を逃がすわけにはいかん!!」

しかし、それを止めるラウラとセシリア。さっきの攻撃は教師達を狙ったものだったため、彼女達には一撃も当たっていない。

「……止めておけ、見栄を張っても何にもならんぞ」

「余計なお世話ですわ!!」

「万全な状態の貴様なら私達に万が一にも勝ち目は無いだろう。だが、今の貴様は別だ」

ラウラはAICで動きを止め、一気に決めようとしている。後一発でも攻撃を当てればサジタリウスの機体は停止するため、この場での最善策と言える。しかし、それは相手がサジタリウス「だけ」からの話だが。

「おい、そっちはどうだあ？」

「「!?!」」

「……キャンサーか」

二人の背後から現れたのは「黒騎士」に敗れ、撤退しているキャンサーだった。

「……失敗だ。どうやらお前も失敗したようだな」

「わり、「黒騎士」に負けちまった」



「・・・生きているならそれで良い。退くぞ」

「おう」

その後キャンサーとサジタリウスはラウラとセシリアを睨んでから撤退した。二人が何もしなかったのは正解だろう。もし、あの状態で戦っていれば間違いなく負けていたのだから。

こうしてサジタリウスとタウラスの戦いも終わり、残りはIS学園で行われている「黒騎士」と一夏達の戦いだけとなった。

## 第四十一話（後書き）

意見やアドバイスを、感想などどんどん送ってください！後、間違いや誤字もあればお願いします。

## 第四十二話（前書き）

黒騎士対一夏達です。これで学園祭編のバトルは終了します。

## 第四十二話

一夏Side

「……」一撃「で終わるからだ」

「なっ!?!」

「「「「「「一夏!?!」」」」」」

俺の懐に「黒騎士」が潜り込み、「ミヨルニル」を直撃させようとしていた。とてつもない危険を感じ、回避しようとしたが間に合わない。なら!

「「雪盾」!」

「雪盾」をシールドモードにして、「ミヨルニル」を防ごうとしたが……。甘かった。「ミヨルニル」は「雪盾」のシールドを容易く破壊し、俺に直撃した。

「ぐああああああ!」

俺は「ミヨルニル」の一撃を受け、吹き飛んだ。「黒騎士」は俺に止めを刺そうとしたが、皆がそれを阻止した。その間に俺はスラスターを使って何とか体勢を立て直した。

「くっ……。!なんて威力だよ……。!」

さっきの一撃で「雪盾」は破壊され、シールドエネルギーも八〇%

以上削られた。咄嗟に「雪盾」自体で防いだおかげで戦闘不能にならずに済んだ。もし、機体そのものに直撃していれば間違いなくやられていただろう。

「大丈夫一夏くん!？」

「な、なんとか・・・」

「・・・当たる直前に「雪盾」自体で防いだか。良い判断だ」

「そりゃ、どうも!」

「黒騎士」は右手に「ミヨルニル」、左手に「グングニル」を構える。二つともキャンサー戦で初めて見た武器だ。「グングニル」の能力はさつき見る限りでは追跡能力があるのがわかり、「ミヨルニル」は非常に高い攻撃力がある事がわかった。おそらく一撃必殺用に作られた武器だろう。俺の「雪片式型」と少し似ているが威力はあっちの方が遥かに上だ。

(なんせ、物理攻撃に強い「雪盾」のシールドを簡単に破っている。それにたった一撃でシールドエネルギーを八割以上削った)

滅茶苦茶な威力だ。それにまだあの武器の特殊能力はわかっていない。一瞬でも気を抜けばその時点で負ける。

「・・・どうした？確かそんな武器が役に立つと思う？と言っていたのだろう?」

「ああ、けど今の俺の状態を見ればそんなこと言っちゃついでないだろうな」

「とんでもない威力ね・・・」

「全員あの武器に注意しろ！！一撃でも受ければその時点でやられると思え！！」

「…………はい！！」「…………」

再び千冬姉の湯で気を引き締める俺と皆、そして、それと同時に全員が攻撃を開始した。

「…………ふん」

奴は武器「ミヨルニル」を仕舞い、「シヴァ」と替えた。そして、「シヴァ」を右腕と一体化したガトリングにし、「グングニル」「テュール」で反撃した。かなり弾丸の数に俺達は近付く事が出来ない。しかし…………。

「…………！（これは…………）」

「テュール」のエネルギー弾が少しすると止まった。…………弾切れか？

「…………」

「黒騎士」は「テュール」を実弾に切り替え、攻撃を続ける。そして「グングニル」のビームを上空に向けて連発する。

「どこを狙って……なっ！？」

上空に向かって放たれたビームは突然方向を変え、俺達に襲いかかった。

「な、何なのあの武器！？攻撃が突然軌道を変えるなんて！？」

「まるで「偏光射撃」みたいだよ！？」

確か「偏光射撃」はセシリアの「ブルー・ティアーズ」のビットが高稼働時に使える特殊能力でBTLレーザーの軌道を変える事ができる能力だ。でも「グングニル」はレーザーではなく、ビームだ。となるとおそらくあれが「グングニル」の特殊能力って所か。

俺達は「グングニル」のビームを必死になってかわしたり防いだりしているが、その隙に「黒騎士」の姿が消えていた。嫌な予感がした俺は思わずその場を離れる。するとさっきまで俺がいた空間に「ミヨルニル」が襲いかかった。

「・・・ちっ」

「危ねえ！」

「黒騎士」は「テュール」を連発し、「グングニル」を射撃と格闘の両方を行いながら「ミヨルニル」を振り回す。俺はそれを必死に避け、「雪片弐型」と「雪閃」で応戦する。

俺は何とかかわし続けるが、一対一で「黒騎士」に勝てるとは思えない。現に俺は少しずつ追い詰められていた。「雪片弐型」を大きく振りかぶるが「グングニル」で弾かれた。俺は「雪閃」を右手に持ち変え、「雪羅」をクローモードにして応戦を続ける。

「・・・少しはやる様になったな。だが、まだ弱い」

「くっ！」

少しの間応戦を続け、「ミヨルニル」をかわし奴の隙が出来た。今しか無い！

「もらった!!」

「・・・ふっ」

その隙を突こうとしたが、寒気がして後退する。すると「黒騎士」の右足が俺の目の前を通り過ぎる。しかも「フェンリル」を使った状態です。

「・・・運が良い奴だ」

「まあな・・・！」

危ない所だった・・・！あのまま攻撃しようとしていれば「フェンリル」が直撃していた。

「・・・だが隙だらけだ」

「！しまっー！」

「フェンリル」を回避し、安心した俺は一瞬だけ隙ができてしまう。そして、それを見逃す「黒騎士」ではなく、「ミヨルニル」が迫ってきた。駄目だ！避けきれない！



「一夏！」

「ミヨルニル」が直撃する寸前に「黒騎士」の攻撃をくぐり抜けたシャルが俺を突き飛ばし、俺は助かった。しかし、かわりにシャルが「ミヨルニル」を喰らい、吹き飛んだ。

「きゃあああああ！！」

「シャルー！！」

吹き飛んだシャルは壁に激突し、倒れる。そして機体が消える。シールドエネルギーが尽きてしまったのだ。幸いシャルは無事の様で俺はホツとして、「黒騎士」を睨み付ける。

「てめえよくもシャルを！！」

「・・・知るか、そんなこと。奴が弱いから倒れた。それだけだ」

「黙れえ！！」

「・・・怒りに任せて戦う奴程、死にやすい奴はいない」

奴は冷静さを欠いた俺の攻撃を軽々かわし、「ミヨルニル」を振りかぶる。

「やらせん！！」

「させないわ！！」

「・・・ちっ」

千冬姉と楯無さんの二人かがり、「黒騎士」を止める。流石の奴もあの二人を同時に相手にするのはキツイようで攻撃しながら後退する。

「落ち着きなさいー夏くん！」

「冷静さを欠いて勝てる奴ではない！頭を冷やせ馬鹿者！」

「す、すみません……」

「シャルロットは……無事のような」

「それにしても……一撃で機体が停止するとは……」

改めて「ミヨルニル」の威力に戦慄する俺達。まずはあの武器を何とかしないと……。

「織斑先生、楯無さん。「ミヨルニル」を何とか破壊できませんか？」

「できなくは無いが……。あの武器の特殊能力がわからん以上、迂闊に手を出せん」

「多分攻撃系の能力と思うけど……」

確かに「ミヨルニル」を壊すにしても、まず特殊能力がわからなくて手が出せない。それに奴には「テュール」がある。「ミヨルニル」を壊そうとしてもあれで逃げられる可能性もある。

「・・・作戦会議は終わったか？なら・・・行くぞ」

「黒騎士」は「瞬時加速」で俺達に向かって一気に近付く。俺達はすぐに散開し、「黒騎士」を包囲するが、奴は再びを一斉射撃を行い、足止めする。そして今度の「黒騎士」の狙いは俺ではなく鈴だった。

「気をつける鈴！」「黒騎士」がお前を狙っているぞ！」

「えっ!？」

「・・・まずは雑魚から消えてもらおう」

「言ってくれるじゃない！」

鈴が「双天牙月」で奴が「ミヨルニル」で接近戦を行う。鈴は「ミヨルニル」を防ごうと「双天牙月」で受け流すが・・・。「ミヨルニル」が「双天牙月」に触れた瞬間、触れた部分が破壊された。

「嘘!？」

「・・・終りだ」

武器を破壊され動揺した鈴に「ミヨルニル」を直撃させる。鈴は地面に叩きつけられ、シャル同様機体が消える。

「鈴!貴様!」

鈴がやられ筈が一人で突撃する。まずい!!

「織斑！更識！」

「わかってます！」

「箒！」

箒を助けるため、俺と千冬姉、楯無さんが援護に向かうが、「グングニル」と「テュール」で足止めされる。その間に「黒騎士」は箒を追い詰め、「ミヨルニル」をぶつけようとしていた。

「箒——！！！」

「……終りだ篠ノ之箒」

「くっ！！！」

「ミヨルニル」が箒に当たる直前で停止した。そして、「黒騎士」も何かに止められていた。これはもしかして……。

「ラウラ！？」

「間に合ったか……」

「大丈夫ですか箒さん！！！」

ラウラがAICで「黒騎士」の動きを止めていた。確か二人は別の用事があった筈……なんでここにいるんだ？

「……ラウラ・ボーデヴィツヒとセシリア・オルコットか。何故ここにいる？」

「……こちらの用事が終わったのでな、学園に戻ると貴様を見つけたのだ」

「……そして動きを止めた、か」

「その通りだ」

もう少し早く来てくれればシャルや鈴はやらなかったけど……文句を言っても仕方ない。箒を助けてくれたんだしな。

「……」

「黒騎士」は「テュール」の能力で他の場所に移動する。あいつがいつまでもああしている訳無いしな。

「今の状況は……」

「凰とデュノアがやられた、命に別状は無い。織斑もかなり損傷を受けている。奴のあのハンマーに気をつける。三人共あの武器の一撃でこうなった」

「一撃!?!」

「一撃必殺の武装ですか……厄介ですね」

「……いつまでも話す時間があると思うか?」

「「「「「!」「」「」「」

また「黒騎士」が接近し、俺達もまた散開する。俺と箒と千冬姉と楯無さんが奴と接近戦を行い、セシリアとラウラが援護をする。ラウラには奴の隙を見つけ次第、AICを使うようにと千冬姉が言っていた。

「ミヨルニル」と「グングニル」と残った右足の「フェンリル」で俺達に対抗する「黒騎士」。俺達の狙いは・・・左足！あそここの「フェンリル」は壊れているため、あそこが一番攻めやすい。

「・・・左足を狙っているのか、良い判断だ」

俺達は緩急を織り混ぜながら左足を狙う。勿論、左足だけではなく他も狙っている。それを回避しつつ奴は「ミヨルニル」を振り回す。

とにかくあれが厄介だ。ハンマーは隙ができやすい武器なのに奴はそれを完璧に使いこなしている。おまけにさつき鈴があれを受け流そうとしたら触れた部分が壊れた。おそらくそれが「ミヨルニル」の特殊能力だ。俺は攻撃を続けながらも千冬姉に能力の事を伝える。後は千冬姉が皆に伝えてくれるだろう。

合計六人による同時攻撃を行い、「黒騎士」に攻める。

「・・・くっ」

流石の奴も少しずつだが、確実に押され始めていた。これなら・・・！

「・・・!!」

それからもうしばらく攻撃を続け、ようやく奴の隙が生まれた。俺

は「雪羅」から「零落白夜」を発動させ、奴に斬りかかる。

「……くくつ」

奴に触れる瞬間に「黒騎士」が消える。今だ！

「そこだー!!」

俺は「雪空」から「零落白夜」を発動、背後に向かって振るい、奴に直撃した。

「な、なに……!?!」

まったく予想していなかった一撃を喰らい、「黒騎士」は驚いていた。「移動」は確かに強力だが、欠点はある。それは移動する場所を攻撃されるとほぼ確実に喰らってしまうという欠点だ。

……とは言え、当たったのはほとんどまぐれに近いけど。今回奴が「ミヨルニル」で攻撃しようとしても、あの武器の特性上正面から攻撃して当たる可能性は低い。なら、当てるために背後から攻撃すると考えたのだ。上手く行って良かった。

「もらったー!!」

「調子に乗るな……!!」

追い討ちを掛けようとしたが、やはり防がれる。流石に一人では無理か。予想外の一撃を受けた「黒騎士」は後退した。そして「グングニル」自体を上空に向けて投げた。これは……!

「皆気をつける！あの武装自体も強力な飛び道具になってるんだ！」

上空に向けて投げられた「グングニル」はまた方向を変え、今度は千冬姉を追跡した。

「千冬姉！！」

「織斑先生だ馬鹿者！それより気をつける！！」

その言葉にはつとめる。俺達は今千冬姉に視線を向けている。つまり隙だらけだ！

「くっ！！」

楯無さんが「ミヨルニル」の一撃をランスで何とか受け流す。だが、さっきの鈴と同じ様に触れた部分が破壊された。

「・・・やるな。やはりお前クラスの實力者には不意討ちはあまり通用しないか」

「誉めてくれても何も出ないわよ！！」

しばらく接近戦を行なう二人だが、「黒騎士」はすぐに離れる。左手にはいつの間にか「グングニル」が握られていた。そして、「グングニル」からエネルギーが漏れ始めていて十字閃の様な形になった。

「・・・フルパワーの「グングニル」受けてみる」



また奴は「グングニル」を投擲した。今度は俺を狙っていて、一直線に向かって来た。あれをまともに受けたらヤバイ！！

「「雪羅」！」

避けきれない以上、防ぐか破壊するしかない。だが、「グングニル」はかなりの強度がある。なら、防ぐしかない。けど、エネルギー部分は防げて「グングニル」自体は無理だ。なら！

俺は「雪羅」で「グングニル」を受けると同時に直ぐ様回避行動をする。後は何とか防ぐだけと思ったが、「グングニル」はそのまま一直線に飛んで行った。・・・どういう事だ？

(もしかして「グングニル」の能力は何か欠点があるのか？)

そう言えば、さっき放っていたビームも全部は追跡してなかった様な・・・。確か・・・。

(何か当たったらそのまま一直線に飛んで行ってよな？もしかして・・・)

「グングニル」は目標に当たる前に何か別の何かに当たると効果が消える・・・？これなら納得できるな。

「大丈夫一夏くん？」

「あ、はい楯無さん」

「あのランスヤバイわね・・・何か弱点はーーー」ありますよ「えっ？」

「多分「グングニル」の能力は目標に当たる前に攻撃を当てると効果が消えると思います」

俺が言つと楯無さんは今までの事を思い出し、気づいた様だ。

「確かにそうね、私達に向けて放ったビームも何かに当たったらそのまま一直線に飛んで行ったわね」

けど、能力自体は厄介だし、威力も高く強力な武器には変わらない。どうする……？

「……一夏くん少し時間を稼いでくれない？」

「良いですけど……何するですか？」

「「グングニル」を破壊するわ。上手く行けばそのまま「黒騎士」を倒せるかもしれない」

「黒騎士」を倒すって……そんなことできるのか？俺の考えている事がわかっているのか、くすつと微笑む。

「大丈夫よ一夏くん。少なくとも「グングニル」は破壊するわ。この機体の奥の手でね」

「ミステリアス・レイディ」の奥の手……。一体どんなやつなんだろう？楯無さんが「グングニル」を破壊するって断言している以上はかなりの威力があるんだろう。

「わかりました。俺達全員で時間を稼ぎます」

「頼むわね」

俺達は千冬姉にこの事を伝え、「グングニル」を投げる時間を与えないために全員で総攻撃をかける。

「・・・時間稼ぎか・・・成る程な」

奴は既に「グングニル」をチャージしており、さつきと同じ十字閃になつていた。ふと見ると、奴はいつの間にか「ミヨルニル」は仕舞っていた。

「準備完了!! 皆離れて!!」

楯無さんの合図と同時に俺達は「黒騎士」から離れる。そして楯無さんの奥の手が放たれた。

「喰らいなさい「黒騎士」!!」「ミステリアス・レイディ」の奥の手・・・「ミストルテインの槍」!!」

「・・・「グングニル」」

楯無さんが「ミストルテインの槍」を放つのと同時に「黒騎士」も「グングニル」を投げる。「ミストルテインの槍は「グングニル」を巻き込んで物凄い爆発が発生し、「黒騎士」も飲み込んだ。

「すげ・・・」

これほどの威力を受ければいくら「黒騎士」でも・・・と思ったが爆発の中から「黒騎士」が現れ、楯無さんに向かって来た。

「嘘でしょ!?!」

「・・・残念だったな」

爆発から抜け出した「黒騎士」は「レーヴァテイン」と「ミヨルニル」を展開し、楯無さんを追い詰める。助けに行こうにも、「テュール」が弾丸が邪魔していた。

「・・・これで終りだ更識楯無」

「そんな・・・!」

そして、隙が出てしまった楯無さんに容赦無く「ミヨルニル」を叩き込む。楯無さんも吹き飛び、地面に落ちると同時に機体が消える。

「楯無さん・・・!」

「・・・後五人、一気に決めてやろう」

楯無さんを倒した「黒騎士」はそのまま「瞬時加速」で俺達に接近し、襲いかかる。俺と箒と千冬姉で攻撃を受け止め、セシリアとラウラが攻撃しようとしたが、いきなり「黒騎士」が「レーヴァテイン」をラウラに向けて投げた。

「?????!?!?!」

ラウラはそれを軽くかわしたが、俺達は「黒騎士」の取った予想外の行動に呆気にとられていた。そして、それが「黒騎士」の狙いだったと気づく頃にはもう遅かった。

「・・・これで四人だ」

「！貴様これを狙ーー」

ラウラが続きを言う前に「ミヨルニル」が叩き込まれようとしていた。

ビー！ビー！ビー！

「な、なんだ？」

が、その前に奴の機体から謎の機械音が発せられ、奴は攻撃を中止した。・・・何の音だ？

「・・・どこまでか」

「えっ？」

「・・・じゃあな」

素っ気なく告げた後、奴は突然撤退した。俺達は状況が飲み込めずポカンとしていた。

「・・・引き上げた？」

「だが、何故だ？まだ奴は充分戦える筈・・・？」

「・・・さっきの音と何か関係ありそうですね・・・」

「・・・奴から引いてくれたなら有り難い。デュノアと凰と楯無を運ぶぞ」

「「「「は、はい」「」」」」

「黒騎士」が完全に撤退したのを確認してから俺達は後始末を開始した。・・・一先ず戦いは終わったけど・・・何か釈然としなかった。

??? Side

「・・・時間切れか。仕方ないな」

三十分を過ぎたので警告音が鳴ってしまった。あれ以上戦闘を行えば武器が使えなくなるのでやむを得なかった。

「・・・「ラグナロク」がここまで損傷するとはな」

機体損傷率は約五十%、更に「フェンリル」「テュール」「グングニル」が損傷している。まあ、時間が経てば元に戻るから問題ないが。

「・・・キャンサーか。あれほどの実力者がいるとは・・・」

おまけに仲間がいると言っていた。となるとその仲間もキャンサークラスの實力と機体を持っている可能性は高い。

「・・・厄介だな」

だが、俺の邪魔をするのなら全員排除する。必ずな。さて、まずは・・・。

「・・・待っている篠ノ之束・・・!!必ず殺してやる・・・!!」

秘密ラボに戻り、奴の息の根を止めてやる・・・!!

「ふ、ふふ・・・ふふふ・・・さて・・・楽しい楽しい悪死悪鬼をしてやらないとなあ・・・」

徹底的に苦しめてから地獄に送ってやる・・・!!覚悟しろ篠ノ之束!!

俺は全速力で秘密ラボに向かった。勿論、一刻も早く奴を処・・・ごほんごほん。悪死悪鬼するために。

??? Side end

## 第四十二話（後書き）

意見や感想などどんどん送ってください！後、間違いや誤字もあればお願いします。



## 第四十三話（前書き）

戦いの後の話です。後PVが1000000アクセス、ユニークが10000を超えました。ありがとうございます！

## 第四十三話

東Side

「ふう、今回も何とか無事に終了したね。にしても・・・」

私は黒くんとキャンサーの戦いを眺める。この機体の性能からしてもおそらくキャンサーが例の襲撃事件の犯人だろう。後、もう一人いると言っていたが・・・。

「・・・多分この黄色の機体のパイロットだろうね。確か「サジタリウス」って名前だったっけ？」

私は別の映像を出す。IS学園外で行われた戦闘映像だ。そこにはサジタリウスともう一人「タウラス」と呼ばれた人物が戦っていた。

「・・・全部星座の名前だね。一気に三人も黒くんと「同じ」のが来るなんてね・・・」

つい、ため息が出てしまう。三人共機体の性能が高い上に実力も全盛期のちーちゃん以上、しかもキャンサーは黒くんを追い詰める程の実力者だ。しかも、まだBCFを使っていない。

「・・・はあ、でもどうやらキャンサーとサジタリウスはいつくんを殺すつもりが無いのが不幸中の幸いって所かな？」

この二人は上手く説得すれば私の味方になってくれるかもしれない。黒くんに対抗するためにも是非そうしたい所だが、どこにいるかわかっていない。私自ら動く訳にも行かないし・・・下手すれば黒

くんにバレルかもしれない。

「・・・流石に殺されるね。下手したら「亡国機業」に行くかもしれないし」

できるだけ黒くんは私の近くに置いておきたい。黒くんを利用しておきたいというのもあるが、もし「ラグナロク」のデータを「亡国機業」が手に入れたら非常にまずい事になるし、他の国に渡れば戦争のきっかけになってしまう。

「データを詳しく見る事が出来ないとっても武器そのもの詳しく調べれば大体分かるしね」

となると・・・あの二人と会うならくーちゃんに頼むべきか。まあ、それも慎重にした方がいいね。最近黒くんとくーちゃん仲良いしね・・・ちよつとした仕草で黒くんにバレルかもしれないし。

「まあ、それは後で考えるとして・・・最後のタウラスは何で「亡国機業」に協力してるんだろ？」

会話を聞く限り、タウラスはキャンサーとサジタリウスの元仲間らしいけど・・・。なんで仲間を裏切つてまでいっくんを殺そうとしてるんだらう？それに・・・。

「そもそも黒くん、キャンサー、サジタリウス、タウラス、この四人はなんでいっくんを狙ってるのかな？」

黒くんは私の所、サジタリウスとキャンサーはどこにいるか不明、そしてタウラスは「亡国機業」にいる。それぞれバラバラの所にながらも目的は全員いっくんを狙っていることだ。

「・・・偶然じゃないよね。どう考えても」

と言っても、この事に気づくのはおそらく私とちーちゃん、後はいつくん達だけだろう。他のボンクラ共は精々、適当にいつくんを狙っているぐらいしか思わないだろうね。

「・・・これ以上黒くんと「同じ」のが来たらかなり困るね」

でも、それを防ぐ方法が無い。あるはず無いけど。

「・・・うん。何か良い方法無いかな？」

来ることを防ぐのが無理な以上は何か別の手を打つしかない。私はしばらく考え・・・一つ思いついた。けど・・・。

「・・・黒くんに言った瞬間に殺されそうな気がする」

こんなことを黒くんが許可するとはとても思えないね・・・ん、何か取引でもしないと駄目かな？

「多分「ラグナロク」の制限を何とかしろって言うだろうね」

これからの戦いは更に激しくなる。私が黒くんの立場なら「ラグナロク」の武装を一つでも多く使いたい。そうなればやはり制限が邪魔になる。

「ま、この写真で黒く人を脅せば良いか」

この最強武器、黒くんの女装姿の写真を出せば黒くんもおとなしく

するしかないね。ふふっ。それに黒くんの会話も録音してあるし・・・。

「楽しみだね」 黒くん早く帰って来てほしいな」

私はワクワクしながら黒くんが戻ってくるのも待った。

千冬Side

「織斑先生。更識さんと凰さん、デユノアさんの手当が終わりました。しばらくすれば目を覚ますと思います」

「そうか」

これで一先ずやる事は終わったな。だが・・・。

「・・・これから大変なことになるな」

「・・・はい。今回の事件で織斑君以外に三人もISを使える男子が現れました」

また世界中が騒がしくなる。なんせ、今まで一夏以外にISを使える男はいなかった。それなのに今回一気に三人も現れてしまった。いや、もしかすると・・・「四人」かもしれん。

（今までそんな可能性など一度も考えた事は無かった。「黒騎士」

が「男」だと・・・)

だが、今回の事件でその可能性が現れた。そもそも何故奴の機体は「全身装甲」だったのだ？それは自分の身体を隠すためだ。「全身装甲」の機体を纏えば外見が分からない。そして今の世界のIS操縦者は一夏以外女だ。自然と「黒騎士」の操縦者は女だと考えるだろう。いくら世界中が探しても正体がわかる筈が無い。奴は女ではなく男なのだから。

(しかし、このことを言えば騒ぎがもつと大きくなってしまふ)

それに言っても見つかるとは限らない。今まで奴が姿を表したのは一夏がいる時だけだ。それ以外に奴が現れたことは一度も無い。そして、これからは世界中も「黒騎士」だけを探す訳が無い。他の三人でも良いのだからな。

「・・・山田先生。「黒騎士」、キャンサー、サジタリウス、タウラス。この四人の共通点がわかりますか？」

「共通点・・・ですか？・・・正体が不明という点といずれも相当な実力者であるということと全員機体が「全身装甲」で驚異的な性能を持っているというぐらいです」

「まだあります。奴等は全員何故か織斑を狙っているという点です」

「！そう言えば・・・でもなぜ織斑君を・・・？」

そこが分からない。一夏が世界で唯一ISを使える男だからか？いや、「黒騎士」は一夏を「恨んでいる」と言っていた。サジタリウスは「必要」、キャンサーはサジタリウスの仲間である以上は奴と

同じだろう。そして、タウラスは不明……。

(駄目だ。これではとても一つに結びつかん)

そもそも「黒騎士」は何故一夏を恨んでいるのか、サジタリウスとキャンサーは何故一夏を必要としているのか、そして何故タウラスは一夏を殺そうとしているのか。これが分からないのにわかる筈が無い。

(せめて奴等の内一人でも捕まえることが出来ればわかるだろうが……)

だが、奴等の実力は全員が全盛期の私以上だ。学園にある訓練機は十機や二十機程度では捕まえることができるとは思えない。国家代表が十人いて何とか一人を捕まえられるというレベルだ。

(しかし、そんなことは不可能だ。もし出来たとしてもその機体やパイロットの奪い合いになる)

ただでさえ、今世界中はぎすぎすしている。奴等の内誰か一人でも他の国の手に堕ちればそれが戦争のきっかけになる。

(一番理想的なのは……私達、つまりIS学園にいるメンバーで奴等を捕まえる事だ)

そうすれば何とかなる。このIS学園はまったくではないが他の国の干渉を受けない場所だ。……もしも時は東に頼るしかないか。

「にしてもこの四機はどこで作られたのでしょうか……?」

・・・どこで、か。私と束はその答えを知っている。私は認めたくは無いが・・・それでもやはりこの可能性が一番高い。この四機は本来なら「存在しない機体」・・・「未来から現れた機体」なのだと。

(・・・こんなこと言っても世界中は認めんだろうな)

あり得ないと否定するだろう。だが、これ以外にあの四機の正体について説明できるだろうか？

(それにもし認めれば、それはそれで厄介だ。なんせ男でも使える機体、世界中が欲しがらう)

今世界、女尊男卑の世の中そんなものが現ればどうなことになるか・・・。今まで男は女がISを使えるという理由だけで苦しんできた。だが、そこに男でも使えるISがあればどうなる？元々男と女では男の方が体力もあるし、力も強い。世界は一気に引っくり返る。男女平等になろうとしても今まで女が偉そうにしていたせいで多くの男達の不満は溜まっている。それを一気に晴らそうとするだろう。

「はあ・・・」

「どうしたんですか織斑先生？」

「・・・なんでも無い。少し一人にさせてくれんか？」

「わかりました」

山田先生が部屋を出る。そして私は束に電話をかける。数秒して束が出る。



『やつほー、ちーちゃん！何の用だい？』

「……今回の事件の事だ」

『あー、もしかして「黒騎士」達の事？』

「知っていたか、なら話は早い。奴等に対抗できる機体を用意できるか？」

『……無理だね。いくら私でも短期間で未来の技術を超える機体を作るなんて不可能だよ』

……いくらこいつでも無理か。予想はしていたが……。

「これからの戦いは激しくなる。今の機体では奴等に勝てない。何としても強力な機体が欲しい」

『まあね〜。なんせ相手はちーちゃん以上の実力に「紅椿」を遥かに超える機体を持つてるしね〜』

「……何とかならんか束？頼む」

『……うーん、考えとく。でも期待しないでね？』

「……わかった」

……何か違和感があったな。前に電話をかけた時も感じたが……。

『じゃあねーちーちゃん』

ぶつと電話は切れる。．．．あまり期待できんな。せめて私達の方にも奴等と同じ機体が一機でもあればーー待て。

(．．．そうだ。何故今まで私はその可能性に気づいてなかった？)

奴等が未来から来たのならば．．．それと同様に未来の私達も来る筈ではないのか？

(なのに何故来ない？奴等は未来の私達に気づかれぬ様に来たのか？)

考えられるのは来ると厄介な事になるからか．．．。後は．．．ま、まさか．．．!？

(．．．い、いや、ここまでにして。これ以上考えて仕方ない)

私は考えた事を止め、部屋を出た。．．．私は考えても仕方ないと思っただが．．．私は否定したかったのだろう。

未来の私達はもう死んでいるのだという考えを．．．。

東Side

「ん〜。どっしり〜」

さつきちーちゃんから電話がかかってきて黒くんやキャンサー達に  
対抗できる機体を作って欲しいと言ってたけど・・・無理だね。黒  
くんに邪魔されそう。

(前にそうしようとしたら黒くんに殺されかけたし・・・)

となるとちーちゃんには悪いけど諦めるもらうしかない。黒くんが  
いなければいいけど・・・そうも行かないんだよね。まだ、黒く  
んの本当の目的がわかって無いし。

(まだしばらくは私の側にもらわなきゃ困るね)

黒くんが私の側にいる間は多少無茶な頼みができる。けど、黒くん  
が他の所に行けばそうならなくなる。

(まあ、黒くんも「ラグナロク」の整備や自分を隠すための場所を  
確保するためにも私が必要だしね。しばらくは大丈夫でしょ)

それに黒くんは「亡国機業」を嫌っている。多分本当は憎んでると  
思うけど。でも、「亡国機業」を潰すために奴等と手を組む可能性  
もある。

(慎重に手を打つ必要があるね)

さて、これからの方針も決まったし一休みしたい所だけど・・・ま  
だ帰って来ないね黒くん。もうそろそろ帰って来ても良いはず・・・  
。

「!」

私は何故か嫌な予感がしてその場を離れた。数秒後、私がいた場所に黒いビームが襲いかかる。こ、これって……まさか？

「黒……くん？」

「よお……篠ノ之束……」

黒くんが「シヴァ」を構えたまま、私を睨んでいた。って！！

「危ないじゃないか黒くん！！もう少し束さん死ぬ所だったんだよ！？」

「ほう……それはすまん」

……あれ？何か今朝感じた以上の悪寒と殺気を感じるんだけど……後、束さんさつきから全身の汗が何故か止まらないんだけど……。

「……死ね篠ノ之束！！」

「うわぁ！？」

また黒くんがいきなり「シヴァ」を放つ。私はそれを何とか避け、この場を離れる。

「篠ノ之束……！！」

「黒くんストップ！！動かないで……！！」

私は今朝撮影した黒くんの女装姿の写真を彼に見せる。それを見た黒くんは止まる。

「黒くん！今すぐ「ラグナロク」を解除して私に渡して！！さもないと君の女装写真を全世界にウェブ配信するよ！！」

「悪魔か貴様！？」

知らないよそんなこと！！て言うか黒くんが言える事かい！？ともかくどんな手を使ってでもこの場を回避しないと本当に東さんの命が消えてしまう！！

「さあ早く！！さもないとー！！」・・・やってみる」・・・え？」

「やってみると言ったんだ。この際俺の女装写真が全世界にばらまかれようが知ったことか・・・！！そうした後には貴様をブチ殺す！！」

ヤバイ！！黒くんがやけくそになっちゃった！！ど、どうしよう・・・！！？どうすれば・・・そ、そうだ！！

「黒くん！これを見なさい！！」

「・・・？テープ？一体何を聴かせよう」とー！！「クスツ・・・！！？」

テープのスイッチを押し、録音している内容を流す。

『だって貴女程度の実力で私を倒すような事言ってるものだから・・・っい』

「い、これは……」

「そつだよ！君が女口調で話している時の会話さー！！」

「き、貴様……なんて卑怯な……」

卑怯？なにそれ？食べれるの？

「くっ……なら貴様がそれを流す前に殺すー！！」

「ちよつと！？それは卑怯だよ！？」

「知るかー！！」

駄目だ！もう手が尽きちゃった！……これで私の人生も終わりか……  
短かったな。

「待つてください黒さんー！！」

「！」

私に襲いかかるうとした黒くんを止めたのは……くーちゃんだった。

「何の用だ……？俺は今からこいつに「レーヴァテイン」で全身を何百回も突き刺した後に両手両足を一ミリずつ細かく切り刻んで、身体と頭だけの状態にしてから「ミヨルニル」をフルパワーで叩き込もうとしているのに……！！」

「酷すぎるよ!?!」

そこまでされるならいつそ一思いに殺された方がまだよ!?!何その拷問すら生ぬるい程の残虐な殺し方!?!

「それは最早処刑ですら無いです!?!とりあえず落ち着いてください!?!」

「・・・チイツ!?!」

・・・黒くんのあんな舌打ち初めて聞いたよ。余程私を殺したかったんだろうね・・・。

「黒さん。ここで東さまを殺せば貴方の機体を整備してくれる人がいなくなります。それに身を隠す場所も無くなります」

「それがどうした・・・!!そんなこと他のー!?!」他とは?」「うつ!?!」

「今黒さんには東さましか頼りになる人がいない筈です。それは黒さんが一番よくわかつているはずですよ」

「くつ・・・」

確かに黒くんには今私以外に頼れる人はいないね。よし。

「ふふ〜ん。そういう事だよ黒くん。さあ!おとなしく私に服従するんだね!」

「邪八裏鬼又マハ枯口朱」

「1」めんなさい!」

すぐに土下座、プライド?そんなのある訳無いでしょ!!

「黒さん人外化してますよ!」

「・・・はっ!」

くーちゃんと呼ばれ正気に戻る黒くん。あ、危なかった・・・後一秒でも遅ければ殺されてたよ・・・。て言うか前のプールの時より怖かったよ・・・。

「く、黒くん。写真とテープ全部消去するから許して。ね?」

こうなったら、写真やデータは全部消そう。本当に殺されちゃう。

「・・・いいだろう。悪死悪鬼24時間で勘弁してやる」

「勘弁してやるってレベルじゃないよね!」

あんなのを24時間も受けたら死んじゃうよ!

「黒さん。東さまは全部消そうとしているんです。黒くんも矛を収めてください」

「・・・今回だけだ。次は無いぞ・・・!」

「了解!」



もうこういう事はしない方が良いね。次したら今度こそ死んじゃう。

「……ふうーふうー……よし、落ち着いた」

黒くんが何度か深呼吸をして、気分を落ち着かせる。……ようやく助かった気がするよ。

「……篠ノ之束、こいつの修理できるか？」

「「ラグナロク」のかい？うーむ、ちょっと難しいね。多少ならともかく結構壊れてるし」

今の私の技術じゃ、完全に修復するのは無理だね。どうしょ？

「……なら、一ヶ月経ってからしてくれ。かなり修復されているはずだ」

「そっか、「ラグナロク」は自己再生と自己修復が可能だったっけ。でも武装はそうはいかないよ？」

機体と違って武装にはあのナノマシンは無いはずだ。特に「グングニル」の損傷は激しい。

「……なら、明日から武装の修理に専念してくれ。そのかわり武装そのものを見てもいいし頼みを一つ聞いてやる」

「オツケー。任せて」

結構時間はかかるけど、武装が見れるなら充分だね。見た所で同じのが作れるかは別だけど。

「・・・そろそろ寝る。今日は疲れた。飯はいい」

「わかりました。お休みなさい」

「あれだけ戦えばそうなるよ。ゆっくり休んでらっしゃい」

「・・・ああ」

黒くんは少しフラフラしながら部屋を出た。余程疲れたんだろね。

「ありがと〜くーちゃん。助かったよ〜」

「これぐらい当然です。ですが今回のような事は二度としないでください。次も上手く行くとはいりません」

「勿論！」

二度目は無いね。次したらその時こそ私の最後だね。

「ん〜そろそろ腹減ったね〜。ご飯は？」

「今すぐ作ります。ですが今の時間だと手間のかかるものは無理があります」

「簡単なので良いよ」

「わかりました。では」

そう言い、くーちゃんも部屋を出る。

「・・・未来、か」

この事に気づくのが世界にどれだけいるだろう。あの四人は未来から人間だと。

「・・・誰も気づかないよねえ普通。今それがわかってるのは私とちーちゃんだけだし」

ちなみにちーちゃんが知っているのはこの前の臨海学校の時私がちーちゃんに「あの機体は未来から現れた機体だ」って言ったからだけ。

「・・・これからどうなるやら」

まったく予想出来ない。けど・・・。

「いつくんを殺させる気は無いよ黒くん。絶対にね」

いずれ彼の真実がわかるまでか・・・それとも黒くんが私を必要としなくなるまでは一緒にいるとしますか。

束Side end

## 第四十三話（後書き）

意見やアドバイスを、感想などどんどん送ってください！後、間違いや誤字もあればお願いします。

## 第四十四話（前書き）

しばらく時間がかかりました。一夏、キャンサー達、「亡国機業」、そして「ラグナロク」の開発者についての話です。

## 第四十四話

一夏Side

「とうわけなのよ」

「はぁ・・・」

学園祭が終わり、寮の自室で俺は意識を取り戻した楯無さんから今回の事件について説明を受けていた。最近「黒騎士」以外にある組織が動き出そうとしていて、狙いが俺だったため、それを防ぐため俺と同居していたとのことだった。

「・・・楯無さんは一体何者なんですか？」

「あら、優しい優しいおねーさんよ？」

「そついつのはいいです」

「ちえ、更識家は昔からこの手の裏工作に関して強いのよ。暗部ってわかる？更識家は対暗部用暗部・・・簡単に言うとスパイを対処するためのスパイって所かしら」

成る程・・・。目には目を、歯には歯をってことか。

「とりあえず、当面の危機は去ったようだけど・・・」

「まだ、気は抜けないってことですね」

「……ええ、まさか例の襲撃者までもが一夏くんを狙っているなんて思ってたからね」

「やっぱり蟹子じゃなかった……キャンサーが例の襲撃事件の……」

「犯人、でしょうね。起きた後織斑先生から少し聞いたのだけど……キャンサーにはサジタリウスと言う名の仲間がいるらしいわ。おそらく二人で一緒に襲撃事件を起こしたんでしょうね」

でも、なんでだろう？サジタリウスって人は分からないけど、キャンサーは悪い奴には見えなかった。なのに何故襲撃事件を起こしたんだろう？

「楯無さん。キャンサーって一体何者何ですか？」

「……残念ながらわかってないわ。今回の事件に対して例の組織以外はまったく情報が得られなかったし……」

「黒騎士」との戦いを終えた後すぐに今回の事件について質問をされ、千冬姉からこの事は絶対に洩らすなと通告された。俺以外にISを使える男が現れたことが影響しているのだろう。

「まあ、しばらくは大丈夫でしょう」

「……しばらくは、だろうけど。」

「じゃあ、そろそろ寝ましょう。色々疲れたでしょう？」

「はい」

明かりを落とす、布団の中に入り込む。オータムと「黒騎士」との戦いで疲れていた俺はすぐに眠りに落ちた。

「お休み、一夏くん。これからが大変だよ。・・・本当に、ね」

ちなみに次の日の結果発表で生徒会に所属することになり、近々各部に派遣される様だ。・・・はあ。

一夏Side end

キャンサーとサジタリウスは自分達の隠れ家に到着し、互いに何があったのか説明していた。

「・・・冗談だよなサジタリウス？」

「・・・事実だ。タウラスは俺達を裏切り、「亡国機業」に協力している」

サジタリウスがタウラスの事を告げるとキャンサーは信じられないという表情をしていた。

「なんでよりによってあいつが裏切るんだよ!？」

「・・・奴には奴なりの目的がある、と云うことだろう」



「くそっ!!」

「・・・キャンサー、苛つくのはわかる。だが、今は今後についての方針を決める方が先だ」

「・・・わかったよ」

サジタリウスに言われ、イライラを収めるキャンサー。しかし、納得していない様子だった。

「・・・なあ、タウラスがいるってことは・・・」

「・・・ああ、ピスケスもいるだろうな。あの二人は仲が良いからな」

「・・・最悪だな。今使える五機の内、二機が向こうにあるってことか」

「・・・そうなるな」

「亡国機業」に自分達の機体のデータがある。これは二人にとって、かなり厄介だった。

(キャンサーから話を聞く限り、「黒騎士」も俺達と同レベルの機体と実力も持っている。はぁ・・・)

つい、ため息を出してしまうサジタリウス。キャンサーがBCFを使っていないとは言え、キャンサーを負かした「黒騎士」。そして、自分達と同じ機体を持つタウラスとピスケス。この二つの危険要素に対してどうするものか、と考えるサジタリウス。

(現実には常に予想の上をいく、か。確かにその通りだな。こうなる  
と最後の機体の操縦者も呼ぶべきか……)

「サジタリウス。これからどうする?」

「あの機体の操縦者もこっちに來させる」

「……ま、それしかないか。けど、大丈夫か?」

実は最後の機体のパイロットはこの二人よりも少し幼いのだ。キャンサーはまだ十五にもなっていないパイロットを呼ぶことに少し抵抗があつた。

「……俺も抵抗はある。が、今は俺達の目的を達成することに集中しろ。いいな」

「……了解」

渋々だが、納得した様子 of キャンサー。二人だけではこの状況を打破出来ないとわかつているからだ。

「さて……俺達の機体の修理を始めるぞ。「サジタリウス」は未しも、「キャンサー」は重点的に修理する必要がある。……キャンサー、どんな攻撃を受けたらこんな風になるんだ?」

「「ミヨルニル」ってのを受けたらこうなった。たった二回喰らっただけでな」

「……滅茶苦茶だな。機体損傷率七十%オーバーだぞ?どんな攻

撃力を持った武装なんだ？」

「知るか、んなこと。あ、そう言えばさあ「黒騎士」のパイロット  
って……一体誰なんだろ？」

「……分かん。未来から来た奴ということ以外不明だしな……」

ふと、キャンサーが言った「黒騎士」について考えるサジタリウス。  
キャンサーを追い詰める程の強さを持つ人物について気になる様だ。

「……キャンサー、奴と戦ったのだろう？何か気づいた点は無い  
か？」

「……ん〜。あ、あいつ確か……俺と同じ」って、言ってた  
な」

「……俺、か。ならおそらく奴は男だな。だが、これだけでは奴  
が何者かは分かん」

「だよな〜。機体も俺達のと同じぐらいの性能だったし」

「……同じ」？」

その言葉が何故か引つかかったサジタリウス。彼等の組織はかなり  
大規模なもののだが、それでも「キャンサー」や「サジタリウス」  
、その他を完成させるのにかなりの年月を費やした。

（なら、奴の機体はどうやって作られた？「黒騎士」に仲間がいる  
と言う情報が無い以上、奴は一人で動いているのは間違いない。し

かし、たった一人で俺達の機体に匹敵する機体を開発できるか？だが、仲間がいるにしては変だな・・・」

考えれば考えるほど謎が増えてしまう。これ以上は無駄だと判断し、話を切り上げるサジタリウス。

「・・・とりあえず、奴のことについては後で考えよう。まずは機体の修理だ。急いでやらんと今度の戦いには間に合わんぞ」

「それは困るぜ！あいつにリベンジしたいのによぉー！」

「・・・今度は俺が「黒騎士」と戦う。お前は別の奴とやれ」

「なんでだよ！？今度こそあいつを倒すのに！！」

やれやれと頭を振るサジタリウス。自分達はあくまで任務の為に来ているのに、自分勝手に動こうとしているキャンサーに対して呆れていた。

「・・・子供か。お前、俺達の目的を忘れたのか？」

「そ、それは・・・その・・・」

「・・・現在俺達以外に三機も未来の機体が存在している。慎重に手を打たねばならない状況なんだぞ？それなのにお前は・・・」

「・・・ごめん」

「・・・わかればいい。さっさと機体を修理するぞ」

「おう！」

早速機体の修理に取りかかる二人、予想外の出来事が起きたが、彼等は今自分達にできることをしっかりとやっていた。

とある高層マンションの最上階。豪華な飾りで溢れている部屋で、オータムがエムに詰め寄っていた。

「てめえ！どういうことだよ！？」

「……………」

「何とか言えこのガキ！」

「……………そこまでにしろオータム」

オータムがエムを壁に叩き付けようとするが、タウラスがそれを止める。

「邪魔するなタウラス！こいつの顔を切り刻まねえと気が済まねえ！」

「やめなさい、オータム。うるさいわよ」

「そうですよ。もっと静かにしなさい」

バスルームから出てきたスコールと少しイライラしながら忠告するピスケス。

「ピスケス、スコール……！」

「……俺がいるのにそんな格好で出てくるなスコール」

「あら、ごめんなさいねタウラス。オータム、怒ってばかりだと老けるわよ。落ち着きなさい」

バスローブ姿のままソファーに腰を下ろすスコール。そんなスコールを、オータムは悔しそうに見つめる。

「スコール！なんで私に言わなかった！「白式」に「リムーバー」の耐性があるなんて聞いてねえぞ！」

「……えっ？」

「……なに？」

「……待てオータム、それは本当か？」

「ああ！何の効果も無かったぞ！」

「……そんな筈は」

オータムが言ったことに全員が驚く。「白式」が既に「リムーバー」の耐性を持っている等聞いていなかった。オータムも全員の反応からそれを感じ取った様だ。

「・・・知らなかったのか？」

「・・・ええ、そんな話聞いて無いわ」

「・・・どついう事だ？」

全員が考えている中、ピスケスが切り出す。

「・・・確かに気になりますが、放っておいても良いでしょう。元々今回の作戦は失敗する事が前提に行われていましたから」

「なんだと!？」

「「リムーバー」を受けた機体は耐性ができると同時に遠隔コールが可能になる。つまり、「白式」に耐性が有るうが無かるうが関係なく、失敗するという事だ」

それを聞き、また怒り出すオータム。そして、さっきと同じようにスコールに問いたです。

「本当なのかスコール？」

「ええ」

「なら何故私に言わない!私は・・・私は、お前の!」

「わかってるわ、オータム。あなたは私の大切な恋人」

「わ、わかっているなら・・・いい」

スコールの笑みを見たオータムは怒りを収め、頬を赤らめてうつむく。

「・・・やれやれ、女同士の恋ですか。下らない。そう思いませんかタウラス？」

「さあな、それは人其々だろう？彼女達は納得しているしな」

「・・・貴方はスコールやオータムの様な人が好みですか？」

「まさか、俺が好きなのはお前だ」

「・・・そうですか。ふふっ」

タウラスの言葉に機嫌を良くするピスケス。そんな二組のやり取りをエムは退屈そうに眺める。

(両方下らないな・・・)

馴れ合いも情も否定しているエムは、つまらなさそうにしながら部屋を出ようとする。

「エム、貴女の機体「サイレント・ゼフィルス」はしばらく修理に専念する必要があるので整備に回してください。わかりましたか？」

「わかった」

エムは短く返事をして、部屋を出る。そして通路で一人、胸の口ケットを握りしめて瞼を閉じる。



(もう少し・・・もう少しだ・・・これで私の復讐が始められる。やっとなんか・・・会うことができる。織斑千冬・・・ねえさんに・・・)

だが、それは叶うか分からない。そうとも知らずに彼女は微笑む。

???? Slide

「・・・ん」。どうしようかなこれ？」

私は今ある映像を眺めている。私の作った機体「ラグナロク」と今回現れた謎の機体「キャンサー」の戦闘映像だ。

「私達以外にもいた、か。まあ当然と言えば当然だよな。にしても・・・」

よく作れたね・・・タイムマシン。まさか私以外に完成させられるなんて思ってたからね・・・。

「まあでも、これはチャンスかな？」

今回現れたキャンサーは「彼」にとっては障害になる存在だ。このまま上手く行けば私の狙い通りに事が進むかもしれない。

「けど、そうは行かない可能性もあるんだよね」

予想外の出来事と言うのは一度起きれば何度も起きてしまうものだ。

逆にとんでもない出来事が起きる事も充分あり得る。

「・・・あのプログラム、残って無きゃ良いけど・・・」

私が開発したあるプログラム、「ラグナロク」のコアが前の機体に使われていた時に私が組み込んだやつで最高のプログラムと言っべき代物だ。

「・・・消去したから大丈夫でしょ・・・多分」

まあ、それに残っていたとしても起動しなければ良いんだし。実際今まで何故か起動しなかったし問題ないか。

「うーん。それにしても・・・どの誰だろ？BCFシステムの研究していた人」

私が開発したBCFシステム、能力こそは完璧だったけど、あまりにも危険過ぎたために私が全部消した筈なのに・・・。

「何処かで手に入れたとしか考えられないね。甘かったか」

あんな危険なシステム、誰も使わないからと油断していた。けど、まさかあんな失敗作の改良型を完成させるとは・・・。

「・・・うーん。大丈夫かな？」

私はこれ以上未来の機体が向こうに行く事を恐れた。下手すれば戦争のきっかけになってしまう機体ばかりだし・・・。

「かといって、まだあの二人を送るのはまずいし・・・」

様子見しかないか……。でも……。

(私の計画は必ず成功させてみせる)

私のけじめをつけるために……。そして、彼等のためにも……  
絶対に。

??? Side end

## 第四十四話（後書き）

意見やアドバイスを、感想などどんどん送ってください！後、間違いや誤字もあればお願いします。

機体説明「**キャンサー**」「**サジタリウス**」「**タウラス**」(前書き)

キャンサー、サジタリウス、タウラス、この三機の説明です。

## 機体説明「キャンサー」「サジタリウス」「タウラス」

### 「キャンサー」

「全身装甲」タイプの機体。色は朱色。蟹の様な形のバイザーや背部の蟹のハサミを広げた様な形状のスラスタが特徴。「展開装甲」やBCFシステムを兼ね備えており、先に開発された五機の内、一番最初に完成した機体で近、中、遠距離をこなす万能型。

### 基本装備

#### 「アルタルフ」

ビット。両腕、両肩、両足にビームと荷電粒子砲がそれぞれ六つずつ計十二機展開されている。ビットとして使わずにそのままエネルギーシールドを展開したり、攻撃することや範囲は狭いがハサミで敵を捕まえる事が可能。一つのビットに四つの砲口があり、四つ一気に放つたり、拡散して放つ等使い分けができる。ちなみにキャンサーはエネルギーシールドを展開した状態でそのまま敵にぶつかったりすることもある。「ブルー・ティアーズ」の様な、使用中に動けなくなる欠点は無い。

### 後付武装

#### 「アクベンス」

近接ブレード。中にビームブレードが仕込んであり、状況に応じて使い分けすることが可能な武装。

#### 「アセルス」

ガトリング。実弾とビームの使い分けが可能。ガトリングとは言え、

ビームがあるため、それなりの威力が出る。

「アナントラ」

スナイパーライフル。「アセルス」とは違い、実弾は無い。狙撃をこなすため用の武装だが、キャンサーはあまり使わない。

「テグミン」

バブルボム。手の平から高密度のエネルギーを特殊な膜で包み込んだ状態で発射する。威力は調整可能で、最大にすれば一つで敵を倒すこともできる。発射されると色が透明になり、ハイパーセンサーでも認識できなくなる。自分の合図や攻撃で膜が破裂し、大爆発を起こす。そのまま敵にぶついたり、罠として使用したり、爆発を利用して身を隠す等使い勝手がいい。

特殊能力

「アウストラリス」

機体から特殊な煙を発生させ、それを浴びると大体、一時間前までの記憶を失う。但し、気を失ってなければ効果は無い。逆に気を失っていれば例え機体を纏っている状態でも記憶は消える。

「サジタリウス」

黄色の装甲を持つ「全身装甲」の機体。両端に羽が付いたバイザーや背部の翼の様なスラスタが特徴。狙撃や射撃をこなす中、遠距離型の機体で全ての武装の貫通能力が高い。五機の内三番目に完成

した機体で「キャンサー」と同じく「展開装甲」やBCFシステムを搭載している。

## 基本装備

### 「カウス」

多機能武装。巨大なクロスボウの様な形状。両腕両足にある武装で防御、射撃、格闘を行なう等「雪羅」と似ているが、こちらは一度に全ての動作を同時に行なうことが可能。防御は「キャンサー」と同じエネルギーシールド、射撃は貫通能力の高い高出力ビーム、格闘は巨大なビームブレード。

## 後付武装

### 「アルナスル」

ビームライフル。弓の様な形状。弓の形はしているが連射可能でチャージすることもできる。矢の様なビームを発射し、大抵の装甲や盾なら簡単に貫く程の貫通力を持つ。

### 「アルカブ」

ビームブレード。手ではなく、足から使用する隠し武器。敵の不意討ちしたりするため用。

### 「アスケラ」

小型ビット。矢の形をしており、腰から射出する。射出すると同時に攻撃や移動のためのエネルギーチャージが行われる。矢の先端からビームが発射可能。ビット自体も高い貫通能力を持つ。エネルギーが尽きると腰に仕舞われる。

### 「ルクバト」



スナイパーライフル。五十キロ以上離れていても命中することが可能な武装で超長距離狙撃を目的に作られ、貫通能力を重点的に強化している。

#### 特殊能力

「ヌンキ」

発動すると周囲の地形や建物の中を細かく見ることができ、建物の影に隠れた場所もどうなっているかすぐにわかる。探索用の能力。

「タウラス」

「キャンサー」「サジタリウス」の兄弟機で二番目に開発された機体。灰色の装甲を持つ。二本の角が付いたバイザーと肩や肘、膝についたスパイク、背部にあるミサイルポッドのスラスタールが特徴。前の二機同様「展開装甲」とBCFシステムを搭載している。近、中距離型で高い攻撃力と攻撃速度で押していく機体。

#### 基本装備

「アルデバラン」

手甲。高密度のビームを纏ったり、付いているジェットで威力を上げることができ、纏っているビームを弾丸として発射することも可能。ビームを纏わなくても十分な防御能力がある攻防一体の武装。

#### 後付武装

「アルキオネ」

ビームライフル。威力ではなく速さを重点的に上げたもので他の機体のビームライフルよりもかなり攻撃速度が高い。

「プレイオネ」

ビーム砲。両肩に展開する武装。「タウラス」の武装の中で唯一速度を無視し、攻撃力だけを強化した武装。そのため「タウラス」の武装の中で一番攻撃力が高い。

「アトラス」

レールカノン。両足に展開する武装。「アルキオネ」同様攻撃速度が高い、更に弾丸も軽く丈夫な物のため回避が難しい武装。軽い弾丸のため、威力が低くなってしまう欠点も弾丸の内部に爆薬を詰め込むことで防いでいる。

「アステローペ」

荷電粒子砲。腰に展開する武装。連射式で一度に最高三発まで連射可能。攻撃と速度を両立したもの、高い攻撃力と速さを持つ。但し、チャージに多少の時間が必要という欠点がある。

「エレクトラ」

ミサイルポッド。背部にありスラスタでもある武装。速さと命中を重点的に上げたもののため、「タウラス」の武装の中では一番威力が低い。牽制用の武装。

「マイア」

物理シールド。両腕に装着されており、ビームコーティングとエネルギーシールドによる高い防御力を持つ。

## 特殊能力

「エルナト」

発動すると機体のエネルギーを消費して、全ての武装の出力が上昇する。但し、エネルギー系統の武装しか効果は無い。

機体説明「キャンサー」「サジタリウス」「タウラス」(後書き)

間違っている部分や誤字があれば言ってください。

## 第四十五話（前書き）

機体説明と一緒に投稿します。この話から一応六巻となります。

## 第四十五話

?????Side

「……ふあ」

「起きたかい黒くん？」

「……ん？」

学園祭から数日が経ち、俺が目を開けると篠ノ之束が目の前に立っていた。

「……何の用だ？」

「「ラグナロク」の事だよ。あれの詳しいデータって無い？全然修理がはかどらないんだよ」

「……成る程」

まあ、この時代には無いオーバーテクノロジーだからな。

「……間に合うか？」

「「キャノンボール・ファスト」までにかい？ちよつと厳しいね」

「……最初は一ヶ月と言ったが……それではとても間に合わないな。かといって、行かないというのはまずいし……」。

「……どれぐらいだ?」

「?」

「……今のペースだと、「キャノンボール・ファスト」当日にはどれぐらい直っている?」

「……ん、八割ぐらいだね。後「グングニル」は間に合わないね」

少しキツイな……。だが、その日には新しい武装が使用可能になるはず……。それに期待するか。

「……それで充分だ。今日から俺も修理を手伝おう」

「いいけど……。それでも間に合わないよ?」

「……構わん」

少しでも「ラグナロク」の状態を良くしておきたいからな。

「ね、黒くん。一つ頼みがあるんだけど……。駄目?」

「……内容次第だな」

ふざけた内容なら即座に殺してやる……。!!

「く、黒くん!? 顔が怖いよ!?!」

「……ああ、この前の事を思い出してな」

「も、もう勘弁してよ。データは全部消したんだし・・・ねっ？」

「・・・そうだな、で・・・その頼みと言うのはなんだ？」

「うん、頼みって言うのはー」

俺は篠ノ之束の頼みの内容を聞き、一瞬殺そうかと思ったが最後まで聞いてからでもいいだろうと思ひ話を聞く。が・・・。

「ーってことなんだけど・・・駄目？」

「・・・正気かお前？」

話を聞いて啞然とする。俺が「そんなこと」許可するはず無いだろう。それに・・・。

「・・・下手したら奴等死ぬぞ？」

この頼み・・・キヤンサー達はともかく、織斑一夏達にとっては不利な内容だ。・・・何を考えている？

「キヤンサー達に対抗するためだよ。それにー」

「・・・俺に対抗するためでもある、か？」

「そんなところかな？ちなみに受けてくれれば君の機体の制限を何とかしてあげるよ？」

「・・・ほっ」



それは有り難いな……。だが、こいつのことだ。精々武装が一つ使える程度だろうな。だが。

「……二つだ」

「ん？」

「……二つ使える様にしろ。それならお前の頼みを受けてやる」

「……一つじゃ駄目？」

「……駄目だ。これでも妥協している方だぞ？」

こいつの頼みの内容は厄介だが……。今は一つでも使える武装を増やしたい。かといってこれ以上は無理だな。こいつとしても織斑一夏が死ぬ可能性を上げたく無い筈……。だが、キャンサー達に対抗するにはこれが良いと考えているのだろう。

「む……一つにしてよ」

「……却下だ」

「ちえ、じゃあそれでいいよ。ただ一気に二つ使えるか分からないし、そもそも制限を何とかできるか分からないよ？」

「……ああ、但し……。ちゃんとやれ。でなければ……。殺す」

篠ノ之束に本気の殺気をぶつける。釘を刺しておかんな。こいつなら俺を出し抜く可能性もある。

「……オツケー、きちんとするよ。東さんもまだ死にたくないからね」

「……一応信じておくか。こいつ自身はあまり信用できんが、こいつの腕は信用できるしな。」

「……ちなみに今日からやれ、いいな？」

「え〜……ま、いいか。にしてもしばらくはゆっくり寝れないね〜。手伝ってよ」

「……いいだろう。ついでだ」

作業にのめり込み過ぎないように見張っておくか。後はこいつがきちんとやっているかもな。

「さ〜て……じゃあ、今から早速作業しますか。久々に全力出すよー!」

「……この前の襲撃事件の時も全力じゃなかったか？」

こいつの久々って案外間隔が狭いのか？まあ、いいか。

(俺の機体もかなり損傷しているがそれはキャンセル達も同じ、状態は五分五分と言った所か)

だが、こつちには篠ノ之束がいる。それに「ラグナロク」は自己修復と自己再生が可能なため、修理にあまり時間がかからない。それを考えるとこちらが有利だな。

「東さま、黒さん」

「くーちゃん？」

「・・・なんだ？」

「これを」

あいつが篠ノ之束にある書類を渡す。

「うーん？これは・・・昨日アメリカで起きた襲撃事件についてのだね」

襲撃事件？妙だな・・・。確か「銀の福音」は俺が来たせいで凍結されてないはず・・・。なのに襲撃事件が起きたのか？

「・・・それを見せる」

「はい」

俺は篠ノ之束から書類を受け取り、内容を読む。

「・・・昨日午前十二時にアメリカのIS開発局に青色の「全身装甲」の機体が襲撃した。目的はISでアメリカの国家代表イース・コーリングと「銀の福音」の操縦者ナターシャ・ファイルスが迎撃に当たった。しかし、敵は何故か戦闘の途中で撤退した」・・・

「どっと思っ黒くん？」

「……おそらくは「亡国機業」の仕業だろうな。そしてこの襲撃者は……」

「キャンサー達と同じだろうね」

「……多分な」

軍用ISを操るパイロットと国家代表を同時に相手してまともに戦える奴はそうそういない。となればこの襲撃者が何者が大体予想できる。

「でもさ黒くん。なんでこの襲撃者が「亡国機業」にいるって判断したの？もしかしたらキャンサー達の方にいるかもしれないのに」

「……この襲撃者は学園祭の時に現れていない。キャンサー達の目的は織斑一夏と「亡国機業」。もしこいつがキャンサー達の方にいるなら俺と戦う時かオータムやエムを捕まえる時に出てくる筈だ」

「そっか、でも出てこなかったってことは「亡国機業」が隠しているってことだね」

「……そういう事だ。しかし……」

何故この襲撃者は撤退した？奴等と同レベルの機体と実力を持っているなら負ける要素は無いはず……。

「……こいつが撤退した理由は？」

「残念ながらわかっていません」

「可能性として一番高いのはキャンサーかサジタリウスが近づいていたからじゃない？」

「……奴等の機体は学園祭の時にかなり損傷している。そんな状態でこの襲撃者を撤退させられるか？」

特にキャンサーの機体は「ミヨルニル」のせいでボロボロだ。こんな短期間で修復できるとは思えない。

「じゃあなんで撤退したんだろ？」

「……一つ可能性がある」

「……何か嫌な予感しかしないんだけど」

「……だろうな」

だが、こいつはまだマシだろう。キャンサー達を説得できる可能性があるからな。……かなり低い可能性だが。

「……おそらくキャンサー達の仲間が現れそいつが襲撃者に接近しようとした、と言った所だな」

「……やっぱり？」

「……後は俺やキャンサー達以外に来たか、だが」

「……それはそれで嫌なんだけど」

確かに。まあ、はつきりしているのはまた敵が増えたと言うことだ。これで俺を含めて未来の機体が合計六機か。・・・厄介だな。

「これ以上増えないで欲しいな」

「・・・無理だな」

止める方法が無い。寧ろあつた方がおかしい。

「うん・・・ね、黒くん。いつくん達のためのー」・・・却下「・・・やつぱり？」

俺がそんなこと許可するわけ無いだろう。俺に得るものが無い。・・・もう一つ理由があるがな。

「ちょっとぐらいいいじゃん。なんでこういう事だけは邪魔するのかな？」

「・・・さあな」

言う訳無いだろう。いずれお前も殺すのだからな。

「ちえ、しゃあないか。んじゃ、作業を続けますか」

「・・・手伝おう」

「私も手伝いましょうか？」

「・・・お前は家事の方に専念しろ」

「そつだよ。くーちゃんまで作業したら家事する人がいなくなっちゃうじゃん」

流石にそれは困る。さて・・・俺も作業するとしますか。これからの戦いのために、な。

??? Side end

とある場所、今そこには二人の女性、スコールとピスケスが今回の襲撃事件について話し合っていた。

「やれやれ、まさか貴女が失敗するとはね・・・ピスケス」

「・・・申し訳ありませんスコール」

「撤退した理由は何かしら？」

「・・・彼等が接近していたため、撤退しました。流石に私でも彼等二人を同時に相手するのはキツイので」

スコールはピスケスの言動に一瞬違和感を覚えたが・・・気にする事でも無いと判断し、話を続けた。

「・・・そう、なら仕方ないわね。今の所彼等とまともに戦えるのは貴女とタウラスだけ・・・しばらくは慎重に動きましょう。所で・・・そろそろ貴女達のことについて詳しく教えてくれないかしら？」

「……お断りします。言っても無駄なので」

二人の空気が徐々に冷たくなっていく。スコールとしては何としてもピスケスやタウラスが所属している組織についての情報を手に入りたいのだが、何故かピスケスとタウラスは話そうとせず、いつも誤魔化そうとするのだ。

「……無駄、ね。それは聞いてから判断するわ」

「……ここで死にたいのですか？」

「……っ!!」

ピスケスからさつきとは比べ物にならない程の殺気が放たれ、思わず後退りするスコール。

「……私達が貴女達に協力する条件の一つに私達について詮索しないことを忘れましたか？」

「……そうだったわね」

ピスケスとタウラスが「亡国機業」に入る時、いくつかの条件を提示した。スコール達は渋々だがそれを受け入れることにした。もし、受け入れなければ非常に厄介なことになってしまっからだ。

「……でも、少しは話してくれてもいいんじゃないかしら？こつちとしては貴女達の機体や組織の情報は喉から手が出る程の代物なのよ」



「・・・私達の機体のデータを一部受け取っているでしょう？それに貴女達の命令にも従っています。これ以上欲を出さないでほしいものです」

「・・・そうね。話はこれで終わりにしましょう。今度行われる「キャノンボール・ファスト」の日まで「タウラス」や「サイレント・ゼフィルス」の修理に取りかかって頂戴」

「わかりました。では」

ピスケスは短く返事をして、その場を後にする。ピスケスの姿が完全に見えなくなったのと同時に隠れていたオータムが現れる。

「・・・いいのかスコール？」

「・・・ええ、あれ以上詮索しようとしたら本当に殺されていたわ」

「やっぱりあいつら殺すべきじゃねえか？いつ寝首をかがれるかわかったもんじゃないわねえ」

「・・・オータム、少しは自重しなさい。今あの二人がこの場にいたら殺されるわよ。あの二人は実力も機体も私達より遙かに上なんだから」

「私があいつらに負けるって言うのか！？」

「ええ、貴女とあの二人では差がありすぎる。せめて彼等と同じ機体がなければ話にならないわ」

なんせピスケスとタウラスの機体は今の時代の技術を遙かに超えて

いる。現在「亡国機業」は彼等から受け取ったデータを元にある機体を開発しており、もう少しすれば完成する予定だ。

（まあ、例の機体を完成してもあの二人に勝てるとは思えないわね・・・）

ピスケスから受け取ったデータは彼等からしてみれば大したことの無い情報のため、対抗できるとは思えなかった。まあ、彼等からしてみれば大したことの情報でも「亡国機業」としては充分すぎる程のデータなのだ。

「オータム、あの二人から何かしない限りは一切手を出さないでね」

「・・・ちっ、わかったよ」

話を終えた二人もその場を離れる。一方ピスケスの方は・・・。

「・・・ふむ」

「どうだ？ピスケス」

「・・・「キャノンボール・ファスト」までに修理が終わるのは少し無理があります。八割行けば上出来かと」

「・・・「サイレント・ゼフィルス」と同時に修理していたからな。最もあつちはまだすぐ修理が完了する予定だったな」

「ええ、「タウラス」に比べればまだあつちの方が簡単ですから」

今の技術で出来た機体と未来の技術で出来た機体、どちらが直しに

くいか言われれば当然未来の機体の方だ。「タウラス」には今存在しない技術が詰まっているため「サイレント・ゼフィルス」に比べ、修理に相当な時間がかかる。

「所でピスケス、なんで嘘をついた？」

嘘と言うのは撤退した理由だ。本当はある機体が接近したため、撤退したのだ。

「・・・その方が良いと判断したからです」

「そうか、で・・・来たのはやはり・・・」

「ーです。これで五機全てがこっちに来たことになりました」

「これで合計六機か・・・ピスケス、「黒騎士」がどこにいるかわかるか？」

「・・・残念ながら不明です」

「なら、「キャノンボール・ファスト」当日まで待つしかないか。少しでも「タウラス」の状態を良くしてくれ」

「そのつもりです」

話が終わり次第、すぐに修理に取りかかるピスケス。少しでも「タウラス」を完全な状態にし、自分達の目的を果たすために。

## 第四十六話（前書き）

一夏とシャルとある人物達の買い物の話です。

## 第四十六話

一夏Side

「え〜と待ち合わせ場所は・・・」

今日はシャルと約束していた買い物の日、本当は鈴も一緒の筈だったんだけど急用があるらしく来れなかった。

「あ、シャル見つーいーん？」

シャルを見つけ、声をかけようとしたがどうやら男達にナンパされている様だ。男の一人がシャルの肩に手を置こうとしたが、シャルは触れる瞬間に身をかわし、その腕をねじ上げる。さて、あいつら退かすか。

「いでででででっ!？」

「触らないでくれますか？そのきつい香水の匂いが移ると困るので」

「な、な、ななっ・・・!？」

「お、おい！離しっーいー!!」

混乱しながら相方を助けようとしたもう一人を横から殴り、吹っ飛ばす。

「ったく、人の連れに何してんだ？」

「一夏っ！」

何故か俺をぼーっと見つめるシャル、まだ掴んだままの男の肩を更  
にねじり、脱臼の音がすると同時に男の叫び声が上がった。

その後シャルをナンパしていた男達はかなり渋い声の警官が駅前の  
派出所へ連れていかれ、朝の騒動が収まった。とりあえず謝らない  
と。

「あ、あの、一夏？」

「わりいシャル！遅れちまって！」

俺は両手を合わせ、シャルに謝る。それを見たシャルはきよとんと  
していた。

「い、いいよ。まだ時間前だし……。その、助けてくれてありが  
と一夏」

「そんなの当然だろ」

仲間を助けるのは当然のことだしな。どうやらシャルはさっきのこ  
とを随分恩義に感じているようだけど……。ここまで感謝されると  
少し恥ずかしいな。

「……………」

「・・・・・・・・」

恥ずかしさからか会話が止まってしまふ。シャルはさっきの柔術みたいな動きで少し汗をかいた様で、手の平で顔を扇いでいた。

「そ、そういうば、鈴遅いね？」

「あ、それなんだけど・・・鈴、今日急用があるらしくてよ。これないってさ」

「え・・・ええ!？」

な、なんだシャルのやつ?いきなり大声を出して・・・て言うかこんな所で大声出したら注目されるぞ。まったく。

「というわけだから、今日は二人でー」

「二、困るよ!」

「へ!？」

「そ、そんなこと急に言われても・・・準備とか、してないし・・・」

「えーと・・・なんのこと?」

「と、とにかく!困るの!」

いやそんなこと言われても・・・これないものは仕方ないだろう。

シャルはしばらく何かを考え、またいきなり大声を出した。

「じゃ、じゃあ、あのー！」

「お、おう」

「きよ、きよきよ、今日は！二人でまわろうか！」

「お、おうー！」

シャルにつられ、俺の声もついつい大きくなってしまふ。そしてまた周囲の注目を集めてしまい、シャルと一緒にカーツと赤くなりながらシヨップिंगモールに向かう。

「ふみゃー！」

「「えっ？」」

俺が少しの間ぼーとしたまま歩いたせいで誰かにぶつかった様だ。

「いた〜い」

「「い、ごめん！」」

「大丈夫!？」

ぶつかった人を見ると・・・俺達よりもかなり幼い感じがする子で左に流れた黒髪が特徴的だった。

「どうしたの〜？」



俺がぶつかった子に誰か近づいてきた。そっちの方を見ると、ぶつかった子と瓜二つの容姿をしていた。違う点はさつき子は左に流れた髪型だったが、こっちの子は真逆で右側に流れた髪型をしていた。

「この男の人がぶつかってきたの〜」

「むづ〜、ちゃんと前を確認してよね〜」

「じめん・・・」

俺はすぐにぶつかった子に謝る。すると・・・。

「「ならいいよ〜。今度から気をつけてね〜」」

二人同時に喋りだす。話すタイミングも一緒だった二人に少し驚く俺とシャル。息ぴったりだな。双子かな？

「君達双子かい？」

「うん〜」

「そつだよ〜」

「「僕達（私達）は男女の双子なんだよ〜」」

「へえ〜」

また一緒に喋る双子。多分口癖なんだろうな。

「・・・双子」

「?どうしたシャル?」

「え?う、ううん。なんでもないよ」

なんだ?シャルのやついきなりこの子達を睨みだしたけど・・・。

「・・・ねえ君達、ちよつといい?」

「ん?」

「なに?」

「「用件があるなら早くしてね」」

また一緒に言う双子について微笑んでしまう。仲が良いんだろな。

「君達何かアクセサリ持ってないかな?」

「・・・ないよ」

「・・・ない」

・・・?何だ?あの子達の空気が変わった・・・?

「ほんと?」

「「何も持って無いよ。ほ」」

双子の子達はポケットの中や服をまくり上げるが財布以外何も無く、アクセサリーの様な物も付けていなかった。それを見てシャルは何故かほっとした。

「そっか、ごめんね。いきなり変なこと聞いて」

「別に」

「いいよ」

「あまり気にしてないから」

双子の空気も元に戻る。さっきまでの雰囲気・・・子供が出す様な物じゃないけど・・・気にする必要は無さそうだな。あ、そうだ。

「君達暇？」

「うっん、暇じゃない」

「時計買いに来たの？」

「「けど、それがどうしたの？」」

この子達も時計を買いに来たのか・・・丁度いいかな？

「俺達も今日時計買いに来たんだ。良かったら一緒に回らないか？ぶつかった詫びもしたいし」

「うっん・・・」

「私達は別にいいけど」

「「そっちのお姉ちゃんはどうなの？」」

「・・・一夏が良いなら僕は構わないよ（確認したいこともあるし・・・）」

また双子を見つめるシャル。なんでそんなにこの子達を警戒しているんだ？俺にはただの仲がいい双子にしか見えないけど・・・。

「んじゃ〜」

「みんなで〜」

「「一緒に買い物しようか」」

「おっ」

「ん・・・ん」

俺はどこから回ろうかと考え、周囲を見渡す。すると・・・。

「あれ？」

「どうしたのー夏？」

「「どうしたの〜お兄ちゃん？」」

「いや、ちょっと・・・おーい、蘭！」

「・・・？え！？い、一夏さん！？」

やっぱり蘭だ。いきなり声をかけたせいで驚いていたのか、びくんと背筋を伸ばしていた。その後シャルと双子を少し見つめてから規則正しい歩調でこっちに向かう蘭。

「こんにちは、一夏さん」

「おう、今日は一人か？」

「あ、はい。ぶらっと買い物に」

「そっか。・・・あ、この前の件、ごめんな。来年IS学園に入学するんだし、学園祭見たかったよな」

「そ、そうですね。出来れば次から優先的に私にチケットを譲っていただけると・・・」

少しの間蘭と会話していると、双子の子達が聞いてきた。

「ね〜お兄ちゃん」

「そっちのお姉ちゃんと話すのはいいけどさ〜」

「「あっちのお姉ちゃんほっといていいの〜？」」

「あ！わ、わりい！紹介するよ！」

蘭との会話をベストなタイミングで切り上げ、シャルを紹介する。

「こっちはシャル。フランスの代表候補生で俺のクラスメイト」

「シャルロット・デュノアです。よろしく」

「ご、五反田蘭です。よ、よろしくお願いします。所でその子達は・  
・・・」

「あ・・・」

どうしよう・・・？この子達は別に知り合いつて訳じゃないし・・・  
ちらっと双子を見るとうっんと悩んでいる様だ。

「まあ、別にいつか。僕はリオ」

「もうう仕方ないな。私はリア」

「仲がいい双子だよ。よろしくね」

左に流れた髪型の子がリオで右に流れた髪型の子がリアか。名字は  
言っていないけど、やっぱりまだ少し警戒しているのかな？

「改めてよろしくな。えーと、リオちゃんとリアちゃんでもいいかな？  
俺は織斑一夏だ」

「へ。貴方があの？」

「確か世界で」

「唯一ISを使える男の人だったっけ？」

「まあ、何故かね」

ほんと、なんで使えるんだろうな？今だにわかって無いんだよな・  
・東さんならわかるかもしれないけど・・・。

その後ももう少しだけ自己紹介の続きをして、蘭に今月行われる「キヤノンボール・ファスト」のチケットデータを送る。その後蘭と一緒に回りたと言ったので一緒に回ることになった。ちなみに左はシャルで右が蘭、リオくとリアちゃんの二人が先頭にたち、合計五人で店内を回った。

一夏Side end

「・・・どこ行ったあいつら？」

一方、一夏達と同じ店でサジタリウスが誰かを探していた。

「まったくあいつらは・・・まあ、子供だから仕方ないか」

さっさと見つけて帰るか考えるサジタリウス。買い物も一通り済ませ、最後に二人が時計を買いたいとダダをこねたため買おうとしたが、ふと見ると二人がいなくなっていた。そのせいで彼は余計な労力を使う羽目になってしまった。

「あいつらのことだ・・・どっかで楽しんでいるんだろうな。はあ・・・」

ついたため息が出てしまうサジタリウス。ある意味彼は一番の苦労人かもしれない。

「・・・時計買ってからあいつら探すか。その方が早い」

すぐに時計店に向かうサジタリウス。ふと、その足が止まった。

「・・・織斑一夏」

彼の目的である織斑一夏が時計店にいた。ここで連れて行けば楽だが、下手をすると戦闘になり余計な被害が出てしまうため、止めることにした。

「・・・彼等の買い物が済んでーーン？」

とりあえず、この場を離れようとしたが・・・その前に気になる人物が見つけた。彼が探していた二人・・・さつき一夏にリオとリアと名乗った双子だった。

「・・・あいつら何しているんだ？」

なんで織斑一夏達と一緒に・・・？と考えるサジタリウス。声をかけようにもシャルロットが双子を警戒していたため、下手すれば自分も怪しまれる。

「・・・あいつらが彼等と離れてから声をかけるか」

やれやれ、とまたため息を吐きながら一夏達に気づかれない様の後をつけることにしたサジタリウス。やはり苦労人である。



一夏Side

「気に入ったのあった一夏？」

「うーん・・・」

時計店のディスプレイを一通り眺めたが、どれもピンと来なかった。だが、せっかくシャルが誕生日プレゼントにくれるっていうんだから、しつかり選ばないと。

「ねーお兄ちゃん」

「こっちはどーう？」

「お兄ちゃんに似合うと思うんだけど」

「ふむ・・・」

リオくとリアちゃんの双子が選んだ時計を見つめる。中々悪くないけど・・・。

「それも何かピンと来ないな・・・」

「むーざんねーん・・・」

「これならピッタリと思ったのに」

「ならお兄ちゃんはどうな時計なら良いの？」

うくん。そろそろ何とかしないと。この子達も一生懸命選んでくれてるんだし。

「そっぴや、蘭は時計持ってるのか？」

「え！？いや、その……ないです。携帯電話の時計しか……」

「だよなあ」

携帯電話の時計で充分だろ？わざわざ腕時計買う必要なんて無い気がするし……。

「ダメだよ二人とも。特に蘭ちゃんは女の子なんだから、おしゃれなのしないと。あの子達を見習いなさい。ちゃんと選んでいるですよ？」

「は、はい」

リオくんとリアちゃんの二人は既に買う時計が決まっている。双子だけにペアの時計だった。

「でも、時計ってお小遣いだけだと中々買えませんし……」

「そっか。代表候補生は一応国に所属している公務員に近いから支給金があるんだよね。一夏はまだ候補生じゃなかったっけ？」

「ああ、まだ国際IS機関での審議が長引いてるらしい」

「ふーん。それにしても長いよね」

だよなあ。もう九月というのに進展していない。やっぱり俺が世界で唯一（今は四人だけ）ISを伝えるせいだろうな。「白式」開発の件で東さんが一枚噛んでるってのもあるかもしれないが。

「それにしても」

「このままじゃ」

「お兄ちゃんの腕時計決まらないね」

「そうだなあ・・・」

いつの間にか時計を買い終わった双子の子達の言う通りまだ決まっていない。そろそろ決めないとなあ・・・。

「じゃ、じゃあさ・・・僕が決めようか？」

「それはよさそうだな。シャルってセンスいいし」

「そ、そう？じゃあ、決めるね」

「・・・」

？どうしたんだる蘭？ぱあっという表情になるシャルと何故か反対に困った様子だった。

「蘭ちゃんも一緒に選ばうよ。せつかくなんだし。値段も気にしないでいいからね。リオくとリアちゃんもそれでいい?」

「は、はい…」

「それでいいと思うよ〜」「」

「おいおい、あんまり高いのは困るぞ」

「ふふっ、一夏が気にしちゃってどうするのさ。もらう側なのに」

「いや、そうだけど・・・あんまり高いやつだとつけるのためらうぞ」

つけるならそれなりの値段の方がいい。その方が気楽に付けれる。

「なら、高校生がアルバイトして買える程度にするよ。それならどう?」

「まあ、それなら・・・あ、ちゃんとシャルの誕生日に同じくらいのプレゼント渡すからな。勿論、蘭も誕生日プレゼントやるからな」

「ふふっ、ありがとう」

「は、はいっ!ありがとうございます!」

シャルと蘭が嬉しそうに返事する。すると・・・。

「いいな〜」

「私達も」

「お兄ちゃんからのプレゼント欲しいな」

「えっ!？」

リオくとリアちゃんまで欲しいと言い出した。ど、どうしよう？シャルや蘭はともかく、この子達のはちよつと……。俺が困った顔をすると二人が笑い出した。

「あはは」

「うふふ」

「冗談だよ お兄ちゃん」

「え？そ、そつか……。からかわないでくれよ二人共……」

「あはは(うふふ)、ごめんね」

「他に買ってくれる人がいるから大丈夫だよ」

「……?この子達今「買ってくれる人」って言ったけど……普通親が買ってくれるって言わないか？」

「ねえ二人共、その「買ってくれる人」って、一体誰かな？」

「……」

シャルが二人に話しかけると、また雰囲気が変わった。何だ?この

雰囲気誰かに似ている……？

「……僕達の〜」

「……保護者みたいな人〜」

「……両親のいない僕達（私達）にとって大切な人だよ」

「い、いめん！」

「気にしないでいいよ」

この子達も両親がいないのか……。シャルもまずいことを聞いてしまったと気づきすぐに謝る。シャルの母親はもう亡くなっているし、父親はろくでもないやつだ。両親はいないも当然に近い。この二人とある意味同じ境遇と言える。だから、謝っているのだろう。

「ほんとにごめんね二人共（やっぱり気のせいだよね……）」

「……いいよ。別に〜」

「……最初は悲しかったけど……」

「もう慣れたから、それに一人じゃないから寂しく無いよ」

そう言い、ニコツと笑う二人、強いんだな……。

「ね〜お兄ちゃん達〜」

「そろそろさ〜」

「お兄ちゃんの時計選ばうよ」

「・・・そうだな」

暗い雰囲気吹き飛ばすためか、二人が話を戻そうとする。それからシャルと蘭とリオくんとリアちゃんの四人でプレゼントを選び十分後、一つの腕時計を持ってきた。ゴールドホワイトの輝きが綺麗な金属製の白い時計だった。

「これならシルバーよりも一夏に似合うと思うよ。右手のガントレットも白だし」

「僕達（私達）も良いと思うよ。両方白ならピッタリだしね」

「わ、私もいいと思います！」

「ああ、蘭も選んでくれてありがとう。勿論、リオくんとリアちゃんもね」

「こ、これくらい朝飯前です！」

「む。何かオマケみたいな言い方。ま、いいや」

時間を見ると、既に十二時を過ぎている。もう昼飯の時間だなと思うとリオくんとリアちゃんが同時にぐぐとお腹を鳴らす。こんな時まで一緒なのか？

「お腹空いた」

「はは。じゃあ一緒に食べようぜ。ぶつかった詫びも含めて奢るぞ？勿論蘭の分もな」

「ん〜。じゃあ、せっかくだからおねがい」

「い、いえ！自分の分は出せます！」

「そう言っなよ」

シャルが店員から腕時計を受け取ったのを確認してからどこで食べるを考え、向こうのオープンカフェにすることにし、シャルを先頭に店内に入った。ちなみにメニューは蟹クリームスパゲッティ、  
・一瞬キャンサーを連想してしまったのは気のせいだろう。うん。

ウェイターさんがランチを持ってくるまで少し会話していると何故か蘭が俺とシャルが付き合ってるのかを聞いてきた。俺がそれを否定すると蘭はホツとし、リオくとリアちゃんがやれやれといった感じで頭を振っていた。そんなやり取りをしているとすぐにランチが運ばれてきた。流石にウェイターさんが一度に五枚の皿を持ってきたのには驚いた。

「お待たせいたしました」

すぐにテーブルに並べられる皿。全体的にほぐされた身がトマトクリームと絡んでいて、いい香りを出していた。後ほどデザートをお持ちしますと告げ、テーブルを離れるウェイターさん。俺達は早速パスタを食べることにした。皆で楽しく話しながらパスタを食べ終え、デザートの時間になった。



「ん？この付け合わせのアイス、全員違うな」

「本当だね。どうしてかな？」

「えっと、私のがストロベリー、一夏さんがバニラ、シャルロットさんがチョコで・・・」

「僕がグレープで」

「私がレモン」

「全部美味しそうだね」

確かに、そっだ全員違う味なら・・・。

「なあ、どうせなら食べさせ合いつこしよつぜ」

「えっ！？あ、あの一夏さん。今なんて・・・」

「いや、だからさ、食べさせ合いつこしなйкаなつて」

「！……いたたたた！」

「ど、どうした!？」

「な、なんでもないです!」

いやなんでもないことないと思うぞ？多分大丈夫・・・だよな？

「・・・お兄ちゃんてさ」

「・・・ほんと女たらしだよね」

「ど、どういふこと？」

「別に？」

な、なんなんだ？女たらしって・・・しかもシャルや蘭までうんうんと頷いているし・・・。

「と、とりあえず俺のバナナからな。シャル、あーん」

「あ、あーん・・・お、おいしいね」

「そうか。そりゃよかった。次蘭な。はい、あーん」

「あ、あーん・・・」

何故かしばらくスプーンを加えたままになった蘭。・・・どうしたんだろ？

「蘭。まだアイス残ってるか？」

「！？い、いえ！あの「ごちそうさまでした！おいしかったです！」

「よかった。次はリオくんがいい？」

「いいよ」

「その次私」

「「あ〜ん」」

口を開けたまま待つ二人。まるで雛鳥にエサを上げる気分だ。

「はい、リオくん。あーん」

「はむ、ん〜。おいし〜」

「はい、次リアちゃん。あーん」

「はむ、う〜ん。あま〜い」

「「おいしかったよ。お兄ちゃん」」

同時に笑顔になる二人。何か和むな〜。良く見るとシャルと蘭も似たような感じでシャルは少し悶えている様な・・・？うん。気のせいだな。

その後シャル、蘭、リオくん、リアちゃんの順番で食べさせ合いっこをした。ちなみにシャルや蘭がまたリオくんとリアちゃんの間を見たりとリアちゃんを見て和んでいたのは、余談だ。

昼食を食べ終えた後、それぞれ目的の店を見て回り、駅前に行った。リオくんとリアちゃんの二人がそろそろ帰らないとまずいと言ったため、駅前で別れることにした。・・・ちよつと寂しいかな。

「ありがとね〜」

「お昼ご飯奢ってくれて〜」

「はは、いいよ。俺がぶつかった詫びをしたただけだし」

「それでもありがと、お兄ちゃん」

「こっ素直に言われるとやっぱり嬉しいな。これが子供の純粹さってやつだな。」

「家に帰るの？」

「……うん」

「……そろそろ帰らないと」

「怒られるかもしれないし……」

「この時間だとさっき言ってた保護者さんも心配するだろうし……もう帰った方がいいな」

最近秋になったせいもあって日が暮れるのが早い。暗くなる前に帰った方がこの子達の保護者さんも安心するだろう。

「バイバイ。リオくん、リアちゃん」

「バイバイお兄ちゃん」

「また会おうね」

そう言い、二人は手を振りながら別れる。

「……今度は戦場でね」

「……え？」

二人が何か言った様な気がしたが、聞き取れなかった。向こうを見るがあの子達の姿は見えなかった。

その後、蘭を家まで送り、俺とシャルはIS学園の帰路についていた。

「……なあ、シャル」

「何一夏？」

「お前なんであの子達を警戒していたんだ？」

「え……そ、そんなこと……あるだろ？」

それが気になっていた。時計を選ぶ時もちよくちよくだが、二人を警戒している様な視線で見つめていた。まるで敵を見張っているかの様に。

「・・・一夏。キャンサーとサジタリウスってそれぞれ星座の名前だよな？確かに十二星座の蟹座と射手座」

「ああ」

「・・・あの子達が気になったのは双子って所なんだよ。十二星座の一つにあつたよね双子の星座が」

「双子座・・・!？」

あの二人がキャンサーやサジタリウスの仲間・・・!？」

「け、けどあの子達どう見てもまだ子供だぞ？」

「うん・・・僕もそこが気になったんだけど・・・あの子達の雰囲気が変わった時、まるで軍人みたいな感じを出してたから・・・」

そうか・・・あの時の雰囲気・・・転校してきた時のラウラに似ていたんだ。

「けど・・・気のせいじゃないか？機体もなかったし、雰囲気もたまたま似ていただけかもしれないぞ？」

「・・・そうだね。僕もそう思うよ。なんで子供を警戒したんだろね。僕が言ったこと忘れて一夏」

「ああ」

この後玄関で筭に出くわし、今日のことを話しながら皆と一緒に夜ご飯を食べた。

—夏Side end

—夏とシャルがIS学園に着く少し前、リオとリアが楽しそうに歩いていた。

「楽しかったね〜。リア」

「うん。そうだね〜リオ」

「……さて、そろそろ出てきたらどう？サジタリウス」

「……たく、何しているんだお前は。しかも、名前まで言いやがって……」

呆れそうな表情を出しつつも二人の背後から現れるサジタリウス。  
—夏達に気づかれぬ様に気配を消していたが、この二人はすぐに気づいていた。

「あはは〜。ごめん」

「うふふ〜。そう怒らないですよ〜」

「「名字は言って無いんだからさ」」

「……当たり前だ。機体を預けといて正解だったな。さっさと帰

るぞ・・・」「ジエミニ」「

」「はっい」「

そのままサジタリウスとジエミニは闇の中へと消えた。



## 第四十七話（前書き）

束と男の話です。次からキャノンボール・ファスト編です。

## 第四十七話

東Side

私は今黒くんと一緒に開発室で「ラグナロク」の修理をしている。ちらつと時計を見ると十二時になるうとしていた。

「ふう、ちよつと休もつか黒くん・・・」

「・・・そうだな」

そろそろ昼ごはんの時間のため、修理を一体中止する。それにしても・・・。

「眠いね〜ふああ〜・・・」

「・・・一週間続けて徹夜で作業すればそうなるだろ・・・」

そう言う黒くんも結構フラフラしていた。私程ではないが、黒くんも寝る間を惜しんで作業をしている。私は結構慣れているからいいけど、黒くんはそうでも無いからキツイだろう。

「・・・でも流石に一週間続けての徹夜はキツイね・・・」

「・・・普通の奴なら倒れるぞ・・・」

普通の人なら三日も徹夜できれば大したものだろう。我ながら良くやるもんだね・・・。けど、まだ寝るわけには行かないんだよね・・・。

「・・・私は昼ごはん食べたらず業再開するね・・・。黒くんは少し寝てていいよ・・・」

「・・・お前まだ続ける気が・・・？そろそろ寝ないと死ぬぞ・・・」

「あはは・・・珍しいね。黒くんが私を心配するなんて・・・明日は雨かな？・・・？」

あゝ駄目・・・、喋るのも辛くなってきた・・・。さっさとご飯食べよ・・・。

「・・・あれ？」

食堂に向かおうとしたが、足が思うように動いてくれなかった。・・・もしかして今の私の状態ってかなりヤバイ？

「・・・はあ。まったく」

「・・・？何黒ーキャッツ!？」

パンツ！と黒くんが自分の両頬を叩いて気をはつきりさせると、いきなり黒くんが私を抱き抱えてきた。いわゆるお姫様抱っこって奴だね。って！

「な、何するんだい黒くん!？」

流石にこの歳になってのお姫様抱っこはちょっとはずかしいよ!？とりあえず手をバタバタしようとしたが・・・さっきと同じく上手

く動かすことができなかった。

「……お前まともに動くこともできないのか……。仕方ない運んでやる……。後飯食ったら寝ろ、いいな？」

「け……。けど……」

「……寝るか、眠らされるかどっちがいい？」

「……自分で寝ます」

「……それでいい」

黒くんに眠らされるなら自分で寝た方がよい……。過去に受けた拷問を思い出す私……。まあ、でも今は黒くんの優しさを素直に受け取るとしますか。私がまだ必要だからって理由もあるだろうけどね。

黒くんにお姫様抱っこされたまま食堂に到着。それを見たくーちゃんか少し驚いていた……。何か羨ましそうな表情で見っていた気もしたような……。まさかね。

「……あの束さま、黒さん。なんでそんな状態に……？」

「あはは……。最近少し寝てなかったせいか身体がまともに動かなかったんだよね……。だから、黒くんに抱っこされたまま連れて来られたって訳」

「……少しじゃないだろ……。一週間も徹夜してたんだ。こうなって当然だ」

「・・・東さま。もう少し自重してください」

自重？そんな余裕無いよ。寧ろこうしている時間さえも勿体無いつて所なのに。・・・そんなこと言ったら黒くんに気絶させられそうだから言わないけど。

黒くんが椅子に近づき、私を座らせる。さっさとご飯食べて作業ー  
ーごめんなさい。食べたらずぐ寝るから睨まないで黒くん。てか心読まないでよ・・・。

「・・・これぐらいなら誰でもわかる。余計なことを考える暇があるならさっさと食べ」

「・・・はい」

「どうぞ東さま、黒さん」

もうすでにテーブルに並べられているご飯を食べる。メニューは佃煮とすまし汁に酢に浸したサラダと玄米ご飯・・・最近あっさりしたものがかりだね。もっと脂っこいものも食べたいな。唐揚げとか、ハンバーグとか、トンカツとかさ。

「・・・そんな状態で食べれる訳無いだろ。下手すれば胃もたれを起こすぞ?」

「もうしばらくはこういうメニューだけです」

「ええ・・・」

はぁ・・・、こうなったら尚更作業を――嘘です。考えてません。だから睨まないで黒くん。

「・・・食べよ」

「・・・そうしろ」

「そうしてください東さま」

ま、二人共心配してくれてるんだし・・・今日はゆっくり休みますか。・・・そうしなかつたら黒くんに気絶させられるから、それが嫌でやるわけじゃないからね。決して。

「うん。良く寝た」

あの後自分の部屋に戻り、ベッドで横になってぐっすり寝た。で、今起きた所。ちなみに部屋に戻る時も黒くんに運ばれた。(お姫様抱っこの状態で)

「・・・今何時かな？」

そんなに寝てないと思うけど・・・。

「え〜と・・・今は十二時・・・？」

・・・うわ〜、約十二時間寝てたの？勿体無い。さっさと作業しま

すか。

「起きましたか東さま」

「くーちゃん？」

部屋を出ようとしたらいきなり扉が開き、くーちゃんがいた。・・・  
あれ？なんかおかしいような・・・？

「・・・くーちゃん」

「はい？」

「なんで起きてるの？もうすぐ夜の十二時だよ？」

夜食はくーちゃんではなく、黒くんが作っている。くーちゃんには  
ゆっくりしてほしいからね。

「・・・あの、今「昼」の十二時です」

「・・・はい？」

はて？今くーちゃんが「昼」の十二時って言ったけど・・・え？ま  
さか、十二時間じゃなくて二十四時間・・・つまり一日まるごと寝  
てたの？うわ・・・最悪。

「本当に心配しました。三日も寝ていたので・・・」

ホワット？」三日「？・・・」

「ええええええええええー！？私三日も寝てたのー！？」

「（ビクツ！）は、はい！黒さんも心配していました！」

「く、くーちゃんほんと！？私本当に三日も寝てたの！？」

「は、はい！今日の日付を確認すればはっきりわかるかと・・・」

私は急いで日付を確認する。・・・くーちゃんの言う通り、三日も経っていた。そ、そんな・・・三日も寝てたなんて・・・。

「・・・うるさいぞ。一体ー！ん？起きたか篠ノ之束」

「「起きたか」じゃないよ！！どうして起こしてくれなかったんだい！？」

作業が大幅に遅れちゃったよ！ど、どうしよう・・・！？

「その・・・何度も起こそうとしたのですが・・・いくら大声で呼んでもまったく目を覚まさなかったの・・・」

「じゃあ、叩き起こしたりすればいいじゃん！！他にも物をぶつけるとかー！」

「・・・黒さんが一度「ミヨルニル」で叩き起こそうとしていました」

「一生懸命起こしてくれてありがとね、くーちゃん」



何？さつきまでと言ってることと違ってる？あつはっは、気のせいだよ。私の命の危機を感じたからじゃないよ。断じて。

「……本気でやりたかったんだがなあ……」

うん。聞こえない。私は何も聞いてない。黒くんが私に「ミヨルニル」を本気で叩き込もうとしていたなんてまったく聞いてないよ。

「え〜と、クーちゃん。ご飯できてるんだっけ？じゃあ、行こっか」

「は、はい」

「……ふむ、この手は使えそうだな」

「止めてよ！もし、「ミヨルニル」を生身で受けたら間違いなく束さん死んじゃうよ！」

「……大丈夫だろ？篠ノ之東なんだから」

どういう意味かな！？私が人外生命体とでも言いたいのかい！？……寧ろ黒くんの方が人外生命体ぽいけどなあ……

「……誰が人外生命体だ。お前や織斑千冬と一緒にするな」

「だから、心を読まないでよ。大体人外生命体ちーちゃんを一对一で負かす程の実力を持つてるくせに」

「……言うことと本音が逆になっているぞ？」

あれ？まあ、いいや。ここにちーちゃんはいないんだし……。

ーゾクッ!!

「!?!」

どこからちーちゃんの強烈な殺気を感じた。え？まさか聞こえた？  
そ、そんなはずないよね！気のせいだよな！？

「・・・どうやら「聞こえた」というより「感じた」らしいな」

うそお!?なに!?人間から進化した存在になったのちーちゃん!  
?・・・黒くんの言う通りちーちゃんって人外かも・・・。

「・・・燃費の悪い「雪片」だけで世界一になった時点で既に人外  
だろう」

じゃあ、その人外に勝つ君は一体なんなのかな？

「・・・どこにもいる「普通」の人間だ」

無理あるでしょ。「普通」ってのは私みたいな人のことを言うんだ  
よ？

「・・・それはないな。仮に町のアンケートで「篠ノ之束は普通か  
否か」と質問したら一万人中一万人が否と答えるだろう」

「なんで!?!」

私はどこにもいる至って「普通」の人間なのに!

「……「普通」の人間がたった一人でISを開発できるのか？」

「あ、そっか……。じゃあ、ISを開発した「普通」の人間ってのはどう？」

「……あほ」

ちよつと！あほって何！？大体あほって言った人の方があほなんだからね！

「……子供か？まあいい、さつさとくうか。ったく……。話が脱線してしまったせいで時間がかかってしまった」

「君のせいでしょ！何私のせいにしようとしているのかな！？」

「お、落ち着いてください東さま」

「うー！」

くそ！復讐したい！やっぱりあの時のデータ（黒くんの女装写真）少しでも残しておくべきだった！……。けど全部消さなきゃ死んでたからね……。何かいいアイデアは無いかな？

「……ほら、食いにいくぞ」

「むー！」

「はい」

この後ちよつとイライラしたままだったから、やけ食いしてやった。

・・・おかげで動きづらくなっただけ。ちなみにその様子を見ていた黒くんからまたあほって言われた。いつかぜったいに復讐してやるー！ー！！

??? Side

俺は昼ご飯を済ませ、少し休憩している。後五分ぐらいだったな。

「・・・くくっ」

やはり篠ノ之束をからかうのは楽しいな。だが、あまりやり過ぎると思わぬ反撃をされる可能性がある。・・・この前の学園祭の時の様に。

「・・・まあ、やり過ぎないようにすればいいか」

それに奴とこんな風に戯れるは今の内だけだしな。・・・何を考えてる俺は、奴は殺すターゲットの一人だ。なのに何故こんなことを・・・？

「・・・作業するか」

余計な考えを振り払うため、「ラグナロク」の修理作業をすることにした。すぐに開発室に向かい、到着すると既に篠ノ之束が作業をしていた。

「あれ？黒くん、まだ休憩時間は残ってるはずだけど？」

「・・・身体を動かしたい気分だな。それより「ラグナロク」の修理はどうだ？」

「やっぱり、八割ぐらいだね。後制限はどうする？」

「・・・制限を何とかできるのか？」

「できるみたい。ただ、かなり複雑なプロテクトだから今からだと良くて一つだね。それに間に合うかどうかとも分からないし。後、「ユグドラシル」は無理みたい」

流石にあれは無理か。使えれば楽なのだが。

「・・・今のペースで修理と制限両方ともこなすのは無理がある、か」

「流石にね。修理か制限かどっちかだね」

「・・・どちらか一つか。二兎を追うものは一兎を得ず・・・と言った所だな。さて、どうする？武装か機体か・・・どちらを選ぶか、俺はしばらくの間悩み・・・数分後決まった。」

「・・・篠ノ之束、・・・の方を頼む」

「いいの？」

「・・・構わん」

「オツケー。じゃあ、今日からそうするね」

「・・・では俺もやるか」

機体を少しでも良くしないと。ただ今度の戦い・・・かなり厄介なことになるな。

(俺以外に五人もいるからな・・・。今の「ラグナロク」で倒せるのは精々一人か二人が限度だろう)

場合によっては・・・今度の戦いを避ける必要が出てくる。新しい武装次第だな。

(引くのも勇気、か。・・・次の武装を見てからの方がいいな)

そろそろ防御系の武装がほしい所だ。もし、そうでなければ・・・。

(「キャノンボール・ファスト」に出ない方がいいな)

今の状態でキャンサー達に勝っても無事では済まない。そんな状態で織斑一夏を殺せるかどうか・・・、それに防御系の武装が出てきても無理はできない。下手をすればまた、「ラグナロク」を修理する羽目になる。

(・・・どうするか)

俺は今度の戦いをどうするか考えつつ作業に取りかかった。

????Side end

## 第四十八話（前書き）

キャノンボール・ファスト編スタートです。本格的な戦闘は次回からです。

## 第四十八話

「キャンノンボール・ファスト」当日。キャンサー、サジタリウス、ジェミニの計四人が会場に近づいていた。

「おーい、到着まで後分ぐらいだあ？」

「・・・二時間と言った所だな。やはり少し遅れるな」

「仕方ないよ」

「機体の修理に」

「「ぎりぎりまで時間を使ってたからね」」

「・・・ごめん」

申し訳なさそうに謝るキャンサー。彼の機体が一番損傷していたため、時間がかかってしまい結果、遅れることになったのだ。・・・それでも機体は完全に修復できていないが。

「・・・キャンサー、ジェミニ、お前らの相手はわかっているな？」

「おっ」

「「とうぜん」」

少し碎けた言い方のキャンサーと陽気な言い方のジェミニ。少し呆れながらもまあいいかと割り切るサジタリウス。戦いの前とは少し



思えない状況だ。

「……ジェミニ」

「「な」に」？」

「……本当に相手を変えなくても良いのか？」

「俺が変わってやってもいいんだぜ？」

「「……いいよ別に」。やるからにはちゃんとやるから安心してよ」

余計なお世話だ、言わんばかりに断り、少しすねるジェミニ。こつこつという所はやはり子供だ。

「……なら任せる。だが気をつける、お前は俺達の中で一番経験が少ない。技術や機体の性能が勝っても経験の差を付かれないように常に集中しろ」

「はい」

「わかりました」

「「ま、そんなことあり得ないと思っけど」」

自信過剰のジェミニに不安を感じるサジタリウスとキャンサー。全員同じ訓練は受けたが、ジェミニだけがまだ戦闘をしたことがない。いわゆる井の中の蛙と言っやつだ。

(はぁ・・・やはり子供か。戦いにおいて慢心は死に繋がると言うのに・・・)

「おい、ジエミニ」

「？」何キャンサー」

「・・・調子に乗ってんじゃねえぞ」

「(ビクッ!!)」

いきなりキャンサーがジエミニに本気の殺気をぶつける。あまり殺気を感じたことの無い二人はすぐに怯えてしまう。

「・・・戦場つてのは、こんな殺気が常に漂ってるんだよ。この程度で怯えるんじゃねえ」

「・・・はい」

「・・・俺達はこれから命懸けの「戦い」をしに行くんだ。んな気楽な態度で行ったら死ぬぞ。わかったな」

「・・・ごめんなさい」

キャンサーが叱咤するとさっきまでと違って気を引き締めた表情になるジエミニ。それを見て驚くサジタリウス。

「・・・驚いたな」

「ん？何が？」

「「あのキャンサーが人を叱るなんて驚いたな（驚きだね）」」

「どっぴい意味だあ!？」

「「「だって（いつも叱られてばっかだろ（だし）」」」

「・・・ぐすん」

事実を言われ、少し涙目になるキャンサー。・・・本当に戦う前なのだろうかと思う光景である。

「・・・さて、そろそろ真面目に行くか。一気に加速するぞ」

「「りょうかい」」

「・・・ちえ、了解」

全員、脚部の「展開装甲」を最大出力で使用し、一気に加速した。

?????Side

「・・・さて、ゆっくり待つか」

会場に到着した俺は一般の観客席に座り、レースを眺めることにし

た。

『おーい、黒くーん』

「……なんの用だ」

いきなり篠ノ之束から通信が入る。何か用事があるかもしれないのでとりあえず出る。

『今日遅れるって、言ったけど……ご飯どうするっ?』

よりによってそれかよ、とツッコミたくなってしまっ。どうせならなんで遅れるの?とか言っってほしいものだ。

「……好きにしてくれ」

『オツケー、後機体の調子はどう?』

「……微妙だな」

『やっぱそんなものか。ま、頑張ってね』

「……ふん」

通信が切れ、また会場の方を見る。今やっているのは二年生のレースで、もうすぐ終わろうとしていた。

「……もうすぐ、か」

さて……一体どうなるやら。

今行われている二年生のレースは抜きつ抜かれつのデッドヒートのようで、最後まで結果がわからない状態らしい。

「あれ？この二年生のサラ・ウェルキンってセシリアと同じイギリスの代表候補生なのか？」

「そうですね。専用機はありませんけど、優秀な方でしてよ。わたくしも操作技術を習いましたもの」

「へえ」

ちなみにセシリアは既に「ブルー・ティアーズ」の高速機動パッケージ「ストライク・ガンナー」を展開していた。やる気満々だな。俺は「白式」を展開し、レースの準備に取りかかる。ピットには俺とセシリア以外の専用機持ちの篤、鈴、ラウラ、シャルが控えている。何故か四組の専用機持ちだけがいないけど・・・なんでだろう？

「それにしても、鈴のパッケージってかなりごついな」

「ふふん。いいでしょ。こいつの最高速度はセシリアにも引けを取らないわよ」

鈴の機体「甲龍」の高速機動パッケージ「風」。増設スラスタが

四基も積んでおり、妨害のために衝撃砲が真横に向いている。更に追加胸部装甲が前に大きく突き出していた。・・・あれ喰らったら痛いだろうな。

(まさにキャノンボール・ファスト用のパッケージって感じだな)

そう考えると俺達の中で一番有利な状態ということになる。セシリアのは本来強襲離脱用、他の皆は間に合わせの高速機動仕様。やはり鈴の方が有利だ。

「ふん。戦いは武器で決まるものではないということを教えてやると、箒が話しかけてきた。エネルギーの消費が大きい「展開装甲」はマニュアル制御にすることで解消したらしい。

・・・戦いは武器で決まるものではない、か。「黒騎士」やキャンサーを見るととてもそうは思えなくなってしまう。はっきり言っであいつらは異常だ。驚異的な機体と実力、まさに異常としか言えない存在だ。・・・あいつら本当に何者なんだ？

「戦いとは流れた。全体を支配するものが勝つ」

「黒騎士」達のことを考えている間にラウラも話しかけてきた。三基の増設スラスターを背中に搭載している。専用のものではないが、十分な性能を持っているらしく、今回のレースに勝つ自信もあるようだ。

「皆、全力を尽くそうね」

最後にシャルが話しかけてきた。増設スラスターを両肩と背中に計

三基搭載している。

その後、山田先生が俺達にスタートポイントまで移動する様に伝え、マーカー誘導に従い、俺達はスタート位置まで移動した。今日は「白式」の調子もいいし、頑張らないと。・・・けど。

(・・・何故か嫌な予感がする)

また、何かが起こるような・・・そんな予感がする。

『それではみなさん、一年生の専用機持ち組のレースを開催します  
』！

大きなアナウンスが響き、ハツとする。今はレースに集中しないと。

俺達は各自位置に着き、スラスタを点火させる。俺は高速機動用のハイパーセンサー・バイザーを下ろし、集中する。

3・・・2・・・1・・・ゴー！

スタートと同時にセシリアが飛び出し、俺達も後を追う。あっという間に第一コーナーを通過し、セシリアを先頭にした列ができた。

「一夏、先に行ってるわよ！」

「あ、おい！」

「喰らいなさい、セシリア！」

横になっていた衝撃砲を前方に向かって連射する。セシリアがそれ

を横にロールしてかわした隙に鈴が圧倒的な加速で抜き去る。

「やりますわね・・・!!」

「ふふん!遅いわ!」

「――甘いな」

いつの間にか鈴の背後にぴったりと付いていたラウラが前に出る、  
空気抵抗が一番少なく加速しやすい場所でチャンスを待っていたよ  
うだ。

「しまった!」

「遅い!」

鈴が衝撃砲を前に放とうとしたが、先にラウラのリボルバー・キャ  
ノンが発射された。直撃こそしていないが、高速機動状態で被弾し  
たことで鈴は大きくコースラインから逸れる。さらにラウラの牽制  
射撃が俺にも向かってきたが、「雪盾」のシールドで防いだ。他の  
皆が回避に集中する間に俺は一気に加速する。だが、ラウラの方が  
技術は上のためコーナーのたびに差が広がってしまう。

背後を見ると徐々にシャルが接近していた。俺は「雪盾」のガトリ  
ングを後ろにばらまくが、シャルはそれを防ぎながら俺を追い抜こ  
うとした。

「悪くは無いけど、威力が足りないね!」

「行かせるか!」



背後の「雪空」をシャルに振るうが、その隙を狙いシャルは加速。「雪盾」のシザーズモードで捕まえようとしたが、僅かに届かなかった。

「お先に！」

少しずつシャルとの差が広がる。それを追おうとすると赤いレーザーが襲いかかってきた。これは・・・箒か！

「先に行かせてもらっぞ！」

「そう簡単にいくと思うなよ！」

箒は「雨月」と「空裂」、俺は「雪羅」と「雪盾」で格闘戦を行なう。一瞬の隙を狙い、「雪盾」で箒を捕まえた。

「しまった！」

「少し下がってもらっぞ！」

俺は接近しようとセシリアと鈴に向かって、箒を投げ飛ばした。三人が対処している間に加速する。

「くっ！」

「厄介ねあれ！」

「捕まらない様に気をつけなければ・・・！」

「レースはこれからだぜ！」

レースは更に白熱。それが二週目に入った時、異変が起きた。突如上空から飛来した二機、その片方がシャルやラウラの「前方」を撃ち抜いた。

「！？」

「あれは・・・「サイレント・ゼフィルス」と・・・」

「「タウラス」！？」

俺達が上空を見上げると二人の襲撃者が俺達を見下ろしていた。

一夏Side end

## 第四十九話（前書き）

続きです。上手く描けてるかな・・・？

## 第四十九話

??? Side

突然現れた二人の襲撃者、この非常事態によって客達はパニックに陥った。スタッフが客達を避難させるため誘導しているが、パニック状態の客達には聞こえていなかった。

「・・・まさかエムだけではなく、タウラスまで来るとはな・・・」

俺はこうなることを予想していたため、いつも通りだ。・・・タウラスがエムと一緒に襲撃しにくることまでは予想できなかったが。

「・・・来い」

直ぐ様「ラグナロク」を展開する。だが、まだ待機しておく。サジタリウス達が来ていないからな。

「・・・シヴァ」「テュール」「レーヴァテイン」・・・「スユン」展開」

俺は今使える四つの武装の内三つと新しく使える様になった武装、「スエン」を展開し、左腕に装着させる。・・・やっと防御系の武装が出てきてくれたか。これで少しは楽になる。

「・・・探知不可能か。これでは何時来るかわからんな」

サジタリウス達の場所を特定しようとしたが、どうやら奴等の機体も俺の機体並の高いステルス能力を持っていたため、特定できな

った。俺の機体は探知能力だけは普通の機体を少し上回る程度だからな。

「……この時代以外の機体と戦うことは想定していなかったしな。仕方ないか」

少しの間奴等の戦いを眺めようとしたが……。

「……！」

。タウラスが織斑一夏に向かって攻撃した。何とか防いだ様だが……。

「……いい度胸だな」

俺の獲物を取ろうとするとは……後悔させてやる。

俺は「ラグナロク」のステルスを解除し、戦場に向かって跳んだ。

一夏Side

「大丈夫か二人とも！」

「う、うん……」

「……あいつわざと外した様な……」

タウラスがわざと外した？なんで？奇襲したにしては変だな・・・？

「・・・余計なことを考えている暇は無いぞ」

タウラスが続けて攻撃を行なう。俺は「雪羅」と「雪盾」両方のシールドを駆使して防ぐ。

「くっ！！」

「一夏さん！」「サイレント・ゼフィルス」はわたくしが！一夏さん達はタウラスを！」

「おい！セシリア！？」

俺の制止を振り切り、一人で「サイレント・ゼフィルス」を纏った襲撃者に向かっていくセシリア。けど、今のセシリアは通常時と違い、ビットが使えない。それを補うために大型B Tライフルを装備しているが、火力が下がっているには変わらない。

俺達がセシリアを援護しようとするが、タウラスが立ち塞がる。

「そこを退け！タウラス！」

「・・・そうしたいのなら俺を倒すんだな織斑一夏」

タウラスは俺達に向けて一斉発射を行なった。俺達がそれを防いでいる間にタウラスは俺目掛けて接近、ビームを纏った拳を向けてきた。「雪片式型」と「雪閃」で対抗しようとしたが・・・黒い閃光がタウラスの接近を阻止した。これって・・・まさか！？

「黒騎士」・・・!？」

「・・・ふん」

「・・・お前が「黒騎士」か」

「黒騎士」の「シヴァ」から放たれたビームがタウラスの接近を阻止していた。・・・俺を助けた？」

「・・・さつさと仲間を連れてセシリア・オルコットの元に行け織斑一夏。戦いの邪魔だ」

「・・・なんで俺を助けるんだよ」

「・・・助ける？笑わせるな、人の獲物を取ろうとしたコイツを先に殺す。それだけだ。貴様を助ける気などまったく無い」

「・・・やっぱりか。けど、コイツのおかげでセシリアを助けることができる。・・・少し複雑だな。」

「・・・さつさと行け。どうやら他の客も来たようだからな」

「・・・客？」

「・・・俺のことか？「黒騎士」？」

「「「「「!」「」「」

「・・・来たかサジタリウス」

俺達が話している間に乱入したのか、サジタリウスが俺達の背後から現れた。

「……役者が揃った、と言った所か」

「……始めるぞ」

「……邪魔するやつは全員殺す。それだけだ」

「黒騎士」対タウラス対サジタリウス……!？」

「……皆！セシリアを助けに行くぞ！」

「良いのか！？奴等を放つて置いて!？」

「俺達が割り込んだ所ですぐやられるだけだ!！」

「……確かにその通りだ。今の我々では奴等の障害になることすらできん……!！」

「ならセシリアを助けに行った方がいいわね……」

「行くぞ!！」

「……ああ(うん)！」「」「」

直ぐ様セシリアの元に向かう俺達。少しだけ「黒騎士」の方を見ると今にもぶつかりそうな状況だった。……どれだけ激しい戦いになるんだ……。



??? Side

今俺はタウラスとサジタリウスと睨みあっていた。・・・三つ巴の戦いか。一見BCFが無い俺が一番不利に見える。だが、今は「スヨン」がある。これで少しはマシになるな。

「・・・サジタリウス、お前が俺と「黒騎士」の相手ということは・・・織斑一夏達の相手はキャンサーか」

キャンサー・・・厄介だな。だが、奴の機体は俺との戦いでかなり損傷している。いい勝負になるかもしれんな。

「・・・外れだタウラス。彼等の相手はキャンサーではない」

「・・・何？」

タウラスは少し驚いた様だ。かと言う俺も驚いていた。キャンサーではない・・・となると・・・。

「・・・新しい仲間か」

「・・・ほう、良く気づいたな。いや、お前だからか」

「・・・俺達と同じ未来から来たやつなら気付くだろう」

「・・・無駄口を言う気は無い。お前らを倒して織斑一夏を殺さなければならんからな」

織斑一夏の所にもこいつらと同じ奴がいる以上、あまり時間をかけることはできない。・・・できれば一気に決着をつけたいな。

(「ミヨルニル」で決めたいが・・・こいつらの実力を考えると難しいな)

「あの武装」があればいいんだが・・・。使えない以上はそれ無しで戦うしかない。

「・・・ふん。確かに話している時間など無いな」

「・・・全員が敵、か。面白い状況だ」

「・・・さて、始めるぞ。三人の「規格外」による三つ巴の戦いになー!!」

「「上等だ!!」」

俺とタウラス、サジタリウスは同時に攻撃を仕掛けた。三人同時による一斉射撃が空中でぶつかり合い、凄まじいスパークが発生した。

それが止むと同時にタウラスに向かって「瞬時加速」を行いながら「ミヨルニル」を展開、タウラスに振るった。タウラスはそれを楽々とかわしながらミサイルを放つ、俺は「テュール」で撃墜しながらサジタリウス目掛けて「シヴァ」を放った。

サジタリウスも俺の攻撃を避けつつ、腰の矢の様なビットで反撃し

てきた。数は八つ、俺とタウラスにそれぞれ四つのビットが襲いかかった。

「テュール」の実弾で撃墜しようとするが、当然サジタリウスは簡単に撃墜させる気など無く、ビットを細かく動かして回避させる。しかもその間に矢のようなライフルで反撃まで行なっていた。

（こいつ……！キャンサー以上の射撃能力を持っているのか……！）

タウラスも射撃能力はキャンサーやサジタリウスに劣りはするが、それでもかなり高い。これほどとはな……。

（やれやれ、未来から来た奴は化物ばかりだな……）

……俺が言うことではないか。大体俺も未来から来たやつだし、織斑一夏達からすれば俺も十分化物だろうからな。

「……やるな」

「……これほどの実力を持っているとは……」

「……誉めた所で何を出ないぞ」

すぐに倒さなければならぬというのに……何故かこの戦いを楽しんでる自分がいる。いや、実際楽しんでるのだろう。キャンサーとの戦いと同じ様に……くくつ。

「……勝つのは」

「「俺だ!!」」

三人同時に叫びながら「瞬時加速」による突撃を行なった。

一夏Side

「セシリア!!」

「い、一夏さん・・・!!」

セシリアの元に辿り着いた俺達は襲撃者目掛けて攻撃を放つ。だが、相手は悠々とかわし、ビットとライフルの同時攻撃を放った。

「速い・・・!!」

「こいつもかなりの実力者のようだが、「黒騎士」やサジタリウス、タウラスに比べれば弱いはずだ」

「全員でかかれば勝てない相手じゃないわね」

「「黒騎士」達がない以上、今までの戦いよりは楽になりそうだな」

「・・・なめるな」

襲撃者が攻撃を再開しようとした次の瞬間・・・。

「「そつだよ。油断したら負けちゃうよ。」」

「……え？」

聞き覚えのある声がした。ま、まさか……？

「やつほー、また会ったね。お兄ちゃん」

「それとそつちのお姉ちゃんもね」

「え、え？」

「君達は……！！」

嘘……だろ？この声に話し方……。

「リオ……くんとリア……ちゃん？」

「「だいせいかい」」

襲撃者を含めて全員が声の方に振り向く、そこには二機の薄い黒色の「全身装甲」の機体が存在した。だが、その機体は少し変な形状をしていた。まるで二機で一つの機体の様な……。

「さーとと」

「あまり話すつもりも無いし」

「「戦おっか、お兄ちゃん」」

「ま、待ってくれ！君達は本当にリオくとリアちゃんなのか！？」  
信じられなかった。あの機体は「黒騎士」やキャンサー達と同じ「全身装甲」の機体だ。それはつまり・・・奴等の仲間と言うことになる。

「そっだよ、お兄ちゃん。もうこの声と話し方を忘れたの？」

「あの時は嘘の名前を言ったんだね・・・」

「酷いな～お姉ちゃん。あの時名乗ったのは本名だよ？」

「ま、もう一つ名前があるんだけどね。さて・・・改めまして、僕達（私達）が「ジエミニ」だよ」「

「ジエミニ・・・双子座」

あの時・・・シャルが予想していたことは当たってたのか・・・  
けど・・・。

「・・・なんでだ？」

「「？」」

「なんで君達みたい子まで戦ってるんだよ!？」

どうしても納得できなかった。この二人はどう見てもまだ子供だ。

俺達よりも幼い子供がどうしてこんな戦場で戦わなければいけないんだ！

「・・・僕達の」

「・・・目的を果たすため」

「それ以外に理由なんて無いよ」

「・・・君達の目的って一体何なんだ？」

「・・・教えて欲しかったら僕達を倒して捕まるか」

「・・・それともお兄ちゃんが大人しく私達に付いてきてくれるか」

「そのどちらかしか無いよ」

・・・二人の話の内容から考えて、おそらく二人はキャンサーやサジタリウスの仲間だ。そして・・・俺を連れていくのがこの子達の目的だろう。

「・・・悪いけど理由がわからない以上、君達に付いていくことはできない」

「・・・そっか」

「・・・なら」

「力づくで連れていくだけだよ！！」

言うのと同時に二人は片方に近接ブレード、もう片方にビームライフルを展開し、襲いかかって来る。が、二人の突撃を襲撃者が阻む。

「……邪魔しないでよ」

「……断る。何故私が子供の言うことを聞かなければならん」

「……そう。だったら」

「お姉ちゃんから殺してあげる」

「……っ!!」

な、なんだこの殺気……!? キャンサーよりは弱いけど子供が出すようなものじゃないぞ……!!?

「あ、あの子達本当に子供……!?」

「とてもそうとは思えないわよ……!!」

子供とは思えない程の殺気を出す二人、あまりにも強烈な殺気に全員が怯んでいた。

「……一つ言っておくよ」

「……私達の邪魔をするなら」

「お兄ちゃん以外は全員殺すから」

「ふ、ふん……! 所詮は子供、私に敵う筈が無い!」

「……リア、僕があのお姉ちゃんの相手をするよ」



「・・・いいよりオ。じゃあ私がお兄ちゃん達の相手をするね」

「戦闘開始!!」

リオくんが襲撃者に、リアちゃんが俺達に向かって攻撃を放つ。子供とは思えない程的確な攻撃だ。

「確かに正確な攻撃だけど・・・！」

「所詮は子供！単純だな！」

リアちゃんが放つ攻撃をくぐり抜け、鈴と箒がリアちゃんに接近する。が・・・。

「うふふ・・・」

リアちゃんが不敵に笑う。次の瞬間周囲から無数の閃光が放たれ、二人に全て直撃した。

「きゃああああ!!」

「くっくっくっく!!」

「な、なんだ!?!」

「今のは・・・ビットですわ!!」

いつの間にかリアちゃんの周囲にビットが展開されていた。あれで攻撃したのか・・・!けど・・・。

「・・・五つだけ？」

リアちゃんの周りにあったのは全部で五つだった。でもさっきの攻撃・・・明らかに五つ以上はあったぞ？

「うふふ・・・ねえ、お兄ちゃん。もしかして六対一で戦ってるつもりなの？」

「・・・え？」

どういう意味だ・・・？リオくんは襲撃者と戦っている以上、リアちゃん一人で俺達六人と戦うことになる筈・・・？キャンサーがいる気配は無いし・・・。

「うふふ、よそ見していいのかな？」

「え？・・・ぐあああっ！！！」

また周囲からの攻撃を受ける。どういうことだ・・・！？リアちゃんのビットはまだあの子の周囲に滞空したままだ。じゃあ今のは・・・！？

「あれは・・・！？」

俺達の周りを見るとリアちゃんのビットと同じビットが五つ飛び回っていた。

「あの子・・・全部で十基のビットを操れるの！？」

「そうか！さっきのは十基のビット全てで攻撃したのか！」

「うふふ・・・外れだよお姉ちゃん。私が操れるのは全部で五つだよ」

「な、何！？」

「五つ」だけ？じゃあ、残りの五つはー待てよ？あの子さっき、六対一で戦っているつもりって言ってたよな？つまり、この戦いは六対一じゃないってことになるけど・・・。

「・・・あれ？」

いつの間にか周囲を飛び回っていたビットが無くなっていた。仕舞ったのか？

「うふふ」

リアちゃんのビットとライフル、そして片方だけのビーム砲からのビームによる攻撃、しかもその間に俺に接近していた。

「ぼーっとしてる暇は無いよお兄ちゃん」

「くっ！ー！」

ビームライフルからビームのブレードが現れる。あの武装ライフルとブレードに切り替えることができるのか！

俺は「雪片式型」と「雪閃」の二刀で迎え撃つ。武器の無い右から攻めようとしたが、突然リアちゃんの右手首からビームガトリング

が放れ、全部俺に命中した。

「く、くそっ……!!」

「休んでいる暇も無いよお兄ちゃん!!」

更にガトリングを連射、後退しながら俺はギリギリのタイミングで「雪羅」のシールドを展開、攻撃を打ち消す。だが、リアちゃんは近接ブレードを展開、ブレードから実弾を連射した。「雪盾」で防ごうとしたが、間に合わず直撃した。

「ぐっ……!!」

「もう終わりかなお兄ちゃん?じゃあ、これで決めるよ!」

二つのブレードを構えたまま「瞬時加速」で接近してくる。避けきれない……!やられる!

「させん!!」

「やらせない!!」

「むー!!」

が、間一髪の所でラウラとシャルの援護が入り助かった。リアちゃんは一旦後退し、距離を見計らって右腕のガトリングと右肩の大型ビーム砲を放つ。

「お姉ちゃん達邪魔!!」

狙いをシャルとラウラに変更したりアちゃんは右手首のガトリング、両手にあるブレードのビームと弾丸、右肩のビーム砲を一斉発射した。

「強い……！」

「まだ子供だというのにこれほどの実力を持っているとは……！」

「けど、いくら強いと言っても所詮は一人！」

「全員で一気に襲いかかれば勝てるわ！」

……多分周りが今の俺達を見れば大人気ないか悪人の様だって言いそうだな。だって子供一人相手に六人で襲いかかっているし……。けど仕方ないんだ！勝つためなんだ！……やっぱり俺達の方が悪役っばいなあ。

気を取り直して……今リアちゃんは五つのビット全てを防御に回していた。どうやらあの機体のビットは腰から射出するタイプで左腰から出している。

そして「サイレント・ゼフィルス」と似たようなビットらしく、今エネルギーシールドを展開していた。けど、エネルギーである以上は「零落白夜」に弱いはずだ。だから、俺は「雪片式型」と「雪羅」から「零落白夜」を発動させ、リアちゃんに目掛けて振るおうとした。

「うふふ、だから六対一じゃないよ？」

またさっきと同じ様なことを言ってる……。けど、俺は気にせず

一気に加速する。攻撃は「雪羅」や「雪盾」で防げるし、今ある五つの――待てよ。

あの子確か「五つ」しかビットを使えないんだよな？じゃあさっきの増えた五つはなんだ？途中から出てこなかったため、すっかり忘れていたがそもそもどうやってビットを増やしたんだ？

確かあの子の機体、リオくんの機体と左右対称の様な――「左右対称」？・・・まさか!？

「六対一じゃなくて、六対二」なんだよ？」

・・・やっぱり！だが、気づくのが後一瞬だけ遅かった。周囲に展開された五つのビットが俺を襲った。

「うあああつー!」

「一夏!？」

「ど、どこからの攻撃だ!？」

「あの子ビットは五つしか使って無いし、新たに出した様子も無いのになんで!？」

「ち、違う・・・あの子のビットじゃない・・・!あの子は「リオくん」のビットだ・・・!」

「え!？」

「だいせいかい!今お兄ちゃん達の周りにはあるのは私のじゃない

くて、リオの機体のビットだよ」

つまりあの子達は・・・コンビネーションをしていたんだ。おそらくリオくんが襲撃者とやっている最中に隙を見てリアちゃん目掛けて射出、援護攻撃や防御をしていた。同様にリアちゃんも俺達とやりあっている最中にリオくんに向けてビットを射出してサポートを行っていた。

「・・・俺達は最初から君とリオくんを相手させられていたって訳か」

「うふふ、そう言うことだよ」

そして襲撃者も俺達同様、リオくとリアちゃんの二人を相手させられていた。襲撃者の方を見ると機体はかなりボロボロになっており、ビットもほぼ全部撃墜されている。

「うふふ、私達ジェミニの恐ろしさはまだまだこれから・・・存分に味あわせてあげる」

子供の様な純粹さと無邪気さの笑顔を放つリアちゃん。だが、俺達にはそれが残酷な天使の様にしか見えなかった。

一夏Side end

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6683u/>

---

インフィニット・ストラトス～白と黒～

2011年10月19日09時17分発行